
ひとりヴァーチャルリアリティー

鮎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひとりヴァーチャルリアリティー

【Nコード】

N0500V

【作者名】

鰯

【あらすじ】

行き当たりばったりで飛び込んだVRMMO。いきなり人の良さそうなお兄さんたちに拉致され、ダンジョンに放り込まれました。うっかり隠し部屋に閉じ込められ、更にこのゲームのウリ、疑似トリップイベント発動でログアウト不可ですって。ついてない主人公が頑張ります。話の展開は非常に遅いです。7/27タイトル変更
爽快感は少なめで、勧善懲悪にはなっていないので、そういった話の流れが苦手な方はご注意ください。

下調べは必要

「あああああ、さみしいー」

壁に向かって呟いてみても、言葉は吸い込まれて消えてしまう。
いやいや、本当にさみしい。

もうかれこれ一週間ほど誰とも喋ってない。

一人が好きだなんて気取ってみたこともあったけれど、やっぱり誰かと話したい。

むしろわたし以外が出す音を聞くだけでも満足してしまいそうだ。
それくらいわたしは、人に飢えている。

「どうしてこうなっちゃったんだろうなあ」

すっかり癖になった一人言を呟きながら、わたしは深い深いため息をついた。

そもそもわたしは一人暮らしではないし、引きこもってもいない。たまにサボることはあるけれど、大学にもちゃんと毎日通っているし、少ないながら友達もいる。

つまり、普通に生活してれば、毎日誰かと会話するのが当たり前の日常を送っていたのだ。

なのにわたしは、今、ひどく寂しい状況に置かれている。

入院とか監禁でもない。

いや、ある意味監禁で合ってはいるのだけれど。

こうなった原因は、わたし自身とひとつのVRMMOにあった。

リアルファンタジーという何の捻りも無いタイトルのそのゲームは、よくあるVRMMOのひとつだ、と思っていた。

エルフやドワーフみたいないろんな種族がいて、レベルはなくてスキルでそれぞれオリジナリティーを出していく類の。

剣と魔法の世界で、大まかな舞台設定はされているが具体的に魔王を倒す等の目標は無く、各々好きなように遊べる感じの。

良く言えば取っつきやすく、悪く言えば平凡。

初めてVRMMOをプレイするには、手頃なゲームだと、わたしは迂闊にもそう判断してしまった。

わたしにはひとつ、悪い癖がある。

よく下調べせず、未知のものに手を出してしまうという癖が。

それで後悔することもあるけれど、しかし根回ししてよく知ってから対応するのは性に合わない。

勉強とか大学とか病院とか、自分の将来や健康に関することについては、割合慎重になりはするけど。

でも娯楽、特にゲームについては前情報無しでプレイしたい、というのが基本方針だ。

いきなり知らないことに出くわしてびっくりしたい。

育て方を失敗して、使えない雑魚キャラが出来るのもまた楽しそうだ。

反省したり後悔するのは、当たって砕けてからでも遅くはない。

所詮は娯楽なのだ、失敗してもまた取り返せばいい。

そんな方針に従い、VRMMO用の機体と一緒にパッケージだけで普通っぽいと判断して購入したりアルファタジーへと、公式HPもろくに確認せずに飛び込んでしまった。

もし過去に戻れるなら、是非わたしに忠告したい。

ちゃんと攻略サイト見てから来い、せめて公式HPに一通り目を通すだけでもいいからと。

ゲームとはいえ、後悔してからじゃ遅すぎることもあるのだと。

普通のMMOはいくつかプレイしたことがある。

なので基本は同じだろうとどこか甘く考えていたことは否定しない。

さらに舐めてかかったくせに、初めての体験に興奮して冷静さを欠いていたことも認めよう。

キャラメイクの時に出てきたお姉さんのリアルさに、自分の思い通りにキャラを作れたことに、一々感激もした。

リアルファンタジーの世界に降り立った時は、目に飛び込んでくるもの全てに感動して浮き足だつてもいた。

そんなわたしが、ゲームを初めていくらしもないうちにあっさりとつまづいてしまったのは、当たり前すぎるほどの流れだったのかもしれない。

チュートリアルも受けずに街の中をあちこちキョロキョロ見て回っているわたしは、分かりやすく初心者丸出しだつたらしい。

途中でやたらと人の良さそうな男性二人組に声をかけられた、と思ったらいきなりがしりと担ぎ上げられてしまった。

あまりの展開に度肝を抜かれたわたしは、まともに反応する間もなく転移させられ、どこかのダンジョンにぺいっと放り出されてしまった。

鮮やかな早業に思わず感心してしまった程の手際の良さだった。すぐにログアウトするべきか迷ったけれど、二人は全く悪気が無

さそうな爽やかな笑顔を浮かべ、「街で待ってるから頑張つて」と親指を立てられたので、じゃあ頑張ってみるかというらないやる気を出してしまった。

後から思えば、VRMMOに足を踏み入れたことによる興奮が悪い方に影響し、まともに頭が働いていなかったのだろう。

ひとりとり残され妙なやる気に満ちたわたしは、そろりそろり忍び足でダンジョンの中を歩いていった。

やたらと大きくて強そうな、リザードマンっぽい敵がウロウロしていて、うっかり見つかつたらあっさり殺されてしまいそうだ。

一応、痛みのフィードバックは殆ど感じないように設定したけれど、すぐ殺されて街に戻るのなんとなく悔しい。

うまく敵をやり過ごして、無事に街まで帰りつきたい。

しかし、出口と思われる方向には敵が密集していて、とてもじゃないけど見つからずに突破出来そうな感じではなかった。

仕方なく、敵が居ない道を選んで進んでいく。

「げ、行き止まりー」

しばらく歩いてたどり着いた先は、残念ながらどこにも繋がってはいなかった。

肉体的な疲れは無かったけれど、がっかりして気が抜けてしまわずるとその場に座り込む。

ここに到ってでわたしはようやく落ち着きを取り戻し、迂闊すぎた自分の行動を反省し始めた。

調子に乗らず、置いていかないと頼めば良かった。

果たして拉致犯がその頼みを聞いてくれたかは分からないが、目的くらいは教えてもらえたかもしれないと思う。

一体わたしは何を頑張るつもりだったんだろうと、考えるほどに自分の間抜けさのため息が出る。

「覚悟決めて死に戻るかなあ」

いつまでも落ち込んでいてもしょうがないと壁に手をつき腰をあげ、その流れでなんとなしにペタペタ壁を触る。

ひんやりとした感触が伝わってきて、おおリアル、と地味に感動していたら、いきなりガコツと音がして、眩しい光に包まれた。

「うわっ」

眩しさに思わずキュツと目を瞑る。

明らかに何かの仕掛けが発動した様だったので、そのまま身を固くして来るかもしれない衝撃に備えたが、何も起こらない。

しばらくそうしていると、ふと手に伝わってくる感触が、石でなくなつたような気がして、目を閉じたまま手を動かした。

やっぱり、違う。

さっきまではざらざらしていたのに、すべすべに変わっている。

無意識のうちに、手を別の位置に移動させていたんだらうか。

恐る恐る目を開けてみると、そこは先ほどまでのダンジョンとは全く違う場所に变化していた。

「おおー隠し部屋めっけ」

木の壁に囲まれたその部屋は、さっきまでの剥き出しの石の壁とは違い人工的で、まるでそこに誰かが住んでいるような雰囲気があった。

小さな机と、本棚、そしてベッドが備え付けられていて、あとはやたらと大きな箱がでんと置かれている。

しかし、窓や扉といった外と繋がるものは無い。

コンコンと一通り壁を叩いて回ってみたけれど、出口は見つからない。

どつやら閉じ込められてしまったらしい。

「んーどうしようかなー」

ベッドに腰掛け、すぐにログアウトするかどうか迷いつつ、ステータス画面を開いた瞬間、女の人の声でアナウンスが流れた。

『只今より、疑似トリップイベントを開催します。

期間中、ログアウトは出来ません。

また、GMと連絡も取れませんので、ご了承ください。

各宿屋において強制離脱は可能です。

それでは、よい三ヶ月を！』

朗らかに告げられたその言葉と共に、表示されていたログアウトボタンがふっと消えてしまう。

「ちよちよ、待って待って!」

慌てて叫んでも、その言葉が誰かに届くことはなく。

いきなりの急展開に動揺したわたしは、手当たり次第にステータス画面を展開し、どこかにログアウトの手掛かりが残されていないか探す。

そしてようやく見つけたヘルプを読んでわたしはがっくり肩を落としました。

リアルファンタジー一番の売り、疑似トリップイベント。

現実の六時間で三ヶ月分のプレイが出来、その間ログアウト不可であり、ゲームへの閉じ込められ体験が出来る。

外部との連絡は不可、何か予定がある人への措置として強制離脱システム有り。

また、外部の攻略サイト等への接続も不可。

内部の掲示板を利用した情報交換は可能。

「嘘でしょー」

ログアウトという手段を断たれて、完全に部屋に閉じ込められてしまったわたしは、ひとつの決心をする。

次からはきちんと下調べをしよう、と。

八方塞がりです

まずわたしがしたのは、ヘルプを熟読すること。

どこかにこの状況を打破するヒントがあるかもしれないと、隅から隅まで舐めるように読んだ。

しかしそこはあくまで説明書程度のヘルプ。

具体的な閉じ込められた場所から出る方法なんて載っている訳もない。

全く関係の無さそうな項目も、もしかしたらと最後まで目を通したが、やはり何も見つからなかった。

ヘルプ以外で使えそうなのは、掲示板とチャットと、ゲーム内部のブログにフレンド通信くらいしか無さそうだ。

そのうちフレンド通信は、そもそも一人も知り合いが居ないので使えない。

まずは掲示板を覗いてみよう、と、ぼちぼちと画面を操作する。

ちなみにメニューやステータス画面は全て目の前にふわふわ浮き上がるようになっていて、淡い光を纏った文字が踊る姿は地味に綺麗だった。

情報掲示板、という文字を見つけ、そこに触れると、ブブーと不正解の時に鳴らされるような音が響き、目の前にエラーの文字が浮き上がる。

「なんで、掲示板は使えるはずだよね」

首を捻り掲示板を開こうと挑戦してみるも、結果は全て同じ。

何度試してもエラーしか出てこない。

もう一度ヘルプまで戻り、掲示板の項目を確認するけれど、原因もさっぱり分からない。

仕方なく掲示板は諦めて、次はチャットを覗いてみることにした。

チャットは誰でも参加出来るものと、決められた人しか使えないものがあるらしい。

誰でも参加出来るチャットは、荒れやすいから苦手だけど、そんな警沢を言ってる場合でもない。

チャットの部屋の名前一覧がずらっと並んだページに辿り着き、しばらく迷ってから三番目くらいに人が入っているチャットに参加しようとその名前に触れる。

しかし画面が切り替わることはなく。代わりに再びあのブザー音

が聞こえてきた。

続いて浮かび上がるエラーの文字。

「なーんーでーっ」

くそう、と思わず舌打ちして画面をぺしんと叩こうとしたが、手のひらは空を切り前につんのめってこけそうになる。

そういえばこれは映像が浮かび上がっていたんだっけ、と思い出し、誰もいないけれど照れ笑いをして気恥ずかしさを誤魔化した。

さて、ここまで来れば、ブログもおそらく使えないだろう。

何の期待もせずに試してみれば、予想通りエラーが出た。

わたしの頼みの綱は、あっさり無くなってしまった。

これじゃいけないと焦ったわたしは、ぐあーっという意味もなく大声をあげ、勢いをつけて壁にぶつかってみるも、見た目より随分と頑丈な木の壁に簡単にぽんと跳ね返され、バランスを崩し床に尻餅をつく。

この様子では、壁を破壊して出るのも難しそうだ。

「あーほんとどうしょー」

がつくり肩を落とし、そのまま床に仰向けになる。

このまま三ヶ月ここに居続けなきゃいけないのだろうか。

この静かで動くものが無い部屋に、たった一人わたしだけで、話相手も無しに。

具体的な今後のことを想像をして、ぞわりと背筋が寒くなる。

わたしは首をぶんぶんと激しく振り、頭の中から怖い想像を追い出した。

そもそも、完全な密室なんてバグでもない限り無いはずなのだ。

だからきつと、ここを出る方法はある。

入れるけど、出れないなんてある訳がない。

そうやってひとしきり自分を励ましたあと、勢いをつけて立ち上がり、手掛かりを探すべく改めて部屋の中を見回した。

一番気になるのはあの大きな箱だ。

箱の所まで歩いてゆき、その隣に並ぶ。

わたしの腰くらいの高さで、幅は両手を広げたよりちょっと小さいくらいの正方形型のもの。

あからさまに何かありそうな様子が怪しい。

きつとあの中に、ここを出る方法が入っているに違いない。
そう期待しながら、箱の縁に手をかける。
が。

「あ、開かないーっ」

思いきり力を入れて引つ張ったのに、箱の蓋はびくりとも動いてはくれなかった。

鍵がかかっている訳でも、暗証番号がついてる訳でもないのに、全く開く気配が無い。

もしや横にスライドして開けるのかと試してみたけれど、やっぱり動いてくれない。

げしげし乱暴に蹴ってみても、上に飛び乗ってジャンプしてみても、ひっくり返そうとしても、隙間すら出来ない。

全力でタックルしても変化がないのを確認し、とりあえずは諦めることにした。

箱にこだわらなくても、この部屋にはもうひとつ怪しいものがあるのだ。

本棚にぎっしりつまった、いかにも何かありそうな本の数々。

きつとあそこに、何か参考になることが隠されているはず。

そうじゃなきゃ困る。

今まで散々期待が外れて来たこともあって、嫌でも慎重になったわたしは、本へと手を伸ばす前にまずはじっくり本棚を眺めることにした。

そんなに大きな本棚じゃないけれど、それでも五十冊くらいの本が収められている。

厚さや色もまちまちで、本当に“らしい”本棚だった。

そしてわたしはあることを発見する。

背表紙に書かれている文字に、読めるものと読めないものがあることを。

読めるものは、たった二冊しかなかったけれど、ようやく手がかりを見つけた気がして、少し興奮してしまう。

どきどき高鳴る胸の鼓動を深呼吸で宥め、おそろおそろ一つの本に手を伸ばした。

タイトルは、『リアルファンタジーの歩き方・上』だ。

きつとこの部屋以外で見つけたのなら、気にも留めなかったに違いないタイトルのもの。

だけど今は、それが全てをどうにかする力を持つ、非常に有用で有り難い本のように思えていた。

本はあっさり手にとることが出来、そのことにやたらと感激しながら、ベッドへと腰かける。

そして過剰なほどに期待しながらページを捲ると、そこにあった

のは。

ヘルプの内容がそっくりそのまま載っていた。
さっき、熟読したばかりの。

「なんでヘルプと同じなのよー」

思わず本を床に放り投げてしまったのは、しょうがないと思う。
期待させといてこれは無い。

いや勝手に期待しただけだけど、でもやっぱりこれは無い、あんまりだ。

ついでにもう一冊の方のタイトルは、『リアルファンタジーの歩き方・下』。

言うまでもなく、上巻に載っていないヘルプの内容がカバーされているようだった。

はああああ、と深く深くため息をついてベッドに横になる。

気力がごっそり削りとられてしまった。

目ぼしい手掛かりが全て空振りに終わってしまったのは痛い。
あとわたしが出来ることと言えば。

「寝よっかな」

ふて寝することくらいだ。

ヘルプを読んで分かったことだが、寝るのもスキルの一つだったりする。

スキルレベルが上がると、短い睡眠時間で体力と魔力が回復出来るようになり、ほんの少し体力が増えるらしい。

リアルファンタジーはスキル制で、スキルレベルが合計10000になるまでのスキルを選択出来る。

スキルは任意の行動を取ると発現し、以後それを育てるか育てないか選択出来るようになる。

上限がやたら多いようにも思えるが、そもそもスキルの数自体が五千個ほどあり、一つのスキルにつき最高500までレベルを上げられることを考えれば、最終的に選択出来るスキルの数はそこまで多くない。

その限られた中で睡眠スキルを選ぶのは、どう考えても愚策だろう。

おそらく使えないネタスキル。
普通なら絶対選ばないだろうもの。
だけど今のわたしに、選択肢なんて残されて無いのだ。

ぼちぼちと画面を操作して、翌日の八時にアラームをセットする。
これもヘルプに載っていた小技だ。

本来はゲームをやめる時間をセットしておいて、うっかりやりすぎるのを防ぐために使うものらしいが、目覚ましとしても使えるとあった。

ちなみに宿屋以外の場所で目覚ましをかけずに寝ると、睡眠時間はランダムになってしまうとか。

睡眠とはなかなか面倒くさいスキルであるようだ。

「はあ、おやすみ、わたし」

自分自身へと声をかけてから、ゆっくり目を瞑る。

さすがはスキルになっているだけはあった。

いろいろぐじぐじ思い悩む暇もなく、一分も経たないうちにわたしは深い眠りに落ちた。

スキルをゲット

ピピピピピ、という無機質なアラーム音で目が覚める。

ここはどこだなんて寝惚けることもなく、目覚めたばかりなのに頭は妙にはっきりしていた。

ゲームを始めてすぐ拉致され、閉じ込められてしまったこと。

それら全てがどうしようもなく現実であることが起きてすぐ思い出され、朝からずんと気が重くなる。

はあ、ともう癖になりかけているため息を溢してからベッドから身体を起こし、ふと視界の隅でメニューバーがちかちか光っていることに気がついた。

一体何だろう。

もしかして運営サイドからの連絡だろうか、なんて淡い希望を抱きつつ、メニューを開く。

開いた瞬間、スキルが発現しましたとのメッセージが目の前に飛び出した。

運営からの連絡じゃなかったか、とがっかりはしたけれど、やっぱりなという思いもあった。

スキルに心当たりはあったので、さほど驚くこともなくステータスを開いて内容を確認すると、意外にも発現したスキルはひとつだけでは無かった。

「空腹、ねえ」

スキル、空腹。

ヘルプでは紹介されていなかったスキルだ。

そういえば痛みのフィードバックをほぼ0にした時一緒に、空腹も感じないように設定していたからすっかり存在を忘れていたが、このゲームには満腹度というステータスがある。

0になっても活動は出来るけど、全ステータスが一時的に減少してしまうらしい。

なので、現実と同じようにゲームの中でも定期的に食事をとる必要がある。

だけど残念ながら、この部屋に食べ物はない。

昨日調べた感じでは、水すらも無さそうだった。

もしかするとあの箱の中身が食べ物なのかもしれないが、たとえばそうであっても開けられない今のわたしには意味が無い。

つまりわたしは、ただでさえステータスが低いのに、空腹によって更にそれが減少してしまうのだ。

それも、この部屋で過ごす時間が増える程に、その影響は大きくなるのだろう。

空腹スキルは、そんな空腹によるステータス減少を抑えてくれるスキルらしい。

しかしこれは使えないネタスキルっぽい。

確かにステータスの減少を抑えてくれてはいるが、その量が微々たるものすぎて、殆ど意味の無いものと化していた。

ここを出るとき、覚えているのがネタスキルばかりなんてことになつてなきやいいなあと思いつつ、改めて自分のステータスを確認する。

名前：シトロネラ

性別：女

種族：人間

体力：7 / 7 (11 / 11)

魔力：3 / 3 (5 / 5)

満腹度：48%

筋力：3 (5)

知力：3 (5)

耐性：3 (5)

精神：3 (5)

器用：3 (5)

速さ：3 (5)

運：3 (5)

空腹によりステータス30%減少

スキル

睡眠：1.5（睡眠時回復時間1.5%短縮）

空腹：1（空腹時ステータス0.1%上昇）

まだ一日も経っていないのに、睡眠がいきなり1.5になっていて少しびっくりにしてしまふ。

だけどよくよく考えてみれば、昨日から10時間ちよつと寝たし、ゲームの中でわざわざそんなに寝る人もいないだろうから、妥当な上がり方なのかもしれない。

そして地味に体力が1上がっているのは、睡眠スキルの恩恵なんだろうけど、1.5もレベル上がって1だけなんてかなり微妙だと思う。

しかし今さらだけど、ステータスの振り分けももう少しきちんと考えれば良かったと後悔する。

キャラメイクでテンションが上がり、早くプレイしたくて特に何も考えず与えられたポイントを平均的に振ったけれど、こつというゲームではそれは下策だ。

全てが中途半端になってしまいがちになる。

わたしもそれは承知だったが、さつさと遊びたい気持ちを抑えられず、後からある程度は調整出来るだろうタ力をくくっていた。

我ながら、残念である。

せめて運にもうちよつと突っ込んでおけば、まだマシなことになっていたんじゃないかなんて考えてしまう。

そういえば、と昨日投げ捨てた本に目をやる。

睡眠や空腹のスキルがあるんだから、読書関連のスキルがあってもおかしくない。

昨日はばらばら流し読みしてやめたけど、きちんと読めば何かしらスキルが発現するんじゃないだろうか。

どうせ出来ることも少ないし、暇潰しも兼ねて『リアルファンタジーの歩き方』を読むのも悪くない。

床に落ちた本を拾い上げ、ベッドに横になったまま読み始める。

内容はやっぱりヘルプと同じで目新しい情報はなかったけれど、きちんと読もうとすると何故か文字が滑ってなかなか進められない。

たった5ページ読むのに、1時間近くもかかってしまった。

それなりに文章を読むのには慣れている筈なのに、おかしいことがあるもんだと首を捻る。

昨日流し読みした時はそうでもなかった記憶があるのに、と。

やたら時間がかかったせいか、なんとなく目が疲れた気がして、休憩を挟むため本を横に置く。

するとメニューバーが見覚えのある感じで光っているのに気づいた。

少しだけわくわくしながらメニューを開くと、そこには予想していた通りのスキルが発現していた。

読書：1（読書力増加）

速読：1（読書速度増加）

初めての役立ちそうなスキルの発現に、思わず頬が緩む。

なかなか読み進められなかったのは、速読スキルが関係したんだなあ、とふむふむ頷き納得する。

だけど、読書力の方はいまいちよく分からない。

読書速度とは別みたいだし、ぱっとすぐ思い当たるものが無い。

またこれもネタなのかなあ、とあまり深く考えることはせず、新しく発現したスキルを育てるべく、再び読書に取りかかった。

残念ながら、劇的に読むスピードが速くなりはしなかったけど、それでも読み進めるうちに少しずつ読みやすくなっていくような気がした。

ようやく上巻を読み終わった頃には、5時間程経過しており、ステータスもそこそこ上がっていた。

速読は10になり、ついでに知力も7になっていた。

ただ、満腹度が10%になってステータスが50%減少したから、今の知力は3のままだったけど。

空腹スキルも上がってたけど、微々たる量だからあんまり意味をなしていなかった。

下巻を読む前に、立ち上がって軽くストレッチをする。

肩が凝ったりはしていないけれど、そこは気分だ。

右、左と身体を捻ったついでに、何気なく本棚に目をやると、どこか違和感がある。

何かおかしいんだろう、と近づいてじろじろ観察して、やっと気がつく。

背表紙の文字を読める本が、一冊だけ増えていた。

手にとる前に、大きく深呼吸をする。

初めて、確かな糸口を見つけた気がして、ときどきと胸が高鳴る。期待しちゃうダメ、ただのヘルプの続きかもしれない。

そう自分にきつく言い聞かせて、ゆっくりその文字を目で辿った。

『スキルあれこれ』と、そこには書いてあった。
ここから出る方法と直接関係はなさそうだけど、ヘルプには無かつた項目だ。

手に取ってパラパラ捲ってみると、どうやらスキルについて詳しく書かれたものだと分かる。

わたしは思わず、本をぎゅっと抱きしめる。

「うふ、うふふふ」

るんるんと浮かれながら、今度はきちんと椅子に座り、机に向かった。

部屋の真ん中にある箱を開けるのにも、何かスキルが必要なのだろっ。

その手掛かりは、きっとこの中にあるはずだ。

部屋の中でわたしが今出来ることは、本を読むことだけなのだから、これが無関係とは考えにくい。

わたしは新しい発見があることを確信し、気合いを入れて表紙を捲った。

可能性発見

『スキルあれこれ』は、そのタイトル通りスキルについてのあれこれ載っていた。

スキルは基本スキルと隠しスキルの二つに分類されるようで、本で紹介されているのは基本スキルの二百種だけだ。

全体の一割にも満たないけれど、しかし取得方法から主な効果まで丁寧に書かれていて、非常に面白い。

暇つぶしで仕方なく読んでいた『リアルファンタジーの歩き方』とは違い、時間を忘れてのめり込むように読んだ。

わたしが既に発現させたスキルも全て載っていて、ネタにしかないと思っていたけれど、プレイスタイルによってはそこそこ使えるスキルになることも分かった。

効果がよく分からなかった読書スキルは、この世界で本を読むためには非常に重要なスキルだということも知った。

本ごとにレベルが設定されていて、読書スキルがそのレベルに達しないと、わたしが確認した時のように文字がぼやけて読めなくなるらしい。

スキルレベルを上げる方法はただ一つ、いろんな本を読むことで、そのレベルで読めるギリギリレベルの本を、間を置いても構わないからきちんと最後まで読みきると一層効果的らしい。

ちなみに『リアルファンタジーの歩き方』は、スキル発現用のレベル0の本で、いくら読んでも読書スキルのレベルが1以上に上がることは無いらしいので、下巻は読まないことにする。

種類豊富なスキルに心奪われつつ、ここから出るのに役立ちそうなものを優先的に探してゆく。

しかしこれだとピンとくるものがなかなか見つからない。

時空魔法なんていかにもどこかに転移できそうだけど、それを発現させる方法も育てる方法も今のわたしは持ってない。

基本的に魔法系のスキルを覚えるには、その魔法を生じさせる呪文が必要らしい。

その呪文は、誰かに又聞きするのでは意味を持たず、きちんと魔導書として形を為しているものを読んで覚えないと効力を発揮しないのだとか。

そして更に、上級の魔法になると、隠された条件を満たさないと覚えることが出来ないようだ。

本棚の中に何かしら魔導書が紛れ込んでいるかもしれないけれどまだ読むことが出来ない。

何より時空魔法なんていかにも難しそうなのを覚えられる条件をわたしが満たしているとは到底思えない。

それにわたしの今の魔力はたったの5、空腹のステータス減少の影響を考えたら更に少なく、時空魔法に限らず魔法全般、まともに使える気がしなかった。

他のスキルも検討してみたけれど、発現させる方法がなかったり、上手い使い方が思い浮かばない。

なので基本に立ち返ることにした。

そもそもわたしは、例の箱を開けるスキルがあることを期待してこの本を読み始めたのだ。

それなのに多岐に渡ったスキルを目にして、一気にここを脱出する方法があるかもしれないと期待が膨れあがり、浮かれてそればかり気をとられてしまったのだ。

しかし焦っても仕方がない。

あんなにあからさまに怪しい箱が用意されているのだ。

そこから攻めるのがきつと正攻法なんだと思う。

錠錠がそれっぽいかな、と思ったけれど、箱に錠はついていなかった。

スキルの発現条件は、錠を開けようとする事だけど、まずそれをクリア出来ないのだからこれじゃあダメ。

他にも破壊というなんとも豪快なスキルもあったけど、スキルレベルが低いうちは無差別に対象を破壊することしか出来ないようなのでこれもダメ。

箱の中身まで破壊されてしまったら、本末転倒だ。

いやでも、壁を破壊すればここから出られるかもしれない。しばらく破壊のスキルについて考える。

だけどもやっぱりこれは駄目だという結論に達する。

この部屋の中に、破壊スキルを使用出来るものは少ない。スキルレベルを上げようとしても、すぐにその方法が無くなってしまう。

修復と併用すればいけるかもしれないけれど、壊しては直しを繰り返していたらものすごく心が荒みそうだ。

部屋の中で一人暴れ回る自分の姿を想像してみる。

更に壊したものをちまちま修理し、また壊す姿を。

非常にシユールな構図で、どう好意的に見たって危ない。

破壊は最後の最後、どうしようも無くなった時の手段として取っておくことにした。

他には他には、と読み進めていくと、ふと気になるスキルが目についた。

解析、というそのスキルは、対象の状態を詳しく分析できるものらしい。

いろんなスキルのことが載っているこの本は面白いけれど、現状を打破出来そうなものが見つからないので、正直ちよつと疲れ始めてもいた。

そんな所で発見したこのスキル、発現の仕方も割と簡単で、何かを深く深く調べるだけでいいらしい。

ちよつと試してみるには、非常にお手軽なものだった。

「よし、気分転換しよう」と

立ち上がり箱の前に向かい、前よりもっと念入りに調べる。

しつこく撫で回してみたり、自分の身体と比較して大体の長さを算出してみたり、抱きついてみたり、頬擦りしてみたり、ついではかりに舐めて味も確認した。

三十分くらいそうして、本当にこれで合っているのかと疑問に思い始めた頃、ようやく視界の隅が光った。

やり方が違っていなかったことに安心しつつ、メニューを開いてスキルを確認する。

解析：1（低レベルアイテムの名称判明）

うんうん、と頷き、本にもう一度目を通してスキルの使い方を確認する。

「ええと、手を置いて集中して、“解析”と」

それに従い、早速箱に解析をかけてみる。

するとちりんという鈴の音に似た効果音と共に、箱の上にぼわんと文字が浮かび上がった。

「なになに、知力の箱、か。」

特性その他もろもろは不明」と」

さすがはまだスキルレベル1だけあって、名前以外の詳しいことは何も分からなかった。

しかし、いかにもそれっぽい名前が分かったのは大きい。

名前から考えるに、一定の知力があれば開くような仕組みになっている可能性が高い。

むしろこの名前で知力のステータスが関係していなかったら、悪質すぎると思う。

幸いにも、速読が知力アップに関係のあるスキルだというのは昨

日のうちに分かっている。

ついでに読書も速読と同系統のスキルだから、レベルを上げれば知力にボーナスがつく可能性がある。

もう何冊か本を読んで、知力を上げれば箱を開けることが出来そう。

初日に試した時は開かなかった。

あの時はおそらく空腹じゃなかった筈で、それでも開けられなかったのだから、少なくとも6以上の知力が必要で、50%のステータス減少を考慮すると最低でも12までは知力をあげなきゃいけない。

結構な時間がかかりそう。

でも、可能性は見えた。

もしこれが全くの見当違いだったら泣ける。

「よし、がんばるぞーっ！」

大声で気合いを入れぱしりと両手で頬を叩いてから、再び読書を再開する。

速読スキルは、出来るだけ速く読むように意識すると少しだけ上がりやすくなるとあったので、それも意識して。

『スキルあれこれ』は、『リアルファンタジーの歩き方』の二倍ほどの量があったので、全てを読み終える頃には既に夜の0時を過ぎていた。

このまま徹夜してもいいけれど、せつかく睡眠スキルもあるし寝

ることにする。

何より精神的に疲れてしまった。

「おやすみー」

誰にともなく呟き、わたしは二日目に終わりを告げた。

落ち込むこともある

三日目。

起きてすぐにステータスをチェックする。

昨日は本を置いてすぐに寝てしまったから、確認するのを忘れていた。

本一冊を読んだのだから、割と上がっているに違いない、と期待していたのだけれど、結果はなかなか厳しいものだった。

速読レベルは17、読書レベルは6、そして知力は9。

一冊読んだのに、知力はたったの2しか上がっていなかった。

読書も知力が上がるスキルだということが、知力の上がり方からほぼ確定したのは嬉しいけれど。

半日費やしてこれは、ちよっと切ない。

補助系スキルは、攻撃や創作系に比べてステータス補正が少ないとは『スキルあれこれ』に書いてあったけど、それでも実際体感するとがっかりしてしまう。

「甘くない、なあ」

ひとしきり落ち込んでいじけた後、改めてステータス欄を眺める。知力が上がるスキルは微妙だったけれど、睡眠と空腹は順調に上がっていた。

睡眠は20で、空腹は18、ついでに体力と精神が1ずつ上昇している。

読書と睡眠のスキルレベルを取り替えたい。

無駄だと分かりながら、睡眠の横に表示されてる数字を読書のところへ動かそうとしてみたけれど、予想通り何にも起こってはいなかった。

「さて、頑張りますか」

ステータス画面を閉じ、ぐぐつと伸びをして立ち上がる。

本棚の前へ行き、じろじろ眺めると、読める本がかなり増えていることが分かる。

進歩したことが実感出来て、それは素直に嬉しい。

新たに読めるようになったのは五冊。

そのうち二冊は、タイトルからしてこの世界の神話を集めたものっぽい。

気分転換には良さそうだけど、今すぐ必要な知識では無さそうな

ので後回し。

後はモンスターについてと、ダンジョンについてと、隠しスキルについてのものだ。

少し迷ってから、『ダンジョンを楽しむ100の方法』を手にする。

最初はダンジョンとはどういうものか、から始まり、その歴史がつらつらと書かれている。

読み飛ばしたくなる気持ちを抑え、我慢しながら読むと、やがて具体的なダンジョンの特徴や罠の種類の説明に移っていく。

そしてようやく、わたしが知りたかった内容に辿り着いた。

『隠された部屋について

ダンジョンの中には、普通の方法では行くことが出来ない隠された部屋が存在することがあります。

部屋へ入るには、決められた動作を行う必要があり、その動作はそれぞれの部屋によって違います。

隠された部屋は、宝物庫になっていたり、強敵が隠れていたり、罠がしかけられていたり、様々な趣向が凝らされています。

共通しているのは、外へ出るにもまた決まった方法をとらねばならないということです。

敵ならば撃破する、宝物庫ならば全ての宝を手にする、など、一定の条件を満たすと、出口が現れます。

また、出口が現れるまでは、部屋では特別な通信以外は全て遮断されます。

なお、途中意識を外へ向けた場合、強制的に部屋から出されます。どうしても行き詰まってしまった場合は、意識を外へ向けてみるのも一つの手ではないでしょうか』

意識を外へ向けるとはおそらく、ログアウトのことだろう。

ああやっぱり、部屋に入ってすぐにログアウトしとくんだったと今さらながらに後悔するけど、もう遅い。

掲示板の類が使えない理由も分かった。

特別な通信って何だろう、運営からのお知らせとか、そういうことだろうか。

それならいよいよ、わたしはここを出るまで一人で過ごさなきゃいけないってことになる。

知らなかったことが分かったのは非常に有り難いけれど、明かされた情報について考えれば考えるほど落ち込んでいく。

出る方法があるって分かっただけでも良かったじゃない、と自分を励ましてどうにか本を最後まで読み終え、ぺたりと床に寝転がった。

歌唱：1（歌の効果発現率0・1％）

作曲：1（作曲力増加）

歌唱は『スキルあれこれ』に載っていたから知っている。

確か、歌で回復したりステータスあげたりと、一見すれば便利そうなスキルだった。

だけど、歌そのものが何かしら効果を持っていないと歌っても意味が無く、一曲歌い終わらないと効果が発揮されないので、使い勝手が悪そうだなあと思った記憶がある。

作曲は初めて見るけれど、自分で好きなように歌を作れるスキルなのだろう。

レベルが上がったらどうなるのか、いまいちよく分からないけど。

微妙なスキルばかりどんどん増えてくなあ、と、改めてステータス欄を開いて眺める。

名前：シトロネラ

性別：女

種族：人間

体力：6 / 6 (12 / 12)

魔力：2 / 2 (5 / 5)

満腹度：0 %

筋力：2 (5)

知力：5 (10)

耐性：2 (5)

精神：3 (7)

器用：2 (5)

速さ：2 (5)

運：2 (5)

空腹によりステータス50%減少

スキル

睡眠：20 (睡眠時回復時間2%短縮)

空腹：23 (空腹時ステータス2.3%上昇)

読書：8 (読書力増加)

速読：20 (読書速度増加)

解析：1 (低レベルアイテムの名称判明)

歌唱：1 (歌の効果発現率0.1%)

作曲：1 (作曲力増加)

三日で七つ、仮にスキルレベルを最大まで上げるとすると、二十しか選べないのに、もう半分くらい埋まりかけている。

仕方ないとはいえ、自分で好んで選んだものが一つも無いのがなんとやるせない。

だけど精神と知力が1ずつ上がっているのを確認して、ちょっとだけ気持ち明るくなる。

知力は目標まであと少し。

まだ箱を開けるのに必要な知力が6だって決まった訳じゃないけれど、解析1で名前が分かるくらいだから、そこまでの高レベルアイテムじゃない筈だ。

多く見積もっても10くらいだ、と信じている。

「が〜んば〜るぞ〜え〜いえ〜いお〜」

歌いながらよつこらしよと起き上がり、新しい本を選ぶ。

スキルを上げるためにも、あれこれ考えすぎて落ち込まないためにも、なるべく歌っているようにしようと思う。

次に読むのは神話にしよう、あれこれ難しく考えずに楽に読めるものもいい。

新しく読める本はまた増えていたけれど、実用的なものっぽくて気分転換になりそうもない。

また新たな情報を見つけて、がっくり落ち込む可能性もけして低

くないのだから。

先ほど見つけていた二冊のうちのひとつ、『ノーステル神話』と書かれた本を引っ張り出し、床に寝そべって鼻歌を歌いながらページを捲った。

むかしむかしこの世界は、ではじまる柔らかいお伽噺の語り口調の書き出しに心底ほっとし、しばし神話の世界へと意識を集中させた。

閑話：後悔先に立たず

「相変わらず位置は不明でええっす」

ふざけた口調とは裏腹に、落ち込んだ顔で少年はがくりと頂垂れた。

とあるの酒場にて。

和気藹々と笑い声が絶えないその場所の一角で、どんよりと暗い雰囲気で落ち込むグループがいた。

「多分隠し部屋よねえ、それも、厄介なタイプの」

はあ、とため息をついたのは、赤いベリーショートの大きな胸の美女。

非常に薄い服をまとい、ほぼ下着といって差し支え無い恰好をし

ているが、褐色の肌によく引き締まった身体は健康的で、あまりいやらしさはない。

加えて、巨人族の特徴である二メートルを超える体格のおかげで、美しいがそれ以上に恐ろしい印象を周りに与えている。

「あそこの隠し部屋は全部見つかっているとと思ってたんですがね、この間のアップデートでしょうか。」

しかしこれだけ経っても戻って来ないということは、別の可能性もあるかもしれせん」

迫力美女が続いてため息をついたのは、気の弱そうな、エルフの青年。

全体的に線が細く、ともすれば女かと思紛うほどの優しげな風貌をしていた。

絹のような銀髪が、俯いた顔にさらさらと幾筋も零れ、物憂げな様子を更に演出している。

「あーほんとのほんとにー見さんぽかったよねーどうしょーきつとフレンドもないよねえ、全然状況がわかんないー！」

一気にまくし立てたのは、最初の少年。
非常に小さく、床に届かない足を可愛らしくぶらぶらさせている。
背中には虫のような羽が生えており、少年がフェアリーであるこ
とを示している。

幼子特有のあどけない風貌をしているが、思い悩む様子は大人の
それだった。

「まじ運が悪いよなあ、いや俺らが悪いんだけど、分かってるけど、
でもやっぱり運、悪いよなあまじで」

天を仰いだまま呟いたのは黒髪の青年。

他の面々に比べたら、非常に地味で特徴が無い。

平均的な日本人の青年の風貌である。

あえて特徴をあげるとすれば、眼鏡をかけていることくらいだろ
うか。

彼らこそ、プレイヤー：シトロネラを拉致しダンジョンに放置し
た本人たちとその仲間であり、ギルド『愉快犯』のメンバーである。

ギルド『愉快犯』とは、その名の通り、プレイヤーノンプレイヤー問わず、様々なイタズラをしかけて遊ぶことを目的とした集団だ。例えば林檎の森の木を全て蜜柑の木に植え替えるとか、低レベルの狩り場に見ただけ強そうなゴーレムを作って放り込むとか、そんなくだらない悪戯を嬉々として行うのが彼ら、『愉快犯』の活動。彼らの行動は積極的に開示されており、遊びのためにリアルマネーをガンガンつぎ込むため、運営からは存在を黙認されていた。何より、『禍根は残さない』というのがギルドの基本理念であり、彼らの悪戯の被害にあったプレイヤーにはその被害を上回る補償が為されるので、プレイヤーの間では一種の娯楽イベントとして受け入れられていた。

新人プレイヤーの拉致は、そんな彼らの遊びの一つだった。何のスキルも持っていない新人プレイヤーを適当なダンジョンに放り込み、どれくらいの時間で街に戻ってくるか、賭ける。

一般プレイヤーからも広く賭けの参加者を募集し、大々的に行う。公式ページにも攻略ページにも、イベントとして記載されており、回避方法も併せて載っているため、全く知らずターゲットにされる新人プレイヤーは極めて少ない。

賭けが終了した後は、新人プレイヤーに対して至れり尽くせりのフォローが為されるので、キャラの育成に利用されることが多く、また、全ての新人プレイヤーに対して行われる訳では無いので、攻略ページには“このイベントに遭遇出来たらラッキー”とまで書かれている。

この遊びが一番他プレイヤーに対しての被害が大きく悪質なものののだが、さほど大きなトラブルも起こらなかったもので、いつの間にか定着してしまっていた。

だから、油断していたといえそうなる。

彼らはまさか、こんな事態になるとは想像もしていなかった。

新人プレイヤーのシトロネラが一日経っても、二日経っても街へ戻って来ないことで、ギルドへの風当たりは一気に強くなった。

大々的に賭けを行っていたため、事情が他のプレイヤー達に広まるのは一瞬だった。

なんとなく囃し立てている輩はそのうち静かになるだろうが、真剣に腹をたてている人間はそうはいかない。

特に以前からこのイベントだけはやめたほうが良いと忠告していた大手ギルドのトップが、その腹を立てている面子の中にあるのは非常に痛かった。

ギルドは、嘗て無い危機に立たされている。

そして、彼ら自身も大きなショックを受けていた。

所詮悪ふざけ、許される範囲での遊びの筈だった。

なのに、何も知らない新人プレイヤーを最悪の状況に送り込んでしまっている。

彼らはけして悪人ではない。

悪戯をして遊ぶけれど、他人を心底困らせ絶望の底に突き落とすて喜ぶような趣味は無かった。

それ故に、罪悪感に苛まれている。

「ちゃんと、こおちゃんのゆうこと、聞いてればよかった」

しょんぼり呟いたのは、少年。

こおちゃんと言うのは彼らに忠告を繰り返していた大手ギルドのトップのことで、少年は特に彼になついていた。

今回のことで彼のフレンドリストから少年を含む『愉快犯』のメンバーの名前は削除されており、その事実も少年を酷く落ち込ませていた。

他のメンバーもその言葉に同意し、更に深く頂垂れる。

「今さら後悔しても遅いです。

どうにか、彼女を助ける方法を考えましょう」

エルフの青年が弱々しく提案し、ぼそぼそと弱々しい声で、思いつく方法をお互いに出し合っていく。

しかし、彼らはなまじ長くリアルファンタジーをプレイしてきたからこそ、分かっているのだ。

彼女、シトロネラからの働きかけが無いと、どうしようも無いことを。

フレンドリストに登録している相手なら、隠し部屋のような通信が出来ない場所においても連絡を取り合える。

そうすれば、隠し部屋攻略のアドバイスも出来る。

しかし、所在地の分からない相手にフレンド申請を送ることは出来ない。

逆なら可能なのだが、シトロネラは彼らの名前を知らない。

スキルで名前もステータスも全て隠した状態で、彼女を拐ったのだから。

「とりあえず、あのダンジョンの探索続けるしか無いな」

はあ、とため息をついて、地味な青年が席を立つと、他の三人もそれに続いて店を出た。

皆無言のまま、街の外へと向かう。

途中、ちくちくと視線が突き刺さる。

こそそと交わされる言葉に好意的なもの少なく、ただでさえ沈んだ彼らの気持ちは更に落ちていく。

その中に、ひときわ厳しい顔をした男がいた。

視線に彼らが気づくと、くるりと踵を返して立ち去ってしまう。

「おちゃん……」

少年はその背中をじっと見つめ、ぐっと拳を握りしめる。

彼の人こそが、少年が一番嫌われたくない相手だった。

少年は唇を噛み、何かに堪えるような表情を見せた後、キッと正面を見つめ、足早に歩を進める。

急に歩くスピードを早めた少年に、仲間達は慌ててついていく。

「どじしたよ」

追いついた黒髪の青年が言葉少なめに問うと、少年が自嘲気味に微笑んでみせた。

「ボクね、ぜつたいに、こおちゃんに許してもらおうの。

また仕方ないなって笑ってもらおうの。

でも今のまんまじゃだめなの、あの子助けなきゃ、こおちゃん許してくれない」

だから、と先を続けようとした少年の言葉を遮り、黒髪の青年がにこりと笑ってぐつと親指を立てた。

「助けようぜ、俺たちで。

課金アイテムもガンガン突っ込むか。

いっそあのダンジョンの改造すっか？」

な、と軽薄に笑ってみせた青年に、強ばっていた少年の顔が微か

に緩む。

「もう、ちょっとは真面目にやりなさい」

「本当に、レオン、貴方って人は」

遅れて二人に追いついた美女とエルフの青年が呆れたように、しかしどこかほっとしたように黒髪の青年をたしなめる。

さっきまで彼らを覆っていた暗い雰囲気は払拭され、各々に笑顔が戻りつつあった。

「おら、ダンジョンまで競争だっ！

一番にシトロネラちゃん見つけたやつは、このトリップイベント終わるまで王様待遇なっ！」

とどめとばかりに黒髪の青年が発破をかけると、三人は苦笑いしながらも嬉しそうに地面をかけてゆく。

青年はそれを満足気に見送りながら、自身もその後を追った。

ギルド『愉快犯』、彼らはどこまでも子供である。

都合の悪いことは忘れやすく、目の前の楽しいことに夢中になりやすい。

確かに今彼らは深く反省している。

しかしそれがいつまで持続するかは定かでない。

少年が『こおちゃん』と呼ぶ存在のことが無ければ、おそらくもっと早く立ち直っていたことだろう。

それが良いか悪いかは、分からない。

何せ彼らは、いつまでも大人になれない子供であるのだから。

お歌の時間

『ノーステル神話』は、ゲームの中のアイテムだとは思えないほど充実した内容で、すごく面白かった。

優しい語り口調とは裏腹に中身はなかなかハードで、とっても浮気的な神サトシがあっちこちで女神様に手をつけ、ドロドロの人間関係ならぬ神様関係を展開していく。

サトシが女神様に引っこ抜かれた髪や、引っこ掛かれて流れた血が、この世界の元になったとされていて、かなりシユールだった。

神話の部分を差し引けば、普通に小説として売られていそうなくらい表現や言い回しがやたらと凝っていて、言葉の響きも心地よかった。

あまりに面白かったので、休憩を挟むこともなく一気に読み終わってしまった。

「サトシどうしようもないな」

ぱたんと本を閉じながら思わず呟き、ふうつと大きく息を吐く。物語の世界からなかなか抜け出せず、しばしその余韻に浸ってい

たわたしは、せつかくだからこの感想を歌にしてみようなんて、普通なら考えないことを思い付いてしまった。

誰も聞く人がいないからこそその暴挙である。

「サ〜トシはダ〜メ男〜

刺され〜ても〜殴られ〜ても〜

学〜習しない〜

いつも〜同〜じ〜こと〜の〜

く〜りかえし〜」

こんな感じで、ひとしきり歌って満足した後、メニューバーが今までとは違った様子で光っているのに気付いた。

スキルを覚えた時は青白かったのに、今はほんのり橙に光っている。

ふんふんと即興の歌の続きを口ずさみながらステータス画面を開くと、新しくページが増えている。

「なになに、歌？」

歌一覧、と銘打たれたそのページには、サトシの歌との文字が行だけ浮かんでいる。

歌一覧

サトシの歌（効果：無し）

深く考えずぼちんとその文字を触ると、さっき適当に歌った曲が歌詞つきの五線譜で表示される。
さらにはわたしの声でその歌が再生されてしまった。

「うわわわっ、恥ずかしいっ」

慌てて止めようとしたけれど、どつちやら停止ボタンはついていないらしい。

歌詞も音程も出鱈目のその歌を羞恥に悶えながらもなんとか最後

まで聴き終え、深呼吸して気持ちを落ち着かせる。

とんだ罰ゲームだ。

現実の自分の声のままだったのも痛い。

キャラクターメイクの時に声を変えることも出来たのだが、喋る度に違和感があるだろうと手を加えなかったのが仇となった。

しっかり自分の声を録音した時と同じように聴こえ、無駄に凝った作りにげんなりしてしまう。

しかし、一応新しく分かったこともあった。

作曲は、ある程度長く歌えば実行されるらしい。

それがどんなにくだらなくてつまらなくて、取るに足りないものであっても、だ。

スキルによつては、固有の技を覚えるものや自分でスキルに準じた技を創れるものがあると、『スキルあれこれ』に確か書いてあった。

それが、今の歌みたいなのだろう。

本を読んだ時にはふーんと流していたけれど、実際体験してみるといろいろ気になることが出てくる。

例えば、元になったスキルごとにページが出てくるのか、とか、

歌は消せるのか、とか。

消せないと非常に困る。

無限に覚えられることは無いだろうから、何の効果も無い歌に場所を取られたくないし、何よりうっかりあの歌を再生してしまったらまた羞恥に耐えねばならない。

残念ながら、ぱつと見ただけでは消し方は分からなかった。

五線譜を表示させて、あちらこちら弄ってみれば或いはその方法が見つかるかもしれないが、あの歌をもう一度聴くのは勘弁してほしい。

確実に消せる方法が見つかるまでサトシの歌はすっぱり忘れることにしよう。

そう固く決意したわたしは、気を取り直して改めて曲を作ってみることにした。

せっかくだから、きちんと効果のついたものを作りたい。

「効果に関係ありそうなのは、歌詞とか気持ちとかかなあ」

サトシの歌は、歌詞も適当で特に大した気持ちも込めていなかった。どちらが関係するか判断がつかない。

物は試しとばかりに、まずはお腹いっぱい何か食べたい気持ちを

込めて、歌詞をつけずに「ららら〜」と歌い続ける。

そして十分ほど歌い続け、そろそろ飽きてきたころようやく聞きっぱなしだった歌一覧のページに文字が浮かび上がった。

ららら（効果：満腹度回復0・1%）

効果はついたらけれど、かなり微妙だ。

十分近くかけて歌ってこれじゃあ使えない。

しかもこれに、歌唱スキルの補正が入ってしまうことを考えると、効果は更に落ちてしまう。

歌っている間に減少する満腹度の割合の方が多そうだ。

どう考えてもこれは使えない。

次は無心で、お腹いっぱい食べたいとの内容を歌いあげるつもりだったけど、いろんな食べ物の名前を挙げていくうちについ気持ちが入ってしまい、結果かなり切実に食事がしたい思いがこもった歌が出来てしまった。

歌詞付きだと、二分くらい歌った時点で歌は完成したようで、先ほどと同じように画面に文字が浮かんできた。

やっぱりちゃんと意味のある歌詞をつけた方がいいみたいだ。

だけどその効果の内容を確認して、わたしはがくりと肩を落とす

た。

食べ物の歌（効果：満腹度10%減少）

期待したのと全く逆の効果を持つ歌が出来上がってしまった。
気持ちは殆どおなじだったはずだから、歌詞が良くなかったのか。

その後も何回か言葉を変えて歌ってみたけれど、満腹度が減少する歌しか出来上がらず、五曲作ったところで諦める。

もしかしたら、今の満腹度も関係あるのかもしれない。
作詞とはなかなか奥の深いスキルようだ。

うどんの作り方、やら、お米は偉大、やら、食べ物ばかりのタイトルがついた歌が並ぶページをそっと閉じる。

消し方が分かったら、すぐに全部消し去ってしまおう。

気を取り直して、ステータスを確認すると読書が12、速読が23、歌唱が12、作曲が10、空腹が28に上がり、知力が1、器用が2上がっていた。

本は一冊しか読んでいないのに、読書が思いの外上がっていて驚く。

ギリギリのレベルの本でもなかったし、『ダンジョンを歩く10

0の方法』と分量は同じくらいだったのに、レベルの上がり方が全く違う。

何が違ったんだろうと思いつけても、夢中になったかそうではないか、くらいしか違いが思いつかない。

残念ながら全ての本に夢中になるのは無理そうだから、ちょっとしたサプライズくらいに受け止めておく。

「ようし、知力あと1っ!」

そんなことよりも重要なのはこっちだ。

ステータス画面の知力の部分を何度も指で撫で、11と表示された数字が見間違いで無いことを確認し、たまらずにやにや笑う。

あと一冊読めば、当面の目標は達成出来そうだ。

すぐに取りかかるか少し迷ったけど、もう夜の九時を回っていたので、今日は寝ることにした。

眠気を感じないのだからあえて眠る必要は無いのかもしれない。

しかしただでさえ時間の経過すら感じられない、何の変化も無い毎日なのだから、きちんと寝る習慣くらいつけてないと、そのうち参ってしまう気がする。

いくらある程度精神が保証された世界とはいえ、わざわざ自分から負荷を増やしたくない。

「待ってるよ箱め、おやすみっ！」

ちょっと高めのテンションでびしっと箱に入差し指をつきつけてからベッドに横になり、上機嫌のまま三日目を終えた。

切欠は斜め上から

さて四日目。

わたしは上機嫌なまま目覚め、意気揚々と本棚へ向かい、じっくりと背表紙に書かれたタイトルを吟味する。

もう一つの神話、『サウスタリア神話』も気になるけれど、新しく読めるようになった本にも惹かれるものがある。

どっちにしようかしばらく悩んでから、『或る魔法使いの一生』と書かれた方を手にとる。

タイトルとは裏腹に、かなり薄めの本で、神話の半分も無い。これなら短い時間でスキルレベルを上げることが出来そうだ。

わたしの気持ちは既に箱へと向かっていて、初めは文章が頭に入っ
って来なかった。

しかし神話ほどでは無いにせよ、自伝形式の物語はなかなか面白く、気づけば話に引き込まれていた。

「やー、アステイかつこいいなあ」

最後のページを読み終え、しばし物語の世界に想いを馳せる。

主人公のアステイは魔法を駆使して様々な難問を華麗に解決していった。

魔法いいなあ、使いたいなあとうっかり思ってしまったくらい、魔法の有用性が強調されていて、わたしはすっかり魅了されてしまう。途中に初歩の火の攻撃魔法のスペルまで載せられていたので、自伝という形をとっているけれど、これが魔法スキルを覚えるのに必要な魔導書の一つなのかもしれない。

もしここが外なら、この魔法を試せるのになと残念に思ったところで、はたと我にかえる。

「知力、知力っ」

うきうきしながらステータス画面を開き、読書が14、速読が25、そして知力が12になっているのを確認した。

「やったあ！」

すぐさま箱に駆け寄り、すーはーと深呼吸してから、おそろおそろ蓋に手をかける。

ゆっくり手に力を込めていくと、蓋は徐々にずれてゆき、ついにその中身が白日の元に晒される……！

なんてことはなかった。

いくら力を入れてみても蓋はぴくりとも動いてくれず、憎らしいほどに頑なに、わたしに反抗した。

何度か試して、どうやっても無理そうだと理解し、がっくり膝をついて敗北感にうちひしがれる。

多く見積もって10くらいはいるだろうとは確かに思っていた。

けれど、6あればいけるに違いないと根拠もなく確信していたのも事実だった。

それゆえに、この結果は痛い。

あまりのショックで、知らず知らず口から箱に対する恨み辛みが漏れていたらしい。

しばらくするとメニューバーが橙色に光った。

ほぼ無意識のうちにメニューを開き、呆けたまま内容を確認する。

箱の馬鹿野郎（効果：特定のアイテムの耐性劣化）

歌一覽に加わったそれを見て、一気に頭がしゃきんとする。
もしかしてこれは、もしかするかもしれない。

もう一度、ゆっくり箱に触れる。

過度な期待はせず、指で軽くちよいちよいとつつく、その程度だ。
何の力も込めず、ただ単に触っただけ。

なのにそれだけで、あんなにも固く閉じられ、どれだけ力をこめてもびくともしなかつた箱の蓋が、ぱかりと口を開いた。

拍子抜けするくらいあっさりとした、今までの頑なさが嘘だったかのような様に、わたしは自分の目を疑う。

慌ててゴシゴシ目を擦り、一旦後ろを向いて深呼吸してから、ゆっくり振り返りその姿を確認する。

やっぱり、開いている。

「ぎゃあああーっ！」

たまらず奇声をあげて、部屋の中をびよんぴよん飛び回る。きつと端から見たらものすごくおかしい人だったと思う。後から思い返したら、恥ずかしくてのたうち回るとも思う。しかし誰も居ないこの部屋で、わたしは溢れる喜びを抑えることが出来ず、感情のままに暴れ回った。

どれくらいそうしていただろう。

ひとしきり叫んでようやく我に返り、さっきまでの醜態など無かったように、素知らぬ顔で箱に向き合う。

中にはわたしが期待していたような、一発で脱出可能な便利アイテムは入っていなかった。

しかしもう、それくらいでは気を落とさない。

この材料が必ず、外へ出る方法へと繋がっている筈なのだから。

「えーと、歯車に糸に針金、それに木材に金属？
何かの材料かなあ」

中身を一つずつ丁寧に確認していく。
せつかなので解析も使って、念入りに。

途中からは、名前の他にカテゴリも表示されるようになり、予想と違わず全てがそれだけでは使えない材料に分類されることが判明した。

箱についていたように、知力の、なんて特別な言葉がつくものは無く、どれも手にとることが出来たので、わたしでも扱うことは出来るそうだ。

「問題は、どう使うか、だよねえ」

うつむと頭を捻り、『スキルあれこれ』を開きながら適当なスキルが無いか探していく。

細工、機械、改造。

それっぽいものはすぐに見つかったけれど、肝心の発現方法がどれも教本を元に何かを作らなければならぬ。

このままでは埒が明かれないと思い、本棚へ向かう。

箱の中身を使わなければいけないのなら、どこかにきつと、そのスキルを発現させるための教本があるはずだ。

新しく読めるようになったものも併せて、一つ一つ背表紙に書かれたタイトルを確かめていく。

しかし、すぐにそれと判るようなものは、無い。

まだ読めない中にあるのか、それともこの中に隠れているのか。

どちらにしる、どれかを読まないことには始まらない。

タイトルから中身が想像出来ないものを五冊ほど選び、机へと向かう。

まずは本命の『知的好奇心』からだ。

一時間かけて半分ほど読み進め、どうやら全く関係無さそうだと判断する。

しかし、細かい裏技や意外に知られていない機能について書かれていたので、最後まで読み進めることにした。

途中、閉じた部屋からでもフレンド同士ならコンタクトが取れて中からならフレンド申請することも可能だったことを知り、わたしはぐぐぐと唇を噛んで悔しがった。

名前と相手の姿を知っていることが申請の条件だと知ってれば、ログインしてすぐ誰か一人くらい、チェックしていたのに。

浚った人の名前すら覚えていないのは、なんとも情けない！

他にも意外なメニューの活用法や、宿屋の有効利用などが載っていて、知らない事実にふんふんと感じながら先に進み、一時間弱で残りの半分を読み終えた。

なかなか有意義だった。

先ほどのように内容を反芻することはせずに、直ぐ気持ちを切り替えて本棚へ向かい、新しく読める本で良さそうなものが増えていないかを確認する。

しかし残念ながら、神話が一つ増えたただけだった。

気を取り直して椅子に座り、読書を再開する。

次は『奇人の一生』だ。

これは『或る魔法使いの一生』と同じく、伝記の形を取った何かのスキル発現用のものかもしれない。

期待しながら丁寧に文字を追っていく。

主人公はがらくた作りを趣味とする青年で、これはいけるかもしれないと、わくわくしながら先に進む。

本の中ではがらくた扱いされているけど、話が進むうちにどうやらそれは所謂からくりのことを指していることが読み取れた。

いよいよ当たりの予感がしたが、いつまで経っても具体的な作り方やそれらしい設計図は出てこない。

その代わり、何度も執拗に『がらくた文庫』という言葉が登場する。

主人公が自分のからくりの技を記した秘伝書のことらしいが、最

後まで秘伝書と略されることはなく、『がらくた文庫』と表現されていた。

物語の終わりが「がらくた文庫に我が未来を託す」との一文で締められていたため、わたしは確信を持って本棚へと急いだ。

アイテム作成

本棚に収められた本の中に、『がらくた文庫』という名前を見た記憶はない。

わたしもそうあっさり見つかるなんて甘いことはもう考えていない。

しかし確かごみがどうかというタイトルならあったはずだ。

『ノーステル神話』と同じ時に読めるようになった本の中に、紛れていたような記憶がある。

上から順に探していき、真ん中くらいで目的のものを見つけた。

『ごみ図鑑』、そうだ、これだ。

どう考えても役に立たなさそうなタイトルだし、やたらと分厚かったので完全にスルーしていた。

これだがらくた文庫いいなあ、と思いながらぱらぱら捲ると、いかにもからくりっぱい絵が沢山目に飛び込んできた。

一度目で当たりを引いたことに非常に機嫌を良くして、ふんふんと鼻歌を歌いながら、まずは基本的な作り方を学んでいく。

さすがに現実と同じように、一から十まで組み上げねばならないということは無かった。

作りたいものの材料を選び決まった形に手順通りに並べて、具体的な完成品を思い浮かべつつえいやと力を込めると、自動的に出来

上がるらしい。

ちなみにレベルが上がると簡単な仕組みのものは、手順を省略出来るのだとか。

ついでに、器用の値が出来上がりの質に関係あるようだ。

また失敗することも多々あり、材料が無くなったり、全く違うものが出来ることもあるようだ。

なかなか面倒くさそうなスキルである。

今まで偶然手に入れて来たのは、ステータスに左右されないものばかりだったのに。

気付いて無いだけで、ほんとには全部に何かしら関わってるのかもしれないけれど。

しかも成功率が存在するときた。

いろいろな要素が関係していて、面倒そうである。

順調にみえたけれど、やっぱり簡単には行かないようだ。

なにしろわたしのステータスは、ほぼ半分にまで落ちている。

ちよびちよび空腹スキルは上がってきているけど、まだまだ焼け石に水状態。

これで質が良いものを作るのは難しいだろう。

しかし落ち込む前に、とりあえず一番簡単そうなからくりをひとつ作ってみよう。

うじうじしていたって何にもならないのだから。

「歯車二個を並べて、ぐるっと糸で囲む」と

とても簡単な手順で出来上がるのは、大きな歯車というもので、直径が普通の歯車の二倍の大きさらしいので、完成形も想像しやすい。

あとは力を込めれば終わりだが、その方法がよく分からない。出来上がれー出来上がれーと念を送っても、撫でてみても、変化が現れない。

もう一度、図鑑の作り方の基本の部分を読み返す。

「あ、名前を言わなきゃ駄目だった」

うつかりその部分を見逃していた。

気を取り直して、改めて大きな歯車を思い浮かべ、ゆっくりその名前を口にした。

するとキラキラした光の粒が材料を取り囲み、ちかりちかりと明滅する。

何度も繰り返しながら光は強く大きくなり、やがて材料が完全に

光に包まれ、再び姿を見せた時には変化していた。

一応、成功はした。

だけど出来はあまり良くない。

一目でわかるくらい、歪んでいる。

「ま、最初はこんなものでしょ」

大きな歯車を手に取り、しげしげ眺める。

解析してみると、これも材料であることが分かった。

明らかに質が良くないけれど、ちゃんと使えるのだろうか。

なんとなくだが、材料の質も成功率に関わってきそうな気がする。

大体のスキルの使い方は分かったので、再び読書に戻る。

今すぐ役に立ちそうな道具が無いか、丁寧に一つ一つ検討していく。

お茶汲み人形や矢打ち人形やのようないかにもからくりっぽいものから、バイクやテレビみたいなもの、更に用途がさっぱり分から

ないものまで有り、その一貫性の無さに妙に関心しながら、気になったページに箱の中にあった糸を挟んでいく。

直接部屋を脱出するための転送装置のようなものは無かったけれど、役立ちそうなものは幾つか見つかった。

その中でも一番欲しいのは、『万能アンテナ』だ。

なんでもそれを設置すると、いかなる場所でもあらゆる連絡手段が使用可能になり、情報媒体へも繋がるようになるとか。

これが出来れば掲示板を使える。

そしたらきつと何か分かるだろうし、何より沢山の人と交流することが出来る。

もう随分人恋しくなっていたわたしは、絶対にこれを完成させようと固く決意する。

しかしいきなりこれに取りかかることは出来ない。

手順が結構複雑なので、今のわたしじゃスキルレベルが足りなくて成功率が低そうだし、材料も幾つか作らなきゃならない。

まずは質の悪い大きな歯車を材料に使った場合、どうなるのか確認することから始めよう。

急がば回れである。

からくりの歌を歌いながら、大きな歯車と普通の歯車を重ね、金属の薄い板でそれを挟む。

そして針金でぐるぐると板を縛り、仕上げに名前を口にする。

「さあ出来上がれ、雑記帳っ！」

ノリでそれっぽく叫ぶと、先ほどと同じように光の粒が現れ、割とちゃんとした、薄いノートが現れる。

名前の前に余計なことを喋っても大丈夫らしい。

大きな歯車に続いてスキルが成功したことに気分をよくして、完成したノートを手に取り開いてみた。

見た目はただのノートだけど、開いてみるとキーボードのついたノート型のパソコンになっていることが分かる。

画面部分には、最初から文書作成のソフトっぽいものが表示されており、それ以外の機能はついてないみたいだった。

試しにカチカチ適当な文章を打つてみると、きちんと画面に表示される。

しかし、いかにも使えそうなコピーやら図の作成やら画像表示のボタンは、存在するものの選択することが出来ない。

さらには打ち込んだ文章を消すことも出来なかった。

多分これは、出来が悪いってことだろう。

「んー、これは失敗、かなあ」

メモ帳代わりくらいには使えそうだが、それくらいにしかならなさそうだ。

スキルレベルが上がってからまた、きちんと作り直すことにしよう。

おそらくだが、材料もちゃんとした物を使った方が良さそうだ。

「あ、そうだ、アイテム収納試してみよう」

きっとMMOをプレイしたらかなり最初に実行するだろうアイテムに関する操作を、わたしはまだ行なったことがなかった。

VRMMOだとどんな風になるのかな、とわくわくしながら、ヘルプで学んだアイテムのしまい方を実行する。

方法はいたって簡単で、しまいたい物を手にとって、インと呟くだけ。

すると手にしたノートはシュツと姿を消した。
いかにもゲームっぽくて、おおおとじわじわ感動する。

アイテムの取り出し方は二種類あって、メニューのアイテム欄に載っている出したいものの名前を触るか、そのアイテムの名前の頭にアウトとつけて呼ぶと、目の前にそのアイテムが浮かんでくるらしい。

まずはアイテム欄を使う方法を試し、実際目の前にふわりとノートが浮かんできたのを確認して、わたしはすっかり興奮してしまう。ゲームの中で過ごして、早や四日。

その間、さっきのからくりを作った時のエフェクト以外、あまりゲーム特有の非現実的な現象を体験していない。

いや、この状況はとても非現実的だけでも。

そうじゃなく、思い通り自分で操れるというのが、重要なのだ。

そんな理由もあって、自在に出し入れ出来ることにすっかり魅了されてしまったわたしは、結局一時間ほどしつこく同じ動作を繰り返してしまった。

ちよつと不機嫌

アイテムを出し入れして遊んでいたせいで、すっかり時間をつぶしてしまった。

気づけば夜の九時を過ぎていて、もうひとつ何かしら簡単なものでも作ってみようか、それとももう寝ようかと迷う。

ステータスでも眺めながらのんびり考えようとメニューを開くと、スキルが二つ発現していた。

一つは機巧と表示されていた。

こちらは予定通りで特に驚くことは無かったけれど、もう一つはいつの間に発現したのか全く覚えの無いもので、わたしは首を傾げてしまう。

「自然回復かあ、うーん、回復するようなこと、したっけ」

体力と魔力が減った場合、薬で即座に回復させることも出来るが、時間がかかっても構わないならば放っておけばそのうち回復するようになっていると、ヘルプで確認した覚えがある。

自然回復とは多分そのことを指しているのだろうけど、体力と魔力が減る行動をとった記憶が無い。

既にどちらも満タンになってしまっているんで、どっちが回復したかすら分からない。

「もしかしたら機巧スキルのせいかな」

考えても分からないので、ステータスを表示させたまま、もう一度大きな歯車を作ってみることにした。

材料を並べる時点では、特に変化は無い。しかしその名前を呟いた瞬間、わたしの魔力は0になってしまった。

力を込めるとは魔力のことを指していたのかと納得しながら、さつきより心持ち円に近づいた歯車を手に取り、頬にそれをあてながらしばし考え込んだ。

からくり作りにどうやら魔力が必要らしいことはこれで分かった。しかしどれくらい必要なかはよくわからない。

質が悪いながら雑記帳も作れたことから、単純にからくり作りに

必要魔力はどれも一律で2だと推測することは出来る。

しかし全く根拠がないし、なんとなくだがそうではない気がするのだ。

これも根拠は無く勘でしか無いのだが、魔力の量が完成品の質に関係している気がしてならない。

魔力をいっぱい使った方が質が良くなるんだっいたら困るなあと思いつつ、ふと頭を掠めるものがあったて、大きな歯車を机に置いて図鑑を開く。

「あつたあつた、魔力測定器、これだ」

図鑑の初めの辺り、材料以外では一番簡単に作れるものに魔力測定器があった。

その名前から自分の全魔力が残存魔力のどちらか測れるものだろうと推測して、ステータス画面で確認出来るのになんでこんなものがあるんだろう、と不思議に思いつつも流した記憶がある。

しかしそうじゃなくてこれは、使用中の魔力を測定出来るものなんじゃないだろうか。

最初の方に載っているのも、機巧スキルに必要なだからだと考えるとしっくりする。

「今日はこれ作って終わりにしよう」と

図鑑に従い材料を箱の中から取り出し、歯車を五つ重ねて真ん中に針金を通す。

手順も非常に簡単で、名前を呼べば失敗することもなくあっさり魔力測定器は出来上がった。

魔力測定器という名前だが、見た目はただの手袋で、人差し指の先には小さな穴が開いている。

右手に手袋をはめてみるが、特にこれといった変化は起こらない。

「そっぴや魔力の出し方ってどうやるんだろ」

基本的なことが分からないことにながっかりしたが、すぐに気を取り直し、人差し指の先端に穴が開いているから、そこが何か関係しているのだろうとアタリをつけて、むむむと意識を指先の一点に集中させる。

しかし何の反応も無いので、肩から指先へ向けて力が流れるイメージもプラスしてみた。

するといきなりぞわっと手の平がむず痒くなり、人差し指がほんのり暖かくなる。

それと同時に手袋の甲の部分に漢数字で二と表示された。

「うわあ、きもちわるい」

ぱたぱたと手を振って、あまり心地のよくない感触を逃がす。

これを魔力を扱う度に体感しなければならぬのは、きついものがある。

出来るならば二度と試したくはなかったけれど、生憎とそう我が俣を言える状況では無かったことを思い出し、我慢してもう一度指先に集中した。

自分の意思で魔力を出せることは分かったから、次は1ずつ分割して出せるかを確認するためだ。

さつきよりも非常にゆっくり、さらに液体じゃなく小さな粒々が一つずつ転がるイメージで力の流れを意識する。

相変わらずむずむずと気持ちの良くない感触が手の平全体を這い回ったが、一度目よりは随分マシになっている気がした。

この調子で慣れていけるのなら、そのうち気にならなくなるだろうと少しだけほっとする。

「お、一だ」

試みは上手くいったようだ。

止め方が分からなかったので、表示はすぐ二へと変化してしまっただけれど、最初は確かに一と出ていた。

ついでに新しいスキル、魔力操作も発現した。

名前の通り魔力を思い通り扱うのに必要なスキルなのだろう。

しかしせっかくスキルが発現したというのに、あまり喜べなかった。

魔力操作がスキルじゃなくて、誰でも出来る基本操作だったら良かったのにとついつい思ってしまう。

スキルになってしまっている以上、魔力が増えたところですから自由に操れるという訳にもいかないのだろう。

「あーもう、やることいっぱいだなあ」

はあ、とため息をついて手袋を外し、机の上に放り投げた。

からくり作りに魔力操作の練習は勿論、読んでない本の中に魔力が上がるタイプのスキルが発現するものが無いかも探した方がいいだろう。

さすがに魔力2のままでは厳しいものがある。

もう少し無いと、からくり作りに必要な魔力が幾つなのか検証することが出来ない。

目標が無いよりはある方がいいけれど、一気にやらなければなら

ない事が増えたせいで、喜ぶよりも先に厄介だと思っってしまった。
一つのことだけ頑張ればいいなら簡単なのにな、なんて不満もわいてくる。

きつとこんな風に感じるのは、頭が疲れているからに違いない。
こんな状態で続けても良い結果は生まれなさそうなので、今日はもう寝てしまおうことにした。

ベッドにごろんと横になり、改めてステータスを見直す。

名前：シトロネラ

性別：女

種族：人間

体力：6 / 6 (12 / 12)

魔力：2 / 2 (5 / 5)

満腹度：0%

筋力：2 (5)

知力：8 (15)

耐性：2 (5)

精神：4 (8)

器用：6 (12)

速さ：2（5）
運：2（5）

空腹によりステータス50%減少

スキル

睡眠：26（睡眠時回復時間2.6%短縮）
空腹：39（空腹時ステータス3.9%上昇）
読書：22（読書力増加）
速読：30（読書速度増加）
解析：8（低レベルアイテムの情報判明）
歌唱：18（歌の効果発現率0.1%）
作曲：14（作曲力増加）
機巧：8（からくり作成）
自然回復：1（自然回復速度増加）
魔力操作：1（魔力操作精度増加）

知力と器用が随分上がっているのが分かり、その数字のおかげで少しだけやる気が戻ってくる。

最初はもっと信じられないくらい低かったのだ。それを考えればずいぶん進歩したものだと思う。

目に見えて分かる結果はモチベーションの維持のためにも重要だとしみじみ思い、雑記帳を取り出して寝転んだままその値を記録する。

毎日記録して比較していけば、もっと成長が分かりやすくなるに

違いないとの考えだったが、ただステータスを写すだけの行為は思いの外楽しかった。

改めて自分の手で打ち込むことで、自分に身に付いたものを実感出来たからかもしれない。

雑記帳の使い方も見つけたところで、ようやく機嫌が持ち直す。

またくよくよ後ろ向きなことを考えて落ち込んでしまう前に、急いで目を瞑った。

明日はもっと前に進むといいなと願いながら、四日目を終わりにした。

寂しさ爆発

五日目。

今日はまずからくり作りから取りかかることにする。

魔力測定器を右手にはめて、人差し指からゆっくり魔力を出して魔力操作スキルを鍛えながら、同時進行で図鑑を開き糸を挟んでいたページをじっくり見比べ検討する。

手の平に感じる気持ち悪さはかなり軽減され、程無くして気にならなくなるだろうと思えた。

使える魔力が2しか無いのは困るけれど、すぐに回復するという一点だけは便利に感じる。

使いきっても殆ど待たずに同じ動作を繰り返すことが出来るのは嬉しい。

その代わりスキルの伸びは遅くなるだろうが、それには気づかない振りをした。

さて、わたしは今、かなり寂しい思いをしている。

誰かと話したくて話したくてたまらない。

しかし、万能アンテナに手を出すのはまだ時期尚早だろう。

失敗して落ち込むのが目に見えている。

では何を作ってスキルレベルを上げるか。

ひたすら材料を作って後々に備えるのがいいのかもしれないが、

どうせならこの寂しさを紛らわせてくれるものが欲しい。

なので、人形を作ることにした。

お茶汲み人形や矢打ち人形の材料になっていて、それだけでは特別な効果は発揮しないただの人形だ。

図鑑で完成形として紹介されているのは、いかにもな日本人形で、暗いところで見たら心臓に悪そうだったけれど、背に腹は変えられない。

本当はふかふかで可愛らしいぬいぐるみが良かったんだけど、残念ながら図鑑には載っていなかった。

材料はちよつと多い。

歯車二つに大きな歯車二つ、糸九本、金属板一枚。

今のわたしのレベルでは厳しそうだが、人形自体が材料になっていることを考えると、必要な材料の数の割に作るのは簡単なのではないかと思っている。

まずは糸を金属板の上に順番に並べていく。

途中うっかり息をかけてしまい、糸を飛ばすミスもしたけれど、何とか図鑑の指示通り並べ終える。

呼吸までちゃんと再現されているのには感心してしまうが、今はその無駄な再現率が恨めしい。

なるべく息を吹き掛けないよう注意しながら、次の工程に移る。

大きな歯車と小さな歯車を交互に並べて、金属板にぴったり収まるようにしなければいけないのだが、これがなかなか難しい。

何度も置き直すと糸がぐちゃぐちゃになってしまつから、一度でちゃんとした場所に置かなければいけないのだが、何か印があるわけでもないのではなかなかうまくいかない。

それでも何度かやり直した結果、どうにか形になった。

すぐに完成させるべく、右手を添えて意識的に魔力を出しながら、名前を呼ぶ。

しかし光の粒は現れず、代わりに白い煙がぷすぷすと部品から出始める。

慌てて手を離すと、ぼんと気の抜けた音と共に部品がバラバラに崩れ落ちた。

「これが失敗かあ、うわあ、へこむなあ」

がっかりして崩れた部品を確認すると、傷はついていないものの、数が減っていることが分かる。

どうせなら別のものが出来れば良かったのに、なんて贅沢なことを思いつつ、もう一度試してみることにした。

一度組み立てたおかげで、最初の半分くらいの時間で並べ終わる。そしてさつきと同じようにして名前を呼ぶと、今度はきちんと光の粒が現れた。

ほつと息をついてから、光の中から出てきた人形を手取る。

それはなんともいえない、微妙な顔立ちだった。

艶々の黒髪ではなく、毛糸のような質感のもつさりした茶色の髪で、日本人形のあのしゅっとした切れ長の目とは正反対のたれ目をしている。

口元も心なしか緩んでおり、そのせいでなんともだらしない、にやけた表情に見えてしまう。

威厳の欠片も無いが、どこか愛嬌のある仕上がりになった。

材料としては質が低いのだろうが、閉じ込められた生活のお供としてはむしろ日本人形が出来るより良かったかもしれない。

「よーしっ、君はタロウだ、よろしくねっ！」

“うんよろしく！”

タロウの分までわたしが喋り、挨拶を済ませる。

自分一人で受け答えしているだけなのだが、話す相手が出来たよ
うな気がして少し嬉しくなる。

「タロウ、わたし、頑張るよ！
“応援してるよお姉さん”」

悪くない。

むしろかなり楽しい。

ひとしきり会話という名の一人芝居を楽しんだ後、次の作業に取りかかる。

また魔力操作の練習をしながら図鑑を開き、今度は糸を挟んでいなかったページも確認していく。

先ほど材料を並べている時に思ったのだが、自分で印をつけられればかなり便利そうだ。

図鑑に筆記用具が幾つかあったことを思い出して、次はそれを作ることにした。

定規やコンパスなんて、一体何に使うんだと最初目を通した時には思ったけれど、からくり作りには重要そうだ。

からくりに必要な道具のせい、羽ペンにインク、定規、コンパスはどれも非常に簡単そうだった。

材料も少なくて済む。

今のわたしでも十分に成功しそうなものばかりだ。

「タロウ、見守ってね

“ うん分かった、頑張れーっ！”」

タロウとの会話を楽しみながら、まずは作りたものの材料を全てを箱の中から取り出し、道具ごとに分けて置く。

そして改めて羽ペンから順番に、並べては名前を呟くという作業を四度繰り返し返した。

羽ペンは羽が無く、インクは薄く、定規は細かい目盛がついておらず、コンパスはやたらと小さかったが、一応使えそうなものは出来た。

一度も失敗しなかったのも嬉しい。

「お姉さんすーいー！」

えへへ、そうかなー」

自画自賛しながら、タロウの手を取り部屋の中をぐるぐる回って喜び、そのままベッドへぼすんと腰かける。

しばらくはやかにや笑っていたが、急に不安に襲われてタロウを抱き締めた。

「タロウ、わたし寂しいよ。

三ヶ月ずっとこのまんまだったらどうしよう」

ぎゅっとタロウを胸に抱え込み、この五日間でたまっていたものをぼそりぼそりと打ち明ける。

タロウは黙ったまんまだ。

わたしがタロウの代わりに喋ってないのだから当たり前なのに、それがなんとも切なくて悲しかった。

「タロウ、大丈夫って言って、ねえ」

抱きしめる腕に力を込めても、揺さぶっても、タロウは何も言わない。

堪えられなくなり、つい、ぼろりと涙が流れてしまう。

一度流れた涙は止まらなくて、どんどん後から後から流れてきて、ついには声を上げて泣いてしまう。

「さ、寂しいいー、不安だよおーっ！
うわああん！」

小さな子のように泣きわめき、溜まっていたものを一気に吐き出し、感情のまま叫びちらす。

床にぼたぼた涙が落ちて、黒い染みを作り、それに気づいてやるせなくなり、更に激しく泣いてしまう。

途中からは自分でも何を言っているのかよくわからなくなり、最後の方は何が悲しかったのかも分からなかったがただ身体と心が要求するままにひたすら涙を流した。

しばらくしてからようやく落ち着き、すすすん鼻を嚙りながら、あれだけ泣いたのに目も喉も全く痛くなくてなく、頭も重くなくていないこと気づき、改めてここはVRMMOの中なのだ実感する。しかし精神に一定以上の負荷はかからないはずなのに、なんであるに泣いてしまったのだらうと、ゲーム自体に対しての不安も生まれた。

「ほんと大丈夫なのかな、わたし」

あれこれ考えると、また不安がむくむくと膨れ上がっておかしくなってしまうそうだった。

そうなる前に今日はもう寝てしまおうと、タロウを枕の脇に置いてベッドへ潜り込む。

まだ夕方にもなっていないけど、しばらく何も考えなくなかった。

「おやすみ、タロウ」

そう呟いて隣を見れば、しまりの無い顔をしたタロウがいて、それにほっと安心して、わたしは眠りについた。

閑話・コジマの憂鬱

大手ギルド』さんぶんしすこ』のトップ、コジマは要領の悪い人間である。

そもそもリアルファンタジーを始めたのも、一人じゃ不安だから一緒にプレイしてくれとの友人の頼みを断り切れなかったからで、ギルドのトップなんてやっているのもその友人に押し付けられたからだ。

その友人はもう既に別のゲームに移っており、それを機に辞めても良かったのだが、大きく育ってしまったギルドを放り出す訳にもいかず、また自身を慕ってくれている人間を突き放すことも出来ず、結局現在までリアルファンタジーに残っている。

しかしだからといっておざなりにプレイしている訳でもなく、困っているプレイヤーがいれば見過ごすことが出来ず親身になってやり、果ては現実での悩み事に対する相談にまで乗ってやりと、端からみて呆れるほどにお人好しに他人の世話を焼いて過ごしている。

そんな性格のおかげでゲーム中での人望は厚く、時には癖の強

いプレイヤーも惹き付けてしまい、しょっちゅう厄介事に巻き込まれてしまっている。

コジマと付き合いの長い『さんふらんすこ』のメンバーは、お人好しすぎるとぶつぶつ文句を言いながらも、彼の側からは離れることはせず、ともすれば付け込まれそうになる彼のフォローに回りながら、満更でもなさそうにしている。

さて、そんなお人好しのコジマが、つい最近とあるプレイヤー達に対して激しい怒りを見せた。

『冗談混じりに『仏』とあだ名される彼の怒りに、『さんふらんすこ』や彼の周辺はちょっととした騒ぎになった。

発端はあるギルドのメンバーによる新人プレイヤーの拉致。前々から彼がやめるよう忠告していたことだった。

件のギルド、『愉快犯』の面々には今までも散々迷惑をかけられている。

特にその中の一人、トロイと呼ばれる少年にコジマは酷くなつかれており、しょっちゅう纏わりつかれ、時には悪戯の後始末をさせられることすらあった。

だがそれでも彼は、淡々と説教をすることはあっても、生々しい怒りを見せることは一度も無かった。

そんなコジマがついに怒ったのである。

誰も予想していなかった事に、彼の周りは酷く戸惑い狼狽し、おそろおそろ遠巻きに彼の様子を見守った。

疑似トリップイベントが始まって三日目の夜、コジマはとある酒場でひとり、黙々と食事を取っていた。

むっすりと眉を寄せ、いかにも機嫌の悪そうなその様子に、誰も近寄ろうとはしない。

元々厳しい顔つきをしていて愛想が良い訳では無いのだが、醸し出す雰囲気がいづもとは明らかに違ったためだ。

しかし食事が終わろうとする頃、彼の前にどかりと腰を下ろす人物が現れた。

ギルド『さんふらんしすこ』のナンバー2、ロリ姐さんことメルチェその人だった。

ロリ姐さんの異名が示す通り、メルチェはあどけない人間の少女の姿をしている。

美形では無いが子供特有の可愛らしさを持っていて、つい頭を撫でたくなる雰囲気がある。

しかしそんな外見とは裏腹に、中身は非常に男前で面倒見が良く、身内を何よりも大事にするので、周りからは姉御と呼ばれ、コジマ程では無いにしてもかなり慕われていた。

ちなみにコジマはごつい筋肉をした大男なので、そんな二人がテーブルを挟んで向かい合う光景はなかなかシユールだった。

「どうしたのよ、あんたらしくもない」

手早く注文を済ませ、メルチェがコジマに話しかける。

コジマはそれには何も答えず、ぐつと眉間の皺を深くした。

そんな彼の様子に、メルチェはやれやれと首を振り、優しげな声で話を続ける。

「そりゃああんたが聖人君子じゃないってこた分かってるよ。

サリユもアルもネジも、仕方無いって、そういうこともあるだろうって笑って構えてる。

でもねえ、下の子たちはそうもいかないのよ。

コジマさんどうしたんですか、大丈夫なんですかって、あたした

ちに不安気に相談してくるのよ」

そこで一旦言葉を区切り、彼の表情を伺う。

相変わらず不機嫌そうではあったが、その中に彼の苦悩を感じとり、メルチェは少し笑って先を続ける。

「だーから。」

もやもやしてることを全部、とつとと吐いちゃいなさい。

で、さっさとお人好しで要領の悪いコジマくんに戻りなさい。
似合わないわよー、あんたにその顔」

ぐりぐりと眉間に指を突きつけると、観念したようにコジマは深くため息をつき、のろのろと口を開いた。

「怒っているというか、情けないんだ、自分が」

ぼそぼそと喋り出した小さな声に、メルチェのみならず店中がこっそり耳をすます。

「もっと俺がちゃんとあいつらに言い聞かせてれば、こんなことには。」

いや、真剣に止めなかった時点で、俺も同罪なんだ。

あいつら、ガキだし、俺がもっとちゃんと……」

延々と続く自虐にも似た告白に、店の中の空気が生暖かいものになる。

そして、終わりそうに無い話を、メルチェが無理矢理言葉を挟んで止めた。

「ばっかじゃないの。」

同罪っちゃあたしたちもそうじゃない。

むしろあんたは止めようとしてた。

てか、あのクソガキどもが、注意されたからって素直に更生する訳ないじゃん。

アカウント消されない限り、変わんないよあいつらは」

メルチエの言葉に、そうだそうだと周りの声が同調し、何か反論しようとして口を開いたコジマの言葉をかきつけてしまふ。

「コジマ考えすぎーっ」

「馬鹿、まじ要領悪い」

「笑ってよリーダー、リーダー怒ってるのやだよっ」

笑いながらかけられる言葉に、コジマは困ったように眉尻を下げる。

特にギルドのメンバーらしきプレイヤーの言葉には、一際大きく反応した。

「すまん、迷惑をかけた」

すっかり和気藹々と盛り上がる酒場の中で、コジマはじつそりメルチエに謝罪の言葉を囁く。

メルチエは意地の悪い顔でにやりと笑い、ぱしんとコジマの頭を叩いた。

「馬鹿リーダー、後でギルドで罰ゲームねっ」

楽しみにギルドメンバーにリーダーの復活を告知するその姿に、コジマの頬もようやく緩む。

そのまま酒場に居た面々に料理をお詫びとして振る舞い、楽しみに食事をする人々を穏やかな顔で見つめた後、メルチエを誘って外へ出た。

しばらく歩いて酒場から離れ、人の少なくなったところでコジマはメルチエに頭を下げた。

「閉じ込められたプレイヤーを助けてたい。」

力を貸してくれ」

メルチエはそんなコジマの姿を見て、呆れたようにため息をつき、いやいやと首を振る。

「あんたのせいじゃないんだよ。いいじゃない、そこまでしなくても」

そう言いながらも、メルチエは分かっているのだ。きつとこのお人好しのリーダーは、反対されても一人で動いてしまふのだろつ。

そしてまた、誰かを引っかけてきてしまふのだ。

メルチエはコジマが好きだった。

独占するつもりは欠片もない。

だけどギルドのメンバー以外に心を砕く姿を見るのは嬉しくない。それがコジマなのだと分かっている。

分かっても、これ以上内側に誰も入れたくなかった。

だからこそ。

「あーもう、仕方ない。

ほら頭上げな、そんな仲じゃ無いでしょ。

一緒に探してあげるよ」

ぱしんと背中を叩けば、ほっと目尻を緩ませてコジマは顔を上げる。

その表情に、まだ見ぬ新人プレイヤーに対してちらりと嫉妬の気持ちが沸いた。

こんな顔をするほど、そいつが心配なのかとつい口にしそうになり、ぐつとそれを飲み込んで別のことを口にする。

「手始めに詳しい情報あいつらに聞き出さなきゃね。

あんたはいいよ、あたしが聞くから。

あんたは掲示板で情報集めね。

あたしよりあんたの方が集まりやすいだろうし」

多少の思惑を含ませたメルチエの提案を、コジマは疑う素振りも見せず黙って受け入れた。

そのまま二人は別れ、それぞれに行動を開始する。

「サリュ、アルとネジに伝えて。

コジマが復活したけど、新人に興味持ちちゃったって。

うん、大丈夫、うまくやる」

だからコジマはその後、メルチエが仲間と交わした会話を知ることとは無かった。

きつとこれからも、知らないまま。

初めての徹夜

六日目。

いつも通り八時に目覚めたものの、すぐに起き上がる気にはなれず、一時間ほどベッドの上でごろごろする。

もう一度ヘルプに目を通し、精神の保護について詳しく説明されてないか確認したけど、トラウマになることは無いとあるくらいではっきりとした基準は分からなかった。

昔、VRが実用化された直後は、心を病んだり現実と仮想の区別がつかなかったりといった問題が何件も起こったと聞いたことがある。

最近はそのような事件が起きたと聞いたことはないけど、もしや表沙汰になってないだけで、実際には解決してないんじゃないだろうか。三ヶ月ひとりきりで過ごして、果たしてわたしは元のわたしに戻れるのだろうか。

考える程に不安がむくむく膨らんでいく。

「あー、もー、やめやめやめっ！」

ぶんぶん頭を振って、無理矢理恐い想像を追い払う。

余計なことを考えるのは、万策尽きてからで十分だ。
まだわたしには、沢山の手段が残されている。

「タロウ、絶対一緒にここ出ようね」

タロウの小さな手をぎゅっと掴み、強引に指切りをし、気持ちを明るくするために好きな童謡を歌う。

歌にあわせてタロウの手足を動かすと、だんだん気持ちが明るくなってくる。

三曲歌い終える頃には、すっかりとはいかないまでも、そこそこには調子を取り戻せた。

ちなみに童謡は歌一覧には表示されなかった。
借り物の歌じゃ作詞として認められないようだ。

昨日と同じく魔力操作の練習をしながら、本棚を眺める。

魔力も地味に1増えていたから、魔力操作のスキルを伸ばしてあげば少しずつ魔力も増えて行きそうだ。

わざわざ新しいスキルを探す必要は無くなったけれど、やはりもう少し効率良く増やせると嬉しい。

結局、神話をひとつと伝記ふたつを選んで机に向かった。
まずは伝記、『占い師の一生』から取りかかる。

さしあたって知力を上げる必要は無いので、丁寧に読む前にパラパラと手早くページを捲って流し読みしておおよその内容を把握する。

占いで有名になっていく女性の話だったが、身一つで出来る占いは無く、どれも道具が必要なことが示唆されていたので、これは無理そうだと早めに見切りをつけた。

次は『治癒師の一生』だ。

補助系の、ステータスが一時的に上がる呪文がスキル発現用のものなどいいなと期待していたけれど、やはりというか体力や病気を回復させることが治癒師の本業のようで、割と初めの方で紹介されていた呪文は体力を回復するものだった。

現時点で体力を減らす手段の無いわたしはそこで読むのをやめる。

「簡単に都合のいいのは見つからないか。
そんなこともあるよねー、タロウ。」

“ そうだよお姉さん、次は見つかるよっ！”

どっちも外れだったのは残念だが、ベッドに座らせたタロウに声をかけて自分を慰めればさほど引き摺ることもなかった。

さて気分転換だと、残しておいた『サウスタリア神話』を開く。

またドロドロの愛憎劇かとわくわくしていたが、今度の神話は神々の住む天界から地上へ落ちてしまった見習いの神様ヒカルが、どうにか天界へ帰ろうと試行錯誤する話だった。

自分の現状とヒカルの境遇が重なり、ついつい感情移入してしまう。

様々な苦難を経て、ようやくヒカルが天界へたどり着いた時には、じわりと目頭が熱くなった。

「わたしも頑張る」

しばらく物語の余韻に浸った後、よしっと気合いを入れてから、からくり作りに取りかかる。

今日はまず、枕を作ってみることにした。

安眠枕という名前が示す通りそれは、ぐっすりよく眠れるようになるものらしい。

しかしこのゲームの中では、ベッドに横になってしばらく目を瞑っていれば直ぐに眠ることが出来る。

それなのにこんなアイテムがあるということは、もしかして睡眠スキルに何か関係があるのかもと最初から目をつけていたものだ。

「木材を四等分するように糸を巻いていく、と」

昨日作った道具を使い、あらかじめ木材に印をつける。

おかげで糸を巻く場所をどこにするか迷わなくて良くなったのは、非常に有り難かった。

しかし全ての糸を巻き終えると、最初に巻いた糸が元の位置からずれてしまっていることに気づく。

「んー、材料って切れ目入れてもいいのかな」

糸を引っかける場所の木材の両端に、薄く切れ込みを入れればかなり精度があがりそうだ。

適当に完成させてしまう前に図鑑にあった折りたたみ鋸の存在を思い出し、そちらを先に作ることにした。

金属と木材をずらして重ねて、糸でぐるぐる巻いて固定するだけだったので、特に道具は使わないで良く、魔力を意識しながら完成させる。

残念ながら折りたためなかつたけれど、それ以外はちゃんとしたものが出来た。

それを使つて、再び安眠枕に挑戦する。

適当な台が無かつたので、椅子を使つて木材に切り込みを入れ、先ほどと同じ手順で糸を巻いていく。

切り込みのおかげで、今度は最後まで糸がずれることは無かつた。これは結構うまくいくんじゃないかと期待を込めて仕上げにかか
る。

「おおつ、なかなか」

出来上がった安眠枕は、材料からは考えられないほどふんわりした仕上がりになり、今まで作つた中で一番きちんと作れているように見える。

解析で確認してみると名前しか分からなかつたので、ちょっとレベルも高いアイテムになるのだろう。

早速効果を試してみたかっただけで、まだ早いので、枕をぼすんとベッドに放り投げ、からくり作りを再開する。

すぐ役に立つかは分からないけれど、作業用の道具っぽいものを全部作ってしまうことにしよう。

何か必要になる度に凶鑑を開くのは面倒だ。

おそらく成功率も高いだろうし、ストレスなくスキルのレベルを上げるのにはぴったりに思える。

「木槌と鑿と、鋏と、錐と、うーん天秤はいるかなあ」

今ある材料で作れるもので、すぐには必要無さそうなものも含め、全部で十の道具の材料を準備し、道具作りにも使えそうなものから一つ一つ順に作っていく。

まずは鋏からだ。

金属板と木材をそれぞれ二枚ずつ使って、手早く組み上げ完成させるも、出来上がったのはやたら大きくて使い勝手が悪そうで、更には切れ味の良くなさそうなものだった。

これはさすがに、これでもいいかで流せない。

「材料そのまま使ってるからかなあ」

箱の中に入っている材料は、同じ大きさを統一されている。それを図鑑に載っている数そのまま使って作っていたが、木材に切り込みを入れて使っても大丈夫だったから、もっと加工してもいいのかもしれない。

それを念頭に置いてもう一度、鋏作りに挑戦してみる。鋸で適当な大きさに木材を切り、作ったばかりの鋏で金属板も切断する。

切れ味が良くないので、金属板は切断面がギザギザになってしまったが、仕方がない。そうやって加工した材料を使って再び鋏を作る。

すると今度はきちんと手の平に収まるサイズのものが出来る。試しに金属板を切ると、切断面が明らかに先ほどよりも綺麗だった。

「ふうん、からくり作り、奥が深いなあ」

好きで始めたことじゃないのに、いつのまにか面白く感じているわたしがいる。

もつといろいろ試してみたい。

その心のままに、次は鑢を作る。

材料は金属板一枚というのを参考に、手の平サイズに金属板を切り、更に表面にそれっぽく、鋏で傷を幾つもつける。

「さあて、どうなるかな」と

わくわくしながら仕上げると、非常に使いやすそうな鑢が目の前に現れた。

手にじっくり馴染むし、ざらざらした部分もわたしが傷をつけた場所にある。

ぱっと見た感じ、文句のつけようのない出来上がりだった。

「よーしっ、残りもいいの、作るぞっ」

すっかりからくり作りの面白さに夢中になったわたしは、時間を忘れて道具作りに勤しんだ。

材料を加工し、鋏や鋸の切り口を鑢で綺麗に磨きあげ、更に増え

ていく道具を駆使して新しいものを作る。

予定していた全ての道具を一度も失敗することなく作り終え、ついでとばかりに昨日作った道具も作り直し、ようやく一息ついた頃には、既に七日目の朝を迎えていた。

工夫してみよう

七日目。

全く寝ていないのに、身体は全く疲れていない。

疲労のステータスが無くても良かったと思いつつ、ただどやっばり睡眠はきちんととろうと反省する。

安眠枕も結局使わず済んでしまった。

起き続けていると、一日が経過したという実感があまりわからない。むしろ酷く長い一日が続いているような気がして、変な感じがする。

「そっいゃ、記録もつけてないや」

雑記帳を活用すると決めたのに、三日坊主どころか一日しか記録していない。

ちよっとずれは出るけど六日目の分として、今のステータスを記録しておく。

名前：シトロネラ

性別：女

種族：人間

体力：8 / 8 (15 / 15)

魔力：4 / 4 (8 / 8)

満腹度：0%

筋力：2 (5)

知力：9 (17)

耐性：2 (5)

精神：5 (10)

器用：13 (23)

速さ：2 (5)

運：2 (5)

空腹によりステータス50%減少

スキル

睡眠：41 (睡眠時回復時間4.1%短縮)

空腹：58 (空腹時ステータス6.8%上昇)

読書：26 (読書力増加)

速読：36 (読書速度増加)

解析：16 (低レベルアイテムの情報判明)

歌唱：23（歌の効果発現率2.3%）
作曲：15（作曲力増加）
機巧：25（からくり作成）
自然回復：6（自然回復速度増加）
魔力操作：11（魔力操作精度増加）

器用が一気に上がっていて驚く。

やっぱり何か作るスキルはステータス上昇が大きいんだなあ、と感心すると同時に、他のスキルが微妙なことを改めて確認することになり、少しだけがっかりした。

そして空腹スキルにちょっとした変化が起きていることに気づく。

「あれ、レベルに0.1掛けた数字じゃない」

上昇値が1%ばかり水増しされているのだ。

倍率が変わったのかなと不思議に思ったものの、もう少し変化を見なければつきりしそうにないので、今は単純に嬉しいサプライズとして受け止めた。

雑記帳に数字を写している途中、打ち間違ったところで、この際これも作り直すかと思いつく。

殆ど使っていないし、やっぱり訂正が出来ないのは面倒くさい。

一応最後まで記録してから、早速大きな歯車作りから始める。

道具のひとつ、木で出来た作業台に歯車を並べ、まずはその直径を測る。

そしてそれを半径とした円を、新しく作ったコンパスで作業台に直接描いていく。

ついでに最初に作った方のコンパスを使って大きな円の中に二つ、歯車サイズの小さな円を描く。

大きな歯車はこれからも何度も作ることになるだろうし、直接作業台に記しておいても問題は無さそうだ。

それにしても、からくりは質が高くななくても全く使えないという訳では無いようだ。

新しいコンパスは、大きな円を描くには丁度良かったけど、小さな円を描くのはちょっとだけ使いにくい。

そこで活躍するのが最初のコンパスである。

小さすぎると思っていたけれど、小さな円を描くには使い勝手良かった。

時にはわざと失敗するのも必要なのかもしれぬ。

新たに分かった事実にふむふむと感心しながら、円に合わせて材料を並べていく。

周りを糸でぐるっと囲むのは、今まで小さな歯車の輪郭に沿わせていたのだけれど、大きな円に合わせた。

うん、いい感じだ。

これだと具体的な完成後の姿が想像しやすい。

自信をもって最後の工程を終えると、非常に綺麗な大きな歯車が出来上がった。

歪みも無く、うつすら光沢を放っている。

元々の材料の歯車と比べてみても、随分と質が高そうに見える。次はこれを使って雑記帳作りだ。

金属板の横幅を大きな歯車の直径に、縦幅をその1.5倍に切り、真ん中に錐で穴を空ける。

同じものをもう一枚作り、最初と同じように順番に歯車を並べて金属板で挟み、針金でぐるぐる巻きにする前に真ん中に針金を通し、材料がずれないように固定する。

針金で全体をぐるぐる巻きにはせず、製本するイメージで金属板の左端の方に縦に針金を巻き付けた。

最後に真ん中を通していた針金を抜き、仕上げにかかる。

余計な工程をいくつか挟んでしまったが、果たして上手くいくだろうか。

わたしの心配とは裏腹に、出来上がったのはかなり質の良いものだった。

文字の訂正は勿論、コピー&ペーストに図の挿入、誤字チェック

や文字サイズの変更、他にもいろいろと出来ることが増え、まさに文書作成ソフトと言っても差し支えないものが出来た。

きつと『ごみ図鑑』はかなりレベルの高い機巧スキルを持った人が書いた設定なんじゃないだろうか。

レベルが上がると、簡単なものは手順を省略出来るとあったけど、そもそも図鑑に書かれているのは既に省略された手順なのではないか。

もう少しレベルが上がれば図鑑通り作っても支障はなさそうだが、しばらくは基本の順番は守りつつ、間に独自の工程を挟んで行こうと決心する。

「そつだ、作ったものも記録してこつと」

新しく作った雑記帳に今までのステータスを写し、そして日別に作ったものを打ち込む。

材料と作り方、それに解析で判明している情報と、出来映えを自分の印象で綴っていく。

より正確に記録するために作ったものを再度解析していくと、名前と分類の他に、レベルが判明したものもあった。

分かったのは、わたしの解析レベル引く五以下のものだった。

せつかくなので、発現したスキルについても記録していく。
基本的な効果、上がると思われるステータス、気付いたこと、
スキルあれこれ』に書いてあったこと。

一通り打ち終わってから、最初から記録を見直していき、更に気
付いたことをぽつぽつ付け足していく。

ようやく満足のいく内容が仕上がった頃には、かなりの時間が経
っていた。

「こづついうのも悪くないな、自分だけの辞書っぽくて」

雑記帳をさらりと撫で、にまにまと頬を緩める。

これを充実させるためにも、ここから出るためにも、もっと色ん
なものを作るうといそいそとからくり作りに戻った。

「次は音が出るものがないなあ」

音楽再生機なんていいかもしれない、と思ったが、さすがに難しかったし、なにより再生できる音楽が自分の歌しか無いことを思い出し、無難に笑い袋を選択する。

糸を三つ編みにして使ったりといろいろ工夫してみたが、結論から言えば失敗した。

物自体は出来た。

多分質もそれほど悪くない。

だけどそれはどうしようもなく、笑い袋でしかなく。

きひゃーひゃひゃひゃと狂ったピエロのような笑い声は、音が出るとは言え、あまり心臓に良くない類のものだった。

「大声で敵を撃退する道具って、そりゃこれは敵も怖がるよなあ」

何でこれを作ろうと思ったんだろうと、ちょっと前の自分の頭を疑いながら、慎重にそれをしまいこむ。

すっかり気持ち折られてしまったわたしは、何か本を読んで今日は寝ることに決め、本棚から『俳句百選』を選ぶ。

それは珍しくタイトル通りの本で、五七五で綴られた美しい日本

語の数々に、非常に心慰められた。

これは寝る前に読む本にしようと思つて、三分の一ほど進めたところで、ステータスを雑記帳に書き込み、ベッドに横になる。

頭の下には、昨日作ったものの使う機会の無かった安眠枕を置く。何か良い変化があるといいなと思いつつ、眠りについた。

七日目（雑記帳より）

体力：9 / 9 (16 / 16)
魔力：5 / 5 (10 / 10)
満腹度：0 %

筋力：2 (5)
知力：9 (17)
耐性：2 (5)
精神：6 (11)
器用：14 (26)
速さ：2 (5)
運：2 (5)

空腹でステータス50%減少

睡眠：41（睡眠時回復時間4.1%短縮）

空腹：64（空腹時ステータス7.4%上昇）

読書：23（読書力増加）

速読：38（読書速度増加）

解析：19（低レベルアイテムの情報判明）

歌唱：23（歌の効果発現率2.3%）

作曲：15（作曲力増加）

機巧：30（からくり作成）

自然回復：10（自然回復速度増加）

魔力操作：15（魔力操作精度増加）

思い切って挑戦

八日目。

起きてすぐにステータスを確認したが、劇的に睡眠スキルの値が増えていることもなく、安眠枕の効果を確認することは出来なかった。

てっきり睡眠スキルの成長率が上がるのだとばかり思っていたので、がくりと落ち込んでしまう。

朝っぱらから出鼻を挫かれたせいで、ついつい余計なことを考えてしまった。

わたしがこの部屋に閉じ込められてから、もう八日目も経過している。

誰とも会わず喋らないどころか、自分以外が出す音を聴かずに過ごす日が一週間以上続いてしまっているのだ。

人の声はおろか、鳥のさえずりも、車のエンジン音も、風の音も雨の音も、何もかもがこの部屋には存在しない。

時間になると、もうすぐ二百時間に達してしまふ。

改めてそれを認識すると、少しだけぞっとしてしまふ。

続けて深く考えると、取り返しがつかないほど落ち込んでしまいそうなので、でたらめな歌を歌い、俳句を読んで気を紛らわせてから行動を開始する。

さて、とわたしは図鑑片手に考えこんだ。

わたしは実は、はつきりと自覚していないだけで、結構な所まで追い込まれているのかもしれない。

タロウと話すのもすっかり当たり前になってしまったし、ふと気を抜くと悪い方へ暗い方へと思考が傾いてしまいがちだ。

もともとそんなにネガティブな方では無いので、そんな自分に違和感を覚えてしまう。

ここはひとつ、スキルレベルや器用が低いなどと言って諦めず、『万能アンテナ』作りに挑戦してみるべきではないだろうか。

失敗してもスキルレベルは上がるだろうし、運良く完成させられれば、例え質が低くて万全の効果を発揮できなくても、一つくらい外との連絡手段が出来るかもしれない。

何よりも、目的に近づいているとはつきり実感できる行為が、今のわたしには必要だ。

よし、と気合いを入れ、まずは材料作りに取りかかる。

万能アンテナに必要なもののうち、自分で作らなければならぬのは、大きな歯車二つに、大きな金属板一つ、あと太い糸と太い針金が一本ずつ。

最初に取りかかるのは大きな歯車だ。

昨日一度作っていたおかげで、組み立てから仕上げまでスムーズに進む。

そして魔力を放出しつつ名前を呼ぶと、魔力が丁度5になったところで、一瞬光の色が変わった。

まさか失敗かとひやりとしながら出来上がったものを確認すると、昨日よりさらに光沢のあるものになっていた。

「もしかして、大きな歯車に必要な魔力は5ってことなのかな」

生憎わたしの今使える最大魔力は5なので、それを越えたらどうなるのか確認は出来ない。

しかし魔力を全部注ぎ込めばいいのでは無さそうだというのが分かっただけでもかなりの進歩だ。

考えて答えが見つかる訳でも無いので、確認も兼ねてもう一つの大きな歯車を作る。

さつきよりさらに集中して魔力を注ぎ込むと、やはり5の時に光の色が変わった。

わたしは雑記帳を取り出し、魔力についての補足を打ち込み、次の作業に移った。

大きな金属板は単純に金属板を二枚くっつけて並べるだけなので、非常に簡単に作れそうだった。

しかし実際並べてみると、二枚の間はかなり隙間が出来ることが分かった。

わたしは鑢で分かりやすく歪んでいる部分を削り、再び二枚を並べる。

さすがに完全にぴったりには出来なかったけれど、さっきよりは随分マシにはなった。

二枚を更に針金でしっかり固定しようかと思ったけど、完成した時に針金の部分がボコっとなって質が下がりそうな気もしたのでやめておく。

すうはあと深呼吸をし、慎重に魔力を出して行くと今度は4のところで光の色が変わる。

慌てて魔力の放出を止めようとするが、それは叶わず全魔力を注ぎ込む結果になってしまった。

魔力が5になった瞬間には光の色は変わらなかったのですが、規定値以上注げばいいという訳ではなく、それぞれに決められた魔力の値を込めなければならぬようだ。

出来上がった金属板の質はそんなに悪くはなかったが、魔力をもっと早く止められていればもっと良いものが出来ていたかもしれないと思うと、悔しい。

「あれ、魔力ってどうやって止めるんだろ」

そこではたと基本的なことに気づき、急いで魔力操作の練習をする。

魔力を放出する速度は少し操れるようになったけれど、止めるのはどうやればいいか分からない。

止めたい瞬間に流れを塞ぎ止めるイメージを持ってみても、多少放出スピードが遅くなるだけで、止まってはくれず最後まで出切っ
ててしまう。

何度か試してみて、どうやらまだ今のレベルでは無理そうだということが分かり、止めるのはすっぱり諦めた。

ここは考え方を変えて、指先の向きを変えることで調整してみよう。

もう一度、大きな金属板を作る。

今度は魔力が4になった瞬間腕を真横にやり、名前を呟く。

出来上がったものは、さっきのよりも光沢があった。

どうやら指の向きを変える方法は、有効らしい。

何度か試してみないと断言は出来ないけれど、しばらくはこの方法でいくことにする。

上手くいったことにほっと安堵の息を吐き出し、すぐに次に取りかかる。

太い針金と太い糸は作り方は似ていた。

材料何本かを一纏めにするだけ。

しかし本数には違いがあり、そこに工夫のしがいがあると見た。

まずは太い針金からだ。

これに必要な針金は二本だけである。

それを互いに絡ませ、紙撚りのように捻っていき、最後に端を切り揃え鑢で丁寧な磨いた。

魔力を全て注ぎ込んでも今度は光らなかった。

残念ながら魔力が足りなかったようだ。

出来栄はそこそこ、元の針金と同じくらいの質だ。

これ以上の改善点が特に思い付かなかったのでこれでよしとして、次は大きな糸に移る。

大きな糸に必要なのは、糸九本。

三の倍数だったので、三つの三つ編みを作り、更にそれを編み込み、端をぎゅっと堅結びにする。

元の長さよりかなり短くなってしまったのが気になったが、特に改善はせずそのまま完成させた。

こちらに必要な魔力は6以上なようで、光の色に変化は見られなかった。

出来上がったのは所々解れていて、お世辞にも質が良いとは言えないものだった。

三つ編みにするのが正解だと思い込んでいたので、この結果は少々堪えるものがある。

さすがにこのまま材料として使うのは躊躇われる。

もう一度ちゃんと作り直すことにして、今度は特に手を加えず、順番に並べてから一纏めにしてから完成させる。

今度は先ほどよりもちゃんとしたものが出来た。

やたらと手を加えればいいというものでは無いらしい。

そういえば最初は三つ編みすることに気をとられていて、並べる順番が疎かになっていたような気がする。

図鑑の順番は重要らしいことを改めて確認し、ここで一旦手を止め、雑記帳に新たに作った三つの材料の情報をつけ加えていく。

解析もして、分かっていることを全て打ちこんだところで一度休憩をいれることにした。

「んーダメだ、組み立てのイメージが掴めないなあ」

休みがてら図鑑を手にし、万全アンテナのページを眺める。

完成した形はパラポラアンテナのようだが、わたしはパラポラアンテナの仕組みをよく知らないし、実物を見たことも無いので、材料を見ても手順についての明確なイメージがわいてこない。ぱっと思いつくのは、金属板に丸みを持たせるくらいだ。

「タロウ、何か良いアイデアない？
” 難しいねえ、うーんうーん”」

タロウに助けを求めてみたものの、都合良く何か閃くこともなく、しばらくぐだぐだ会話をした後、とりあえずやってみてからまた考えるかと行動を再開した。

外の世界と想像

まずは金属板に丸みをつけるべく、木槌でがつんがつん叩いて形を変えていく。

どれぐらいの曲面が必要かはさっぱり分からないが、確か半球まではないってなかった気がするので、角度をつけすぎないように苦慮した。

しかし木槌だけで金属板の形を変えるのは、思っていた以上に難しい。

綺麗な曲面にはならず、一部分だけべこつと凹んでしまったり突出してしまったりと、なかなか思い通りの形にはなってくれない。それでもしつこく叩き続けているうちに、多少ましかと妥協出来る程度にはなったので、これ以上叩いてまた形が歪むことを恐れ、そこで木槌を置いた。

不恰好に外枠からはみ出してしまった部分を鋏で切り落とし、縁を鑢で丁寧に磨いて、ようやく土台が出来上がる。

今までで一番大変な作業だった。いつの間にかつめていた息を吐き出し、額の汗をぐっと手で拭うフリをした。

実際に汗は流れていないのが、こういうのは気分である。

早速出来上がった金属板の上に部品を並べてゆくのだが、平らで

なくなつたせいで手を離すとすると部品が中心に向かって滑り落ちていってしまう。

そこで適当な場所に錐でぶすぶすと幾つも穴を空けて、そこに針金を通し部品を結んで軽く固定することにした。

並べる順番と大まかな位置だけ図鑑を参考にして、金属板の中につまく収まるように頭を捻って部品同士を噛み合わせていく。

一通り並べ終えた後に部品が一つ余っていることに気づいてはやり直し、全部使ったものの金属板から大きくはみ出してしまったのでやり直し、何度も並べてはやり直してを繰り返しているうちに、どうにか形になった。

「もっかい並べろって言われたら無理だなあ」

殆ど偶然に組み上がったことにぶつとため息をつき、うっかり触つて崩してしまわないうちにさっさと仕上げにかかる。

そつと金属板の縁に人差し指を置き、その先から魔力を放出しながら名前を呟くと、光が緑色に変化した。

失敗かと思つたが、光の中からは材料でも万能アンテナでもないものが出てきた。

「なんだこれ、んんん、棒？」

パラボラアンテナと似ても似つかぬそれは、10cm弱の金属の細い棒で、引つ張ると三倍程度に伸びた。

一体何が出来たんだろうと首を捻りながら解析を行うと、『簡易アンテナ』と表示される。

万能アンテナは作れなかったが、一応アンテナらしきものは出来たので、どれ程の物か試してみることにした。

簡易アンテナを片手に持ち、多少役に立てばいいのだけどさほど期待せずにメニューを開く。

きつと無理だろうな、と思いながら掲示板の文字に触れた。

エラーを予想していたのにすんなり新しいページが展開されたので、一気に胸がどきどきと高鳴ったが、次の瞬間あっさり落ちついた。

「全部文字化けかあ、ま、そんなもんだよね」

予想通り、と強がってみるけれど、やっぱりどこか期待していた

部分はあつたらしく、しゅんと肩を落としてしまつ。

チャットもブログも掲示板と同じく、エラーは出ず先のページには進めるものの、文字化けしていて何も読み取れることは出来なかつた。

「あーあ、残念だなーって、お、おおおっ！」

口をへの字に曲げて、読み取れない文字を適当に触っていると、おそらく誰かのプログラしきものが開いた。

中身も他と同じく全て文字化けしていて、何を書いているのかさっぱり分からない。

わたしが驚いたのは別の部分だ。

その記事には、小さなフェアリーの女の子と大きな巨人族の男性が、遺跡らしき建物の前でピシッとポーズを決めている写真が表示されていたのだ。

「うわ、人だ、人だよタロウっ！」

わたしはすっかり興奮してしまい、タロウを掴んで部屋の中をぐるぐる転げ回った。

久しぶりに目にする自分以外の姿は、ゲームの中にわたし一人きりじゃなく、誰かが存在していることを感じさせてくれ、今も元気にどこかを駆け回っているのだと想像すると、感極まって思わず涙が出そうになる。

何度も何度も写真に触り、うへへへと怪しい声をあげてにやにやとだらしなく笑い、もっと他は無いかと勘に頼って次々に新しい記事を開いていく。

写真付きの記事は全体の割合からしたらそう多くは無いみたいだが、それでもわたしの寂しさを慰めるには十分な量があった。

敵と戦っている人間の男の子、美味しそうな料理を前に談笑しているエルフの男女、小型の竜の背中に乗るフェアリーの女の子、巨人族の人たちに胸上げされているドワーフの青年。

ぼやけていて顔もよく分からない写真も多かったけれど、それですら見ていて楽しかった。

その中でもわたしが特に気に入ったのは、どの記事にも一枚以上の写真がついているひとつのブログだった。

そこに載っている写真は他のものに比べると圧倒的に綺麗で躍動感がある。

激しく動いているだろう場面を切り取ったものも全くブレていない。構図も綺麗で見映えのするものばかりに見える。

写真に関しては全くの素人だが、そんなわたしでもこれがかなりセンスが無いと撮れないものだろうと推測出来た。

「もしかして写真にもスキルってあるのかなあ」

スクリーンショットの機能はついていなかったことを思い出し、これがスキルなら面白いものがあるものだと感心しながらそのブログを過去に遡って、一枚一枚写真をじっくり楽しんだ。

お気に入りに登録したいけれど文字化けのせいでその方法が分からないので、せめて頭に焼き付けておこうと、細部までじろじろ眺める。

よく写真に登場する人たち三人に勝手に名前をつけ、ポーズや恰好からなんとなく性格を想像し、ここを出たら会ってみたいなあと憧れを募らせる。

その為にも早く万能アンテナを完成させねばと思うものの、なかなか写真漁りをやめることが出来ず、結局夕方近くまで写真を眺めて過ごしてしまった。

「よしっ、やる気回復!」

写真のおかげでかなり元氣の出たわたしは、もう一度氣合いを入れて万能アンテナ作りに取りかかった。

次はぜひブログの内容を確認出来るものを作りたい。

そして、もつと外の世界を楽しむのだ。

より明確な目的が出来たせいか、自然と材料を選ぶ手にも力がこもってしまった。

必要な材料を作り、さつきと同じ手順で並べていく。

金属板を加工するのも意外と上手くいき、ふんふん鼻歌を歌いながら組み上げるていった。

やり直すことなく一度で上手く材料が金属板の中に収まり、これはとかなり期待していたのだが、今度は残念ながら何も出来ず、せっかく苦勞して丸みをつけた大きな金属板と歯車が消える結果になつてしまった。

残念だけれど今回が特別悪かつたんじゃなく、さつきが余程運が良かったんだと自分に言い聞かせ、必要以上に氣に病まないことにした。

しかし何度も失敗が続くとさすがに落ち込みそうなので、今日はこれで終わることにした。

雑記帳にステータスを写し簡易アンテナや金属板の加工等について書き込む。

全く意識はしていなかったけれど、後から読み返したら非常に浮かれた言葉が踊っていた。

どれだけ嬉しかったんだと自分に苦笑いしてから雑記帳を仕舞い、ベッドに座って俳句を読む。

更には五枚だけと決めてブログの写真を眺め、わたし自身をその写真の中に加えた幸せな想像をしながら、ゆっくり目を閉じた。

八日目（雑記帳より）

体力：9 / 9（16 / 16）

魔力：6 / 6（11 / 11）

満腹度：0%

筋力：2（5）

知力：10（18）

耐性：2（5）

精神：6（12）

器用：17（31）

速さ：2（5）

運：2（5）

空腹でステータス50%減少

睡眠：4.7（睡眠時回復時間4.7%短縮）
空腹：7.0（空腹時ステータス8.0%上昇）
読書：2.6（読書力増加）
速読：4.0（読書速度増加）
解析：2.4（アイテムの情報判明）
歌唱：2.5（歌の効果発現率2.5%）
作曲：1.5（作曲力増加）
機巧：4.1（からくり作成）
自然回復：1.3（自然回復速度増加）
魔力操作：2.0（魔力操作精度増加）

ブログを投稿

九日目。

今日もしつこく万能アンテナ作りに勤しむつもりだ。
いきなり取りかかるのではなく、成功率を上げるためにもちゃんとした万能アンテナにするためにも、まずは材料の質を上げることにした。

大きな歯車と大きな金属板はこれ以上手の加えようが無い。
改善点があるとすれば、素早く正確に組み立てることくらいしか思いつかないので後回しだ。

まずは、太い針金から。

組み立てる方法自体は昨日とさほど変えず、二本を捻る時になるべく均一になるよう注意する。

変えるのは、注ぐ魔力の量。

昨日寝る前に、万能アンテナを作った途中で魔力が1増えていたことに気付いた。

太い針金を作った時には魔力は5のままだったので、これは試してみる価値はあるだろう。

「うまくいってよーっ」

ぱんと両手を合わせて仕上げを待つ部品にお願いしてから、出来るだけ素早く魔力を放出する。

最後まで絞り出すと、一瞬光の色が変わった。成功だ。

出来上がったものは、表面がツルツルしており、明らかに元の針金よりも質が良さそうだ。

よしよし、と頷いて何度かそれを撫でてから、次の材料に取りかかる。

太い糸はまだまだ改善の余地がある、と思う。

三つ編みはダメだったので、まずは九本の糸を順番通りに纏めてから、両端を堅結びにした状態で仕上げてみた。

残念ながら魔力は6ではまだ足りないようで、光の色に変化は見られない。

その結果出来たのは昨日とさほど変わらない、きちんとはしているが普通の域を出ないもの。

次は両端の他に、真ん中も結んでみる。

これはまずかつたらしい。

最初よりも、解れが目立つ結果になってしまった。

結び目を増やすのが駄目なら、後は何を試そうか。

少し悩んだ後、わたしはちょっと汚いかなとは思いつつ、糸を口に含んで唾液で湿らせ、その湿り気で互いをくつつけることにした。

細かいところまで再現されているゲームならではの工夫だ。

ふわふわと落ち着きのなかった糸は、水気を得たおかげできつちり纏まり、完成させる前から既に一本の糸になっているように見えた。

仕上げてみると、格段に出来がいい。

使えるものはなんでも利用すべし、と雑記帳に書き込んで、わたしは残りの材料作成に取りかかった。

金属板に丸みをつけるのはやっぱり難しい。

昨日二回目に作った時より上手く出来ず、一回目のものとさほど大差の無い仕上がりになる。

しかし余った部分は切り落とさずに、叩いて凹ませ、鑢をかけることで対処した。

そのおかげか、昨日よりも多少大きな円が出来上がる。

これなら部品を配置を考えるのが少し楽になりそうだ。

雑記帳を捲り昨日の工程を確認し、一度材料を置いて固定したい場所に予め錐で穴を空け、針金も通しておく。

接着剤みたいなものがあれば便利なのにと思いつつも、てきぱきと素早く部品を並べて、最後に魔力を注いで名前を呼ぶ。

光が変色することもなく、どうやら成功したらしい。

現れたものは手のひらに乗るくらい小さかったけれど、紛れもな

く図鑑に載っていた万能アンテナの形をしていた。

「よよ、よし、これで実験」

一度であっさり上手くいったことに多少動揺しながら、出来上がった万能アンテナを机の上に置き、ぶるぶる震える手でメニューを開く。

すぐに掲示板もチャットも相変わらず文字化けしているのが分かって、がっかりするどころか逆にほっとしてしまった。

失敗するのが当たり前になりつつある自分に、弱気はダメだと気合いを入れてからブログを開くと、文字化けに混じって存在する意味のある言葉が目飛び込んできた。

「お、おおお、おおおおっ！」

ついに、ここまで来た。

ぐぐつと胸に熱いものが込み上げてくる。

スキルや人の名前、地名などは全く読み取れなかったが、それで

も何が書かれているか分かる。
ちゃんと理解出来る。

と を倒しましたー強かったわーまじ鬼畜！

スキル500レベル到達！ 今からギルメンにお祝いして
もらいまーす！

で が 。 馬鹿ばっかだ（笑）

もう飽きたー疑似イベ長えよ！

色んな人の言葉が生き生きと踊っていて、貪るように片っ端から
読んでいった。

楽しい、嬉しい、悲しい、ムカつく。

様々な気持ちがあるそこには渦巻いていて、わたしは一緒の気持ちに
なって、喜び、怒り、声をあげて笑った。

勿論、昨日気に入った写真が綺麗なブログも舐めるように読んだ。
ひたすらひとつのスキル、おそらく写真、について書かれていて、
並々ならぬ情熱がひしひしと文面から伝わって来る。

おかげで益々ブログの主のことが好きになってしまった。

「コメント、は出来ないか」

特に面白かった日記にはつい何か言葉を残したくなったけれど、さすがにそれはまだ無理なようだった。

コメントがついている日記はいくつかあったから、機能としては存在しているのだろうけれど、今のわたしには使えないらしい。

残念だけど仕方ない。

人のブログが読めるようになっただけでも大きな進歩だ。

「あれ、そうだ、わたしがブログ作るのは無理なのかな」

途中でふと思いつき、メニューからブログを選択した時に初めて出てくるページへと戻る。

新着日記のお知らせで埋め尽くされた画面の隅っこに、『日記を書く』との一文を見つけ、わたしは迷わずその文字に手を触れた。内心予想していたエラーが発生することもなく、あっさり新しいページが開く。

出てきたのは、下に投稿ボタンがついただけの真っ白なページ。

「ど、ど、どうすれば」

先に引き続いてあまりに順調な展開に余裕が無くなり、おろおろ吃りながら呟くと、そのままわたしの言葉が文字となって白いペー
ジに表示された。

すぐに音声入力システムか、と気付いて落ち着き取り戻し、試し
に何か書いて投稿してみることにした。

書きたいことは沢山あったけれど、なるべくシンプルに分かりや
すく、更に人目に触れる場所に投稿することを考慮して、特定の誰
かを非難することの無いよう心がける。

そのため今の自分の状況について書いているのに、緊張感や危機
感に欠ける内容になってしまった。

「もうちょいつけたそうかなあ。

いやでも同情買うのはやだし、ん、こんくらいでいつか」

今の自分の寂しさや大変さをアピールしたい気持ちが無かった訳
じゃ無いが、そうすると最初にわたしを拉致した二人組を暗に非難
することになりそうだったのでやめておく。

誰にも会わないうちに、対人関係に問題を抱えるのは御免だ。
この記事が万人に見られるなんてことは無いだろうが、気を遣うに越したことはない。

一番最初にタイトルっぽい一文を加え、ぼちりと投稿ボタンを押すと、画面が切り替わり投稿完了の文字が浮かび上がる。

どうなったか確認するために再び最初のページに戻ると、新着日記一覧の横に自分専用のスペースが増えていた。

新着日記の中にもわたしが書いたものが加わっており、ぼちんとそれを選択すると他のブログと同じように記事が展開される。

大きな群れに仲間入りしたみたいで、なんとなく嬉しい。

「コメント、つくといいなあ」

うきうきしながら画面を閉じる。

が、初めて誰かとの意志疎通が成立しそうな予感に、なかなか落ち着くことは出来ず、しばらくブログを開いてはコメントが来てないのを見てがっかりする、なんてことを繰り返してしまった。

初めてネットの掲示板に書き込んだ時みたいだ、と自分の行動に苦笑いし、何十回見ても変わらないコメント欄を確認してからようやくコメントを使って誰かと交流することは諦めた。

閑話・写真家の喜び

「はるたんはるたんっ、見て見てこれっ」

自称『カメラマン』のハルベルトⅡハルベルタ、通称ハルがギルドの集会場で一人、撮り貯めた写真をせっせと整理している時のことだった。

ギルドのメンバーであり彼女の被写体の一人でもある七海が勢いよく扉を開いて飛び込んで来て、メニュー画面を展開させたまま上機嫌で駆け寄ってきた。

「なんや騒々しいなあ。

あ、この写真なかなかええやろ？」

呼ばれたハルは適当に返事をしつつ、ひらひらと一枚の写真をつまみ七海の目の前へ差し出した。

「うわっ、やだ七海ちよー可愛い、可愛すぎっ！
って、じゃなくてえっ！

ほらほらはるたん、このブログ見て見てっ」

写真の中で可愛らしくポーズを決めた自分の姿に、一瞬うっとり見とれた七海だったが、すぐに我に返り自分の展開している画面をハルへとぐいぐい押し付けた。

「んーこれ写真無いやんー。

うちが他人のプレイ日記興味無いん知ってるやろ」

いかにも気が進まないといった口ぶりで、しかししびしび七海の前に表示された画面を覗き込み、差し出された日記に目を通したハルは、途中でぱあつと顔を輝かせた。

「ちょっとちょっとこの綺麗な写真のブログって、絶対うちのことやん！」

いやあ嬉しいわー、見る目ある子やなあ。

へえ、慰められましたって、なにこの子めっちゃ不憫やん」

途中触れられていた写真のことがおそらく自分のものだと確信し、やっと興味が湧いて改めて文章を初めから読み直すと、あまり他人に関心の無いハルも憐れみを覚えるような体験が、淡々とした言葉で綴られていた。

「ほら、あのお調子者ギルドがちよっかいかけてえ、オヒトヨシ様が指名手配かけた子だよー」。

新着日記巡回してたらたまたま偶然見つけちゃってさ。

ダントツで目を惹く綺麗な写真なんてはるたんのくらいでしょ？

これは早く知らせなくちゃって思ってたさっ！

七海えらいでしょー」

えへへーと得意気に胸を張る七海の頭を撫でて、せっかくなので挨拶しとこうとハルは自らメニューを操作して画面を開き、ブログの新着記事一覧から先ほどのものを探す。

「二ページ分遡ったところでそれらしきものを発見し、いざコメントを送信しようとするも、弾かれてしまう。」

「ああ、フレンドのみの設定になってないのになんでなんやろ」

首を傾げ目線で問うと、それを受けた七海もハルの真似をして同じように首を傾げてみせた。

「七海も試したけどね、コメント出来なかったの。
理由はわかんないけど、多分隠し部屋のせいじゃないかな」

残念だよねえ、とさほど残念そうでもない様子で、首を傾けたまま七海はにっこり楽しげに微笑んだ。

「いやあ、ほんま要領悪いなあこの子。」

一週間以上隠し部屋出れんなんで、あり得んやろ」

ほう、と呆れたようにハルが呟くと、七海が待つてましたとばかりに勢いよくぺらぺらと喋り出した。

「それがね、その子、多分まっさら初心者ちゃんばいのー。

ブログには書いてないけど、あのオヒトヨシ様がさあ、その子について分かってるだけの情報、掲示板にアップしちゃってえ。

チュートリアルも受けずにキラキラおめでキョロキョロしてたところ、お馬鹿さんたちに浚われちゃったらしいよっ！

多分隠し部屋のセオリーも知らないんじゃないかなあ。

んっふふっ、可哀想にねえ」

「ああ、はいはい、オヒトヨシ様な」

少し唇を歪めてハルが七海の言葉を繰り返す。

対する七海も、皮肉げな笑みを浮かべた。

「ほんと、オヒトヨシ様も悪気が無い分タチ悪いよねえ。
純真無垢なのも程々じゃなきゃ、悪意と変わんないのにい。
あ、信者サマたちにはナイシヨね」

人差し指を口にあて、茶目っ気たっぷりウィンクする七海に、
ハルも片眉を上げて反応する。

「で、七海はこの子、気に入ったん？」

視線を手元に戻して写真の整理を再開しつつ、ハルが何気ない口
ぶりで質問する。

「まだ分かんないけど、要領悪そうなことか、前情報無しで来て
そうなことか、かなり七海好みっ！

あとほるたん気づいてた？
この子あんだけのことされたのに恨み言一つも書いてないんだよ。
こっちを下げずに相手を攻撃する言葉なんていっぱいあるのに、

偽善者っぽくてイイよねえ。

んふっ、からかって遊んだら楽しそおー。

とにかくオヒトヨシ様んとこに取られるのだけはやだなあ、つま
なくなっちやいそだもん。

それだけは断固阻止っ！

あとねあとねっ」

「分かった分かった、七海の好きにしい」

機関銃のごとく喋り続ける七海の言葉を遮り、ハルは薄く笑う。

写真に目を向けたまま、軽く放たれた容認の言葉に、七海はにい
いと唇を吊り上げた。

「えへへ、はるたん大好きーっ！

よーっし、『ブロガー』七海、頑張りまあっす！

待っててね、絶対はるたんファン連れてくるから！」

最後にハルにぎゅっつと抱きついて、七海はつきつきと軽やかな
足取りで集会場の外へと駆けていった。

ギルド『一発芸』は、自称『写真家』のハルを筆頭に、ネタスキルに特化した人間と、七海が気に入ってスカウトしてきた人間で構成された集団である。

戦闘に役立つスキル持ちは極めて少なく、また『愉快犯』とは違った意味でひねくれた人間が多いので、『さんふらんしすこ』とはあまり相性が良くない。

特に七海は、運営に目をつけられないギリギリの線で人をおちよくり面倒事をばら蒔き、火の無いところに煙を立てて面白がり、果てはブログにその顛末を事細かに書いてアップしてしまうため、多くのプレイヤーに『愉快犯』以上の要注意人物として警戒され嫌悪されている。

しかし見た目は天使のように愛らしく、好んで着ているフリフリのロリータファッションがその外見に非常に良く似合っているため、その腹黒い中身とのギャップと相まって熱狂的な信者が少なからず存在するのもまた事実である。

「うちにオヒトヨシ様にお調子者に、この子もえらい目えつけられて大変やなあ。

珍しいスキル持ってたらええけど」

広い集会場にぼつんと一人取り残され、大変そうとは言いながらさほど気持ちのこもらない声で呟いたハルは、一枚の写真を手に取った。

最近撮った中では一番気に入っているもので、ブログには載せずに仲間内だけで楽しもうと思っていたもの。

少し考えてから、それをブログに貼りつける。

「頑張つてや、お嬢ちゃん。

うちの写真のためにも」

然り気無く激励の言葉を混ぜ、近い未来仲間になるかもしれない被写体候補のために、新しい記事を投稿した。

そしてハルはそれきり、少女の存在を記憶の彼方に追いやってしまっ

ハルベルト「ハルベルタ。

彼女の興味の幅は非常に狭い。

そんな彼女にとって、七海や他のメンバーが起こす問題は些末なことだった。

ただ良い写真が取りたい、興味があるのはそれだけ。

さすがにギルドの仲間のことや、よくメンバーから話を聞くプレ

イヤーの話は覚えているし、聞いた話を忘れる訳では無い。
ただ再び話題にされない限り、自分から思い出すことは滅多に無い。

「今度は火山で水芸してる写真がええなあ。 大道芸スキル持ちの子おはログインしてたっけね」

既に思考は次の写真の構想へと移っており、自分の写真が好きだという少女のことは、記憶の底へ沈めてしまふ。

そんな彼女がトップに立っているからこそ、ギルド『一発芸』は成り立っているのであり、彼女もまた、コジマとは別の意味で人を惹き付ける人間だった。

称号獲得

メニュー画面を閉じたものの、まだ少しブログに気を取られていたせいか、すぐに万能アンテナ作りを再開する気にはなれず、本を読んで気分転換をすることにした。

すっかりお気に入りになっていく『俳句百選』を開き、特に好きなものを口に出して読み上げていく。

綺麗な言葉を紡ぐのは、人の言葉を借りていても気持ちがいい。

ゆっくり味わいながら、何度も言葉を噛み締めていると、久しぶりにメニューバーがちかちか光っていることに気がついた。

「んんん、あれ、何が変わったんだろ」

メニュー画面を開き、ざっとスキルを確認するが、新しいものが増えた訳では無いようだ。

読み上げた俳句が歌として認識されたのかと歌一覧のページを開いてみるも、特に変化は無い。

更には新しいページが増えたようでも無く、わたしは首を捻ってステータスをもう一度上からじっくりと眺めていく。

そうしてようやく、全体的にステータスが上昇していることと、種族の下に新しい項目が増えていることが分かった。

「称号、ひ、独り身？」

新しい要素が増えたことに喜んだのもつかの間、あまりに安直な名前のそれにくっつと頂垂れる。

特定の敵をいっぱい倒したり強いボスを倒すと、称号が貰えるっていうのはヘルプで見た記憶があった。

確か称号持ちになると、ある敵に対して強くなったり、ドロップアイテムが増えたり、なんていう恩恵が受けられるようになるらしい。

しかしわたしはボスを倒すどころか、まだ一度も戦っていない。

むしろ武器すら握ったことが無いのだ。

称号イコール戦闘を頑張った証だと認識していたので、自分に称号がついたことに戸惑ってしまった。

もしかしたら戦闘じゃなくプレイスタイルによってつくようになるのかも思い直し、それでも特に心当たりが無いと首を捻りながら、何気なく称号の部分に触れてみた。

すると詳しい説明がぶわっと目の前に飛び出してきた。

称号：独り身

発生条件

一定期間他プレイヤーと相対せず過ごす
その他一定の条件を満たす

効果

周囲半径30m以内にいる他プレイヤーの人数に応じてステータスが+30%～-70%の間で変動する。

パーティーを組んだ場合、メンバーにも同様の恩恵が適用され、解散すると解除される。

尚、パーティーメンバーも他プレイヤーとして数えられる。

「えええ、なにこれひどい、全然嬉しくないっ!」

最後の一文まで読み終え、あんまりな内容に思わず悲鳴をあげてしまった。

これはつまり、近くに誰かいると弱体化する呪いみたいなもので、パーティーなんか組もうもんならみんな巻き添えを食らってその呪いを受けてしまう、ってことだろうか。

他プレイヤーの人数が多い程ステータスが上がるという可能性も無いわけじゃないし、是非そっちであって欲しい。

けれど残念ながら今まさに周りに誰もいない状況で、ステータスが大幅に上がってしまったこととその名称から考えて、周囲に人が増える程弱くなっていくものだと考えるのが妥当だろう。

だとしたら非常に意地が悪い称号だ。

誰かとパーティーを組むどころか、近くで一緒に狩りをするのも難しくなってしまう。

どれぐらいの人数が居るとマイナスに傾いてしまうのか、もっと詳しいことが知りたかったが、説明はそれで終わりだった。

この隠し部屋の中でステータスが上昇するのは非常に嬉しい。

空腹でのステータスの減少は痛かったし、器用が上げればもっと質のいいアンテナも作ることが出来るだろう。

しかし外では殆どの場合マイナスにしか働かなさそうなのでこの称号を外す方法が、今すぐにも知りたかった。

自在に称号を外すことは出来ないものかとステータス画面のあちこち触ってみたが、特に変化は見られない。

久しぶりにヘルプを開いて、改めて称号の部分を読み直すと、一度取得した称号は別の称号を得た時にどちらか選んで変更するか、何らかのスキルで消すしか無いとすっかり書かれてあった。

「うわあ、やっぱり呪いだよこれ」

散々な結果に、項垂れるどころではなく、べたりと床に転がり膝を抱えて丸まってしまふ。

そのままごろごろと左右に体を揺らし、あーとかもーとかうめき声を挙げ、くさくさした気持ちを発表させようとした。

しかし途中で、すぐには言わないけれどそのうちパーティーを組んで遊んでみたかったな、なんてことをすっかり考えてしまい、余計に鬱々としてしまふ。

今日は全てが順調にいったので、いつの間にか調子に乗って浮かれていたらしく、反動でいつもより気分がずんと落ちてしまふ。

「いやいやいやいや、でも、ここ出るまではステータスあがったまんまだし、うんそう考えればラッキー、うんわたしラッキーわたしはラッキーラッキー」

自分に暗示をかけるがごとく、ぶつぶつとポジティブなことを言い聞かせ続け、やがてそれが歌として認識されたくらいで、多少気持ち落ち着いた。

出来た歌は運を5%上げる効果を持っていたが、改めて歌う機会

はおそらく二度とやって来ないだろう。

歌の消し方も調べなきゃなあと思いつつ、雑記帳を開いて今日新しく分かったことを加えていく。

その作業もなかなか進まず、間違えては打ち直しを何度も繰り返したところで、今日はもう終わりにしようと思った。

こんな状態では何をやっても上手くいかないだろう。

四苦八苦しながら今日の成果を書き終えた後、また何度も間違いつつながらステータスを写していく。

称号が微妙なことに変わりはないけれど、ステータスのマイナス補正が少なくなったのは嬉しかった。

元のステータスにさほどの変化は無いが、現状で反映される値が一気に増えたおかげで、少しは明るい気持ちになれた。

「明日も頑張るね、タロウおやすみっ」

増えた値をしばらく指でなぞってから雑記帳を机の上に置き、ベッドに潜り込む。

天井を見つめながらお気に入りの俳句をいくつか讀じ、タロウに声をかけ、ゆっくり目を閉じた。

九日目（雑記帳より）

体力：24 / 24（28 / 28）

魔力：11 / 11（13 / 13）

満腹度：0%

筋力：4（5）

知力：15（18）

耐性：4（5）

精神：10（12）

器用：31（36）

速さ：4（5）

運：4（5）

空腹でステータス50%減少

称号でステータス30%増加

睡眠：53（睡眠時回復時間5.3%短縮）

空腹：76（空腹時ステータス8.6%上昇）

読書：27（読書力増加）

速読：42（読書速度増加）

解析：28（アイテムの情報判明）

歌唱：28（歌の効果発現率2.8%）

作曲：1 6（作曲力増加）

機巧：4 6（からくり作成）

自然回復：1 6（自然回復速度増加）

魔力操作：2 5（魔力操作精度増加）

高まる期待

十日目。

今日こそは、誰かと言葉を交わしてみせる。

そう強く決意して、また材料作りから開始する。

手順は昨日と変えず、魔力を放出するスピードに気を配った。

太い糸は魔力が8で無事に光の色に変化が見え、満足のいく出来栄えた。

他の材料も、組み立てに慣れたおかげか、ステータスが上がったおかげか、やたらとぴかぴか光るものになった。

金属板に丸みをつけるのは、まだまだ上手くない。

多分本当にちゃんと作るなら、型を用意しなければ駄目なんだろうな、と思いながらある程度のところまで折り合いをつける。

他の材料の組み立ては恐ろしいくらいに上手かった。

つい調子に乗りそうになった自分を諫め、一気に魔力を注ぐ。

「よしっ、かなりいい感じ」

光の中から姿を見せたのは、昨日よりも一回り大きく、ちゃんとパラボラアンテナの形をしたもの。

所々歪み、何年も雨ざらしにされたようなくたびれた雰囲気醸し出していたが、紛れもなく万能アンテナだった。

昨日作った万能アンテナと並べて机の上に置き、ついでに一番初めに作った簡易アンテナも気休めに出しておく。

いきなりチャットや掲示板には手を出さず、まずはブログを開く。目に飛び込んでくる新着日記一覧は、明らかに昨日とは違っていた。

殆ど文字化けしていない。

「うふふふ、分かる、名前もスキルも分かるっ」

にやにやと口元が緩み、目についた日記を開いて指で文字をなぞっていく。

あと分からないのは、おそらく街やダンジョンの名前だけ。内容を理解するにはもう十分なレベルだった。

ついつい読みふけりそうになり、はっと思いき直して開いていた日

記を閉じる。

後でじっくり読めばいいのだ。

今はそれより先に、することがある。

何度か深呼吸をしてから、情報掲示板の文字にゆっくりと触れた。エラーは出ず、すぐに画面は切り替わり、ばばっと画面いっぱいに掲示板の親記事のタイトルが並んだ。

雑談っぽいのと攻略情報っぽいものが混じっており、どれもそこそこの返信がついている。

こんな状況ではあるけれど、いきなり攻略情報に手を出すのは抵抗があったので、だれでも参加出来そうな『しりとりでリアルファンタジー』という記事を展開させるべくタイトルに触れる。

すれとブーという聞きたくない音と一緒に、エラーの文字が浮き上がる。

「え、エラー……。」

ほんと意地が悪いーっ！

書き込みは出来ないかなとは思っていたけれど、まさかここでエラーが起きるとは思っていなかった。

あと少しなのに、とんだおあずけを食らってしまった。

他の記事は無理かと一応目に入る全てのタイトルを触ってみたが、エラー音がただむなしく響くだけだった。

すっかりやる気を削がれてしまったわたしは、しょんぼりしながら掲示板のページを閉じ、全く期待せずにチャットを開く。

参加人数が表示されたいくつものチャットの名前が浮き上がってくる。

ここまでは初日から来ることが出来た。

特に吟味することもなく、適当にひとつの部屋の名前を触る。

すぐに、参加しているプレイヤーの数とチャット上の注意がずらずらと表示された。

きつとここでまたおあずけなんだろうなあ、と何気なく入室ボタンを触った。

するとわたしの予想に反してエラー音は鳴らず、気づけば沢山の椅子が円の形に並べられた狭い部屋の中にわたしは一人立っていた。何の心構えもしていなかったわたしは、一瞬惚け、それから大いに焦った。

この状況は、アバター付きの音声チャットをした時に似ている。つまり、なにか。

わたしは、誰かと言葉を交わす手段に辿り着いたってことか。それに気づき、つい大声をあげそうになったが、誰かが聞いているかもしれないと思い慌てて片手で口を押さえる。

空いた方の手で胸を押さえ、ふーっと長めの息を吐いてから、改めて部屋を見回した。

確かに入れたのだが、誰も居ない。

何人が居ると表示されていた筈なのに、気配すら感じない。

「あー、どなたかいらっしやいませんか？」

恐る恐る小声で呼びかけてみるも、何の反応もない。

これは、部屋に入れるけど会話は出来ないというがっかりサブライズかと気を落としてつつ、数度声をかけてみたが結果は一緒だった。仕方ないので部屋を出ようと、扉へ向かう途中、一つの椅子の背中に小さな紙が貼られているのに気付いた。

一体何だろうと、近づいて確認する。

『七海：一時離席中』と、そこには書かれてあった。

「みんな離席中ってついてない、けどこれってまだ希望持っていないのかな」

部屋に置かれた椅子の背中を全て確認し、四人の名前と離席中の文字を発見してがっかりするも、気を落とすにはまだ早いと思い直してすぐに部屋を出る。

そして今度は念入りに、参加する部屋を吟味していく。

初日に確認した時より、全体的に人数は減っていた。

一番多い部屋でも六人しか居ない。

初日は十人を超える部屋がいくつかあったのにも思いながら、その六人が居る部屋に入室した。

「うわあ、また離席中？」

しかし中には誰の姿も無く、先ほどと同じように椅子に離席中の文字が表示されている。

やっぱり、万能アンテナの質が悪いせいで、本当は誰か居るのにわたしには離席中としか写らないんだらうか。

さっきの部屋と合わせて十人、全員が揃って離席中なんて、普通はあり得ない。

掲示板が覗けなかった時より意地が悪い仕様だと落ち込みながらも、幾つかの部屋をまわってみる。

無人、無人、無人。

三つ目の部屋で、わたしはがっくりと膝をついた。

これはなかなか、精神的にくるものがある。

蹲ったまま涙をこらえ、気持ちを落ち着けてから部屋を出た。

次、誰も居なかったら諦めよう。

そう心に決め、わたしは一つの部屋を選び、誰も居なくて当たり

前と自身に言い聞かせながら、入室の文字を素早くなぞった。

ついでに対面

「そつだよねそんな上手くいく訳ないよね」

人気の無い部屋で、わたしは力なく笑った。

やはり今の万能アンテナじゃ、チャットは出来ないようだ。

大丈夫、確実に目標には近づいてる。

明日にはきつと、掲示板も開けるようなものが作れるはずだ。

そのためにもさっさと気持ちを切り替えようと、部屋の扉に手をかけた時に、背後でがさりと何かが動く音がした。

ぎしりと身体が固まり、一瞬頭の中が真っ白になる。

もしかして、との期待で心拍数が一気に上がり、息が上手く出来なくなつた。

落ち着こうとすつと息を吸ったと同時に、あっさり声をかけられた。

「あーっ、初めての子だー！
ねねねっ、お喋りしよっ」

屈託の無い声に、わたしは勢いよく身体を回転させた。

そこに居たのは、綺麗な顔をした男女の二人組。

どちらにもここにこ笑っていて、わたしにキラキラした眼差しを向けている。

紛れもなく、このわたしに声をかけてくれている。

何か話さなくては、返事をしなくては、と焦りに支配される。

失敗して、出ていかれたくない。

もっといろんな言葉を投げ掛けてもらいたい。

そのためにも第一印象が大事だと、無理矢理笑顔を作って口を開く、が。

「はは、はじめまじでええええ。

うあああん、ひと、ひとだああああっ！」

盛大に失敗してしまった。

わんわん声をあげて泣くわたしを見た二人は、ぎよっとした顔でこちらを見ていたが、女の子がおずおず近づいてきて、よしよしと頭を撫でてくれる。

それが嬉しくて、ますます激しく泣いてしまう。

結局、困り顔の二人に見守られながら、わたしは長い間泣きわめき続けた。

「ほんとすみません、取り乱しちゃって」

ようやく泣き止んでから、わたしは二人に頭を下げた。

二人は互いに顔を合わせ、何やら目で会話してから改めてわたしに向き直った。

「いいよいいよー」。

ねね、シトロネラちゃん、もしかして、変な二人組に浚われちゃった子？」

こてんと首を傾げて、女の子がわたしに尋ねた。

どうして知ってるのだろうと不思議に思いながらも、こくりと頷くと、二人は一気にわたしとの距離をつめ、大変だったねえと労いながら、ぼんぼん背中や肩を叩いてきた。

暖かくてまたじわりと目頭が熱くなっただけれど、ぐっと飲み込んで、おずおず口を開いた。

「えと、シオリーナさんにギギアルさんですよね。

なんでわたしのこと、知ってるんでしょう」

入室前に確認した名前を思い出しながら疑問を投げ掛けると、二人は驚いた顔になり、男の人の方、おそらくギギアルさんが、逆に疑問を投げ返してきた。

「あー、シトロネラちゃん？

もしかして君、掲示板見てない？」

見たくても見れないんです、とは口にせず、うんうん頷くと、一瞬ギギアルさんの顔に呆れが浮かび、ついではっと何かに気付いたような表情になった。

「見てないんじゃない？、見れない？」

まさにわたしが言いたかった言葉を当てられ、ぶんぶんと激しく顔を縦に振ると、シオリーナさんとキギアルさんはわたしを挟んで目で会話し、無言で椅子を勧めてきた。

わたしがそれに腰を下ろすと、二人もそれぞれ近くの椅子に座る。

「つとな、掲示板にね、シトロネラちゃんのこと書かれてるんだ。名前と連れ去られた経緯全部。

だから君、ちよつとした有名人なの」

ギギアルさんの言葉に、わたしは顔色を悪くする。そんなことになっていいるなんて、予想もしてなかった。きつと情けない顔になっていたのだろう。シオリーナさんが慌ててフォローしてくれる。

「違う、違うんだよっ！」

悪気があって晒してやるーってのじゃなくって！

シトロネラちゃんが見つかったらみんな保護したげてねっていうお願い？

心配してるからの非常手段、みたいなの？」

わたわたと手を振って説明する姿に、やさぐれかけた気持ちが和んだ。

だけど、心配してくれるのは有難いが、掲示板で晒されるのは嬉しくない。

そんなわたしの気持ちを汲んでくれたのか、更にフォローの言葉を重ねようとするシオリーナさんの口を、ギギアルさんがやんわりと手でふさいだ。

「ま、それとは関係なく、協力するよ。」

俺たち、このゲームそこそこ長いから、役に立たないってことは

ないと思うし」

な、とにつこり笑って話題を逸らせたギギアルさんと、口を押さえられながらもこくこく首を縦に振るシオリーナさんにすっかりやられたわたしは、二人にうまく誘導されながら、今まで自分の身に起こったことを洗いざらい話してしまった。

すっかり逆上してしまつたわたしは、筋道立てて喋ることが出来ず、あつちこつちに話が飛んで非常に聞き難かつたことだろうと思う。

しかし二人は嫌な顔ひとつせず、質問を挟みながらわたしの話を理解しようとしてくれる。

それに感激して、途中何度か涙ぐんでしまい言葉が途切れがちになつたが、それでも根気よくわたしに付き合ってくれた二人は、本当に出来た人たちだ。

ついてないと思つていたけれど、チャットで一番最初に二人に出会えたわたしは、もしかするとかなり運が良いのかもしれない。

知らないことがいっぱい

「シロちゃん、ついてないねえ。

ちよっぴりお間抜けさんなのを差し引いても、ついてなさすぎるよ。

でもでもシロちゃんも危機感が無さすぎだよっ！

危ないよ！」

一通りわたしの話を聞き終えたあと、シオリーナさんにめっ可
愛らしく叱られた。

わたしも自分が迂闊だったと反省していたので、大人しくそれを
受け入れる。

嫌味たらしく言われていたら、ムツとしていただろうが、シオリ
ーナさんから悪意は感じられず、ただわたしを心配する気持ちだけ
が伝わってきた。

初対面のわたしにどうしてそこまで、と思わないでもなかったが、
素直に嬉しかった。

「ヘルプに載ってないことも山ほどあるしな。

しっかし、まさか擬似イベ知らずに飛び込むなんて本っ当に無謀だよ、シロちゃん」

ギギアルさんに心底呆れたように首を振られ、恥ずかしさで身体を小さくすくませた。

いつの間にか二人がわたしをシロちゃんと親しげに呼んでいることが、照れ臭かったのもあり、ぼつと頬を赤くする。

それを見たシオリーナさんがていつという掛け声と一緒にギギアルさんの頭にチョップを繰り出し、ぎゅっとわたしを抱き寄せる。

「もーギルは言い方が冷たいのーっ。

シロちゃんが怖がるでしょっ！」

ねーっと同じを求められ、わたしは困って視線を彷徨かせた。

ギギアルさんはそれをはいはいと軽く受け流し、先へと進める。

「隠し部屋でそんなに足止めされることってまず無いんだよ。

基本的に半日もかければ誰でも出れる仕組みになってるはず。

多分シロちゃんももう出る条件は満たしてると思うんだよな。
シオリ、どう思う?。」

話を振られたシオリーナさんは、わたしを離し、しばらく考えこんでから口を開いた。

「あたしもそーだと思う。」

シロちゃんたまたま擬似イベに引つ掛かったけど、普通こんなぶっ続けプレイ出来ないしー。

シロちゃん、きつと初歩の初歩見落としてるんじゃないかなあ」

そこまで話すと、シオリーナさんはちょっと待っててね、と言いつつ残り、部屋から出て行ってしまふ。

ギギアルさんは親切で優しくそんな人とはいえ、会って間もない人と閉じた空間で二人きりというのは緊張する。

気まずいと思っているのが顔に出たのか、ギギアルさんは頭をぼりぼり搔いて苦笑いをした。

「シオリ、多分ダンジョンに詳しいやつ呼びに行っただけだから、すぐ戻るよ。」

その間シロちゃんが全然知らないっぽい擬似イべのことも説明しよっか」

ね、と爽やかに提案され、わたしはおずおず頷いた。

ヘルプでおおよそは分かっていたつもりだったけれど、知らなかったことばかり聞かされ、最低限のことしか公式には説明されていないことを知る。

中でも一番驚いたのが、擬似トリップイベント中のゲーム内での記憶は、殆ど現実を持ち越せないこと。

現実での六時間で体験しても差し支えない程度に削られ薄められるので、楽しかったとか大変だったくらいしか覚えていられないらしい。

「普通に考えて六時間に三ヶ月分の体験放り込むなんて無理だろ？ 脳に負担がかかっちゃうし、リアルの生活に支障が出ちゃうしね。だからブログは毎日細かくつけた方がいいよ、こっちで何したか確認出来る唯一の方法だから」

そう説明されてみれば確かに、ごく当然のように思えた。

しかし、それって果たしてゲームとして楽しいのだろうか。そのままギギアルさんに質問すると、また苦笑いをされる。

「だから微妙に不評みたいだよ、このイベント。

三ヶ月ずっと参加するやつなんてかなり少ないし。

俺は好きなんだけどね、後でブログ読み返すと楽しいし、追体験で二度美味しいし。

あ、ログインしたら思い出すよ、ちゃんと。

ログアウトしたらまた忘れちゃうけどね。

ゲームの記憶と現実の記憶は別のところに保存されてるって感じなんだよ」

ふむふむと頷いてみせたが、実はよく分からない。

実際一度ログアウトしてみないと、感覚として理解出来ない気がする。

そんなわたしの分かったふりを見破ったのか、ギギアルさんはうーんと少し考えこんでから、わたしにある提案をした。

「シロちゃん、試しに、そうだなあ。

五年前の記憶思い出せる?」

奇妙なことを、とさえつつ、素直に思いだそうとしてわたしは驚いた。

中学生だったことは思い出せる。

何人かの友達の名前も思い出せる。

しかしそれ以外が全く浮かんでこない。

怖くなってギギアルさんをすぐる様に見つめると、ね、とにっこり返された。

「それがゲームの記憶。

直接ゲームのプレイに関係ないことは自動的に排除されてるんだ。

あ、そんな泣きそうな顔しないで。

つまり今の俺たちは、ゲーム用の擬似人格なの。

現実とある程度記憶を共有するから勘違いしそうになるけどね」

VRMMOプレイ時に、直接脳とリンクせず間にクッションを置くというのは知っている。

擬似人格というのも、知っている。

しかしもつと単純に、痛いとか辛いとかを現実に持ち込まないようにするためのものだと思っていた。

これほどにゲーム用にカスタマイズされているとは、驚きである。

一応の理解は出来、落ち着いたところでシオリーナさんが小さなエルフの男の子を連れて帰ってきた。

男の子はわたしをじろじろと眺めた後、ふんと鼻で笑った。

「こいつが、例の馬鹿？」

超ブスじゃん」

あからさまに悪意が込められた声に、わたしは思った以上に打ちのめされる。

シオリーナさんたちが優しくかったのもあるが、人の悪意に触れるのが久しぶりだったせいもあるのだろう。

ブログには罵倒でもなんでも構わないから誰かと話したいと書いたものの、実際体験してみるとそんなのは嘘だったと悟る。

自分でも驚くくらい、がつつりやられてしまった。

落ち込んだ気持ちを悟られないよう、曖昧な笑みを浮かべ黙っていると、男の子は綺麗な形の唇を歪め、更に何か言い募ろうとした。が、シオリーナさんに首根っこを掴まれ、ぷらんと宙吊りにされ

てしまった。

「キーチっ！」

毒づくなつてあれほど言ったのにバカバカっ！」

きつと目を吊り上げ口をわなわな震わせるシオリーナさんは、怖い顔をしている筈なのにどこか可愛らしい。

そのせいかキーチと呼ばれた男の子は全く怯むことなく言い返す。

「ふん、本当のことだろ。」

「離せよバカリーナ」

はんつと嫌味っぽく笑ったキーチくんだが、こちらも首根っこを掴まれているためいまいち様にならない。

二人はしばらくぎぎぎと睨み合った後、ほぼ同時に口を開いた。

「もおーっ！」

「なんでそんなに可愛くないのっ！」

「だから離せっつってんだろバカ」

ぎゃいぎゃいと賑やかな口喧嘩が始まり、どうしようとおるおるしているとき、ギギアルさんにばんぽんと肩を叩かれた。

「アホ二人はしばらく放っておこう」

ね、とにっこり笑ったギギアルさんは、相変わらず爽やかだったけれど、何故かぶるっつと背筋が冷たくなる。

これが腹黒いということか、なんて馬鹿なことを思いながら、きんきん言ひ争う二人を見守ることにした。

順風満帆とはいかない

ギギアルさんは宣言した通りしばらく二人の好きにさせた後、言葉の応酬が途切れた所にするりと入り込んで二人をたしなめる。

シオリーナさんもキーチくんも、むすりと黙り込んだが、再び言い争いを再開させることは無かった。

手慣れていると感心しながら見ていると、突然視界が切り替わった。

「え、え、え？」

三人の姿は消え、わたしはこの十日間ですっかり見慣れた部屋の真ん中に突っ立っていた。

慌ててメニューを開き、チャットからさっきまで参加していた部屋を探し、ぽんと触れる。

しかし、エラー音が鳴り響くだけで、画面が切り替わらない。

わたしは焦って、何度も何度も指で部屋の名前を叩いたが、結果は変わらなかった。

わたしはやや取り乱しながらも、ブログを開いて中身が読めるか確認する。

文字化けの割合は明らかに増えており、スキルや名前はまた読めなくなっていた。

だが、自分でブログを書くことは出来たので、少しほっとする。

一体どうしてこんなことに、と考えながら、今日作った万能アンテナを手取る。

ぱっと見た感じでは特に変化は無かったが、ひっくり返してみると、一部が真っ黒に変色しているのが分かった。

おそらくこれが原因なのだろうが、そもそも何故こんな変化が現れたのかが分からない。

「っと、呑気に考えてる場合じゃなかった」

わたしは万能アンテナを机に置いて、メニュー画面を開きフレンドの項目を選ぶ。

こちらからのフレンド申請は可能だったことを思い出し、シオリ

ーナさんとギギアルさんに急いで友達登録して欲しい旨に、チャットからいきなり消えたことへの謝罪を添えて送った。

キーチくんにはあまり良く思われてなさそうだったのでやめておいた。

すぐに返事は来なかったなので、少し不安に思いながらも、次の行動に移る。

また万能アンテナを作るうとして、ギギアルさんたちの話を思い出し、手を止めた。

わたしは、もう既にここを出る手段を持っている筈なのだ。

万能アンテナを作ればまた、誰かと喋ることが出来るだろうが、ここから出られる訳じゃない。

目的を取り違えるべきでは無い。

「一日目から出来たこと、うーん」

ベッドに座り、この部屋に閉じ込められてからのことを細かく思い出していく。

混乱して、ヘルプを読んで、後悔して、本を読もうとしてやめて、ふて寝して。

「そっだ、『リアルファンタジーの歩き方』の下巻、読んでないっ」

スキルレベルも上がらないし、ヘルプに載っていることばかりだからと必要が無いと判断し、読むのをやめたあの本。

あれこそ、ここに入って一日以内に出れることというキーワードに、ぴったりな気がする。

わたしは急いで本棚に駆け寄り、目的のものを探し、椅子に座って手早く目を通していく。

もう既に気持ちはここから出た後に飛んでいて、レベルの低い本なのに読み終えるのにかなり時間がかかってしまった。

そしてやっと最後の一文を読み終え、わたしは期待を込めて部屋をぐるっと見回した。

何の変化も起きていない。

念のため、本を片手に壁を隅々まで調べてみたが、やはり特に変わってはいなかった。

これが正解だと半ば確信していたこともあり、ショックはかなり大きかった。

はあ、と深いため息をつき、ぺたりと床に座り込む。
他に何があつたか思いたそうとするが、なかなか頭が働いてくれない。

本当に出られるのかと自信を無くしかけた時、シユンという音と共に目の前に小さな画面が開いた。

「シロちゃん、聞こえるーっ？」

聞こえたら返事するか、ウィンドウの枠触ってーっ」

シオリーナさんだった。

画面にはシオリーナさんの顔が写っていたが、視線は宙をつろつろさまよっていて、わたしの姿は見えていないようだ。

「はい、聞こえます！」

さっきはすみません、アンテナ壊れたみたいで！」

急いで返事をした瞬間、画面の中のシオリーナさんとぼつちり目

が合い、次いで二つ画面が開き、それぞれにギギアルさんとキーチくんの姿が写し出された。

「えへへ、フレンド申請ありがとう！」

これからよろしくねっ」

シオリーナさんの満面の笑顔に、落ち込んだ気持ちが一気に浮上する。

つられてにこにこ笑っていると、横からキーチくんにはっきりやられてしまった。

「はっ、馬鹿面晒していい気なもんだな」

心なしか先ほどより冷たい声に、ひゅっつと息を呑む。

わざわざ向こうから連絡させて図々しかっただろっかとかと小さくなると、ギギアルさんがくすくす笑いながらフォローしてくれた。

「キーチね、拗ねてるんだ、自分にだけフレンド申請来なかったから」

「なっ、違えっ！」

慌ててギギアルさんの言葉を遮ったキーチくんだったが、うつすら頬が赤くなっていた。

もしかして嫌われていた訳では無かったんだろうかと、その反応に少し調子に乗って、こっそりフレンド申請を送ってみる。

キーチくんは一瞬表情を変えただけで、特に何も言わなかったけれど、ちゃんと了承してくれたようだった。

少しだけ、キーチくんがどういふ人か分かったような気がした。

閑話・それぞれの思惑

シトロネラの姿が急に消えてしまった部屋で、残された三人は驚きに目を見開いた。

通常、チャットの部屋から退室するには扉を潜るしか方法が無い。いきなり姿が消えるのは、外部から強制的に接続を断たれた時くらいなのだ。

「シロちゃんログアウトさせられちゃったのかなー？」

頬に指をあて、こてりと首を傾げシオリーナが呟いた疑問に、ギアルは曖昧な意見を返す。

「そうだな、だけどまだ十日目だぞ。

現実じゃ一時間も経ってない。

よっぽど切羽詰まった状況ならあり得るが」

せめて一人暮らしかそうでないかくらいは確認しとけばよかったな、と軽く肩を竦めてみせる。

キーチはそんな二人のやり取りをうるんげな表情で見つめた後、くるりと踵を返して部屋の扉へと向かう。

「あーっ、キーチどこ行くの？」

軽い非難の色がこもった声をシオリーナがその背に投げかけると、ぶっきらぼうな調子にでフレンド、とだけ返してそのまま部屋から姿を消した。

どういうこと、とギギアルに視線をやると、どこか面白そうにやりと笑う顔があった。

「あいつ、シロちゃんからフレンド申請送って来てないか確認しに行ったんだよ。」

隠し部屋に飛ばされたんならあり得る話だろ？

「いやいやいや、やさしいねえキーチくんは」

さも愉快そうに笑うギギアルは、先ほどシトロネラと相對していた時とは雰囲氣を一変させており、とても人の良さそうな人間には見えなかった。

シオリーナはそんな彼に特に反應することもなく、どこか楽しそうに話を続ける。

「あたしもシロちゃんとフレンドになつておきたいな。

そしたらきつと、コジマ様と仲良くなれるチャンス増えるよねっ！
掲示板に情報流して心配するくらいだもん。

ギルはやっぱりメルチエちゃん？」

ギギアルとは違い、先ほどまでと全く同じ様子で打算を口にするシオリーナに、ギギアルはにやりと笑つてみせた。

「メルチエも魅力的だけど俺は愉快犯狙い。

あいつらみんな可愛いしな、馬鹿で」

貶しているとしか思えない言葉にも、特に反発することなくシオリナはにこにこ頷いてみせた。

「あそこら辺みいんな取り巻き多くてガード堅いもんねっ。

ああん本当にシロちゃんに会えてラッキー！

やっぱりたまにはチャット利用するもんだねっ」

胸の前で両手を合わせ、うっとりとした表情を浮かべたシオリナの言葉に、ギギアルも同意した。

シトロネラには説明しそびれたが、チャットを利用する人間はあまり多くない。

部屋だけは確保しておいて、作戦会議をする時に使われたり、遠くにいる相手に装備を自慢する時に使われるくらいで、それもそう頻繁には行われない。

中ではメニューの殆どが使えなくなるのも、チャット離れに拍車をかけている。

シオリナとギギアルも、今日はたまたまチャットを使ったが、利用頻度は高くない。

「そだそだ、早速コジマ様に知らせなきゃっ！
掲示板にレスしたら見てくれるかなっ？」

嬉々として部屋を飛び出しかけたシオリーナを、ギギアルが慌てて引き留める。

「待て待て待て。

俺のフレンドに『さんぶんしすこ』のメンバーが居るからそいつに繋ぎを頼む。

掲示板はやめとけ、シロちゃんにばれたら嫌がられるぞ」

先ほど掲示板に情報が載せられていると告げた時の反応を思い出して、シオリーナはあっさり引き下がる。

シトロネラにまだ嫌われる訳にはいかないのだ。
出来ればもっと信用してもらうのが望ましい。
目的の相手と親しくなれるまでは。

「それにしてもキーチ遅いね、何してるんだろー」

再び椅子に腰を下ろし、足をぶらぶらさせながらシオリーナが首を傾げる。

フレンド申請が来ていないか確認するだけなら、とっくに戻ってきていてもおかしくないだけの時間は経っている。

「多分申請が来てなくて、通信に強いやつに何とかならないか確認してるんじゃないかね？」

ああ、分かっているとと思うけど、キーチには言うなよ、さっきの。あいつ変に真面目だから」

ギギアルがにやりと笑って念を押すと、シオリーナははいと元気に返事をし、二人で目を合わせてくすくすと笑いあった。

ダークエルフのギギアルとシオリーナ。

兄弟のようによく似た優しげな顔をしており、ギギアルは細いな

がら鍛えられた身体を、シオリーナは大きな胸と尻に括れた腰、すらっと伸びた手足を、つまり異性の目を惹きやすい身体を持っている。

ギルドには所属していないが、交友範囲は広く、そこそこ有名な二人組である。

さほど悪い噂は聞かないが、その交友範囲に有名人が不自然な程多く含まれているため、一部からは敬遠されている。

現実では全く関わりの無い二人だが、目的が似ているためにいつしか一緒に行動するようになった。

すなわち、いい男といい女にちやほやされたいがために。

他人の権威を借りて楽しく遊びたいがために。

似たようなプレイヤーは他にも居るが、この二人ほど意図を悟らせず、上手くやっている者は少ない。

そんな二人にとって、すっかり有名人となったシトロネラは恰好の標的だった。

「もっともっと、仲良くなるうね、シロちゃん」

えへへと笑って呟いたシオリーナの声は、さっきまでと何も変わらないのに、どろりと暗いものが含まれていた。

親切な男の子

「それでシロちゃん、そこから出る方法はもう見つかった？」

心配そうに尋ねてきたシオリーナさんに、首を横に振って応える。そっかあと残念そうにため息をつき、しばらく何か考え込んだ後、目をきらりと光らせてシオリーナさんがある提案をしてきた。

「そだそだ、シロちゃんの情報、掲示板に出回ってるって言ったよね？」

良かったら、投稿した人に消して貰えるように言おっか？

シロちゃんすぐ動けなさそだし、ねっ」

シオリーナさんの申し出は非常に有り難いものだった。

本当ならわたしが直接その人をお願いするのが筋なのだろうが、今はその手段が無い。

チャットに呼び出してもらうにも、また万能アンテナを作らなくちゃいけないし、かと言ってここを出るまで放置しておくのも嫌だ。

「すみません、お願いしていいですか？

心配していただけたのは嬉しいです、わたしは元気です、って伝えてもらえるところごくごく助かります」

ペこりと画面越しに頭を下げると、シオリーナさんは顔の前でひらひらと手を振り、照れ臭そうにはにかんでみせた。

「困った時はお互いさまっ！

じゃ、早速お願いしてみるねっ！

ギル、ダリアちゃんに連絡してもらっていい？」

ギギアルさんはその言葉に笑顔で頷き、わたしとキーチくんに断つてから画面から消え、少ししてから画面も宙に溶けるようにして消えた。

シオリーナさんも、また後でね、との言葉を残して一緒に居なく

なつてしまった。

後に残されたのはわたしとキーチくんだけだ。

キーチくんへの苦手意識は多少薄れたものの、やっぱり気まずさは残る。

しかし意外にも、キーチくんの方から話しかけてきてくれた。

「おい、あんま馬鹿面晒してんじゃねーぞ」

しかめ面で放たれた棘のある言葉に一瞬怯んでしまったが、口が悪いだけできつとそこまで悪意は無いのだと自分に言い聞かせる。だらしない顔になっていたのかもときりつとした表情を作ると、キーチくんは微妙な顔でわたしを眺めた後、ふうっと長く息を吐いて、がしがしと乱暴に頭を掻いた。

「つたく面倒くせえ。」

いいか、あんまり他人に借りを作んな」

見た目は小さな男の子のキーチくんが、子供を諭すような口ぶりでわたしに話しかける。

ほぼ初対面のシオリーナさんたちに、あんなことを頼んだのはやはり図々しかったかと反省し、しおらしく謝ってみせるとまたため息をつかれる。

そうじゃねえよと呟きながら、少し困った顔をしたキーチくんの様子に、わたしはつい吹き出してしまった。

今ので完全に確信する。

この人は多分、かなり良い人だと。

わたしの図々しさに腹をたてたんじゃなく、わたしのことを案じてくれた故の言葉だったのだ。

確かに、久しぶりに人に会えて浮かれていたとはいえ、差し出された好意を疑いもせず嬉しげに受け取る様子は、端からみたら危なっかしく、間抜けに見えたのかもしれない。

「笑ってんじゃねえっ！」

本当に馬鹿なのかお前はっ！」

キーチくんは頬を赤く染めて悪態をついてきたが、もう全く怖くはなく、むしろ微笑ましく見えてしまうのだからわたしも現金なものだ。

ひとしきり毒づいていたキーチくんだが、わたしが全く堪えた様

子を見せず、嬉しそうにへらへら笑っているのに気づき、不貞腐れた様子で隠し部屋を出る方法へと話題を変えた。

「一回しか言わないからな。」

隠し部屋を出る一番の手掛かりは部屋を解析することだ。

その名前こそが最大のヒントになる。

解析スキルは覚えてんだろ？

ならさっさとやれ」

早口で一気に捲し立てられ、わたしはその勢いに流されるまま解析を試す。

部屋自体に解析を行う、とはなんともイメージが掴みにくかったが、いちいち説明させるのも悪いと思い、壁に手を当てすっかり慣れた部屋の全容を想像しながら、解析スキルを発動させた。

すると、部屋のちょうど真ん中にひらりと文字が浮かび上がる。

「ええと、機巧師の小部屋？」

わたしがそれを読み上げると、すかさずキーチくんの指示が飛ぶ。

「ならそこを出るのに必要なのは機巧スキルだ。

一定のレベルに達するか決められたものを作れば出られる。

今のお前の機巧スキルのレベルはいくつだ？」

きびきびした物言いに、慌ててスキルを確認する。

今日作った万能アンテナのおかげで、昨日より3上がって49になっっていた。

それをそのままキーチくんに告げると、おかしなものでも見るよ
うな目でまじまじと見つめられる。

「お前なあ、どんだけ……いや、いい。

そんだけあるなら、レベルじゃなさそうだな。

とりあえず作れそうなもの片っ端から作りゃ出れるだろ。

分かってるだろうが、作ったことないやつだぞ、いいな？

「一回も作ってないやつな」

よっぽどわたしが抜けて見えたのか、何度も作ったことのないものを作るように念を押してくる。

そこまでじゃないのにと心の中では思ったが、口には出さず神妙に頷き、丁寧にお礼を言った。

早速取りかかろうと思ったが、アドバイスしてもらえばなしでこちらから席を外すのは躊躇われる。

何よりも少し話していたかった。

しかし何を切り出したものか、悩んでしまう。

「ええっと、ほんとに、本っ当にありがとうございます」

困ったわたしは、再びお礼言葉を口にした。

するとキーチくんは不機嫌そうに顔をしかめる。

何度もしつこかったかと焦ったが、彼の機嫌を損ねたのは別の部分だったらしい。

「そのくそ丁寧な喋り方うぜえ。

普通に喋れ」

むすつとしたまま、しかしほんのり頬を染めて、かしまった喋り方をやめるように言う姿に、またじんわり笑いが込み上げてくる。吹き出してしまつ前に急いで笑顔を作り、キーチくんに話しかける。

「うん、ありがとうキーチくん」

それがなんとも照れ臭くて、思わず視線を逸らしてしまう。キーチくんは、くんってなんだよとぶつぶつ言っていたが、満更でもなさそうで、ちらりと視線を戻すとうつすら笑みを浮かべていた。

久しぶりにこんな友達の作り方をしたなと、甘酸っぱいものを胸に感じながら、わたしはキーチくんに気づかれないよう、こっそりとその空気を楽しんだ。

胸がもやもや

この雰囲気ならもっというんな話が出来ると踏んで、いざ話しかけようとした瞬間に窓が二つ開いた。
シオリーナさんとギギアルさんだ。

「遅くなってごめんね、シロちゃんっ」

顔の前でぱしんと両手を合わせ、ちろりと舌を出して可愛らしく謝られ、わたしは慌てて首を横に振る。

「キーチくんいろいろな教えてもらってましたし、大丈夫です」

ちらつとキーチくんを見てから笑ってみせると、二人は揃って真顔になる。

すぐに笑顔に戻り、楽しげにキーチくんをからかい始めたけれど、一瞬見せた表情怖かったような気がして、少しだけ引っかかる。

何か不味かったのだらうかと然り気無く二人の言葉に注意してみたが、特に何も触れなかったのでわたしも深くは考えないことにした。

きつと驚いたただけなのだろう、と自己完結し、さてどうしようかと三人のやりとりを眺めていると、タイミングを見計らったかのようになりギギアルさんから提案がなされた。

「シロちゃん、キーチから話聞いたならもう出る方法は分かったんだよな？」

そこで提案なんだけど、出るのは明後日の朝まで待ってもらえないかな？

勿論断ってくれても構わないよ」

につこり笑って告げられた内容の真意が分からず、首を傾げてギギアルさんとシオリーナさんを交互に見た後、キーチくんの方を伺ってみると、彼もよく分からないという表情を浮かべていた。

この通信を終えたらすぐにでも脱出に向けて取りかかろうと思っていたわたしとしては、ずるずる先伸ばしにされるのは嬉しいことではない。

しかしこうしてわざわざ打診されるということは、そうした方が

いい何かがあるのだろうとすぐに返事はせず、ギギアルさんの話に耳を傾ける。

「ダンジョン毎に隠しイベントがあつてね、それをクリアするとその後一時間くらいダンジョン全体に敵が出なくなるんだ。

本来は回復やダンジョン離脱のために在る時間なんだけど、それをシロちゃんの脱出時間にしたらどうかって話が出ててさ。

そこ出ですぐ敵にやられちゃうってのも嫌だろう？」

確かに今のわたしじゃ街に帰りつく前にあっさりやられてしまうだろう。

しかしどうせいつかは死ぬこともあるだろうし、体験しておくのも悪くない。

街に死に戻れることだし、何よりそれだけのためにわざわざイベントをクリアしてもらつのも申し訳無い。

折角のご厚意ですが、と断りの文句を述べかけると、シオリーナさんに途中で遮られた。

「えつとね、シロちゃん。

実はシロちゃんのためだけじゃなくって、ある人たちの仲直りも兼ねてるんだっ。

シロちゃんにはこっちの都合押し付けちゃって悪いんだけど、協力してもらえないかなっ？」

じいっと潤んだ目で見つめられ、わたしはたじろいでしまう。断り文句を一旦引っ込めて、再び詳しい話を聞くことにした。

「んんつと、シロちゃんのこと掲示板に載せてた人がね、シロちゃん浚ったグループのことすっごく怒ってるの。」

でも浚ったグループの子たちも反省してて、シロちゃんにも怒ってる人にも謝りたいって言ってるの。

じゃあ、そのきっかけに、協力してシロちゃん救出のために一緒に戦ったらわだかまりも少なくなるかなあって、そんな話になって浚ったグループの一人がね、怒ってる人のこと大好きで、今すぐく落ち込んでるんだあ。

だからね、出来れば協力してほしいの」

聞かされた内容にわたしは黙り込む。

仲直りに付き合う義理はないのだが、断ると厄介そうだ。

わたしが発端ですぎすぎした関係を放っておくのは後味が悪いし、何よりそこまで話が進んでいるのを今さらやめさせるのも、後々面倒事を引き起こしそうである。

だけどやっぱり、胸がもやもやしてしまっ。

わたしは、浚った人たちに対して、怒りも恨みもさほど抱いてはいない。

何の下調べもせず飛び込んだわたしの自業自得な面が大きいし、腹を立てても事態が好転した訳でもない。

ただ間が悪かったのだと、割り切っている。

しかしだからと言って、好意を抱いている訳でもないのだ。

出来るならあんまり関わらずに過ごしたい。

むっつと黙り込んでしまったわたしに、ギギアルさんが更に何か言おうとして、キーチくんに遮られる。

「馬鹿かお前ら。」

なんでこいつがそこまで協力する義理があんだよ、おかしいだろ」

むすつと顔をしかめて、ふざけてんのかと呟くキーチくんの言葉は乱暴だったけれど、わたしの胸のもやもやを少しだけ払ってくれ

た。

素直に頷けないわたしが意固地なだけな気がし始めていただけに、それはとてもありがたかった。

ギギアルさんはキーチくんの言葉に困ったように眉を寄せ、ゆっくり言い聞かせるように遮られた話を続ける。

「そりゃな、シロちゃんに負担かけるのはおかしいと俺も思うよ。でもな、考えてみてくれ。

不本意だろうが、シロちゃんは有名になりすぎた。

遅かれ早かれあいつらからの接触があるのは避けられない。

それなら俺たちが立ち会って一気に済ませた方がいいだろう?」

な、と優しく諭すギギアルさんと、うんうんと頷くシオリーナさんに、わたしは返す言葉もなく、キーチくんも黙り込んでしまった。そう言われたら、確かにそれが一番良いような気もしてくる。

今すぐここを出て、バラバラにいるんな人に会いに来られることを想像してみた。

すごく面倒くさそうだし、わたし一人で対峙するのも不安がある。

「じゃあ、すみません、お願いします」

顔を上げにこりと三人に笑いかけ、深く頭を下げた。

現状では二人の提案に乗るのが一番良さそうだ。

ここを出るのが遅くなるのは残念だけれど、今さら一日くらい変わらないうち、はずだ。

シオリーナさんとギギアルさんはほっと安心したように笑みを返し、キーチくんは苦虫を噛み潰したような表情でそっぽを向いてしまっ。

「じゃ、あたしたちは救出作戦詰めにいくねっ。

ほら、キーチもっ！

待っててね、あたしたちがシロちゃんのこと、必ず助けるからっ

「！

シオリーナさんに急かされるまま、三人の姿が画面から消え、やがて画面もふっと宙に消えて、部屋の中にわたしひとり残される。

つい先ほどまで賑やかだったのに、まるで全てが幻だったのだと錯覚してしまうほど静まり返った部屋で、わたしはしばらく呆けてしまった。

今までと比べてあまりに密度の濃い時間に、改めて整理しようとしてもなかなか気持ち追いつかない。

ぼんやりしたままメニューを開き、フレンドリストを確認する。

ギギアルさん、シオリーナさん、キーチくん。
ちゃんと三人の名前が表示され、夢では無かったことを教えてくれた。

「タロウ、わたし友達が出来たよ」

ぼつりと呟いた言葉は部屋によく響き、空気に溶けていった。
嬉しくてたまらないのに、寂しくて悲しくて、自分の気持ちを持って余してしまう。

衝動的に三人にまた通信を繋げそうになり、慌てて取りやめるも、気になって仕方がない。

「もうすぐ出られるんだよね。
そしたらもっと、いっぱい喋れるよね」

タロウを手に取り、ぎゅっと抱きしめ自分にそう言い聞かせる。
そのためにも、早くここを出るための何かを作っておこうと**図鑑**を開いたが、気が散って全く集中出来なかった。

しばらくわたしは使い物になりそうもない。
しかし寝る気分にもなれない。

「そつだ、ブログ」

ギギアルさんに言われたことを思い出し、メニューからブログを開く。

気持ちを落ち着けるためにも、ログアウトした後のためにも、今までのことをきちんと詳しく書いておこう。

初めに書いた日記では省いたことも付け加えながら、雑記帳も参考に、わたしは日記を書き連ねた。

ストレス発散

出来る限り詳しく、今日までの体験を書き込んで見直し、あまりネガティブに傾かないように気をつけて、一日ずつに分けて投稿していく。

後から自分が読んで楽しめるように気を配るものの、人目に触れることを考えるとある程度表現も限られたものになる。

非公開にすることが出来ればいいのだけど、少なくとも今の万能アンテナの精度では出来ないようだ。

そういえば現実に戻った時、どんな形でブログの内容を確認出来るのかを聞いてなかったことを途中で思い出した。

ブログを書く作業を一旦中断して、雑記帳に調べたいこと聞きたいことを思いつくままに加えていく。

「タロウ、どうしたんだろね、わたし」

ふと手が止まった瞬間、ぐるぐると胸に渦巻いている不安が、ぐっと喉元までせりあがってくる。

それを紛らわせようとタロウに話しかけた。

何が原因なのか、はつきりとは自分でも分からなかったが、ただなんとなく落ち着かなくて、気持ちが悪い。

もう少しでここを出られるというのに、うきうきわくわくしないのは、緊張しているからだろうか。

それとも、さっきまでの賑やかさとの落差からくる寂しさだろうか。

それとも、全く別の何かだろうか。

「そのまま強引に出ちゃえば良かったかなあ、ねえ」

ふーっと深く息を吐き、床にごろんと寝そべって手足をばたばたさせる。

しかし全く気分は晴れない。

「あーなんだろ、変な感じ。」

「すっごいもやもやするー」

うっうーっと唸りながら、そのまま部屋中をぐるぐる転げ回る。

いつもならこんな時は友達や家族と話をして気分転換を図るけれど、わたしのせいで何やら面倒をかけてしまった三人にまた連絡するのも気が引ける。

「ひよっとしてわたし、自分で思ってるよりあの人たちのこと恨んでるのかな」

何気なく呟いた言葉だったが、それは思いの外すんと胸に落ちて着いた。

だらんと身体の力を抜き、自分の放った言葉についてよく考える。

わたしの自業自得だと思っではいる、それは本当だ。

けどどこかで、拉致した二人組が余計なことをしなければとも思っているのも事実だ。

何にも知らなかったわたしも悪い。

ろくに調べもせずゲームの中に飛び込んだ、それは確実にわたしの落ち度だ。

しかしだから何をしても構わないのか、全部わたしのせいで向こうは何にも悪くないのかって言ったら、それはやっぱり違うと思う。

もしそうやって開き直られたらと仮定してみたら、ものすごく腹が立った。

つまりわたしは、彼らに対するわだかまりはあんまり無いと思いついてたけれど、その実心の奥ではぶすぶすと不満を燻らせていたらしい。

「変態、悪趣味、傍迷惑、陰険っ！
ばーかばーかばーかつ、大っ嫌いっ！」

考えれば考えるほどにむかむかしてきて、彼らと、ついでに掲示板にわたしの情報を載せたという人に対して、思いつくまま悪態をつく。

「仲直りなんかわたしに関係ないっ！
図々しいっ！
そっちの事情なんて知るかっ！
勝手に人の情報載せるなっ！
わたしのプライバシーも考えるっ！」

頭を空っぽにして、感情のまま口をついて出た言葉を叫んでいると、ぼろぼろ本音が溢れてゆく。

わたし実はこんなこと考えてたんだ、と自分に少々驚きながらも、ひたすら叫び続けた。

ひとしきり悪態をついて、何の言葉も思い付かなくなったところで、ようやく口を閉じる。

胸を占めていたもやもやは綺麗さっぱり消えてしまい、とても爽快な気分になっていた。

「んふふ、うふふふふふっ」

そうしたら今度は可笑しくなって、くすくすげらげら笑い転げる。ばしばしと床を叩き、げほげほと咳き込み、涙を流しながら大笑いした。

自分も彼らも、馬鹿みたいでどうしようもなくて、全部くだらなくて、どうでも良くなってくる。

このまま彼らを待たずに、わたしがここを出たら全て台無しになるなあ、と考えたら楽しくて仕方なくなってくる。

勢いに任せて密かに脱出してしまおうかとすら思ってしまう。

消えたわたしに思惑が外れて困っている青年二人を想像すると、それはとても素晴らしい意趣返しのように見えた。

「ま、キーチくんたちもいるしやめとこ」

想像の中で拉致犯二人を散々困らせてある程度満足したわたしは、その思惑を引っ込めた。

キーチくんとシオリーナさんとギギアルさん。

三人に迷惑をかけるのは本意ではない。

もう既に動き出しているだろう申し出を今さら拒否したら、きっと彼らに不利益しかもたらさないだろう。

このゲームにログインして、初めてまともに交流を持てた人に、これ以上の負担はかけたくない。

三人のことを考え、ようやく落ち着いたわたしは、えいっと勢い

をつけて立ち上がり、ぐつと片手を天井に向けて突き出した。

「よし、あと一日頑張るぞーっ！」

やる気と元気を取り戻したわたしは、日記を書く作業を再開した。さっきまでの一連の醜態は勿論省いたが、雑記帳には詳しく書いておいた。

ここを出て、自分だけが見られる設定に出来たら、こっそり追加するつもりだ。

すぐ投稿するつもりの記事より力が入ってしまい、全部書き上げたころには既に朝に差し掛かっていた。

「さてさて、からくり作りっとその前に」

ふんふん鼻歌を歌いながら図鑑に手を伸ばし、昨日の記録をつけていないことを思い出して再び雑記帳を開いた。

昨日は殆ど雑談をして過ごしていたから、全体的にさほどの変化は見られない。

しかし空腹スキルが順調に育っているおかげ、随分と元のステータスに近づいてきていた。

初めはただのネタスキルだがすっかりしていたけれど、意外に役に立っている。

「どのスキル捨てるかも考えなきゃなあ」

割と愛着の沸いてきたスキルの名前を一つ一つ指でなぞり、今後
のことにしばし思いを馳せた。

さすがに、今のまま全部育てるには、バランスが悪すぎる。

ステータスが効率よく上がるものを取り入れるべきなんだろうな
と思いつつ、しかしすぐにどれを育てるのを止めるかも決めること
も出来ない。

空腹スキルのように、ある程度育たないとその効果が実感しにく
いものもあるかもしれないと思うと、尚更どれも選びにくかった。

幸いにも、合計で10000に達するにはまだまだ余裕がある。

そのうち、どれが必要か自然と分かるようになるだろう。

スキルの取捨選択はそれからでも遅くないだろうと考え直し、し
ばらくはそのままにすることにした。

最後にもう一度スキルを眺めてから画面を閉じ、からくり作りへ

と取りかかった。

十一日目(雑記帳より)

体力：25 / 25 (28 / 28)
魔力：11 / 11 (13 / 13)
満腹度：0%

筋力：4 (5)
知力：16 (18)
耐性：4 (5)
精神：11 (13)
器用：33 (37)
速さ：4 (5)
運：4 (5)

空腹でステータス50%減少
称号でステータス30%増加

睡眠：53 (睡眠時回復時間5.3%短縮)
空腹：85 (空腹時ステータス9.5%上昇)
読書：27 (読書力増加)
速読：43 (読書速度増加)

解析：29（アイテムの情報判明）
歌唱：29（歌の効果発現率2.8%）
作曲：16（作曲力増加）
機巧：49（からくり作成）
自然回復：16（自然回復速度増加）
魔力操作：26（魔力操作精度増加）

成功したけど問題も

図鑑をばらばら捲り、必要な材料の数が少ないものをいくつか選んでいく。

半日もあれば作れてしまいそうなもの、というのを念頭に置いていたが、それでも十数個の候補が見つかった。

どうせ作るなら今後も役に立つものを、と初めは思っていたが、よくよく思い返してみたらからくり作りに必要な道具や材料では、出口を出現させることは出来なかった。

それならばいつそのこと、役に立たなさそうなものから作っていた方が当たりに早くたどり着けるかもしれない。

そう考えたわたしが一つ目に選んだのは、『ドライフラワー』だ。材料は糸二本、それを花の形に並べるだけの簡単な仕組みで出来る上がるものだ。

他のからくりの材料として登場することもなく、部屋に飾るくらいしか用途が思い付かない。

早速糸を並べ、特に手を加えることもなく完成させる。

必要な魔力はたった1で良く、レベルはかなり低いだろうと予想出来た。

「うわあ、本当にただのドライフラワーだ」

完成品を指でつまみ目の前に持ってくる。

すすすと鼻を動かしたが何の匂いもせず、カラカラに水分の抜けた一本の花は、部屋に飾るにしても少々物足りない感じだった。

机の上にぽいっと放り投げ、次に取りかかるうとした瞬間、ゴゴゴゴと地鳴りがし、部屋が光に包まれた。

眩しさに耐えられず、ぎゅっと目を瞑り、その場にしゃがみこむ。そのまま大人しくし、音が止んでしばらくしてからゆっくり目を開き、そのままぼかんと口を開けた。

「あは、あはは、一回目で当たり？」

何も無かった筈の壁に、まるで前からそこにあったかのような佇まいの扉が出現していた。

特別な雰囲気は一切無く、部屋の様子によく馴染んだ簡素な木の扉だった。

あまりにも呆気なく目的が達成され、喜びよりも脱力感が先に来ってしまう。

「ううう、なんか納得いかない」

扉をじとりと眺め、はああと深いため息をついてぺたりと床に手をついた。

今までのわたしの苦勞の日々は一体何だったんだろう。

そう思わずにはいられないほど、隠し部屋の仕組みはあっさりしたものだっただ。

変に万能アンテナなんて目指さずに、簡単なものから順に作っていれば早かったのだ。

タネが明かされた今だからこそ、後悔せずにはいられない。

しばらくそのまま落ち込んでいたが、出ることが出来るようになっただけでも良かったと思いき、これで最後と大きなため息をついてから立ち上がった。

うっかり部屋を出してしまったても困るので、扉とは十分に距離をとる。

メニューで時間を確認すると、まだ午前八時を少し回ったところだった。

明日の朝まではかなり時間がある。

とりあえずもうこちらはいつでも大丈夫な旨を、キーチくんたちに伝えることにする。

顔を突き合わせての通信だと、邪魔になっても困るので、フレンドへのメール送信の機能を試す。

「出口出せました、今日明日よろしくお願いします、っと」

文字数に制限があったので、用件だけ簡潔に書いて三人に同時に送信する。

これでもうわたしがやるべきことは終わったとほっと息をつき、何をして時間を潰そうかとベッドに腰をかけぼんやり思索し始めると、メニューバーがチカチカ光る。

キーチくんからの返事だった。

了解、との短い言葉だったが、その返信の素早さににやにやと頬が緩んでしまう。

そうだ、とぱちんと手を叩く。

せっかく時間が出来たんだから、感謝の気持ちをこめて三人に何か役に立つものを作ってプレゼントしよう。

大したもののは作れないだろうが、何もしないよりマシだろう。

邪魔にならない大きさを、使い捨てのものが良い。

目的が出来て一気に気分が良くなったわたしは、ふんふん鼻歌を歌いながら図鑑に素早く目を通していく。

機巧スキルの特徴なのかもしれないが、直接戦闘に役立ちそうなものは少ない。

笑い袋はその数少ないうちの一つなのだが、さすがにあれをお礼として差し出すのは躊躇われる。

あれこれ比べて、ようやく候補に上がったのは二つだけ。

魔物笛という敵を集める効果のものと、煙玉という敵を攪乱させる効果のもの。

前者は十回、後者は一回の使い切りで、さほど大きすぎない手頃なサイズだ。

他はやたら場所を取ったり、使い方が面倒くさそうだったり、使いきりでなかったりで適当なものが無かった。

うまく質の良いものが作れるかも分からないので、両方作ってみることにする。

まずは魔物笛からだ。

必要な材料は、糸一本に金属板一枚だけ。しかしそのままでは大きすぎるので、金属板をくわえるのに丁度良いサイズに鋸で切断し、図鑑にあった縦型のホイッスルの形に似せるべく、真ん中に小さな四角い穴を開ける。

錐で開けた穴に糸を通して、仕上げにかかった。

必要な魔力は今のわたしでは足りないようだったが、外見からは特に問題が無さそうに見えるものが出来た。

ただ、試しに吹いてみると酷く息が詰まるのが分かる。

顔が真っ赤になるほど息を入れるとようやく、フィロ口と頼りない音が鳴った。

「これは駄目かなあ」

首にかけるためにあるだろう紐の部分に指をかけ、ぐるんぐるん回しながら改善点を考える。

ただの板に穴を開けるだけじゃなく、金属板をぐるりと丸めて笛っぽくしたらどうだろうか。

早速試してみる。

小さく切断した金属板に四角い穴を開けてから木槌で叩いて筒状にする。

目標が小さいのでなかなか難しく何度も間違っ指を叩いてしまったが、痛みは感じないので問題は無かった。

不恰好ながらも円筒になった金属板に糸を通し、仕上げる。

今度も見た目は先ほどと変わらない。

しかし息を吹き込むと、ピイッと鋭い音が鳴った。

そのまま三回続けて鳴らすと、ぴしりという音と共に笛が砕けちり、光の粒になって空気に溶けて消えてしまった。

「回数は減っちゃうけど、一応合格かな」

よしよし、と頷き、同じ手順で魔物笛を量産する。

慣れると段々楽しくなってきた、気づけば十個の笛が床に転がっていた。

これだけあれば十分だろうと手を止めて、最後に作ったものに解析をかける。

名前しか分からなかったのも、それなりにレベルが高いのだろう。使用回数が予め判れば良かったのだが、わたしの解析スキルレベルでは無理なようだった。

あまり差があると困るのだが、仕方がない。

次に取りかかる前に、いつの間にか来ていたシオリーナさんとギアルさんの返事を確認する。

もう既にイベントは始まっているらしく、しばらく連絡が出来ないと書かれてあった。

終わりそうになったらまた連絡するとあるので、今日も寝るのは無理そうだと諦め、再びお礼の言葉を送信しておいた。

煙玉は木材と糸を二十本も必要とする。

作り方は単純で、木材を糸でぐるぐる巻きにするだけだったが、
図鑑に載っている完成品は球体だ。

そのままでは、どう考えても質の高いものが出来そうにない。

試しに何の工夫もせず作ってみたが、必要な魔力も足りず、凸凹
したものになってしまった。

壁にぼんと投げてみると、ちろちろと細い煙が立ち上ぼり、すぐ
に消えた。

これでは敵を攪乱するどころの話じゃない。

むむむと図鑑を前に唸り声をあげる。

金属なら叩いて形を変えれば良いが、木材ではそうもいかない。

確か火で炙ると良いんじゃないかな。とあやふやな記憶を引
つ張り出してみるも、肝心の火が無い。

木材を手に取り、無理矢理曲げようとしても思い通りにはなっ
てくれなかった。

イライラが募り、べきりと折ってやろうかと乱暴な方に思考が傾
いたところで、ひとつ思いつく。

まず、木材を鋸で出来るだけ小さく切断し、木槌とノミを使って
さらに細かく砕いていく。

半分程木屑に変えたところで作業をやめ、それを手に取りぎゅっ
ぎゅっと握って押し固め、丸い形にしていく。

最後にそれを糸で包む。

形が変わってしまったので、順番通りに巻き付けるのは大変だったが、なんとか出来上がった。

「おおお、見た目はいい感じ」

仕上げ前の状態は既に完成した煙玉の形に近く、満足感が胸を占める。

さてどうなるかと魔力を一気に注ぎ込むと、野球の球のように丸いものが現れた。

これは成功だろうとにんまり笑いながらそれを手に取るも、つるつるしていても収まりが悪い。

ちよつと力を入れすぎると、つるりと手から逃げていつてしまいきりで、ものすごく投げにくい。

壁に向かって投げつけると、目標の場所とは違った場所に飛んで行ってしまった。

結果、さっきよりは多めにもくもくと白い煙が現れたが、やはり一瞬で消えてしまう。

とても人に差し出せるレベルでは無さそうだった。

かなり力を入れて下準備をしたので、使えないと分かりしゅんと

してしまう。

あれ以上の方法は思い付かないし、スキルレベルと魔力、両方が足りていないようだ。

一回こっきりの使い捨てアイテムというのも大きいのかもかもしれない。

魔物笛をもう少し追加しようかと考えたところで、はたと気づく。いろいろ作ったけれど、果たしてアイテムは収まりきるのだろうか。

魔物笛は勿論、せっかく作った道具も持っていきたい。

出来るものなら未使用の材料もだ。

しかし、確かに持てる量には制限があるのだ。

個数ではなく重さだったから、もしかしたら全部持ち出せるかもしれないが、いざ出る時に無理だと気づいて手間取ったら目も当てられない。

慌てて道具を片端からしまっていく。

小さいものばかりだからいけるかと思っただけれど、十四個目を放りこむとぺっと吐き出されてしまった。

これは不味い。

まだ雑記帳も魔物笛も残っているのだ。

それにタロウも連れていかなきゃならない。

万能アンテナは置いていくとしても、全然空気が無い。

「うーん、どうしよう」

思わぬ問題に当たってしまったわたしは、困り果て、しばしその場で立ち尽くした。

打開策発見

何度かアイテムの出し入れを繰り返す。

どうしても持って行きたい雑記帳とタロウを先にしまうと、からくり用の道具が六つしか持っていけなさそうだった。

収納出来るアイテムの量は、精神が関係しているとヘルプに書いてあった。

このまま時間の経過を待てば、空腹スキルが上がって多少持てる量は増えるかもしれない。

しかしそれで、残りの道具八つとお礼に作った魔物笛を持っているようになるだろうか。

どう甘く見積もっても無理だ。

「ううう、せっかく作ったのになあ」

諦め切れず、床に散らばった道具の一つを手に取りろうとして、着けっぱなしですっかり忘れていた魔力測定器の存在を思い出した。

まじまじと手を見つめ、はっとあることに気付く。

何も全部仕舞い込む必要は無いんじゃないだろうか。

この魔力測定器のように、外に出した状態で運ぶなりなんなりすればいいのではなからうか。

自分の思い付きに興奮し、早速魔物笛を首にかけていく。

十個全てかけ終わったところで、動きにくくなっていないか確認するために部屋を走り回る。

身体の動きに合わせてガシャガシャ十個の笛が揺れるのは煩わしかったが、それ以外は特に不都合が無さそうだった。

残る道具の数々だが、これはちよつと面倒だ。

抱え込めば持てないことは無いだろうが、両手が塞がるのは困る。全部魔物笛のように首にかけることが出来たらいいのに、と考えたところでわたしはまた思い付いてしまった。

「うふふ、わたしすごいかも」

自分の閃きにすっかり機嫌を良くして、すぐに思い付きを実行に移す。

まずは鋏を手に取り、持ち手の部分に糸と針金を通す。

一本ずつでは心許ないので三本ずつまとめて使い、長さが足りないので更に継ぎ足した。

そして通した糸と針金の端を絡ませて結び、頭の上でぶんぶん振

り回す。

かなり思いきり振り回したけれど千切れることは無かった。強度に問題は無さそうだ。

「うん、完璧！」

試みが上手くいったことに満足して、一度結び目をほどいて、そこへ穴の空いた道具を通していく。

更に穴の無いものには錐で穴を開け、同じように通す。

鋏、針、木槌、鑪の四つを通した所でバランスを考えてひとまず纏めた。

同じように針金と糸を絡ませたものを作り、定規、天秤、ノミを通し、針金でコンパスと羽ペンをくりつける。

残ったインク、鋸、作業台は収納し、ノミとピンセットと錐は針金でぐるぐる巻きにして一纏めにし、手で持っていくことにする。

出来上がった輪っかに首を通したが、さすがに邪魔だったので両肩にそれぞれかける。

「おおお、やれば出来るもんだなあ」

端からどう見えるかは全く気にせず、わたしは全て持っていけそう
な目処が立ったことにほっと安堵の息をついた。

欲張れば材料もいくつか持っていていけそうだったが、これ以上ジャ
ラジャラさせるのは鬱陶しかったのでそれは諦める。

さすがにこの恰好で待っているのも微妙なので、ガシヤガシヤ音
を立てながら取り外していく。

肩にかけていた荷物を外したところで、シオリーナさんから通信
が入った。

「おいシロちゃんっ！」

慌てて魔物笛を外し、ささつと髪を整えてそれに答える。

「はい、シトロネラです」

電話の受け答えのような言葉選びがおかしかったのか、シオリ
ナさんはくすくす笑いながら用件を話し始めた。

「んつとね、イベントだけど順調だよっ。

この分ならあと三時間くらいで終わりそうかな。

もうすぐ会えるねっ！

すっごく楽しみだなっ」

にこにこ笑顔のシオリナさんにつられてわたしもへらりと笑い、
メニューを開いて今の時間を確認する。

丁度午後六時をまわったあたり。

九時まで何をしていようと一瞬意識が逸れたわたしに、シオリ
ナさんが嬉しい提案をしてくれた。

「もうイベント大変なところは終わっちゃったのね。

だからちよくちよく休憩とれるから、その間お話に付き合ってく
れたら嬉しいなあ。

ね、いいかなっ？」

むしろそれはこちらからお願ひしたいことだった。

シオリーナさんの状況がさっぱり分からないので、無闇に引き留めるのも悪いと思っただけに、すごくありがたかった。

「ありがとうございます、シオリーナさん」

画面に向けてぺこりと頭を下げると、シオリーナさんはぷくりと頬を膨らませて拗ねたような声で不満を漏らした。

259

「シロちゃん他人行儀だよお。」

あたしはシオリって呼んで欲しいなっ。

シオリーナってのはね、シオリって名前先に取られちゃって仕方なくつけたの」

ほらほら、と期待に満ちた目で見つめられ、わたしは少し照れながら彼女の名前を呼ぶ。

「えと、シオリさん」

「シーオーリーっ！」

さんなんていらないうっ！」

間髪を入れずシオリさんから呼び捨てにするよう要求される。

むっと唇を尖らせる姿は非常に可愛くて、何でも聞いてしまいうになるが、そこは譲れない。

わたしは人を呼び捨てにするのがあまり得意でない。

付き合いの短い人なら尚更だ。

「し、シオリさんで許してください」

小さな声で「ごにょごにょ」とお願いすると、シオリさんは不満そうではあったがすんなりひいてくれた。

「ま、いつか。」

でも敬語は禁止だよっ！

友達同士で敬語なんて変でしょ、ね？」

にっこり笑って釘を刺すシオリさんにわたしはこくこくと頷く。
さらりと友達だと言ってくれたことも嬉しくて、しばらく緩んだ
顔をしていたと思う。

それからはシオリさんが主に喋り、わたしは聞き役に回った。

内容はわたしに配慮してくれたのか、今回イベントに参加してい
る人たちのことに終始していた。

全員が知り合いらしく、彼らに思うところはあるものの、シオリ
ーナさんから人となりを聞くとそれほど悪い人たちじゃないのかと
思えてしまう。

誰も彼もポジティブに語るシオリーナさんも、キーチくんと同じ
く良い人なんだろうな、とほっこりした気持ちになった。

「あ、そろそろ休憩終わっちゃっ！

次はギルが来るから相手したげてね。

そだそだ、シロちゃんが良かったらギルって呼んであげてーっ！
ああん、もういかなきゃっ、またね！」

二十分程話してから、慌ただしくシオリさんは去ってしまった。
休憩ギリギリまでわたしに付き合ってくれたのだろう。

気を使わせてばかりで、嬉しいけど申し訳ない。

後日改めてお礼をせねば、と密かに決心をすると同時に、今度は
ギギアルさん、もといギルさんから通信が入る。

「ギ、ギルさんもうありがとう」

思い切って碎けた話し方で応えると、ギルさんはすぐににこりと
笑ってくれた。

こちらも本当に、拝みたくなくなるくらい良い人だ。

「シオリから話は聞いたよね。」

俺からは、良ければ一人紹介したいんだけど、どうかな？」

急な申し出に戸惑うも、断る理由も見つからなかったので素直に頷いた。

すると宙にもう一つ画面が開き、厳しい顔つきの男の人が表示された。

「この人はあるギルドのトップのコジマ。

で、コジマ、この子がシロちゃんだ」

ギルさんの紹介に合わせてぺこりとコジマさんに向かって頭を下げる。

コジマさんも同じようにわたしに軽く頭を下げた後、沈痛な面持ちで口を開いた。

「コジマだ。

本当に、本当に、すまなかつたっ！」

そう言うつやいなや、先ほどとは比べものにならないくらい深々と頭を下げる。

一体何を謝られているのか分からないわたしは、その迫力に気圧されおろおろし、頭を上げてくださいとただ繰り返し返す。

しかしコジマさんは一向に頭を上げてはくれず、どうしようと思ったところでギルさんが助け舟を出してくれた。

「ほら、シロちゃんのこと掲示板に載ってたって言ったよね？
彼がその犯人」

明るく告げられ、ああそれかと納得するも、まずはコジマさんが頭を上げてくれないと話が始まらない。

「お、お願いですから頭をあげてくださいいいっ」

「いやこれじゃまだ足りん、それだけのことをした自覚はある」

おたおたと呼びかけるわたしと、土下座しそうな勢いのコジマさんのやりとりは平行線を辿り、見かねたギルさんが間に入って取りなしてくれるまで終わらなかった。

閑話：キーチの気持ち

面倒なことになったもんだ、とキーチは迫りくる敵を倒しながら軽くため息をついた。

わざと派手な魔法を連射させ、いかにも不本意だとばかりに地面を爪先で蹴りつける。

そうして自分自身に対して不機嫌さを主張しなければ、胸の底から突き上げてくる嬉しさを抑えられそうになかった。

キーチがリアルファンタジーを始めたのは、友達が欲しかったからである。

根っこの部分は素直で真面目ないい子であったのだが、口下手で見た目にもあまり自信が無く、更に素直になるのは格好悪いと突っ張ってみせる性格だったため、現実での友人は非常に少ない。

そしてその貴重な友人たちは、キーチの性格を面白がり、よくネタにしてからかう。

彼らに悪気は無く、キーチもそれが嫌な訳ではない。

しかしたまにどうしようもなくやるせない気持ちになってしまっただ。

だからキーチは、穏やかな性格の、心許せる友達が欲しかった。そこで目をつけたのが、リアルファンタジーだ。丁度発売された新しいVRMMOに、一も二もなく飛び付いた。自分の思うような姿でプレイし、更に疑似トリップイベントで三ヶ月も共にすれば親友と呼べる存在だって出来るんじゃないかとキーチは期待に胸が高鳴った。皆に頼られ、かつこ良く活躍する自分を妄想し、中学時代にいつもクラスを中心に居た人間の姿をまねて作ったキャラクターで、希望と共にゲームの中へと旅立った。

しかし実際はそう上手くはいかない。まずゲームを始めてすぐに、やたら綺麗で恰好のいい人間の多さに圧倒されてしまった。

キーチ自身も可愛らしい少年の姿になってはいたのだが、根付いた美形への劣等感はなかなか消えない。

ようやく慣れた頃には周りは遙か先に行っており、生来の不器用さ故に別の自分に成りきることも出来なかった。

親友どころか知り合いすらなかなか作れず、ようやく知り合えた人間ともそこまで親しくなれない。

ゲームといえどプレイするのは生身の人間同士。自分に都合のいいモブではない。

失敗を通してそれに気がついてから、キーチは少しだけ大人にな

った。

口は悪いままで、人付き合いがいきなり得意にもなったりはしなかったが、多少は丸くなり、やたらと突っ張っていたせいで隠されていた素直さと真面目さが少しずつ表に出るようになってからは、知り合いも増えた。

仲が良いと胸を張って断言出来る相手はまだ居なかったが、これはこれでいいものかもしれない、と思い始めていた頃、事件は起こった。

そこそこ交流のあるシオリーナから連絡が入った時、キーチは一人であるダンジョンに潜っている最中だった。

もうすぐ最深部というところで横やりが入り思わず顔をしかめたが、無視はせずすぐに応える。

キーチが人からの通信に応えないことは、殆ど無いと言っていい。

シオリーナから頼まれたのは、チャットに来て新人プレイヤーが困っているからアドバイスしてくれということ。

ダンジョンについて詳しいことが知りたいらしい。

噂の新人については、キーチも掲示板で確認してその存在を知っていた。

しかし、大手ギルドや上位のプレイヤーが動いているから、自分出来ることなどないだろうと端から介入することは諦めていた。

なのに、キーチが必要だと言う。

キーチは直ぐ様ダンジョンを脱出し、シオリーナの元へと駆けつ

け詳しい話を聞いた。

シオリーナたちを見るなり号泣したプレイヤーから聞き出したという一連の経緯を聞き、その要領の悪さと運の悪さに同情しながらもある種の親近感を抱く。

女なのは残念だが、それでも互いの失敗談を話しあえたら楽しいだろうなと思った。

ファーストコンタクトは大失敗だった。

シオリーナにも散々釘を刺され、キーチ自身も迂闊なことは口にすまいと思っていたのに、緊張で頭が真っ白になり憎まれ口を叩いてしまう。

言い返しもせず困ったように笑う姿に、焦って撤回しようとしたがシオリーナに阻止され、撤回するどころか更に悪態をついてしまう。

やがてその姿が消え、慌ててチャットから出るもフレンド申請は来ておらず、しばらくして出てきたシオリーナとギギアルにだけ申請されていることが分かった時は、キーチは大層落ち込んだ。

普段呼ばれもしないフレンド通信に、しかも明らかに自分を敬遠している相手がいる場に現れるなんて真似はしないキーチだったが、この時ばかりはシオリーナ経由で割り込んだ。

どう謝ろうか考えている最中にシオリーナにあっさりと先ほどの様子をバラされ、反射的に否定の言葉を叫びまた後悔した。

しかし直後にフレンド申請が送られてきたのを確認し、口元が緩

みかけたのを慌てて引き締める。

話してみるほどに、キーチはシトロネラの要領の悪さが気にかかった。

このままではいいように利用されるだけだと、自身の経験を振り返って思う。

キーチはシオリーナとギギアルの二人のことを嫌いでは無かったが、完全に信用している訳でも無かった。

痛い目に遭わされたことはない。

しかし彼らと絡んだことにより、幾人かの知人と疎遠になったり、正論を言われているのにもやっとしたりと、ほんの些細なことがキーチに二人を警戒させていた。

せめて自分だけは力になってやらなければ、とキーチは柄にもなく決意する。

そこにはキーチも意識しないまま、すっかり諦めた善のヒーローへの夢と、友達が出来ることへの嬉しさが隠れていた。

「シトロネラ、シロ、シーラ、トロ……。
あああくそっ」

敵が途切れ余裕が出来た時に、あと数時間で会うことになる友達になんて呼び掛けようかとキーチは悩んでいた。

いろいろ思い悩むも、どれもいまいちしっくりこない。

かといって、本人になんて呼んでほしいかなんて尋ねられるほど、キーチは社交的でもなかった。

煮詰まった彼はガリガリと頭をかきむしり、運悪く沸いてきた敵に苛々をぶつけ八つ当たりした。

「くっそ、うぜえんだよっ！」

女々しく悩んでいることの恥ずかしさも相まって、放たれた火の玉の威力は敵一体を葬り去るのには過剰すぎる程のものだった。

「キーチ、ギル戻ってきたら休憩していいよーっ！」

ぼすんぼすんと威力の高い魔法を乱射するキーチに、シオリーナが声をかける。

キーチは振り向かず微かに頷いただけだったが、シオリーナは特に気にした風もなく自分の持ち場へと戻っていった。

ちらりと横目でその背中を見る。

いろいろ思うところはああるものの、キーチはギルとシオリーナの二人が羨ましかった。

広い人脈も、初対面相手に臆せず話せるところも、自分のような人間にも普通に接してくるところも、全部羨ましくてたまらなかつた。

シトロネラも、自分がでしゃばるより素直に二人へ任せた方が賢明だとも思う。

きつと悪いようにはならないだろう、とも。

それでもキーチは、自分なりに動きたかった。

シトロネラがいらないうというなら諦める。

二人の方がいいというなら従おう。

だけどその前に、やれることはやってみたいのだ。

「負けねえっ！」

自身の弱気を振り払うようにキーチは一声叫び、シトロネラと会ってからのことを頭の中でシミュレーションし始めた。

これでお別れ

やっとコジマさんがこちらに向かい合ってくれたので、改めて頭を下げて、彼が再び口を開く前に一気に言いたいことを言ってしまう。

「ええと、いろいろ心配してもらってありがとうございます。

掲示板に載っちゃったことについては微妙な気持ちですが、わたしのためにしていただいたことだってギルさんたちから聞いているので気にしてません。

なのでコジマさんも気にしないでください。

あの、あのですね、さっきみたいに謝られるのは、こ、困ります」

気にしてないというのは嘘だったが、それを伝えてもまた過剰に謝られるだけだと予想出来たので言わないでおく。

コジマさんは早口で一気に喋ったわたしの言葉を最後まで聞いて、再び頭を下げかけ、はっとしたようにその行動を取り止めた。

シオリーナさんが真面目で優しい人だと言っていたが、それは本当のことらしい。

「そう言ってもらえると有り難い。

君がここから出たら詫びも兼ねて力になりたいと思っている。

困ったことがあれば何でも言っただけいい」

そこでようやく、コジマさんが微かに微笑んだ。

厳しい顔つきが一転して優しいものになり、その差が激しい分、ひどく魅力的なものに見えて、さすがギルドのトップの人だけのことはあるなと妙に感心してしまった。

その時はお願いしませんが、当たり障り無く答えたものの、きっと何かお願いすることは無いだろうと密かに考えていると、ギルさんがこやかに一つ提案をしてきた。

「そうだ、それなら二人もフレンド登録しておくといいね。

シロちゃん、コジマはフルネームも一緒だから」

あっさり言われてしまい、わたしは少し動揺する。

正直、そんなにお近づきにはなりたくない。

いい人なのだろうけど、一連の出来事のおかげで生まれた苦手意識が消えた訳じゃない。

「ただどギルさんの申し出を断るのも憚られたので、不満はぐっと飲み込んでフレンド申請を送った。」

ギルドのトップならきつと知り合いも沢山いるだろうし、こちらから連絡をしなければそのうち縁も切れるだろう。

「コジマに連絡しにくかったら俺に言ってくれてもいいからね」

複雑な気持ち表情に出ていたのか、ギルさんが笑ってフオロロしてくれた。

コジマさんはその言葉に軽く眉を寄せたものの、特に反論はしない。

掲示板の一件で、お節介で親切の押し売りをしてしまう人だどこかで思い込んでいたので、その反応は意外だった。

先入観に捕らわれすぎていたかと、少しだけ反省した。

コジマさんはその後すぐに姿を消して、ギルさんも次はキーチくんが来ることを告げて居なくなった。

ひとり残された部屋の中で、ほーっと長い息を吐く。

いつの間にか肩に力が入っていたようだ。

フレンドリストを開くと、コジマさんの名前が増えている。

思わずため息が出そうになって、慌てて息を止めた。

早くキーチくんから連絡が来るといいなと思いつつ、ぼんやり宙を眺める。

しばらくそのまま待っていたのだが、一向に連絡は来ない。

何かあったのかと心配になったが、何かあってそれに対処している最中ならこちらから連絡するのも躊躇ってしまう。

すっかり手持ちぶさたになったわたしは、見納めとばかりに掃除がてら部屋の中を見て回った。

不本意に閉じ込められた場所とはいえ、もうすぐお別れだと思つと感慨深いものがある。

持ち出せるものなら全部丸ごと持って行きたい。

特に『ごみ図鑑』は手元に置いておきたい。

しかしもし次の人がこの隠し部屋に閉じ込められた時にこれが無かつたら困ってしまうだろう。

無くなったものは補充されるかもしれないが、はっきり分かつている訳じゃないのでやめておく。

外に出しっぱなしになっている本を一冊ずつ本棚に戻し、そつと心の中で手を合わせた。

余った部品は全て箱に戻して口を閉じ、使いかけのものはその上

に纏めておいておく。

小さすぎて使えなさそうな切れ端は部屋の隅に集める。
ベッドを整え椅子を仕舞えば、

元通りとまではいかないものの、ござっぱりとした様子を取り戻した。

ここで十日以上も過ごしたのかと考えると、不思議な気持ちになっってくる。

しみじみしていると、それを遮るようにぴかぴか視界の端で光るものに気付いた。

今更何だろうと首を傾げながらメニューバーを操作すると、スキルが一つ発現していた。

整頓：1（部屋の効果回復）

『スキルあれこれ』には載ってなかったスキルと、見覚えのない効果を目にしてわたしは考え込む。

額面通り受け取るなら、部屋には何かしらこちらに影響を与えるものがあるらしく、汚れるとその効果が落ち、片付けると戻ららしい。

そういえば、と一つ思い当たることがあった。

ここでいくつもからくりを作ってきたが、作った数に対して失敗の回数が少なすぎる気がするのだ。

偶然と、いろんな工夫をしたおかげだと思っていたのだが、この部屋の名前からして機巧スキルに関する影響があったのだと考える

とじっくりいく。

もっと早く気づいていれば小まめに掃除していたのに、もう二回
を出るってタイミングで判明したのはすごく残念だ。

「もー、説明されてない要素多すぎるよ」

悔し紛れに不親切な仕様に対して八つ当たりし、軽く画面を叩く
振りをする。

ここを出たら基本的なことに關して一度勉強した方がいいのかも
しれない。

またこんな目にあっても困る。

しまいこんだ雑記帳を取り出し、調べたいことにいくつか付け足
した。

それも終わると、いよいよすることが無くなってしまふ。

シオリさんに告げられた時間まであと一時間と少し。

本を読む気にもならず、ベッドに腰掛けぼんやり天井を見つめた。

どれくらいそうしていただろう。

わたしを何度も呼ぶシオリさんの声ではっと我に返り、慌てて返
事をする。

「良かったー、返事無いから心配しちゃったよっ！
あのね、もう出てきて大丈夫だよ。
うふふ、楽しみだなっ」

にこにこ笑うシオリさんに気づかなかったことを謝ると、気にしてないよと明るくフォローされほっとする。

待ってるねと言ってシオリさんの姿が消えたと同時に、急いで準備を始めた。

魔物笛を首にかけ、両肩に道具をくぐらせ、左手にまとめたものを掴み、扉の前に立つ。

いよいよだ。

これでわたしは、一人きりの生活から解放されるのだ。

扉に手をかけようとすると、ぶるぶる震えていることに気づいて一度引っ込める。

軽く握って胸にあて、深呼吸をした。

ここを出られるのは嬉しいし、この先にあるものが楽しみではある。

ただ少しだけ怖い。

長く一人でいたわたしが、ちゃんとやっていけるか不安でもある。うまく喋れるだろうか、変なことしちゃわないだろうか。

考える程に不安は大きくなっていった。

がちりと扉の前で固まってしまったわたしの背中を押したのは、キーチくんだった。

なかなか出てこないわたしを不審に思ったのだろう。

いきなり一言だけ投げつけて、返事も待たずに消えてしまった。

「待つてんだから早く来い馬鹿っ！」

急なことにぽかんとしたわたしだったが、可笑しくて嬉しくて、くすくす笑ってしまう。

それだけで身体の強ばりは解れ、震えも収まった。

そうだ、この扉の先には、知らないものばかりじゃない。

キーチちゃんとシオリさんとギルさん、ついでにゴジマさんも待つてくれている。

不安が消えた訳じゃ無い。

だけどそれよりも、わたしは三人に直接会いたい。

会ってちゃんとお礼を言いたい。
もっと親しくなりたい。

扉に手をかける。

今度は躊躇うことなく、一気に開け放つ。

目の前に広がるのはごっこごつした石の壁、初日に見たダンジョン
そのもの。

そろりと一歩踏み出す。

足の裏から伝わってくる感触は、部屋の中とは全く違う。
そのままの状態で一旦止まり、顔だけで後ろを振り返る。

「ばいばい、二度と来ないからっ」

部屋にきつぱり別れを告げ、一気に外へと駆け出した。

外は外で大変そう

走り出してすT字路に突き当たり、勘で右を選んでそのまま進む。肩にかけた道具がぶつかり合ってジャラジャラ鳴り響いた。

どこにも敵の姿は無いが、人影も見えない。

行き止まりに当たって引きかえそうとした時、どこから微かに声が聞こえてきた。

その声を目標に踵を返し、道具のせいでそれをかき消さないようにと今度は普通に歩き出す。

どんだん声は近くなってきた、わたしの名前を呼んでいることに気づき、こちらからも呼び掛けた。

「いま行きますー!」

それが向こうに届いたのか、一旦わたしを呼ぶ声は消え、代わりにそこで待っているようにとの声が聞こえた。

わたしは素直にその場で立ち止まり、壁に寄りかかって待つ。

声の届く範囲なのだからすぐに合流出来るかと思っていたのだが、人影が視界に飛び込んできたのは予想より随分経ってからだった。

現れたのはシオリさんたちではなく、背の高い女の人と、可愛らしい小さな女の子の二人組だった。

わたしの姿に気づくと背の高い方の女の人が駆け寄ってきて、ぎゅっとわたしの手を握り、その大人っぽい見た目とは裏腹に無邪気に微笑んだ。

「きゃーっ、シトロネラちゃんはじめてまして！

私はセイレーン、よろしくねえ」

やけにはしゃいでいる様子にわたしが驚いて目を白黒させていると、後ろからきた女の子がセイレーンと名乗った女の人の背中をぱしんと強めに叩いた。

「ちよっと、もう、んつとにあんたって子は。

違うでしょ、その前に言っことがあるでしょー！」

見た目は少女なのに、明らかにセイレーンさんよりしっかりした口調で、彼女を叱りつける。

その言葉にはっとして何かに気付いたらしいセイレーンさんは、握ったままの手にギュッと力を込め、しゅんとした様子でわたしに謝った。

「ごめんなさい、反省してるのよ、本当よ」

初対面のセイレーンさんに謝られるような覚えのないわたしは、きよとんとして彼女をまじまじと見つめる。

しかしいくら見つめたって心当たりがある筈も無く、はあと気の抜けた返事をしてしまう。

見かねたらしい女の子が、セイレーンさんの代わりに説明をかって出てくれた。

「シトロネラさん、でいいのよね？」

あたしはメルチエ。

で、この子はあなたをそんな目に遭わせたくそ馬鹿二人組のお仲間。

実行犯じゃないけどがつつり関わってるわ。
ほんつと考えなしなんだから」

ほう、と物憂げにため息をついたメルチェさんは、見た目は幼いけれどセイレーンさんの保護者みいだった。

さすがに思うところはあるものの、セイレーンさんの謝罪はとりあえず形だけでも受けておく。

待たせている人たちもいるだろうしとの考えから適当に流してしまっただけだったのだけど、わたしの言葉でほにゃっと破顔したセイレーンさんを見て、なし崩し的に許してしまいそうだとこっそり苦笑いをした。

「さ、一度出てやつらとも合流するわよ。

シトロネラさん、あたしの横に。

セレはみんなに彼女が見つかったこと知らせてから来なさいよ」

てきばきと指示を飛ばすメルチェさんに従い、彼女の側に行く。

セイレーンさんはあいと片手を上げて返事をし、ひらひらとこちらへ手を振ってみせた。

すると次の瞬間視界から彼女の姿が消え、代わりにただっ広い草原が現れた。

急な変化に驚きキヨロキヨロ辺りを伺うわたしに、隣に居たメルチエさんは短く、外よ、とだけ呟いて黙ってしまふ。

しばらくそのまま、わたしたちの間には沈黙が流れた。

居心地が悪く、話しかけるのも躊躇われたが、わざわざ迎えに来てくれたお礼は言っておかねばと、ときどきしながら口を開いた。

「メルチエさん、あの、いろいろありがとうございます」

深々とお辞儀をすると、首の魔物笛がガシヤリと音を立てた。

メルチエさんはそんなわたしをじろりと眺めた後、素っ気なく呟いた。

「仕方ないじゃない、コジマが気にしてるんだもの」

それはけして好意的な響きでは無かった。

申し訳なくて、身体を小さくして頂垂れてもう一度すみませんと謝ると、メルチェさんは苛立たしげな口調で一気に捲し立てた。

「なんなの、あたしが苛めてるみたいじゃない。

なんであたしたちがあいつらの尻拭いしなきゃいけないのよ、おまけに女狐と狸もついてくるしっ！

あんたも何なのその格好、おしゃれのつもり？

ほらこれあげるから仕舞いなさい、みっともない」

ぷりぷり怒りながらも、メルチェさんはわたしに小さな袋を差し出した。

これ以上迷惑はかけられないと押し返したが、無理矢理手の中へと擦り込まれる。

諦めて受け取り、どう使うのかしげしげ見つめていたら、メルチェさんがアイテム収納用の袋だと教えてくれる。

急いでお礼を言っつて身につけたものを入れると、その小さからは想像出来ない容量の袋の中にどんどん吸い込まれていった。

魔物笛を仕舞う途中で、その一つを感謝の気持ちとして差し出してみる。

が、受け取ってもらえず、がくりと肩を落とすと渋々といった様子でメルチェさんが口を開いた。

「感謝してくれるなら、あんまりコジマに近づかないでね。
あんたが悪いんじゃないけど、これ以上あの人に負担かけてほしくないの。」

その袋の対価はそれにして頂戴」

そう言っつてそっぽを向いてしまった姿に、もの悲しい気持ちになる。

悪い人じゃないのだろう。

態度は素っ気ないが、良く思っていないわたしは収納しきれないアイテムに気がつかつてくれたことから、面倒見が良さそうだと感じられる。

対価というなら、助けにきてくれたことで十分なのだから。

出会い方が違えば普通の知り合いになれたかもしれないのに、と考えるからこそ、きっちり引かれてしまった線が悲しい。

それだけコジマさんが大事なのだろうと分かるから、それ以上踏み込む気にはなれなかった。

しかしやはり、コジマさんには頼らない方が良さそうだ。

既にフレンドになってしまったことを、メルチェさんに伝えるべきか悩んでいるうちに、ぽつりぽつりと人が増えてきた。

「シー口ちゃんっ、シオリさんですよーっ！
えへへ、意外にちっちゃいんだね、かわいいっ！」

その中の一人、シオリさんが駆け寄ってきて、ぎゅっとわたしに抱きついた。

背中を丸めていたせいで、丁度顔が大きな胸に潰される位置になり、柔らかいその感触に慌ててしまう。

しかし離れてもらうにしても、口が塞がれて声が出ない。

「シオリーナ、困ってるぞ」

そう言ってシオリさんをべりっ剥がしてくれたのは、つい先ほどまで話題になっていたコジマさんだった。

お礼を言いながら、早速忠告を無視してしまったと青くなり、こっそり横目でメルチェさんを伺う。

にこにこ笑ってこちらを見ていたが、わたしと目が合うと一瞬ぎらりと瞳が光ったような気がする。

早急にコジマさんの側を離れようとは思ったが、いつの間にか加わったギルさんも交えて始まってしまった会話を上手く抜けることも出来ず、たらりと冷や汗をかく。

居たたまれなくなって、気づかれないように然り気無く他の人たちの顔を見回し、キーチくんの姿を探した。

見つけたらそれを理由にこの会話を脱出しようと思って。

しかしどこにもキーチくんは居ない。

そういえばさっきも連絡が来なかったし、本当に何かあったのかと心配になる。

シオリさんもギルさんも何も言わないから、大丈夫だとは思うけれど気になってしまう。

そしてしばらくして、街へと転移することになっても、キーチくんは現れなかった。

シオリさんに聞いてみたが、そのうちちゃんと来るとだけしか教えてもらえぬまま、移動することとなってしまった。

ややこしい人間関係

ダンジョンから外へ出た時と同じように、一瞬で周囲の景色が変わり、大きな街の側に気付けば立っていた。

シオリさんに促されるまま中へ入り、みんなの後をついていく。所々に見覚えのある建物があったので、おそらくはわたしが最初に降り立った街に戻ってきたのだと分かった。

途中こちらを伺う人の数が妙に多くて、少し緊張する。

然り気無くギルさんとシオリさんがわたしの両脇に立って隠してくれたので途中から気にならなくなったけれど、思っているよりも自分のことが噂になっているのではと不安になってしまふ。

自意識過剰だとは思いつけど、一度生まれだ不安はなかなか消えてくれなかった。

ようやく目的地らしい広いホールに入って視線が無くなり、ほっと息をつく。

受付でコジマさんが何かの手続きをしているのをぼんやり眺めていると急に入口が開き、フリフリのロリータファッションに身を包んだ女の子が駆け込んで来た。

「いえーいつ、美少女七海ちゃん参っ上！」

勢いよく叫んでびしっとポーズを決めた女の子に、ぼかんとしてしまふ。

強烈な人も居るんだなあとしみじみ思っていたら、シオリさんに強く手を引かれてその背に隠された。

一瞬見えた顔が強張っていたような気がして、つられてわたしも緊張してしまふ。

横目で周りを確認すると、シオリさんと同じように表情が固くして現れた女の子を見ている人が多数だった。

「『一発芸』のヒトが何の用なの？」

呼んでないんですけどー」

棘のある声を投げ掛けたのは、キーチくんのような可愛らしいフェアリーの男の子だった。

ぶくつと頬を膨らせ腕を組み、背中の羽を威嚇するように逆立てて女の子を睨み付けている。

しかし女の子、七海さんは全く意に介した風もなく、笑って受け流す。

「残念でしたっ、七海もちやあんと招待されてますよーだ。
そうだよねー、メルたん？」

その言葉に、メルチエさんに一斉に視線が向けられた。
ギルさんとシオリさんが厳しい目をしていて、わたしが見られて
いる訳じゃないのになんだか居心地が悪い。
メルチエさんはそんな視線をうけて少しバツが悪そうに肩を竦め
る。

「そうよ、あたしが呼んだの」

彼女がそう肯定の言葉を呟き頷くと、あちこちから、なんでどう
してとの声が聞こえる。

人間関係がどうなってるかよく分からないわたしは、おろおろす
るばかりだ。

きつと中心にあるのはわたしのことなんだろうけど、それとは全
く違うところで話が進んでいるように見える。

「うるさいわね、だってあたしたちとこいつらだけじゃ偏りすぎでしょ。」

バランス取るために丁度いいと思って」

メルチェさんがフェアリーの男の子を肘で指しながらそう言つと、しぶしぶといった様子でみんな口をつぐむ。

しかしギルさんだけは笑顔でどこか険のある言葉を投げた。

「困るな、そういうのは。」

先に教えといてくれなきゃあ」

ね、とわたしに向かって同意を求めてくるが、いきなり話を振られて困ってしまう。

代わりにシオリさんが受けて、うんうんと頷いていた。

何で揉めているのかはわからない。

しかしこの駆け引きにシオリさんとギルさんも絡んでいることは分かってしまった。

ほんの少しだけ二人から距離を取る。

わたしのためにしてくれていることなのかもしれないが、こういうのは得意じゃない。

早くキーチくんが来てくれないかな、と入口を何度も伺った。

「いいだろう、ほら行くぞ」

コジマさんがその声をかけると微妙な空気は払われ、みんな素直にそれに従いぞろぞろと移動していく。

わたしも行かねばと慌てて足を動かすと、ちょいちょいと服の袖を引っ張られた。

「はあいシトロン、七海と仲良くしようねっ」

振り返ると上目遣いの七海さんと目が合って、どきまぎしてしま
う。

自己紹介する前にギルさんに間を遮られ、シオリさんに手を引かれてしまったので、近づいたのは一瞬だったが、間から見えた七海

さんは満足そうににやりと笑っていた。

「じゅめんね、シロちゃん。

あの子場を引っ掻き回すのが趣味だから、あたしたちもぴりぴりしちゃって」

わたしの手をぎゅっと握ってシオリさんが申し訳なさそうに肩を落として呟く。

ずっと明るく振る舞ってくれていたシオリさんのそんな姿に、慌てて気にしてないと首を降る。

「あーよかつたっ！

シロちゃんに怖がられて嫌われたかと思っちゃったよー」

茶目つ気たつぷりの言葉に、ついさっき感じたことを見透かされたような気がしてぎくりとしたが、曖昧に笑って誤魔化しそろりと視線を逸らした。

嬉しそうに笑うその顔を見ると、おろおろして使い物にならなか

「たわたしを庇ってくれた人に薄情だったと軽い自己嫌悪に陥って
しまいそうだ。」

階段を上り、長い廊下の突き当たりにある部屋に入った。

中は広々としており、椅子があちこちに転がっていた。

みんながそれぞれに椅子を拾って適当な場所に座っているのを見
てわたしもそれに習う。

最初は隅の方に座ったのだが、シオリさんに促されて真ん中の方
へ移動する。

落ち着いたので人数を数えると、わたしも含め全部で十人がそこ
にはいた。

コジマさんが立ち上がり喋りだそうとした瞬間、どこからかピピ
ピピとアラーム音が響いた。

メルチェさんがさっと席を立ち、部屋に備え付けられていた電話
を取り一言二言話した後、受話器を持ったままこちらを振り向いた。

「キーチが下に来てるけど、入れていい？」

待ちに待った人の登場に、ぶんぶん激しく首を縦に振る。

隣ではシオリさんが意外そうな顔をしていたが、嬉しい知らせに気を取られていたわたしはその表情の意味を深く考えることはしなかった。

部屋の人たちに断って、扉の近くでキーチくんを待つ。

隣にはギルさんとシオリさん、ついでに何故か七海さんもいる。

あんまりにわたしが楽しみにしているせいか、シオリさんが複雑そうにこちらを見ていたので少し恥ずかしくなり、出来るだけ気持ちを抑えるよう努めた。

そしていよいよ扉が開いた。

思っていたより小さくはなかったけれど、画面で見たまんまの姿に顔がつい緩んでしまう。

キーチくんはずらりと並んだわたしたちを見て、ギョツとしたように後退りした。

しかしぱちりとわたしと目が合うと、うろつろと視線をさ迷わせた後、ぽそりと呟きそっぽを向いた。

「よ、よう、久しぶり」

耳まで真つ赤にしたその姿に吹き出しそうになったが、何とか堪えてわたしから歩み寄る。

キーチくんはまた後退りしかけたけれど、一歩下がったところで踏み止まってくれた。

「久しぶり、キーチくん」

もつと気のきいたことが言えれば良かったのだけど、浮かれたわたしにはそれが精一杯だった。

だけどキーチくんはそれでようやくちゃんとこちらを見てくれ、照れくさそうに目尻を緩めた。

「えー何なの何なのっ、意っ外、七海びっくり！
シトロンとキー坊どんな関係なの、怪しいー」

きゃっきゃと楽しげにからかう七海さんの言葉に、わたしたちは揃って首を傾げ、同時に口を開いた。

「友達です」

「と、友達？」

示し合わせたように重なった言葉に、七海さんはきゃらきゃら笑い転げ、シオリさんががばつと背中に抱き着いてくる。

「えーシロちゃん、あたしはっ？
友達だよねっ？」

拗ねたような声に慌てて頷くと、シオリさんは満足そうに笑った。

「もういい？
話進めたいんだけど」

入口でじゃれ合うわたしたちに業を煮やしたらしいメルチエさんから厳しい声が飛び、慌てて席に戻る。

コジマさんが困ったようにたしなめていたが、メルチエさんはきつい目でこちらを睨んでいて、一気に頭が冷える。

これから一体何が起こるのか分からないが、厄介そうだなとこっそりため息をついた。

茶番劇開演

全員が座ったところで、コジマさんがフェアリーの少年にちらりと目配せをした。

すると少年とその近くにいたセイレーンさんと二人の男性が揃って立ち上がり、やけに沈痛な面持ちでわたしの前へやってきた。

男性二人はおそらくわたしをダンジョンに放り込んだ二人組で、セイレーンさんもいることから少年もその仲間なのだと理解する。

「すみませんでしたっ、ごめんなさい！」

黒髪で眼鏡の青年が大声で叫びながらジャンプしてから床に這いつくばり、土下座のポーズをとると、残りの三人も口々に謝罪の言葉を叫んでそれに倣う。

一度に四人の人間に土下座され、わたしはぎょっとしてしまった。慌てて立ち上がり、やめてもらえるように頼むが一向に聞き入れてもらえない。

代わりに少しだけ顔をあげて何か訴えるような潤んだ目でこちらを見つめてくる。

何だろう、この茶番は。

慌てながらも、そう思わずにはいられなかった。

ここに来るまでに、いくらでも個人的に話す機会はあった。

ただセイレーンさん以外に謝罪はおろか言葉をかけられることすらなかった。

なのに今さらこんなパフォーマンスをされたって、遊ばれているようにしか感じない。

ダンジョン内でのセイレーンさんとのやり取りを思い出す。

メルチエさんに言われて初めて謝った彼女は、無邪気でまるで小さな子供のようにだった。

彼らもおんなじなのかもしれない。

途中から慌てることをやめ、じっと彼らを見下ろしたわたしに何を思ったのか、コジマさんが声をかけてくる。

「俺からももう一度謝罪させてくれ。

こいつらを止められなくて本当に済まなかった」

さすがに土下座はしなかったけれど、立ち上がって深く頭を下げるコジマさんに苦々しい気持ちが沸き上がる。

よってたかつてそんなことされたら、もういいよって言うしかない。

ここで怒れるほど、胆の座った人間じゃないのだ。

「ええと、みなさん顔を上げてください。

もう済んだことですし、気にしてませんから。

助けに来ていただいてありがとうございます」

複雑な気持ちを押し殺して、にっこり笑ってからこちらからも頭を下げると、嬉しげに笑って顔を上げる四人組の姿が目に入った。

やっぱり、と自分の推測が外れていなかったことを確信し、肩の力を抜く。

きつと腹を立てても無駄なのだろう。

釈然としない気持ちは消えないものの、そういう人たちなのだと諦めた。

四人組はもう既に立ち尽くすわたしをよそに、コジマさんへと興味を移してしまっている。

ゆっくり腰を下ろしながら、始まった次の茶番をぼんやりと眺めた。

「平気か？」

眉を寄せ小声でわたしを気遣う様子を見せるキーチくんは、ささくれた気持ちが少し穏やかになる。

大丈夫だと笑ってみせると、舌打ちをしてそっぽを向いてしまったけれど、その気持ちが有り難かった。

「オヒトヨシ様、ああ、コジマのことね。

あれの周りはいっつもこんな感じ。

オカシイでしょ？」

耳元で囁かれた声にびくりとして振り返ると、妖しい笑みを浮かべた七海さんがそこにはいた。

「狐と狸には気をつけてね。

可愛い七海ちゃんからのア・ド・バ・イ・スっ！」

いつの間にかコジマさんと四人組の間に立って取りなしているシオリさんとギルさんへ曰くありげな視線を投げ眩いた後、七海さんは素知らぬ顔でわたしから離れていった。

しばらくして話はずいたらしく、フェアリーの少年が嬉しそうにコジマさんにぎゅっと抱き着き、メルチエさんに引き剥がされてはまた抱き着いてを繰り返していた。

シオリさんとギルさんは満足そうにそれを眺めている。
もうわたしがここにいる必要も無いように思える。

キーチくんを誘って退出しようかと思いついた頃、七海さんからかいかい混じりの声が飛んだ。

「ねえねえ、まだ続けるなら七海、シトロン連れてっちゃんよ？
いいよねー？」

その言葉でシオリさんとギルさんが弾かれたように動き出し、素早くわたしと七海さんの間に立つ。

「玩具にされるのが分かってて連れていかせる訳が無いだろ」

ギルさんが険しい声で七海さんに応戦し、シオリさんが小さく「めんねとわたしに謝った。」

きつとさっきの茶番劇の前なら普通に頼もしく感じただろうその行動がなんだか白々しく見えてしまい、その事実になんか少し落ち込んだ。そこまでわたしはやさぐれているのかと情けなくなってしまう。

「ただどうして、と思わずにはいられない。」

コジマさんたちの仲直りまでの一連の流れに二人が関わっているのはきつと間違いない。

四人組の土下座まで二人が考えたとは思いたくないけれど、何にも言わなかったってことはわたしにはそれで十分だと思ってることじゃないだろうか。

「今までのやり取りでそう判断されてしまったなら、わたしも悪かったのだからうけど少し悲しい。」

「すまないがもう少し居てもらいたい。

一人で過ごさざるを得なかった日々に対する補償をさせてほしい」

コジマさんにそう言われて、七海さんはあっさり引いた。

別に必要ないとオブラートに包んで辞退したものの、遠慮していると受け取られ、メルチェさんにまで押しきられそうになる。

このままでは不味いと、心を奮い立たせて今度ははっきりと知らないと言った。

「隠し部屋で作れたものもありますし、補償して頂くほど酷い毎日だった訳じゃないです。

それに、いろいろしてもらったら、これからのプレイが楽しくならなさそうですし。」

お気持ちはありがたいんですが、それだけで十分です」

少し強めの口調できっぱり言い切る。

さすがにこれは譲れない。

わたしがこつ強気に出ると思ってなかったのが、シオリさんとギルさんまでも驚いたようにこちらを見た。

「えー、せっかくだからギルド入るーよ！
こおちゃん入れてくれるってゆってるし。
ソロプレイは大変だよ。」

あ、ボクたちもスキルレベル上げるのも手伝ったげる！」

フェアリーの少年がコジマさんの背中から顔だけを覗かせ、無邪気にそんなことを言い出した。

補償の内容は驚くことに、ギルドへの加入だったらしい。

どこが補償なんだと呆れていると、シオリさんとギルさんが慌ててフォローを入れ始めた。

「えっとね、シロちゃん。」

コジマの『さんぷらんしすこ』、加入するのすつごく難しいのっ。

普通はね、いくらコジマが連れて来た人間でも同盟のギルドに入るのが当たり前なんだよっ」

「そうそう、こんなチャンス滅多にないぞ？」

『さんぷらんしすこ』のメンバーってだけで余計な揉め事に巻き込まれなくなるし、守ってだってもらえる。

有名になったシロちゃんには、これ以上ない場所だと思う」

二人はわたしがギルドに参加することに賛成なようで、あれこれ言葉を変えて必死に説き伏せようとしてくる。

しかしいくら言われても、これだけはわたしの譲れない部分なのだ。

「『さんぶんしすこ』が嫌なら七海のとこおいでよー。
おつきくないし助け合いもしないけど、楽しいよっ！」

途中七海さんも加わってきたが、その提案も遠慮する。

じゃあ仕方ないねとあっさりと言葉を引つ込めた七海さんに笑ってお礼を言ったせいか、シオリさんたちもようやく口をつぐんでくれたけれど、残念そうな顔でこちらを見ている。

「本人が嫌だっつってるんだから仕方ないでしょ」

素っ気なく呟いたメルチエさんの言葉で、更に何か言おうとしていたフェアリーの少年も口を閉じる。

これでひとまずギルド入りは回避出来たようだ。

メルチエさんの思惑がどこにあるかと、助けて貰ったことには変わりない。

ぱちりと目が合い苦虫を噛み潰したような表情になったメルチエさんに、苦笑いして軽く頭を下げた。

称号は曲者

しばらく部屋の中に気まずい沈黙が流れた。

居心地が悪くなり、さつさと部屋を出ようと腰を浮かしかける。

しかしぱつと顔を輝かせたフェアリーの少年に、行動を遮られてしまう。

「じゃあじゃあ、せめて一緒にパーティー組んで遊ぼうよ、こおちやんも一緒にっ！」

たまーにでいいから、ね？」

パタパタと駆けよってきて、膝をついて腕の袖を掴み、上目遣いでこちらを見る少年にどうしたものかと困ってしまう。

この子は本当は女の子なんじゃないかな、と関係無いことを思いながら、慎重に言葉を選んで断りの言葉を述べる。

それを聞いた少年は、悲しそうな顔をして俯きか細い声で呟いた。

「やっぱり許してくれないんだ、ボクたちのこと」

しょんぼり縮こまって肩を震わせる少年の姿に、自分がもの凄く酷い仕打ちをしたような気分になる。

しかしちゃんと理由を説明しようとして口を開いたものの、またしてもそれは遮られた。

「あつたりまえじゃーん、七海あんな謝り方されたらせえつたいに許さないもん。」

ほーんと『さんぶんしすこ』のトップ様は甘いんだからあ」

きゃっきゃつと楽しげに喋る七海さんに、コジマさんが素早く反応して表情を曇らせ、また頭を下げそうになったので慌ててシオリさんたちと共に止めに入る。

見当外れの言葉では無いのだが、今そんな援護射撃は欲しくなかった。

つい恨みがましくじとつとした目で七海さんを見ると、にやにやとあまり趣味の良くない笑顔を浮かべてわたしを見ていた。

場を引つ掻き回すのが趣味だと言ったシオリさんの言葉は正しかったらしい。

厄介な人たちばかりだと頭が痛くなったが、とりあえずコジマさんたちの誤解を解くべく再度口を開く。

今度は誰にも遮られなかった。

「ええと、わたし、パーティー組んだ人のステータスが70%も減っちゃう称号持つてるんです。

だから許してないとかじゃなくって、パーティー組む気が無いんです、すみません」

建前と嘘をちよっぴり混ぜつつ説明し、ぺこりと頭を下げる。

なあんだ、じゃあしょうがないね、と残念そうに呟く少年に薄く微笑みかけながら、さりげなくその手を袖から外す。

「えー残念だよっつ。」

さっと近づいてきてわたしに抱き着いたシオリさんの言葉に曖昧に笑ってみせた。

「ゴジマさんとメルチェさんが何やら相談しているのを眺めていると、シオリさんが閃いたとばかりに明るいう声である提案をしてきた。

「じゃ、パーティー組まなきゃいいんだよねっ。

パーティー組まないでも普通に一緒に遊べ……ば……ちよ、キー
チっ！」

しかし突如として目の前に開いた画面に、シオリさんの言葉は途切れてしまう。

プレイヤー：キーチからパーティー申請が届いています。
受理しますか？ YES or NO

驚いて振り返ると、そこには顔を赤くしながらもきつと強い視線でわたしを見ているキーチくんがいた。

「えと、キーチくん？
パーティー組んだらキーチくん弱くなっちゃうし、いいことないよ？」

パーティー申請の画面はわたし以外にも見えてしまっているようで、部屋中の人間の視線を感じながらも小さな声でキーチくんを探ねる。

一人でこそそ狩りをするしか無いと思っていたので、気持ちは嬉しい。

だけどそこまですてもらおう義理が無い。

「そうだよキーチっ！

シロちゃんの話聞いてなかったのっ？

困らせるようなことしちゃだめっ！」

シオリさんが珍しく声を荒げキーチくんに詰め寄った。
いつの間にか近づいてきたギルさんもそれに加わる。

しかしキーチくんはそんなわたしたちの言葉を一蹴してしまった。

「っせえ、そんならいどうってことねえし。
と、友達だったら、協力すんのは当たり前前だろっ、友達だったら
っ！」

二回も友達だと叫んだキーチくんは、ほわりと気持ちが暖かくなる。

本当に、不器用でいい人だ。

それが分かるからこそ、これ以上迷惑はかけたくない。

シオリさんとギルさんはまだキーチくんに苦言を呈している。

ぎつと眉を吊り上げているシオリさんのその表情が少し怖い。

ギルさんはシオリさんをたしなめつつも、キーチくんへの文句を止めようとはしない。

他の人たちはそんな様子を黙って見守っており、わたしが二人を止めなければと焦る。

早く選んでこの場を収めようと、急いで画面に手を伸ばした。

しかしNOを選ぶとしたその手は、後ろからやんわり止められてしまう。

「シオリちゃん、シトロン怖がってるよお？」

手を握ったまま七海さんがくすくす笑いながら声をかけると、はつとした様子でシオリさんとギルさんはキーチくんから離れ、七海さんからわたしを引き離そうと手を伸ばしてくる。

しかし七海さんはそれをひらりとかわし、掴んだわたしの手をキーチくんの手を重ね、何か書かれた紙をぐるぐると素早く重なった手に巻き付けた。

「キー坊の頑張りにい、感動しちゃった七海からプレゼント！
シトロン、また」

そこで七海さんの声は途切れる。

どうしたのかと振り返れば、そこには七海さんもシオリさんたちも居なかった。

代わりに目に飛び込んできたのは、幾つもの建物に満天の星空。

「へ？」

そう、わたしとキーチくんはいつの間にか見知らぬ街に立ち尽くしていたのだ。

明らかに先ほどまで居た街とは違う。

一体何が起こったのかと混乱するわたしとは裏腹に、すぐに何かを察知したらしいキーチくんが小声でぶつぶつと悪態をついている。

「き、キーチくん？」

戸惑ったままキーチくんの名前を呼ぶと、キーチくんはしかめ面
でくいつと顎をしゃくった。

その先にあるのは、開いたままのパーティー申請画面。

困って視線で難色を示すと、キーチくんはゆっくり頭を振った。

「いきなり70%なんて嘘だろ。」

二人パーティーでそんなに減る訳がねえ。

パーティーだと支援魔法とかタゲ取りとか便利なことが増えんだ
よ。

あー面倒くせえっ！

後で説明するからとつと承諾しとけっ！」

最後はがしがし頭を掻きながらもどかしそうに叫ぶキーチくんの勢いに押され、ついぼちつとYESを選んでしまった。

これで良かったのかと思わないでもなかったが、酷く満足そうに頷いたキーチくんの笑顔に、そんな気持ちは一瞬でどこかへ飛んでいってしまった。

「改めてよろしくね、キーチくん。
えええつと、それで、ここは？」

辺りをぐるっと見回してもう一度ここが知らない場所だと確認してから、心当たりのありそうなキーチくんに聞いてみる。

キーチくんは忌々しげに舌打ちをした後、一つの店を指差した。

「あそこで説明する。

面倒な横槍入んねえように通信切つとけ」

ぶつきらぼつに吐き捨ててさつさと歩き出したその背中を慌てて追いながら、メニューを開く。

隠し部屋では見えていなかった項目が増えていることに驚いたが、設定を開き片っ端から機能をオフにしていた。

「あ、ねえ、連絡つかなかったらシオリさんたち心配しないかな？」

途中でそれが気にかかり、声をかける。

キーチくんは足を止めて振り返り、むっと眉を寄せて首を振った。

「七海がある程度説明してるだろ。」

「っつーかお前、腹立たねえのかよ。」

「あいつらのお膳立てによ。」

ぶすつと機嫌の悪い声で逆に尋ねてきたキーチくんは、わたしは少し考えて素直な気持ち告げる。

「んー、感謝してるよ、助けてもらったし、いろいろしてもらったし。」

でも良く考えたらなんか、ちょっと変だったよね、全部」

思い出して改めて気づく不自然さにくすりと笑うと、キーチくんは呆れ顔で肩を竦めた。

その大人びた仕草が見た目が少年のキーチくんに似合っていないなくて、堪えきれず嘔き出してしまう。

そんな様子をギョツとして見ていたキーチくんだったが、やがて諦めたようにひとつため息をついてゆっくり店へと歩いていき、わたしもそれに続いた。

閑話・狐と狸と道化師

「七海ちゃん、どういつつもりなのかな？」

シトロネラとキーチの二人が消えた部屋、シオリーナの静かな声が響く。

表情はこっそり抜け落ち、瞳だけが七海をぎらりと強い視線で捉えている。

「あははっ、何か都合悪かったあ？」

しかし七海は怯んだ風もなく、わざとシオリーナを挑発するような言葉を選ぶ。

一瞬ぎりつと悔しげに顔を歪ませたシオリーナは、すぐに平静を取り戻し、大きなため息をつく。

そして部屋中の人間に見せつけるかのように、眉を寄せて弱々しく七海を非難し出した。

「酷いよ七海ちゃん、シロちゃんやっと思し部屋から出てきたことなんだよ。」

なのにいきなりどこかに飛ばしちゃうなんて、悪ふざけしすぎだよ。

ね、ギルもコジマもレオくんたちも、そう思うよねっ?」

そこで一旦七海から視線を外しぐるりと部屋を見回すと、何人もが頷く姿が目に入る。

「シオリ、駄目だ、シロちゃんにもキーチにも繋がらない」

七海を責めるシオリーナの後ろで消えた二人と連絡をつけようとしていたギギアルが、難しい顔で首を横に振った。

コジマも同じだったようで、僅かに肩を落としていた。

その隣で慰めの言葉をかけているメルチェに気付いた七海が、にやにやと嗜虐的な笑みを浮かべた。

「丸三日追跡通信不可になる脱出札だから無駄だろう。
ほらほら、ずつつと前にストーカー対策用に作られたやつ。
ってゆーかあ、メルたんは知ってたよねえ？」

急に矛先を向けられて、メルチエはぴくりと肩を震わせた。

「どづいことだ」

反論もせずむっつり不機嫌そうに黙り込んだメルチエだったが、
コジマに険しい顔で問われると、微かに俯きあつさりとその思惑を
白状する。

「考えてもごらん、自分を浚った相手と、その顔見知りにもまれて、
ギルドにまで勧誘されて嬉しいかい？」

コジマは気にせず許しちゃうだろうけど、あたしは絶対やだよ。

だから頃合を見て逃してやるってその問題児が言うから、乗っ
たんだ。

まさかこんな方法だとは思ってもみなかったけどね」

かぶりを振って力なく肩を落としたメルチエに、コジマはそれ以
上の追求はしなかった。

ただ黙って彼女の頭をぽんぽんと優しく叩き、何か言いかけたシ
オリーナとギギアルに頭を下げた。

「すまない、俺が焦って周りが見えていなかったせいだ。
あまりメルチエを責めないでやってくれ」

その姿に二人はしぶしぶ口を閉じる。

そして改めて七海に対し、メルチエに対しての文句が不発に終わ
った鬱憤を晴らすように、ねちねちと遠回しな嫌みを
投げかける。

「何で七海ちゃんは言ってくれなかったの？」

あたしたちは中立だしシロちゃんの味方なのになあ」

「ああ、せめて俺たちも一緒に飛ばしてくればよかったのに。
キーチじゃ少し心配だ」

代わる代わる不満を口にするシオリーナとギギアルの言葉をにこにこ笑いながら聞いていた七海は、途中でくるりと身体の向きを変えた。

そして他人事のようにぼんやり成り行きを眺めつつ、四人でこそこそ何やら笑い合っている『愉快犯』のメンバーのうちの一人、セイレーンをびしっと指差した。

「はい、セイたん、七海からの質問ですっ！

シトロンが一番なついていたのは誰でしょうかっ？」

突如話を振られたセイレーンは驚いて目をぱちぱちさせていたが、しばらく考え込む。

「はあい七海せんせ。

キーチくんとシオリーナちゃんとキギアルくんだと思いまあす」

右手をびしつと耳にあたるように挙げてセイレーンが答えるも、

七海は首を横に振る。

同じように残りの三人にも訊ねていくが、誰も正解を貰うことは出来ず、珍しく七海が心底呆れたような表情を浮かべた。

「えーってかちよつと見てたらずぐ分かるのにい、七海信じらんない。

謝ったらシトロンに興味無くなっちゃったの？

んふふ、ねえコジコジ、この子たち全っ然反省してないっぽいよ」？

最後はにやりと笑ってコジマに視線をやると、彼は頭を抱えてため息をつき、まだ問題ばかりの彼らと向き合っって何やら小言を言い始めた。

四人組はしゅんと顔を俯かせて大人しくそれを聞いている。

メルチエはそんなコジマを、やれやれと呆れながらも、優しい顔で見守っていた。

完全に注意の逸れたコジマたちを余所に、七海は更に話を進める。

「シトロンは完全にキー坊しか信用してないっぽかったよ。」

あの子たちのパフォーマンスの後にシトロンのフォーローに回らなかったのは痛かったねえ。

売り込みに必死にな・り・す・ぎっ！

んふふ、ざあんねん、詰めが甘かったねえ」

二人しか聞いてないからだろう。

七海はわざと思惑を炙り出すような言い回しをもって二人をからかう。

ひくりと顔をひきつらせたシオリーナだったが、すぐになっこり笑ってみせた。

「七海ちゃんが何言ってるのか全然わかんないけど、有り難い忠告として受け取っとくねっ！」

にこにこ笑顔で見つめ合う二人から、うすら寒いものが流れる。ギギアルは少し顔をしかめてその様子を眺めた後、何気ない風を装って一つの心配を口にした。

「で、今回のことはやっぱり記事になるのかな？
シロちゃんのためにも遠慮しておいて欲しいんだけどな」

別に自分は一向に構わないけれど、とでも言いたげな口調に、七海はわざとらしく首を傾げてみせる。

「狐ちゃんと狸くんがしばらくシトロンたちにちょっかいかけないなら考えてもいいよ？」

具体的にはあ、そだなあ、七海がはるたんとシトロンを引き合わせるまで。

ほら、シトロンのためにもね？」

うふふと含み笑いする七海をしばらくじっと見つめた後、キギア
ルはため息をひとつついて頷いた。

「分かった、だけど勿論連絡はとるよ?」

いいよね、と笑って念を押ししたギギアルに、七海はウインクを寄越し、ちよっかいかけなきや会ってもいいよ、と含みのある言葉を囁いて頷いた。

「じゃ、七海はこれで帰るから、あつちは狸くんたちにあげちゃうつ。

あーん七海優しいっ!」

けらけらと楽しげに笑いながら軽やかな足取りで部屋を出ていくその背中を、二人は悔しげな表情で睨み付けた。

「甘かったわね」

「ああ、キーチの行動が予想外過ぎた」

低い声で互いの認識を交換し合う。

七海だけならまだ何とかなつたかもしれない。

しかしキーチがあんなにシトロネラに拘るとは思っていなかった。足止めをすれば言動に似合わず臆病なキーチのこと、後から一人で乗り込んでくることは無いだろうと、例え来たとしても緊張して口々に喋ることも出来ないだろうとタカをくくっていたからこそ、あんな仲直りを優先させた謝罪パフォーマンスを提案したのだ。

それがこつも崩されてしまつとは、二人とも想像だにしていなかった。

「とりあえず、あつちに食い込むわよ」

「了解、シロちゃんとは繋がりを維持するだけでいいよな」

「ん、隙を見て取り込も。」

何となくだけどあの子、まだまだいろいろ釣り上げてくれそうだもん」

手早く反省会を済ませ、まだ揉めているコジマたちの元へと向かう。

明らかに二人の思惑を見抜いた上で、わざと彼らを揉めさせてか

ら去っていった七海に、それぞれ苦い気持ちを抱いた。

「次は絶対、負けないんだから」

この場を辞してしまった少女にむけてぼそりと呟いてから、シオリーナたちはとびきりの笑顔で双方の間に滑りこんだ。

待ちに待った食事

ごちんまりしたその店の中は、がらんとしていて、わたしたち以外の客は居なかった。

それどころか店員の姿すら見えず、面食らってしまう。

四人掛けのテーブルが三つ置かれていたがそれだけで、厨房らしき物も見当たらない。

店で話をすると言われたので、てっきり食堂か酒場なのだろうと思いきりこんでいた。

密かに食事がとれると楽しみにしていたので、少しがっかりしながら、机を挟んでキーチくんの斜め前に腰を下ろす。

するとキーチくんは机をトントンと叩き、目の前に画面を出現させ、私にもやってみるよう視線で促してきた。

訳も分からず、見よう見まねで同じように机を叩く。

「おお、メニューだ」

そして現れた画面には、食べ物の名前がずらりと並んでいた。

ゲーム開始直後からデフォルトで持っている500Gではとてガルも

手が出そうにない値段の料理が、画面いっぱいに並んでいて思わず腰が引けてしまう。

しかし下の方へ視線を移すと、30G前後のお手軽な値段のものも幾つかあることに気づいてほっとする。

どれにしようかしばらく悩んでから105G分、三品の食事を頼むことにした。

ぼちぼちと画面を操作して支払いを終えると、間を置かずさっと机の上に注文したものが現れる。

こんな仕組みなんだと感心していると、キーチくんが驚いたようにこちらを見ていることに気付いた。

わたしもキーチくんの方を見て、目を丸くしてしまう。

キーチくんの前にあるのは、コーヒーマ杯だけ。

対してわたしは、料理の乗った皿が三枚。

明らかに何か勘違いしている自分に、一気に顔が赤くなるのを感じた。

「あ、あはは、何か口にするの、久しぶりだから、つい。

そ、そうだよ、食べながら話ってたよだね」

恥ずかしくなって取り繕うように笑うと、キーチくんは黙って再びメニューを開き、わたしに合わせていくつか料理を追加してくれた。

気をつかわせてしまったようだ。

話が終わってから頼むべきだったとがっくり肩を落として反省す

るわたしを余所に、キーチくんは一人でさっさと食事を始めた。

「んだよ、食べよ」

一口食べてから、まだ手をつけてないわたしをちらりと見てそう
言ってくれる。

本当に何から何まで迷惑をかけたばなしである。

申し訳なく思いつつも、その心配りに感謝して、そっとフォーク
を手に取った。

「うん、ありがとう、いただきます」

まず口に運んだのはスクランブルエッグ。

口一杯に何かが広がったが、久しく食事をしていなかったせいか、
刺激が強すぎてくらくらしてしまった。

鼻がつんとして、思わず涙が出そうになったが、ぐっと堪える。

二口目からは普通に味が分かった。

優しい卵の味がする。

卵そのものの甘さとほんのに漂うバターの香りを楽しみながら、ゆっくり何度も噛み締めた。

長い間食事を取っていないのに、すぐに普通に食べることが出来るようなところは、やっぱりゲームなんだなと感心しつつ、夢中で料理を口に運んでいく。

安いだけあって一皿の量は少なく、たった五口でスクランブルエッグを平らげてしまい、少々のもので足りなさを感じながら次の皿に取りかかる。

次はポテトサラダだ。

これも非常に少量だったので、より楽しめるよう一回に口に運ぶ量を少なめにした。

ジャガイモとニンジンだけの非常にシンプルなものだったが、私の好みのジャガイモの形を残さず綺麗に潰したタイプだったのが嬉しい。

しつとりなめらかなジャガイモの舌触りと、柔らかいながらも噛むと伝わるニンジンのほんのりとした甘さと食感にうっとりする。舌を転がして口内のあらゆる場所でその味を楽しみ、ふんつと鼻で息をして抜けていく香りをスパイスに、よりその味を引き立たせる。

なんて美味しいんだろうとうっとり幸福感に包まれたまま最後の一口まで味わい、ほうとため息をついた。

さあ次だとまた張り切ってフォークを握り直したところで、はっ

と気づいて斜め前のキーチくんを目をやる。

食事に夢中になりすぎて、すっかりキーチくんのことを意識の外に飛ばしてしまっていた。

見ればキーチくんは既に食事を終えており、黙ってわたしが食べ終わるのを待っていてくれている。

「い、ごめんねキーチくんっ!」

慌てて皿を横にどかし、机ギリギリまで頭を近づけて謝った。

せっかく話をするべく連れてきてくれたのに、とんだ醜態を晒してしまった。

あろうことが一緒に居ることを忘れてしまうなんて、失礼にも程がある。

しかしキーチくんは怒るところか、文句を言おうともせず、むしろ可笑しそうに明るく笑った。

「はははっ、んなに美味しいのかよ。

いいぜ、ゆっくり食べよ。

俺もそれ食べたくなっただし」

その笑い声に驚いて、がばっと顔を上げた。

照れずに声をあげて笑うキーチくんなんて初めて見た。

何とも新鮮で、ついまじまじと見つめてしまった。

言葉通りポテトサラダとスクランブルエッグを注文したキーチくんは、そんなわたしに気づき訝しげな顔をする。

慌てて視線を逸らし、キーチくんの頼んだ料理が気になっている風を装った。

「それどっちもすっごく美味しかったよ」

誤魔化すようにそう言えば、キーチくんはふんと鼻をならして小さく笑う。

「お前が食うの見てりゃ分かる」

そう言ってさっさと食べ始めたので、私も話をやめて食事を再開

することにした。

残るはソーセージ二本だけだ。

プスリとフォークを突き刺して口に運び、一気にかじりつく。

ぷちりと外側の皮が弾けると同時にじゅわりと肉汁が溢れ、豚肉とハーブの味が口に広がり、とけた脂が舌に絡む。

待たせないようにさっさと食べてしまおうと思っていたのに、飲み込んでしまうのが勿体なくて、殆ど形が無くなるまで噛み続けたので、結局はたった一口にかなりの時間をかけてしまった。

二口目からは、もう少し余裕を持って味わい、そこそこ楽しんだ後すぐに飲み込んだ。

多少の形を残していたため、飲み込む際に喉の奥でより味わうことが出来た。

二本目もしっかりと楽しんでから、未練がましく留めていた最後の一口をごくんと飲み込み、はああと感嘆の息を吐いた。

「すごいね、このゲーム。

こんなにリアルに味覚が再現されてるなんて。

ああ幸せ、ごちそうさまでした」

丁度同じく食事を終えたキーチくんは、そのまま感動を伝えるとまた笑われてしまった。

「変なところに拘ってるからな。
けどこれでそんなに感動するやつも珍しいぞ。
料理スキルで作ったやつはもつと美味いぜ」

その言葉に思わず目を輝かせる。

「この料理も十分美味しかったのに、それ以上があるというのである。」

誰かが作ったものをフリマなどで手に入れることは出来るだろうが、ここは是非とも自分で取得したい。

現実での料理の腕はさほどでは無いが、スキルならばレベルを上げればより美味しく作れるようもなるのだろうか。

それは何とも魅力的だった。

すっかり意識をそちらへと向けてしまったが、キーチくんという言葉で正気にかえる。

「じゃ、何から説明すつかな」

コーヒー啜りぼそりと呟いたキーチくんは、しばらく考え込んだ後に、がしがしと頭を掻いて頬を赤くし、ぷるぷると頭を振る。

「一体何を考えているのか気にはなつたが、ちよつと面白かつたの

で、声をかけるのはやめて黙ってその様子を眺めることにした。

危なっかしい人

「こんなどこにきたのは多分、転送アイテム使われたからだ。
あいつ、七海ってやつが何考えたかは分かんねえけど、お前にと
ってはラッキーだったと思う」

やがて口を開いたキーチくんの言葉を聞きながら、七海さんの行
動を思い返す。

みんな警戒していたしそれを分かった上でおちよくってもいたが、
そこまでの不快感は無かった。

それはおそらくターゲットが私じゃなかったからだろう。

「あー、聞いているかもしんねえけど、このイベント、一週間過ぎ
たくらいから、飽きて抜けるやつ増えてくんの。
いいタイミングでこの街に避難出来たな」

いきなりぽんと飛躍した話に、つい首を傾げてしまう。さすがにそれから全てを察せるほど、賢くもないし知識も無い。キーチくんもそう思ったのか、詳しく補足してくれた。

「狩り場はさすがに分かるよな。

人が減ると、空いた人気の狩り場に移動するやつが増えんだよ。

で、その近くの街に拠点置くやつが増えて、プレイヤーが全然いねえ街が増える。

ここはいねえ方の街だ。

正直拠点にするには微妙、でもお前無駄に知名度上がってるし、最初の街だと絡まれてゲームどころじゃねえだろ。

だからラツキーってこと」

間を置かず一気に喋るキーチくんは少し早口で、ついていくのに必死だったが、一応の事情は飲み込めた。

きつとそれだけじゃなく、あのままじゃ事あるごとにコジマさんや誘拐犯の人たちに接触されて、目立つことになっていた気もする。そういえばとセイレーンさん以外の誘拐犯の人たちは名乗りもしなかったことを思い出し、今更ながらむっとうとしてしまう。

しかしキーチくんが再び説明を再開したので、そちらへ集中した。

「普通は最初の街でチュートリアル受けて自分に会った武器選ぶんだけどこの街では無理。」

ま、まあ、仕方ねえから、お、俺が代わりに見てやるよ。
あ、ありがたく思え！」

途中からしどろもどろになりぎつと私を睨み付けながらも、そう
言ってくれるキーチくんの気持ちはとても嬉しかった。
しかし本当にそこまでしてもらっていいのだろうか。
明らかに甘えすぎている。

「あのね、キーチくん、パーティーのことなんだけど」

やっぱりよろしくないと思い、パーティーを解散しようと言いか
けたが、一瞬だけキーチくんの瞳が弱々しく揺れた。

それにどきりとしてしまい続くはずの言葉を発するのを躊躇って
いると、不機嫌に顔をしかめ、しかしどこか拗ねた風にキーチくん
がぼそりと呟いた。

「んだよ、今更やだとか言うつもりかよ。
俺じゃ頼りねえってのか、ふん」

刺々しい言い方だったがどこか気落ちしている様子に、すっかり焦ってしまったわたしは、提案するはずだったパーティー解散の代わりに、全く別のことを口にした。

「ええっと、そうじゃなくて。

ステータス、そうそうステータスがね、パーティー組んでどうなつたか聞きたくって！

あ、わたしも確認するね」

取り繕うように早口で告げ、そのままメニュー画面を開き、こっそりキーチくんの方を伺った。

不自然すぎたかと思っただけ、キーチくんはそう思わなかったようで、ほっとした様子でいそいそとメニュー画面を確認していた。わたしが見ていないか、とでも分かりやすく嬉しそうに頬が緩んでいた。

ずっとプレイしているキーチくんは新米のわたしが思うのは筋違いかもしれないが、なんだかこの人はとても危なっかしい。

口調は乱暴だけど、妙に素直だしすぐ顔に出るから分かりやすいし、会って間もないわたしによくしてくれる。

こんな様子ではそのうち悪い人に騙されるんじゃないか、むしろもう騙されているんじゃないかと心配になってしまう。

迷惑をかけないように別行動しようと思ったけれど、もしかしたらそうしない方がいいかもしれない。

気づいてないみたいだけど、キーチくんも十分有名人になっていて、知らない人に絡まれる可能性が高いのだ。

行方不明の新人プレイヤーと一緒に消えたプレイヤーなんて話題性十分だ。

さすがに掲示板に晒されることはもう無いだろうが、コジマさんやシオリーナさんたちの口から事の詳細が漏れる可能性は少なくともいと思う。

失礼かもしれないけれど、誘拐犯の人たちなんて嬉々として喋りそうなイメージがわたしの中には出来てしまっている。

途中で飽きてログアウトする人がいるのなら尚の事、格好の暇つぶしの話になるだろう。

どう考えても上手くあしらえそうに無いキーチくんと、このまま別れてしまうのは不安すぎる。

「おい、減るところから5%増えてるぞ。
どういづことだ？」

密かにそんなことを考えていたら、訝しげな声をかけられ、慌てて自分のステータスを見る。

わたしのもものも5%上昇していることを確かめてから、称号の効果についての説明を最初から最後まで読み上げた。

キーチくんはそれを聞いてふんふんと頷いた後、わたしに説明するというよりも考えをまとめる風にはそぼそ呟いた。

「単純に考えると一人増えると25%減少か、狩り場選ばないとキツイな。

支援で20%は上げられるから、多くてもう一人、っつーとやっぱこの辺から移動しない方がいいか。

おい、どのステータスが高い？」

開きっぱなしだった画面を閉じながら、器用が抜きん出ていることを伝えようと、再びぶつぶつと呟き出す。

どうやらキーチくんなりにわたしのチュートリアルプログラムを考えてくれているようだ。

器用で使えそうな武器というと、弓や銃が思い浮かぶ。

悪いなあと思いつつ、わたしは密かに決心していた。

思いきってその好意に甘えてしまおう。

その代わり、わたしが矢面に立つ。

わたしとキーチくんの二人が揃っていれば、興味本位で絡まれた時により注目されるのは、きっとわたしの方だ。

せめて絡まれる心配が無いと分かるまで、それくらいはさせてもらおう。

本心では一緒に行動したかったのだ。

必要だったのは、自分を納得させる言い訳だけ。

それなりの建前が出来たおかげで、罪悪感はなりを潜めた。

あれこれ考えたてみても結局は、キーチくとまだ離れたくない。

自分なりに気持ちに区切りがついてすっきりしたところで、真っ直ぐキーチくんを見つめる。

「よし、とりあえず武器屋行くぞ」

丁度考えがまとまったらしいキーチくと目が合い、立ち上がった。

て店の外へと歩いていくその後を追う。

外に出ると、既に夜明けが近いようで、うつすらと空が明るみ始めていることに気づいた。

地平線が明るく染まる様子にうつとり見とれてしまい、キーチくんは遠くから呼ばれて我にかえる。

「朝焼け、綺麗だね」

駆け足で追いついてそう伝えれば、キーチくんはきょとんとした顔で足を止め、地平線へと目をやった。

懐かしそうに目を細め、口元を綻ばせる。

「だよな、やっぱりいいよな」

うんうんと何度も頷くキーチくんは嬉しそうだった。

そのまま朝日が完全に昇ってしまうまで、黙って地平線を眺める。現実ではなかなかお目にかかれない光景にしばらく心奪われていたが、どちらともなく視線を合わせ、なんとなく視線をで会話し、そのまま武器屋へと歩き出した。

武器を買う

武器屋に足を踏み入れると、壁に飾られた様々な武器が目飛び込んできた。

しかし、相変わらず店員らしき人影は見えない。

キーチくんは構わず壁から武器を取り外していつている。

どこもこんな風に無人販売の形をとっているのだろうか。

NPCがどんな反応をするのか少し楽しみにしていたわたしは、がっかりしながらもキーチくんが勧めてくれた武器を構えてみた。

やはり予想通り、キーチくんが選んだのは弓と銃に偏っていた。あとは鋼糸なんて武器もあるようだ。が、初心者には難しいらしい。銃の方が扱いは簡単そうだったが、どちらかといえば弓の方がしっくりくる。

しかし途中でふと気になることがあり、構えた弓を下ろしながらキーチくんを尋ねた。

「キーチくんはさ、どんな武器を使うの？」

見たところ何の武器も装備していないキーチくんだが、もしも前衛でないならばわたしがそれを務める必要がある。

二人とも後衛だとバランスが悪い。

「基本は魔法だな、これが武器みたいなもん」

そう言ってぐいとつき出したキーチくんの指には、シンプルな指輪が嵌まっていた。

華奢なデザインのそれは、どう見ても敵を殴るためのものでは無さそうだ。

「じゃあさ、わたし前衛向きの武器がいいな」

弓を壁に戻しつつそう言えば、キーチくんの肩がギョッと寄せられる。

別に器用が必要な武器じゃなくても構わないと付け加えるが、キイチくんはゆっくり首を振った。

「別に、前衛居なくても街の近くなら何とかなる。
余計な氣い使うんじゃないよ」

むすつと不機嫌そうな顔をしながら、戻した弓を再び取ってわたしの方に差し出してくる。
しかし受け取る訳にはいかない。

「キイチくんが嫌じゃ無いなら、これからも一緒に遊べる武器がいんだ。
駄目かな？」

こんな聞き方をしたら、優しいキイチくんはまず断れないだろう。
ずるいと思いながらも、訂正はしない。

案の定、キイチくんはうっと言葉に詰まった後、渋々ながらも別の武器を選び始める。

「ごめんね、とその背中に呟いたが、その言葉が届くことは無かった。

やがてキーチくんが簡単な説明と共に手渡してくれたのは、小さなヨーヨーと扱いが難しいと言っていた鋼系だった。

鋼系で攻撃する方法はイメージしにくかったので、ヨーヨーを指に嵌めて、試しに前方に向かって投げてみる。

元々得意という訳でもないのに、投げた後はきちんと手元に戻ってきた。

何度試しても、投げた後に手を引く動作をしなくても、ちゃんと戻ってくる。

これならわたしでも使えそうだ。

「本当にそれにすんのか。
微妙だぞ、使うやつ少ないからフリマにもそんなに売回ってないし」

ヨーヨーを握りしめたわたしに、キーチくんが眉をひそめて問いかけてくる。

しかし、変えるつもりはない。

使用する人が少ないのは技があんまり格好よくないからで、使え

ない武器では無いと予め武器を渡す時に説明してくれたのはキーチくんだ。

格好の良さなんて、この際どうでもいい。

しばらくヨーヨーのマイナス要素について語っていたキーチくんだったが、わたしが気持ちを变える様子が無いのを見て、諦めたようにため息をついた。

「ごめんね、でもやっぱり、前衛やりたいんだ」

こちらを心配しての提案を断ったことと、先ほどキーチくんの性格につけこむような言い方をしたことに、多少の後ろめたさ覚え頭を下げる。

しかしちゃんと自分の意思も添えれば、キーチくんは仕方ないと薄く笑い、わたしからヨーヨーを受け取るうとした。

きよとんとしていると、再度手を伸ばしてくる。

「ほら、金ねえだろ。」

「買ってやるから寄越せ」

あつさり言われた内容にわたしは焦ってしまふ。
確かにお金は無い、しかしキーチくんにたかるのは気が引ける。
それならこの店で一番安いものを選びたい。
ギユツとヨーヨーを握り込んで慌てていると、不意にある存在の
ことを思い出した。

「ね、これ、売ってお金にならないかな」

魔物笛を一つ取り出し尋ねる。

お礼に渡そうと思っていたけれど、出すタイミングが無く、無駄
に場所を取っていたもの。

多分、タイミングがあつても、あの場ではけして渡すことがな
かったもの。

キーチくんはわたしからそれを受け取り、しげしげと眺めた後何
故か呆れたような顔になる。

「お前、これどうしたんだよ。」

店売りでもそこそこの値段で売れるし、フリマに出せばかなり儲
かるぞ、これ。

「まったく、んなもん作ってんならさっさと出てこいよ」

そのまま投げて寄越そうとしたので、手を後ろに回して受け取りを拒否する。

戸惑ったキーチくんに、へへっと笑ってみせた。

「あのね、それ、本当はお礼用に作ったの。」

まだあるから、キーチくんの一つ受け取ってもらいたいんだけど」

売れるアイテムなら、ゴミにはならないだろうし、邪魔なら売ってくれてもいい。

残りの魔物笛は売って資金にするとしても、キーチくんには、せめてもの気持ちとして渡しておきたかった。

「馬鹿、折角なんだから売れよ。」

売って金にしろ、礼なんて言ってるじゃねえ！」

ぎらりと目を光らせて声を荒げたキーチくんだったが、わたしが次々に魔物笛を取り出してみせ、一つだけだから受け取ってくれと懇願すると、まだぶつぶつ文句を言いながらもしまってくれた。

ほっとしながら、アイテム売買の方法を教えてもらう。

フリマで売り手側に立つにはスキルが必要で、キーチくんはそのスキルを持っていないらしいので、欲はかかずに魔物笛は全て店で売ってしまうことにした。

売り買いたいものを手にとり、ショップと呟けば画面が出ると聞き、ヨーヨーと魔物笛を持ったまま早速試してみた。

小さめの画面が目の前に現れ、品物と値段がそれぞれ表示される。手にしたもののだけでなく、店にあるものと自分の持ち物も全て一覧になっている。

こういう仕組みかとふんふん頷きながら操作する。

ヨーヨーは800G、手持ちの395Gでは半分にも満たない。

しかし魔物笛は50Gで買い取ってもらえるようだ。

ギリギリ足りたことに安堵し、ちゃんと払えるのかとやきもきしながらこちらを見守っているキーチくんの一つ頷いてから、魔物笛を全て売り払いヨーヨーを手に入れる資金にする。

売買完了の文字に触れると同時に消えた魔物笛に驚きつつ、手の中に残ったヨーヨーをしみじみと眺める。

プレイ十三日目にして、ようやく武器を手に入れることが出来た。

普通ならば初日でとつくに終えていたはずのことだ。

随分と時間がかかってしまったが、その分感慨もひとしおだ。

嬉しさについ、にやけてしまっていたらしい。

キーチくんが微妙な顔でこちらを見ていることに気づき、慌てて表情を引き締め、ヨーヨーをちゃんと装備する。

意識して装備すると、ヨーヨーは指輪へと姿を変え、右手の中指に収まった。

試しに投げるフリをしてみると、ヨーヨーが手の中からしゅんと現れて飛び出し、手の中に戻ると消えてしまう。

面白がって何度も繰り返していると、急に武器屋の扉が開く。

驚いて振り返るとそこには体格の良い髭のお兄さんが立っていて、ここにご笑いながらこちらを見ていた。

NPCの仕様

このお兄さんも武器を買いに来たのかと思い、軽く会釈して場所を譲ろうとしたが、お兄さんは扉の前から動こうとはしてくれない。にこにこ笑ったまま、こちらを見ているだけで、他の行動を取る様子も無い。

あの、と思いきって声をかけると、お兄さんでなくキーチくんから返事が来た。

「そいつ、武器屋のNPC。
多分武器屋に関することしか反応しねえ」

どいてろ、と腕を引かれ、大人しく後ろに下がる。
代わりに前に出たキーチくんとお兄さんのやり取りを、興味深く見守った。

「今日はいいい天気だな」

「……………」

「ヨーヨー、一つ貰ったぜ」

「おお、お客さん、ありがとう！

他にも何か買わないかい、お勧めがあるんだ」

そこで一旦言葉を切り、ちらりとこちらを向いて、どことなく得意気な顔をしてみせたキーチくんは笑って頷き、続いて為される入り口から退いて貰うための交渉に耳を傾ける。

おそらくわたしにNPCとの会話のコツを理解させるためだろう。いきなり本題には入らず遠回しに話を進め、お兄さんから返事が貰えないこともわざと交えつつ話してくれる。

そこを通してください、ということ伝えるためだけに、何往復ものやり取りが交わされた。

相手に伝わるように言い方を工夫するのはパズルのようで面白そうだが、想像していたNPCと随分違ったことに少しだけがっかりもした。

しばらくしてようやくお兄さんが動き出し店の中へと移動してから、ひらひらと手を振って店を出るわたしたちを見送ってくれた。

その動きは非常に滑らかで、さっきのやり取りが嘘のように人間

くさかった。

それだけに、あの機械的な受け答えがどうにも物足りなく、残念に思えてしまう。

「お店の店員さんって、みんなあんな感じ？」

ちらちらと後ろを振り返りながら、真っ直ぐ街の入口を目指すキイチくんに見ると、あっさり首を横に振られた。

「最初の街のNPCはもつとリアルで個性もあるぜ、NPC同士で勝手に交流始めちまうくらい。

あいつらはプレイヤーの話聞いて学習して、成長してくんだよ。この街は来るやつ少ねえからな、まだまだ発展途上って訳。

あの武器屋はまあまあ成長してる方だぜ、初期のやつは笑いもしねえ」

説明を聞いてよく考えられているなと感心すると同時に、小さな野望がむくりと顔をもたげてきた。

この街は少し寂しい。

鳥の声や木のざわめきは聞こえて来るけれど、人の声が足りない。わたしたちだけで劇的にこの街のNPCの成長を促すのは難しくうだけれど、せめて挨拶くらいはするように頑張ってほしい。

そのためにも、NPCらしき姿を見かけたらとりあえず声をかけてみることにしよう。

キーチくんの話しぶりからして、しばらくここを拠点とするのだろうか、しつこく話しかければ多少の成長は促せる気がした。

他にも急に店員さんが現れた理由を聞いてみた。

どうやら、どこの店も二十四時間開いてはいるのだが、店員さんが居る時間帯はそれぞれ決まっているのだとか。

武器屋なら朝の九時から夜の七時まで、昨日訪れたような食堂なら朝の八時から夜の十時まで、といった具合に。

店員さんを通さないと買えない物もあるようだが、基本的にどの時間帯でも品揃えにさほど代わりは無いようだ。

しかし店に居ない時はちゃんと家に帰っているようで、個性が出てくれば家族の話をしてくれるようになったり、入れない仕様になっているNPC用の家にお邪魔することが出来るようになる聞きわくわくしてしまっ。

時にはNPC同士で結婚したり、店の人間が親から息子へと代替わりすることもあると聞き、ますます野望が膨らんでいった。

そんな事を話しながら歩いていると、いつの間にか街の入口に着

いていた。

いよいよ初めての戦闘かと気持ちが高揚してきたものの、キーチくんはそこで足を止めてしまい、腕を組んで何か考えこんでいる。

問題でもあったのかとは思ったが、特に聞くことはせずその横顔を眺めながら、キーチくんが口を開くの待った。

やがてキーチくんはぱりぱりと頭を掻きながら、気まずそうな顔でわたしをちらっと見た。

「あのよ」

とても言いにくそうに、口を開いては閉じ、落ち着きなく視線をさ迷わせるのを見て、今度はこちらから水を向けてみる。

「どうしたの、何か問題でもあった？」

街の外へ視線をやり、それとなく外へ行かないか促すと、わたしと目を合わせないまま、小さな声でぼそぼそとキーチくんが喋り出した。

「考えたらお前、もう宿屋からログアウト出来んだよな。
勝手にいろいろしちまったけど、別にやめてもいいんだぞ。
あんな目にあったら続けたくねえって思っても仕方ねえし」

徐々に肩を落としながら、なんとも寂しげな口調でそんなことを言うので、微笑ましさについ頬が緩んでしまう。

わたしが仕方なくキーチくんに着いていつているように見えたのだろうか。

本当はもうゲームを止めたがっているように見えてしまったのだろうか。

もしそうなら、ちゃんと誤解は解いておかねばならない。

「あのねキーチくん、本当にどうしても嫌なことは、わたしちゃんと断るよ」

そう言えばキーチくんは、疑わしげにわたしを見据えた。
そんなに頼りなく見えてたのだろうかと苦笑いしかけたが、シオ

りさんたちにもそう思われていた節はある。

確かに押しには弱いし流されやすい。

だけど何もかも受け入れてしまえるほど、おおらかな人間でもないのだ。

「ほら、ギルドもパーティーも、断ったでしょ？」

あれ、称号のせいにしちゃったけど、断った一番の理由は嫌だったからだよ。

もし称号のことが無くても、何か理由見つけて断ってたと思う」

しかしここまで言っても、キーチくんは変わらず訝しげな様子でこちらを見ている。

暗にメッセージを込めたつもりだったんだけど、全く伝わらなかつたらしい。

さすがに言葉にするのは照れるのだが、言わなければキーチくんは疑ったままだろう。

背に腹は変えられないと、覚悟を決めて精一杯の気持ちを伝える。

「だから、キーチくんのパーティー申請受けたのは、嫌じゃなかったからだよ。

むしろすごく嬉しかった、一緒に遊べるの。」

なのに今更、ログアウトなんてしないよ。
折角これから楽しくなりそうなのに」

ここまで言えば流石に伝わったようだった。

キーチくんは勢いよくわたしから視線を外し、耳まで真っ赤にしてばっかじゃねえのとぶつぶつ悪態をついている。

しかし重ねて真意を問うてくるようなことはせず、せかせかと足早に歩き始めた。

「おら、さっさと行くぞっ」

乱暴な口調で怒鳴られたけど、まだ少し赤い顔のせいで照れ隠しにしか見えない。

笑ってしまつと機嫌を損ねてしまいそうだと、こぼれかけた笑い声を何とか抑え、近くにいた門番らしき人影に声をかける。

「行ってきますね」

返事はおろか視線も向けてもらえなかったが、最初はこんなものだろう。

いつか行つてらっしゃいって言わせてやる、と密かに闘志を燃やしなが、小さくなったキーチくんの背中を追いかけた。

戦闘準備

街の周りは見渡す限り草原になってる。

遠くにうつすら山陰は見えるものの、どこまでも見通しが良く、あちこちに敵らしき姿が見える。

どこから襲ってくるかもしれないと緊張しながら辺りを警戒していると、キーチくんにふんと鼻で笑われてしまった。

「街の周りのモンスターは基本的にアクティブじゃねえし、初心者でも戦えるくらい弱えから。」

こっちから手を出さない限り襲ってこねえよ」

だから力を抜けと言われ、ほっと息を吐いた。

両手両足をぶらぶらさせて緊張をほぐし、何度も深呼吸をする。すぐ近くには兔型の敵が居たが、確かに敵対する素振り無く、こちらには注意すら向けてこない。

周りのことなんざお構い無しに夢中で草を食べる姿は、とても愛らしかった。

「まず俺が一匹狩るからそこで見とけ」

そう言うとキーチくんはどこからか杖を取り出し、一番近くにいる敵に殴りかかった。

ゴンッと鈍い音がして、杖の先端が当たると同時に、ギギギと可愛らしい外見からは想像出来ない耳障りな音を発し、赤く目を光らせた敵がキーチくんに飛び掛かってくる。

しかしフェイントを入れることもなく、真っ直ぐ向かってきたところに再び杖を振り下ろされ、白い煙と共にあっさりその姿を消した。

後に残ったのは数枚の硬貨だけで、戦いの跡はどこにも残っていない。

MMOだとしばらく血や体液の跡が残るものもあったので、さほどリアリティーの無い戦いの様子に気が抜けてしまう。

「ま、こんな感じだな。

あいつ動きが単純だから、お前でもいけるだろ」

ちよつと誇らしげにこちらを見たキーチくんは、杖をしまいながら落ちた硬貨を拾いつつ、新しいターゲットへと視線を移した。近くで仲間が倒されたというのに、逃げもせずのんびり草を食べている。

確かにこれなら大丈夫そうだと、ゆっくり敵に近づくと途中でキーチくんに止められた。

「あ、ちよつと待て。

戦う前には解析かけとけ、敵と戦う時の基本な。格下なら必要ねえけど、かけとくに越したこたない」

言われた通り解析をしようとしたが、今までずっと対象に触れてスキルを発動していたので、やり方が分からず戸惑ってしまう。

とりあえず触ってみるかと思えば、慌てたキーチくん後ろから腕を掴まれてしまった。

「なにやってんだ、馬鹿かっ！

触ったら襲ってくるっつうの！

お前今まで解析どうやって使ってたんだよ」

目を吊り上げて怒鳴るキーチくんは身体を小さくしながらも、落ちていた小石を拾い実際に解析をかけて実際に使ってみせた。
こんな感じで、ともごもご口ごもりながら伝えれば、ため息をつけてキーチくんも小石に解析をかける。

「解析指定」

指先を目標に向けてそう呟くだけ。
するとわたしにも見える文字が小石の上に浮かび上がった。

「まったく、なんで知らねえんだって、そうか、チュートリアル受けてねえんだもんな」

呆れたように呟いたキーチくんだったが、途中ではっとして表情を改め、一旦敵から距離を取り、草の上にどかりと腰を下ろし胡座をかいた。

わたしもそれに倣って地面に座り、なんとなく正座をする。

「あーっと、お前の知識はヘルプ程度って認識でいいか？」

まずはそう聞かれ、その他に読んだ本の名前を挙げていく。
それに心当たりはなさそうだったが、キーチくんは首を振ってな
んとも言い難い、可哀想なものを見るような目でわたしを見た。

「本って基本的に、一番最初、つまりこのゲームが始まった時の情
報しか載ってねえんだわ。」

スキル発現用のやつと生産スキル関係以外は殆ど役に立たねえな」

どことなく言い辛そうにわたしの読書履歴をばっさり斬ったキー
チくんだったが、知っておいて悪いことは無いだろうと思っている
のでさほどの衝撃は無い。

むしろ役に立たない知識をそれっぽく見せている手の込みように
逆に感心してしまう。

それだけに先ほど目にした戦闘の微妙さに違和感がある。

どうしてかその理由を聞いてみると、さも当然といった口ぶりでキーチくんは答えをくれた。

「VRでリアリティー追求した戦闘なんて20禁プラス精神鑑定に定期診断付きじゃなきゃ無理だろ、常識的に考えて。」

お前はまだ戦ってないからだろうが、実際相対するとこれでも迫力ある方だぞ」

なるほど確かに、言われてみれば当たり前のことだった。

わたしだって何も、血飛沫が見たいだなんてそんな物騒なことを考えていた訳じゃなく、ちょっと疑問に思ったただけだ。

だからどこか引き気味にこちらを見るキーチくんの視線が痛かった。

それから基本的な戦闘についてのレクチャーが始まった。

まずは解析をかけて敵の状態を確認し、敵の残りの体力を示すバーを出現させること。

かけ方はさつきキーチくんが実践してみせた通り、対象を指差して解析指定と呟くだけ。

例えば途中で対象が動いても、ちゃんと視界に捉えていればスキルは発動するらしい。

パーティーを組んでいれば誰かが解析すれば全員が敵の体力を見ることが出来るようになるらしく、またメンバーの体力と魔力はパーティーの設定を弄れば常に可視化することが出来るというので、早速表示させてみる。

ぼんとキーチくんの上に現れた、赤と青のバーの横にはそれぞれ数字が一緒に表示されていて、体力が812/812、魔力が5623/5623となっていた。

ついでに基本の設定も弄り、自分の体力と魔力も常に視界に写るようにしておく。

イメージすれば頭の中に情報として流れてくるらしいが、慣れるまではきちんと目で確認することにした。

今のわたしの体力は31/31、魔力は17/17となっている。キーチくんのステータスと比べて余りに差がありすぎて、落ち込むを通り越してそのすごさに圧倒されていると、キーチくんは照れ臭げにそっぽを向いた。

「言っとくけど、俺はあんま大したことねえからな。
上位になると5桁なんてザラだし、装備によっちゃ6桁いくやつもいる」

それを聞いて、驚くよりもあきれてしまっ。

ゲームバランスはどうなってるんだろうと思わないでもないが、ここで考えても仕方ない。

逆に考えればどんどんステータスを伸ばせるということであり、そういう意味では悪くないとも思えた。

後は回復アイテムの使い方や、仲間の回復のさせ方、そして敵に狙いを定める方法を聞いた。

応用はまだまだあるようだが、それだけ分かっていたれば目の前の敵に対することは出来るだろう。

知識だけ増えていってもどうしようもないので、その他のことはおいおい教えてもらおうことにして、まずは戦ってみることにした。

「よし、頑張るぞーっ！」

立ち上がってパンパンと草を払い、近くの敵を見据えながら気合いを込めて叫ぶと、頑張れよと小さな声でキーチくんが呟くのが耳に届いた。

振り返ってその顔を見ると、素知らぬ顔でつんと澄ましていたが、耳が少し赤くなっている。

再び敵の方を向き、抑えきれない笑みを口に浮かべながら、静かに解析の言葉を呟いた。

閑話：困った人たち

「やっと動き出したあー。」

んもう、キー坊つてば要領悪いんだからっ」

ただっ広い草原の一角に、何本もの巨木がそびえる場所がある。

その中の一つ、特に背の高い木のでっぺんに、何かを観察する三つの人影があつた。

380

「こおら、七海つてば、あんまり暴れないの。

これそんなに耐久高くないんだからね」

頂上に作られた足場の上で七海がびよんびよん飛びはねると、妙に身体の線の細い男が口を尖らせて文句をつける。

さわさわと風で木が揺れても足場は全く動かず、空に固定されているようにも見える。

「もーママうるさあい、今いいところなんだから」

七海はべーつと舌を出して目の前にある画面に視線を戻した。
そこにはシトロネラとキーチ二人の姿があり、見られているとは思ってもない様子で、キーチが敵を一匹狩っている場面が写っている。

「ってゆーかなくね？」

シロちゃんだっけ、防具初期のまんまじゃん。

キーチっての気いきかねーの、そこはプレゼントするところでシヨ」

最後の一人、真っ黒な肌に派手なメイクをした白い髪の女が、画面の向こうのキーチにダメ出しを始める。

短いスカートを履いているにも関わらず、胡座をかいて座っているの、パンツが完全に見えてしまっていた。

しかし七海とママと呼ばれた男は気にする風もなく、好き勝手にあれこれ口を挟んでいく。

「そうね、アタシもあれはちょっとねえ。」

可愛い顔してるけどモテないわね、あの子」

「長いこと中にいたのにな、七海ならもうとっくに狩りに出てるよ」

きゃっきゃと楽しげに盛り上がる三人組には、キーチの評判はあまり良くないようだ。

動くたびに逐一敵しい言葉が飛び交う。

「かくれんぼは三日だけなのにい。」

あの調子じゃ、ロクに準備も出来ないかもねえ」

くすくすと楽しげに笑った七海に、どうしても良さをうたに白い髪の女が声をかけた。

「なーんであんな自滅しそうな組み合わせにしたワケ？」

「あ、それはアタシも気になるのよねえ。」

可愛いアタシの七海ちゃんのお願いだから監視してたけど、そんなに面白そうでもないしね」

ママもそれに乗って疑問を口にする。

七海はうーんと首を傾げて、頬に人差し指をあて、口を尖らせぷくりと頬を膨らませる。

「オヒトヨシ様への嫌がらせとお、狐ちゃんたちの鼻っ柱折るのに一番効果的だったからなんだけど。」

ホントはシトロンだけ飛ばすつもりだったんだよねえ。

キー坊はあ、んー、その場のノリ？」

きゃはっと笑って両手を口にあて、上目遣いで二人を見た七海の頭を、白い髪の毛の女がべしりと叩いた。

「ネカママぶりっ子うぜー」

心底げんなりした口調でそう呟いた彼女に、七海はわざとらしく泣き真似をしながらすり寄っていき、押し返されてもめげずに抱き着こうと飛びかかって、また拒絶される。

そんな二人を適当に宥めながら、ママが再び話題を元に戻した。

「七海ちゃんもレミちゃんも、あんまり暴れないでっば。
それで七海ちゃん、これからの予定は？」

やけに長く白い指をした手のひらを二人の間に差し込みつつ、ママが七海にそう問えば、すぐに答えが返ってきた。

「それはもう完璧っ！
んとね、三日間は放置して、それから偶然を装おってハルさんとシトロンを会わせるのねっ。

狐ちゃんたちは七海が遊んであげてえ、オヒトヨシ様のところには別口で仕掛けるつもりっ。

こないだの仕掛けもまだ尾を引いてるみたいだし、かなり楽しいお祭りになりそうだよっ」

えへんと胸を張りながら得意気に語る様子は可愛らしいものだったが、その内容はあまり可愛いとは言い難いものだった。

しかし聞いていた二人は当たり前のように頷き、好き勝手に自らもその中に組み込んでいく。

「じゃあアタシはハルの手引きに加わっちゃおうかしら。」

ついでにあの子たちの仲を邪魔しちゃうのも面白そうねえ」

「あたしはメルチェで遊ぶわ。」

あの女からかすと面白ねーし」

きゃらきゃら笑いながら、シトロネラたちの知らない所で今後の予定が組まれていく。

どんどん話は盛り上がってゆき、それぞれに必要な役者を揃える為にあちこちへ連絡を取り始めた。

「んふふ、久しぶりにギルドみんなで遊べそおだね」

嬉しげに笑った後、唇の端を上げて薄く微笑んだ七海に、ママとレミもにいつと唇を歪めて応える。

顔立ちには全く共通するところは無い三人なのに、その表情は酷く似通っていて、彼女たちがどういう人間なのかを端的に示していた。

「さあて、今のうちにゆっくり楽しんでてね、シトロネ」

まるで恋人に語りかけるような甘い声で画面の向こうのシトロネラに囁いた後、七海は二人を残して姿を消した。

「あらせっかちね、七海ちゃんたら」

一瞬にしてその場を離れた七海にママはくすりと優しげに笑い、レミはつまらなさそうに鼻を鳴らして画面に視線を戻した。

「あーあ、ちょっと遊ぶくらいよくね？」

トントンと指で画面に写るシトロネラの姿を叩くレミだったが、ママが静かに首を振るとそれ以上何も言わず、片手で別の作業をしながら大人しく監視に戻った。

「あらあら、仲良さそうじゃない」

ようやく狩りへ向かおうとするシトロネラの背にかけたキーチの言葉を拾い、ママはちろりと舌を出して上唇を舐めた。

「じつじつって、引き裂きたくなるわよねえ」

誰に聞かせるでもなく呟かれた言葉は、不穏な余韻を残し、そつと空に溶けて消えた。

ママことマンマミアはお姉キャラプレイで知られていて、気さくな性格でそこそこ人気もある方だったが、その本性は七海に近いものがある。

仲の良いプレイヤーたちを見ればこっそり裏からちよつかいを出し、その仲を引っ掻きまわしては楽しむという質の悪い癖の持ち主だった。

レミの方はそこまで歪んではないものの、真面目な人間や大勢に好かれる人間をおちよくって怒らせることを楽しむという、これもまた性格の良いとは言えない人間だ。

二人ともギルド『一発芸』に所属していて、ギルドの中でも七海に次ぐ問題児である。

そんな二人が面白そうな獲物を見逃す訳も無く、完全にシトロネラとキーチの二人組はマークされていた。

シトロネラがキーチから離れるべきでは無いと考えたのは、ある意味では正解だったが、しかしそれだけでどうにかなる相手でも無かった。

「攻略の鍵は、どうやって別に気を逸らすかってトコか」

すっかり悪い顔になってしまったママを横目で眺め、ぼつりとレミが呟く。

それは誰の耳にも届くことは無く。

画面の向こうで笑い合うシトロネラたちの姿だけが、明るく輝いていた。

初めての狩り

兔型の敵の名前はラビと言っらしい。

判りやすいのはいいけれど、兔だからラビというのは些か安直すぎる気がする。

ゲームのタイトルもそうだけれど、ネーミングセンスに欠けるなあ、なんてことを考えながら、ヨーヨーの届く距離まで敵との間を詰める。

体力は30/30と表示されていた。

今のわたしといい勝負である。

攻撃を仕掛ける前にもう一度、さっきキーチくんが見せてくれた戦いを思い出す。

ラビの攻撃パターンは真っ直ぐ飛び掛かってくるだけ。

そこに上手くヨーヨーを叩き込めば、無傷で勝つことが出来る。

頭の中で自分の勝利をはっきりイメージし、きちんと敵の位置を見定め、いざ右手からヨーヨーを放った。

ぼすと鈍い音がして円盤部分が当たり、赤い目をしたラビがギギギと耳障りな音を立ててこちらを向く。

向かい合ってみると、思っていた以上に不気味で、つい怯んで逃げ腰になってしまった。

「うわっ、ちょ、待って!」

そこにどすんとラビに飛び掛かってこられ、体勢を崩したところに更に連続して攻撃を受けてしまう。

すっかり慌てたわたしは、攻撃することも忘れ顔の前で両手を交差して身を守ることだけに専念した。

次いで攻撃されることを覚悟したが、その前に後ろからラビに火の玉が飛んで来る。

空中に居たラビの全身が火に包まれたかと思うと、次の瞬間にはその姿は消えてしまい、代わりにぼとりと硬貨が落ちた。

「何やってんだよ」

火の玉が飛んできた方向を振り返ると、大きくため息をつき呆れた顔をしたキーチくんの姿が目に入る。

どうやらわたしを助けてくれた火の玉はキーチくんが放ったものらしい。

その姿を見て一気に気が抜け、ぺたんとその場に座り込んでしま

った。

「おい、大丈夫か」

心配そうにキーチくんが駆け寄ってきて、放心しているわたしの目の前で何度も手を振る。

「ふ、ふふふふふ」

平気だと言うはずなのに、口を開けば何故か笑い声が漏れた。それを聞いたキーチくんはぎしりと固まってしまった。
わたしはそんなキーチくんの手をがしりと握り、そのままぶんぶん上下に振り回した。

「キーチくん、なにあれすごい迫力！

嘗めてた、わたし完全に嘗めてたよ。
血なんか出なくてもすごい怖い、すごい怖いよキーチくんっ！
兎なのに強そうだよっ！」

恐怖ですっかり興奮していたらしい。

目を白黒させるキーチくんをよそに、早口であれこれ捲し立てる。
自分の放った言葉にまた興奮して、更にいろいろと喚いてしま
いそうになったが、べしりと勢い良く腕を払われ、一気に頭が冷えた。

「い、ごめんねキーチくん」

慌てて何度も謝るが、キーチくんはむすつと不機嫌そうに顔を
かめたまま黙っている。

怒らせてしまったかと思うと胸がひゅつと冷たくなったが、キ
ーチくんがちらちらと払った腕を気にしているのに気づいて、ほっ
とした。

怒っている訳では無さそうだ。

現金な自分に少々嫌気はさしたが、顔には出さず立ち上がる。

このままでは役立たずどころか足手まといになってしまう。

そうならないために、もう一度ラビに挑もうと気合いを入れた。
するとキーチくん後ろから服を引っ張られる。

「お前やっぱ弓にしろけ！
前衛は無理だろ、あれじゃ」

そのままぐいぐいと街まで引つ張って行かれそうになり、慌てて足を踏ん張って抵抗する。

「大丈夫、何かふつきれた、いける気がしてきたよ！」

ぐつと拳を握って力説したが、キーチくんは疑わしげにこちらを見るだけだった。

しかし掴んでいた服は離してくれ、好きにしろと諦めたように咳く。

これは一つ、キーチくんが納得してくれるくらい、ちゃんとしたところを見せねばなるまい。

さっきのような情けない様子を見せる訳にはいかない。
気合いを入れ直し、再度ラビに向かい合う。

解析をかけ、改めて間合いを取り、一気に攻撃を仕掛けた。
今度は飛び掛かって来るのを待たずに連続でヨーヨーを打ち込む。
途中で攻撃を外し、お腹に体当たりされたが不思議とあまり怖くない。

躊躇って前衛は無理だと判断される方がよっぽど怖かった。

丁度十回攻撃が当たったところで、ようやくラビの姿が消え、硬貨がパラパラとその場に散らばる。

どうだとはかりにキーチくんの方を見たが、まだその表情は晴れない。

それならばと、近くに居た別のラビに再び挑みかかった。

今度はたった二回攻撃を当てたところでラビの姿が消えてしまう。
いきなり攻撃の威力が上がったことには戸惑ったが、反撃を受けずに倒せたことに気を良くして更に数匹のラビを狩る。

そして硬貨以外のアイテムがドロップしたところで、キーチくんから制止の声をかけられた。

「分かった、分かったからほら、そろそろ拾え」

「やれやれと首を振り、どこか遠い目をしながらわたしの足元を指さす。

硬貨を拾うこともせず、ただひたすら狩っていたため、あちらこちらに点在していた。

それを一枚一枚拾い手のひら一杯になったところでアイテム収納を実行する。

更にラビが落としたアイテムを拾って解析する。

「兎の肉、かあ。

「ねね、キーチくん、これ料理出来るかな？」

「兎の肉を握りしめ、うきうきとして振り返れば、微妙な目付きでわたしを観察しているキーチくんとはっちり目が合った。

「料理、出来るけど。

いきなり吹っ切れすぎだろ、お前」

どうやら先ほどの狩りのことを言っているらしい。

何かおかしいだろうかと首を傾げると、納得のいかない様子でしばらくぶつぶつと呟いていたが、やがて自己完結したようで、数度頭を振ってから顎でくいとラビを示す。

「一個じゃ少なえからな。

もうちよい狩るぞ」

そう言ったかと思うといきなり火の玉を手のひらに出現させ、近くのラビに向かって放つ。

一瞬でその姿は消えて無くなり、後には硬貨だけが残る。

更に続けて火の玉を放ったキーチくんは、遅れてはなるものかとわたしもラビ目掛けて駆け出した。

結局太陽が傾くまで黙々と狩り続けた。

途中空腹によるステータス減少のペナルティーはあったものの、さほど狩りに支障は出なかったのものでそのままにしておいた。

成果は二人合わせて十二個の肉。

狩ったラビの総数だけで言えば、その二十倍以上、二百匹を軽く超えたことだろう。

それだけ肉はなかなかドロップしてくれず、さすが狩り場として人気の無い場所だと妙に納得してしまった。

肉を手分けして持ち、お金を分配しようとしたところで少し揉めた。

明らかにキーチくんの方が多く狩っていたのに、きっちり二等分しようと主張するキーチくんにわたしが反対したせいだ。

最終的にはキーチくんの言い分を呑み、これからもお金は基本的に山分け、アイテムは物に応じて分配と決まる。

しばらくは負担ばかりかけると申し訳なく思ったものの、こうやってパーティーならではの決まり事が増えていくのは楽しいし嬉しいことだと密かに微笑んだ。

もつとちゃんとした戦力になることを自分自身に誓いつつ、夕陽を背にし、キーチくと歩調を合わせ、赤く染まる街へと歩いていった。

恥ずかしがり屋の場合

街に入りまず向かったのは、雑貨屋だった。

中には武器屋と同じようにひたすらにこにけ笑っている店員さんが居て、じつとこちらを見ていた。

ここで料理スキルを発現するのに必要な道具が売っているらしい。当面はフライパンさえあれば何とかなるというキーチ君のアドバイスを元に、店員さんに一番小さなフライパンを売ってもらえるように頼む。

途中で何度か会話は途切れたものの、無事にお金を支払うところまでこぎ着ける。

画面越しの取引とは違い、店員さんを介してのやり取りは直接お金を出して支払わなければいけない。

提示された50Gを取り出すと、自動的に10G分が一枚の穴の空いた硬貨に変換されて現れた。

つい感心して、しげしげとその真新しい硬貨を眺めていたが、にこにこ笑う店員さんになんとなく無言の圧力を感じ、慌てて手にしたお金を差し出す。

雑貨屋を出たその足で宿屋へ向かう。

途中すれ違うNPCらしき人たちに軽い挨拶をしていたら、キーチくんは怪訝そうに見られてしまったが、理由を説明するとキーチ

くんも消極的ながら協力してくれた。

声をかけるのでなく、軽く頭を下げるだけだったけれど、それでも何もしないよりは刺激になるだろう。

誰からも返事が無いのは少し寂しいが、これがNPCの成長に関わるのかと思えばやる気も出る。

宿屋につくまでに、かなりのNPCに声をかけることが出来、わたしは随分と満足していた。

宿屋の受付には、丸々とした人の良さそうなおばさんが座っていた。

自分で部屋を取るべくおばさんに話しかけようとする、キーチくんに止められてしまう。

そして30、2、1と続けざまに三つの数字を告げると、おばさんが一つの鍵を投げて寄越し、無言のまま階段を指差す。

それに従い階段を上り始めたキーチくんの背中を慌てて追うと、一階分上ったところで階段は途切れ、目の前に扉が現れる。

躊躇うこともなくそれに手をかけ、中に消えたキーチくんにと、そこにはやたらと大きな円形の空間が広がっていた。

「うわあ、すごい、何ここ、扉がいっぱいー！」

広いホールの真ん中には一つの机がぽつんと置かれていて、わたしたちが入って来た扉以外に全部で四つの扉が、こちらとは反対側の半円部分の壁に等間隔で並んでいた。

キヨロキヨロと落ち着かないわたしに、机に座るように勧めたキイチくんは自らも席につき、手早く説明をしてくれる。

「この部屋がしばらくの拠点な。」

それぞれの寝室と作業部屋、倉庫がついてる。

寝室には自分以外誰も入れねえから安心しろ。

作業部屋は生産なら大体何でも出来る、勿論料理もな。

倉庫は重さ関係無く百個までアイテム置けるから好きに使え」

想像していた宿屋との違いに驚きつつ、キイチくんの説明を聞く。やたらと設備が充実しているので、さぞ高いのでは無いかと心配になり、それとなく尋ねると少し視線を彷徨かせた後、小さな声で呟いた。

「一月で、10000G」

とても払えそうに無いその金額に、一瞬気が遠くなりかけた。
しかしすぐに気を取り直し、詳しいことを聞き出す。

二人で10000Gだと聞き、少しほっとするも、それでも今のわたしの手持ちではとてもじゃないが足りそうに無い。

しかし普通に宿屋に泊まると一泊につき100Gで、更に調理場や作業場を借りるのも倉庫を利用するのもそれぞれお金がかかるらしいので、長い目で見ればお得らしいと聞き、納得はした。

キーチくんが良かれと思ってしてくれたことならば、それが最善なのだとも思える。

俺が全部払うと言い張るキーチくんを何とか言い含め、わたしも半分出すことを納得させてから、ひとまずお金のことは忘れて料理に挑戦してみる事となった。

作業場に移動し、フライパンに兎の肉を乗せて、中央で燃え続ける焚火らしきものにあてる。

すぐにぴかりとフライパンの中身が光り、ぷすぷすと焦げた匂いが手元から漂ってきた。

隣で同じように料理していたキーチくんは上手くいったようで、フライパンの中には美味しそうに焼き上がった肉がある。

無言のままそつと新しい兎の肉を差し出されたので、焦げた物体をしまつてからもう一度挑戦する。

次は生焼けに近かったものの、何とか食べられそうなものが出来

たので、その場でむしゃりとかじりついた。

生臭い血の臭いはしたものの、味はそんなに悪くない。

隣で美味しそうな肉をもそもそ食べるキーチくんをちらりと見て、次こそはと闘志を燃やし、ステータスを確認した。

満腹度は52%となっており、ペナルティーが発生する50%をギリギリ超えたところだった。

もう一枚食べておこうと再び肉を焼き、さつきよりは上手く焼けた肉をしっかりと味わいながら、増えたスキルをチェックしていく。

ヨーヨースキルは玩具二となっており、既に19までレベルが上がっていた。

使える技も出来たようで、歌一覧とは別のページが新たに発生している。

そのページを開くと、二連撃と三連撃という技の名前が表示されていて、魔力と引き換えに強力な攻撃が出来るとの説明があった。

そこでふと疑問に思ったことがあり、もそもそと二枚目の肉を頬張っているキーチくんに質問をする。

「ねえキーチくん、技って、どうやって使うの？
もしかして叫ぶ、とか？」

そうだったら慣れるまでかなり恥ずかしいと思いつつキーチくんを窺うと、苦虫を噛み潰したような顔でゆっくりと頷かれてしまった。

ヨーヨーを構えて、三連撃と敵に向かって叫ぶ自分の姿を想像してみる。

いくら現実の自分とは姿を変えているとはいえ、やっぱり恥ずかしいものがある。

これぞプレイの醍醐味だと割り切って楽しむべきなのだろうかと思ひ始めたところで、あることを思い出した。

「でもキーチくん魔法使った時、何も言っていなかったよね？」

何か方法があるなら教えて欲しいと必死で頼み込んだが、今すぐには無理だと首を振られてしまう。

技の元になるスキルのレベルが上がると、無言というスキルを発現する資格が得られるらしく、キーチくんはそれを利用しているとのこと。

今のわたしのレベルではまだその域に達していないようで、それまでは羞恥に耐えて技を使うか、技を封印して通常攻撃で頑張るしかないらしい。

「お前はまだいいだろ、普通の攻撃あんだから」

どうしようかと悩むわたしに、キーチくんは拗ねたように呟いた。確かに魔法は詠唱しなければ攻撃方法が無くなってしまっただろう。それに比べたら、選択の余地がある時点で恵まれているとも思える。

何を思い出したのか、遠い目をして心なしか元気が無くなってしまったキーチくんに、急いで慰めの言葉をかけた。

「でも魔法ならかつこいいんじゃないかな？」

ほら、自分の言葉で火の玉が出来るなんてすごいよ！」

「じゃあお前は、敵を断罪せし清らかな炎よ、とか毎回敵に向かって言いてえの？」

「……き、厳しい、かな」

しかしあっさりと言い負かされ、二人で遠い目をしてしまった。頑張った過去のキーチくんに胸の中でこっさり手を合わせる。

そんな思いをしてまでどうして魔法を使ったかったのか聞きたい思いもあったけれど、これ以上余計なことを思い出させるのも悪い。

然り気無い風を装おつて、ステータス画面に視線を移し、何か別の話題は無いかと必死で探す。

「そ、そうだキーチくん、スキルのバランスとか、アドバイスして欲しいなっ！」

何とか糸口を見つけ、多少声を裏返しながら声をかけると、キーチくんはぱちぱちと何度か瞬きをしてこちらを見た後、仕方ねえなと首を振りながら、嬉しそうに頬を緩めて最初の部屋へと移動した。上手く気を逸らせたことにほっと胸を撫でおろしつつ、わたしもその後を追った。

長い一日の終わり

最初の部屋に戻り、キーチくんの隣に腰を下ろして、ステータス画面を見てもらう。

今日一日で食事と玩具二と料理、更には防御と鉄人なんてものも発現していた。

一度もお知らせが来なかったのは、街についてすぐいろんな機能をオフにしたせいだろう。

キーチくんに見てもらいながら、自分でも改めてステータスを見直した。

名前：シトロネラ

性別：女

種族：人間

称号：独り身

体力：38 / 38 (37 / 37)

魔力：21 / 21 (20 / 20)

満腹度：70%

筋力：5 (5)

知力：19 (19)

耐性：9（9）
精神：14（14）
器用：77（74）+10
速さ：5（5）
運：5（5）

称号でステータス5%増加

睡眠：58（睡眠時回復時間5.8%短縮）
空腹：98（空腹時ステータス10.8%上昇）
読書：27（読書力増加）
速読：46（読書速度増加）
解析：34（アイテムの情報判明）
歌唱：30（歌の効果発現率2.8%）
作曲：16（作曲力増加）
機巧：61（からくり作成）
自然回復：34（自然回復速度増加）
魔力操作：36（魔力操作精度増加）
食事：11（空腹回復率1.1%上昇）
防御：1（防御時ダメージ軽減率0.1%上昇）
鉄人：3（ダメージ軽減）
玩具二：19（器用依存攻撃）
料理：2（食材調理）

いつの間にか器用が凄まじく上がっている。

おそらくだが、攻撃スキルの玩具二を覚えたからだろう。

補助スキルとは比べ物にならないその上昇っぷりに圧倒されてい

ると、真剣な顔でわたしのステータス画面を覗いてしたキーチくんが、一つ咳払いをした後アドバイスをしてくれた。

「スキルの取り方に決まりはねえけど、このままじゃ体力が心許ないな。

耐性と精神は装備で補えるけど、体力装備は少ねえし。

ま、明日は採取するつもりだから、そんな時に出るスキルでしばらくはどうにかなんだろ」

具体的なスキル名を出さない簡単なアドバイスだったが、逆にそれが好ましかった。

しばらくはこのままスキルレベルが上がるに任せようと決め、明日の予定をキーチくんに尋ねる。

「明日は採取とまだ行ってない店に連れてってやるよ。防具もそろそろ買えるくらいには金貯まっただろ。

後は本屋と銀行、一応作業場も行ってくか」

そこでキーチくんは一旦言葉を切り、再びわたしのステータス画面を覗いた。

そのまま片手でトントンと机を叩きながら何やら考え込んでしま

う。
わたしは邪魔にならないよう黙ったまま、こっそりキーチくんを観察した。

エルフ特有の尖った耳の美少年と違って差し支えない可愛らしい姿をしているが、接して出来たキーチくんのイメージとはあまり馴染まない気がする。

誘拐犯のフェアリーの少年はそのまんま子供っぽい雰囲気、可愛がられることに慣れてそうで、違和感が無かったけれど、キーチくんは可愛いと言われて喜ぶタイプには見えない。

むしろ可愛いなんて言ったら怒られてしまいそうだ。

面倒くさがってあまり外装を変えなかったのだろうか。

不思議に思っているのが顔に出ていたのか、考えが纏まりこちらを向いたキーチくんとはっちり目が合い、ギロリと睨まれてしまった。

「何だよ」

「いやいやいや何でもないよ」

低い声でそう言われ、慌てて首を振る。

キーチくんは不審気に眉をよせ、チツと舌打ちをしたが、そのまま問い詰めることはせず、わたしの今後の方針を聞いてきた。

「機巧スキル育てるかそうじゃないかで、やり方が変わる。

別に他の生産スキルでもいいけどな。

お前は どうするつもり？」

少々ぶっきらぼうな声色のキーチくんの言葉に、わたしはしばし考え込む。

好きで選んだスキルじゃない。

必要に駆られて仕方なく取っただけだ。

しかし成り行きだったとはいえ、もうすっかり馴染んでしまっている。

わざわざからくり作りのための道具も持ち出してきたし、今さら別の物に鞍替える気も無い。

「そうだね、機巧スキルは育てるつもりだよ。
面白くなってきたとこだし」

こくりと大きく首を縦にふると、キーチくんは黙ったまま軽く頷いた。

そのまま席を立ち、明日九時な、と言い残して作業部屋へと引っ込んでしまう。

「キーチくん、部屋はどっち使えばいいかなー」

後を追って中に向かって呼びかけると、好きにしろとの答えが返ってきた。

少し迷ってから、一番左の部屋に足を踏み入れる。

中には小さな机と、大きめのベッドが置かれていた。

隠し部屋のベッドよりもふかふかしていて、寝心地が良さそうだ。

ぼふんとベッドに勢い良く飛び込んで、その肌触りの良さににやにやしてしまふ。

「そつだ、タロウタロウ」

すっかり忘れていたタロウの存在を思い出し、慌てて取り出しベツドの脇に座らせる。

相変わらず間の抜けた顔だったが、しばらく見ていなかったせいかとても可愛く見えて、ベッドに寝転がったままつんとタロウをつつく。

「タロウ、外だよーっ！」

んふふ、すごいよね、ちゃんと出られたよ」

上機嫌でタロウに話しかける。

もう自分でタロウの代わりに喋ることはしなかったが、長い一日のことを順を追って話していった。

微妙な気持ちになったことや、キーチくんが親身になってくれていること、話すことは沢山あって、あらかた話し終えてようやく満足した頃には、随分と時間が経っていた。

「明日も、楽しい一日だといいいね」

最後にぎゅっとタロウの腕を握って、勢いよく身体を起こした。

そのままメニューを開き、ブログを書き始めた。

これも隠し部屋では使えなかった機能が沢山増えていた。

いろいろ試したくなる気持ちを抑えて、先ほどタロウに話したことをそのまま文字にしていく。

公開と非公開が選べたので、詳しく書いたものは非公開にして、公開用には簡単に、隠し部屋を出られたことだけを書いてアップした。

雑記帳にステータスを書き込み、ついでにブログにもその内容を写すことにする。

一日ごとにまとめ、思い出したことを付け加え、途中でしんみり感傷に浸りつつ昨日までの日記を完成させ、非公開にする。

既に日付は午前0時を跨いでいた。

急いでアラームを八時にセットして、身体をベッドに横たえる。

「おやすみ、タロウ、キーチくん」

夢は見れないけれど、
気持ちよく眠れそうだと、
幸せな気分で見
目を閉じた。

作業部屋の中

十四日目。

目覚めてまず目に飛び込んできたのは、隠し部屋よりも随分高い天井だった。

改めてあの部屋を脱出出来たのだと実感出来て、じわじわ嬉しさが沸き上がってくる。

すぐに飛び起きて部屋を出るが、キーチくんはまだ起きていないようだった。

今のうちに部屋の中を探索しておこうと、まずは作業部屋に向かう。

作業部屋は昨日料理をした焚き火を中心として、時計の文字盤のように十二の区画に分かれていて、そのうちの一つは今入ってきた入口に充てられている。

まずは朝ごはんだと、真ん中の焚き火で兎の肉を焼く。

こんがりて良い色に仕上がりに、試しに端っこをちよつとかじってみると、じゅわりと肉汁が溢れてきて、口に広がる肉の甘さにうっとりしてしまう。

スキルレベルはまだまだ低いのに、こんなに美味しく作れるとは驚きだ。

これならば確かに、レベルを上げていろんなレシピを覚えれば、

店で食べたものより美味しいものが作れそうだ。

そのまま片手で肉を掴み、むしやりと豪快に噛みちぎって口いっぱい頬張りながら、分かれた区画を一つずつ確認していく。

都合の良いことに、手には肉汁はつかず、全く汚れる素振りもなかった。

そういえば部屋に風呂は無かったし、隠し部屋ですつと過ごしたのに髪もべとついていない。

リアリティーはあるけれど、そんなところはやっぱりゲームなんだなと思いつながら、ゆっくり部屋の中を回った。

昨日はあんまりゆっくり見る時間が無かったが、改めて覗くとそれぞれが簡素なパーテーションで仕切られていて、小さな部屋のようになっていることが分かった。

一つ一つ中にあるものは違い、魔女が笑いながら中身をかき回してそうな大鍋で占領された場所に、鍛冶炉と金床のある場所、他にもぱつと見ただけでは一体何に使っているのか分からない場所まであり、様々な生産が出来るようになっていたようだった。

そのうちの一つ、試験管や秤の置いてある場所はキーチくんが使っているようで、カラフルな液体や粉が無造作に散らばっていた。

それ以外の場所には全く手がつけられていなかったの、からくり作りに良さそうな場所が無いかと思つたものの、わたしが隠し部屋で作つたような道具が置かれている場所が無い。

二つは何も無いただの空間となつていたので、とりあえずそこを使わせてもらおうと作業台を取り出して真ん中に置き、その上に他の道具を並べていく。

全て並べるとそれだけで台の上は埋まつてしまい、作業するスペースが残らない。

もう一つ台が欲しいなと考えていると、部屋の扉が開きキーチくんが入ってきた。

「おはよう」

「お、おう」

わたしが居るとは思つていなかったのか、一瞬びくりと身体を震わせたキーチくんだったが、すぐにこちらに気づいてゆっくり近づいてくる。

「よくわかつたな、機巧スキル向きの場所が」

並べた道具を興味深げに眺めながらそんなことを言われ、曖昧に笑って頷く。

消去法で選んだだけなので、誉められても胸を張っていいのかわからない。

「あー、見た目で何の部屋かわかんねえとこ入ったらまず解析な。解析スキル持ってんならとりあえずなんでも解析かけてみる」

わたしの表情に何かを察したらしいキーチくんにそうアドバイスされて、この場所に解析をかけてみると、その他の部屋と浮かび上がってきた。

「宿屋の作業部屋は備え付けの施設が必要なのと取ってるやつが多いスキルに有利な効果付きの場所と、それ以外に分かれてんだ。

その他の場所は一律で全部の生産スキルの成功率が上がるようになってる筈だ」

文字を指差しながら丁寧に説明してくれたキーチくんは、そのままぐるりと一角を見渡し、腕を組んだまま足りないな、と呟いた。

「ん、何が？」

「椅子やら机やら、何もかも足りてねえ」

そう言うとキーチくんは、他の使っていない区画から背の低い小さな椅子を一つ運んできて、作業台の前にぽんと置いた。

「え、いいの？」

「俺は薬しか作んねえからな、使わない場所のもんは好きにしてい
い」

そのままキーチくんは自身が使っている場所に行って、何やら作

業を初めてしまったので、わたしはわたしで他の場所から適当なものを見繕うことにした。

鍛冶炉のある場所からは材料を入れるような大きめの箱を、大きな机のある部屋からはルーペや彫刻刀の入っていた道具入れらしきものを、最後に魔女の鍋の部屋から踏み台を持ち出して、それぞれを適当に配置する。

道具入れには小さな作業道具を収め、踏み台の上には大きめの道具を並べ、隅に箱を設置すれば、随分とそれらしい部屋になった。

機巧師の部屋と名付けても違和感の無い仕上がりには、満足しているような角度から部屋を眺めていると、作業を終えたらしいキーチくんに後ろから声をかけられる。

「そろそろ出るぞ」

短く告げてそのまますたと入口に向かうキーチくんの背を小走りで追いかける。

部屋を出たところでちゃんと立ち止まって待っていた姿に、にやけそうになるのを必死でこらえて、歩き出したキーチくんの少し後ろを澄まし顔でついていった。

宿のおかみさんは変わらずにここに笑顔で、いってきますと言え
ばきちんと反応してくれた。

いってらっしゃいの言葉を噛み締めながら、やっぱり宿は来る人
が多いからだろうかと上機嫌なまま考えていると、すぐに一つの目
的地に着いた。

しっかりした煉瓦作りの建物の前で足を止めたキーチくんは、建
物を指差して銀行など呟いた後、中に入らずそのまま別の場所に歩
を進める。

少しゆっくりめの速度にすぐに追いついて、隣に並ぶと立ち寄り
なかつた理由を話してくれた。

「銀行は宿を長期で取ってる場合は殆ど使わねんだ。

預けたもんは別の街でも受け取れるから、移動する時に預けるく
らいか。

一回につき手数料が50Gかかるから、試しに預けてみるって訳
にもいかねえだろ」

確かに、50Gは大きい。

手数料なんかで消費するくらいなら、何か美味しいものを食べる
方がいい。

説明を聞いた限り普通のMMOでの銀行と大差は無さそうだった

ので、知らなくても大丈夫だろうと自分の中で結論づける。

次にたどり着いたのは、銀行とは違い木で作られたやたらと大きな建物の前。

ここも中に入ることは無く、作業場だただけ紹介される。

どうやら中に入る時にお金が必要なようで、中身は宿屋のものと大差無いと説明され、納得する。

お金に余裕が出来たら見学に来てみようところっそり思いながら、次の目的地に向かうキーチくんについていく。

道中すれ違う人に声をかけるが、やっぱり反応は無い。

宿屋のおかみさんのようにはいかないかと、少々がっかりしていると、前をゆくキーチくんから遠回しなフォローが入った。

「店とクエストのNPC以外のやつは、普通話しかけられない分成長早えから。」

その、まあ、あれだ。

挨拶くれえなら、そのうち返ってくる」

照れくさいのだろう、後ろからでも耳が赤くなっているのが分かる。

優しい気遣いに感謝しながら、そんなに落ち込んでないことを示すために、元氣良くすれ違うNPCの人たちに声をかけてゆく。

何度かキーチくんが小さな声で挨拶していたのは、何とも微笑ましかったけれど、態度には出さず気づかないフリで通した。

初心者の我が俣

次に着いたのは小ぢんまりとした建物で、キーチくんは今度は素通りせずに中へと入っていく。

続いて入口を潜ると、中には鎧や兜を着せられたマネキンがずらりと並べられていた。

重そうな金属の甲冑から、下着のように露出度の高いものまである。

多くは普段の生活では目にしないようなデザインで、物珍しさに近くのマネキンの着ているものをぺたぺた触ってその質感を確認した。

見た目には着心地の悪そうなものが多かったが、裏地はしっかりとしていて意外にも肌触りが良い。

つい頬擦りしてその感触を楽しんでいると、躊躇いがちにキーチくんは声をかけられる。

「あー……とりあえず、昨日稼いだ範囲で買えそうなやつ見繕ったけど。」

その、それはちょっと、やめといた方がいいと思っぜ」

そう言われて、頬擦りしていたものがラメ入りのキラキラした紫の服であることに気づき、慌ててマネキンから距離を取る。

あはははと恥ずかしさを取り繕うように笑いながら、キーチくんが選んでくれたものを手にとった。

昨日稼いだ分と使ったものも合わせて、今の所持金は500Gと少し。

何かあった時のためにある程度残しておくとなれば、使うのは400Gが限度だろう。

まず目についた皮の胸当ては、いかにも防具らしくて良さそうだったが、取引画面を開いて確認すれば300Gと少し高い。

一つにつき込むくらいなら、安めのをいろいろ買って、お洒落したい気持ちも多少ある。

今のわたしの格好は初期装備のまま、上は布のTシャツ、下は布の長いズボンになっていて、上下ともにベージュ色をしている。

Tシャツはシンプルなデザインが割と気に入っているのだが、下は微妙だ。

お腹のところで紐で結んだだけの、裾がぶかっとした寝間着のよくなデザインはいただけない。

そこでまず、カーキ色のショートパンツを選ぶ。

防御が2しか上昇しないせいか100Gと安めだった。

ついでに布のリボンと革のブーツを選ぶと、350Gとなった。

新しい服に着替えられることにわくわくしながら店員さんと呼ぶ。

すみません、では店員さんは反応してくれなかったが、具体的に商品の名前を挙げるとマネキンの中から金色のスーツを着た髪の長いお兄さんがこちらへ向かってきた。

てつきりマネキンの一体だと思っていたものがいきなり動き出したので、ぎよっとしてしまっただが、にこにこしながらこちらの言葉を待っているようだったので、おずおずと商品一式を差し出す。

成長具合は武器屋の店員さんと似たり寄ったりで、愛想は良いけれど防具の売り買いに関すること以外には答えてくれない。

しかし、そんな状態でこんな派手なスーツを着こんでいるところからして、自由に喋るようになったら非常に個性的な人になりそうな予感がする。

その時が楽しみだと思いつつ、無事に買い物を終えた。

そのまま防具屋の中で、買ったものを身につけてゆく。

装備するには手にとって装備しようと思えばいいので、どこかへ引込まずにその場ではっぱと変更した。

しかしショートパンツ身につけても、元からつけていた布のズボンは外れずそのままだった。

布のズボンの上からショートパンツを履いているという、非常に情けない格好になってしまっている。

ブーツは初めから履いていた木靴とちゃんと入れ替わったので、やり方が間違っている訳ではないらしい。

「体の上と下は、五つまでは重ね着出来るから。」

脱ぎたきや頭ん中で脱いだ自分の姿イメージしながら、脱ぎたいやつに触れ」

キーチくんからそんなアドバイスを受けて、ショートパンツだけになった自分を思い浮かべながら布のズボンに触れると、するりと床に脱げ落ちた。

そのままズボンをつまんで店員さんに渡し、ついでに一緒に木靴も合わせて、全部で15Gで引き取ってもらった。

せつかく重ね着出来るということなので、50Gの黒いスパッツを購入し、ショートパンツの下に身に付けた。

最後に肩まである黒い髪を買ったばかりのリボンで束ねてみる。

「どっかな、似合う似合う?」

すっかりはしゃいで、くると回ってみせたが、キーチくんからはそっけない反応しか返って来なかった。

しかしそれで気分が沈むことは無く、るんるんと浮かれて結んだ髪に手をやる。

さらりと手に当たる感触は現実の自身の髪の毛の質感と似ていた。くすぐつたいような切ないような、そんな気持ちがきゅっと胸を締め付ける。

浮わついた気持ちは一瞬で落ち着き、なんとなくしみじみしてしまった。

現実ではさほど時間が経っていないとはいえ、もう随分と長く家を空けているような心持ちになる。

旅行先でふと軽いホームシックにかかるような、そんな感じだ。

「ほら、次行くぞ、次」

急に大人しくなったせいも、キーチくんが少し焦ったような口調でわたしを店の外へと追いたてる。

はいはいと苦笑いしながら従うと、後ろからありがとございましてとの声がかかる。

振り返ると、店員さんが深々とお辞儀しながらわたしたちを送り出してくれていた。

たったそれだけのことでセンチメンタルな気持ちは吹き飛んでしまい、また少しこの作り物の世界が好きになる。

こちらこそ、と店員さんに向かって大声で叫んでから、意気揚々と次の場所に向かった。

次の目的地は本屋で、町の小さな古本屋のように店中にぎっしりと様々な本が並んでいて、通路は人一人が通れるギリギリの幅しか無い、そんな店だった。

買わないまま立ち読みすることは出来ないらしく、試しに手にとって見たものの開くことは出来なかった。

「機巧スキルに関するもののピックアップを頼む」

わたしが色々な本のタイトルに目移りしている間に、キーチくんが店番のお婆さんに話しかけていた。

お婆さんはそれに軽く頷いて応え、さっと右手を翳す。

すると店の本棚のあちこちから本がすっと抜け出て、お婆さんの前に飛んで行き、その前の番台に積み上がっていった。

幻想的な光景にほうと見とれてみると、キーチくんを確認するように言われる。

狭い店なので、一度店を出てキーチくんと場所を入れ替わり再び中に入り、積まれた本のタイトルと値段を取引画面で確認した。

全部で六冊あり、その中には『ごみ図鑑』も含まれていたが、10000Gと高くすぐに手が出そうな値段では無かった。

一番安いものでも6000Gしたので、今すぐに入手という訳にはいかなさそうだ。

残念だと思いながら店を出ようとする、キーチくんに引き留められる。

「いくらだ、言え」

ほんと手のひらに硬貨を出現させながらそんなことを言うので、慌てて店を出ようとする。

しかしキーチくんは頑固にもその場を動いてくれない。

どうしたものかと困った顔を見ると、キーチくんはきつと目尻を吊り上げた。

432

「今から採取すのに必要なんだよ。

機巧スキルなんて掲示板に情報殆どねえしよ」

「いや、でも基本材料は分かるよ、糸と金属板と木材、それに針金と歯車！」

わたしも負けじと声を張り上げ対抗すると、キーチくんはぶつぶ

つと何やら呟いた後、何も買わないまま店を出てくれた。

ほつとしてその後を追うも、キーチくんは不機嫌そうな顔をしたままだ。

せつかくの好意を無下にしたようで、悪いとは思いつつも譲れない一線について伝えておく。

「あのねキーチくん、わがままかもしれないけど、わたし身の丈にあつたプレイしたいんだ。

だから、自分で買える範囲で買いたいなーって、あれ？

いやいやいや、宿屋とつてもらっちゃった時点でこんなこと言えた義理じゃないよね。

むしろキーチくん付き合わせてるくせに何言ってるんだろ、やばいわたし超図々しい！

自分のことだけ考えてた、キーチくんのプレイスタイル考えてなかった！

そうだよね、のろのろプレイに付き合えって言ってるのと同じじゃん、うわ、恥ずかしいっ」

しかし途中で自分の主張の身勝手さに思い至り、かっとなりが熱くなる。

互いの効率の良さを考えるならば、厚かましさを横において、先にお金を借りてしまつて装備を揃えて後から色をつけて返す方がよっぽどいい。

結局わたしの主張は、自分のプレイを優先させた故のものだ。

キーチくんにたかるようで悪いから、なんて言い訳をつけたせいで、ここまで気づかなかった。

わたしのやり方を通すと、それだけキーチくんを格下の狩り場に引き止めることになる。

そこを考えていなかった自分が情けなくなる。

今からでも別行動を申し出るべきか。

しかしそうしたらキーチくんを側で守れない。

一体どうすれば良いのかわからなくなって、頭が真っ白になる。

「……い、おいつ、シトロネラ、シロっ！」

大声で名前を呼ばれ、はっと我に返ると、困ったように眉を寄せ、るキーチくんとぼつちり目が合った。

その表情にまた迷惑をかけているとがくりと肩を落とすと、もごもごと歯切れ悪く、しかし言葉を濁すことなくキーチくんがぼつぽつと喋り出した。

閑話・幹部の集い

「ああ、もう、やり方が陰湿！」

ギルド『さんぶんらんしすこ』の会議室にて、メルチエが苛立った様子でバンと荒々しく机を叩いた。

部屋の中に居るのは、幹部の四人のみで、そこにゴジマの姿は無い。

「メルチエ、腹立てたら負けよ。
冷静になって、ほら、深呼吸」

そうメルチエに声をかけたのは、三十代半ばの外見年齢に相応しいしっとりした肌の質感を持つ、切れ長の瞳をした人間の女性だ。

その外見に相応しく声色も落ち着いていて、全身から怒気を発するメルチエをやんわりと宥める。

十代から二十代前半の外見をした女性キャラクターが圧倒的に多いゲームの中で、珍しく三十代の外見を選択し、大人の女性が醸し出す色気と母性を言葉や行動の端々から滲ませる彼女、アルローネは、ババアと悪態をつかれることも多かったが、一部の層から密やかにしかし熱烈に支持されている。

「ま、うんざりもするわな、まったく厄介なやつらだよ」

アルローネに続いて口を開いたのは、全身が赤い鱗で覆われた年齢不詳の男性。

生々しい鱗の質感や、爬虫類を模したその顔があまりにもリアルなため、いまいち人気の無い竜人キャラクターの彼、捻り鉢巻きこと通称ネジは、ちろちろと細い舌を覗かせながら、煙混じりのため息をつく。

「年少組へのフォローは終わりました。

噂の出所はNPC、かなり面倒なパターンです」

そんな二人の言葉を余所に、画面を操作しつつどこかへとひっきりなしに連絡を取っていた、黒豹の獣人の青年が口を開く。

耳や尻尾のみが獣であるとは人間と同じというタイプの獣人とは違い、獣をそのまま二足歩行に適応させ、顔だけが獣と人間を合わせたようになっているタイプの獣人で、どこか不気味な外観から竜人と同じくらい人気が無い種族だ。

現に青年、サリュが、瞳孔を極限まで細くし薄く開いた口から牙を覗かせながら画面を操作する様は、禍々しさすら感じさせるような迫力があり、迂闊に声をかけたら喰われるのではと思わせる雰囲気がある。

しかしサリュ以外の人間は気後れする様も見せず、黙って続きを促した。

「プレイヤーとNPC同時進行で火消ししないと再燃します。

ギルド戦捌くのはそれから、ですかね。

多少ポイントが削られるのは諦めましょう、今、結構まずいですから」

画面から目を離さないまま語られた内容に、サリュ以外の三人は頷きつつ、各々が何事か考え込んだ。

事の始まりはつい先日。

ギルド員の間で、コジマがギルドを解体して引退するつもりらしいという噂が流れていることが四人の耳に入った。

もちろんそんな予定など無く、何を馬鹿なことをと四人それぞれが笑って否定したため、噂はそれで落ち着いたかのように見えた。

しかし一旦落ち着いた噂はいつのまにかギルドの外でもまことしやかに囁かれるようになり、それを耳にしたギルド員がまた不安がるといった悪循環が発生していた。

『愉快犯』のことでコジマが随分と落ち込んでいたことも噂に信憑性を持たせる結果となっただけらしい。

結果、ギルド員へ他のギルドからの勧誘が殺到し、解散される前の記念にとギルド戦の申し込みが急増することとなった。

ギルド戦は一定期間内に相手に返事をしなかったり、格下のギルドからの申し込みを蹴ると地味にギルドポイントが減るので、数が多くなればその影響は少なくない。

だがそのペナルティを受けても、今は噂の収束が先だとサリュは主張している。

普段なら対応出来る人間を外から呼んで、分担して事にあたることも出来ただろう。

が、今は生憎イベント中で、人が減ることはあっても増えることは無いのだ。

それでもシトロネラのが無ければ、十分に対処出来た範囲内だった筈だ。

しかしコジマへのフォローと、シトロネラの捜索に気をとられた結果、幹部四人がその噂に気付いたのは噂が十分に広まってしまった後だった。

そしてシトロネラが救出された今は、事の詳細を問い合わせる声とシトロネラの現在地を知りたがる野次馬もそこに加わり、救出後も不自然な程収束を見せないギルド解散論と共に、四人を悩ませることとなる。

「はあ、こんなこと言いたか無いけど、ほんとあのシトロネラって子、鬼門だわ」

椅子の背に寄りかかり、天井を見上げたままメルチエが呟くと、苦笑いしながらネジが肯定とも否定ともとれる言葉を返す。

「その子が悪いんじゃないかなあ。
確かに相性悪いわ、俺らとは」

そんな二人を笑顔でやんわりたしなめたアルローネは、サリュに

向かって大まかな役割分担を提案する。

「私はギルドの子たちのケアに廻るわね。

ほら、志保ちゃん、あの子気にしちゃってるのよね、噂聞いてすぐに私たちに伝えなかったこと。

サリュは情報集め、メルチェたちはNPCの火消しが妥当かしら」

そつと手を頬に添えながら、微かに首を傾げるアルローネに、サリュは微動だにせず応えた。

「いえ、NPCはアルが良いでしょう。

NPCの中のキーパーソン数人に接触してそれとなく噂を否定してください、分からなければ後でリストを送ります。

ついでにギルドの子も連れていけばケアにも役立つでしょうし、そこはアルに任せます。

メルチェはコジマについていてください。

これ以上何かあると不味いです。

場合によっては敵を作っても構いませんから、コジマをガードしてください」

それを聞いてメルチェは少し嬉しそうに笑い、すぐに表情を引き締め続く言葉に耳を傾ける。

「嫌かもしれませんが、コジマと『愉快犯』は引き離さない方向でお願いします。

『愉快犯』は抑えておきたいですからね。

ネジは各ギルドの幹部以上にあたってください。

ギルド戦のハンデをちらつかせても構いませんから、ギルド内で噂を否定してもらえよう交渉を。

あとは、そうですね、七海をマーク出来る人間も欲しいところですが」

そこまで喋ったところで、初めてサリュは画面から視線を外し、天井を見上げて大きなため息をついた。

「せめてリヨウキがポロが居れば良かったんですが、本当に間が悪いというか、やり方が汚いというか」

普段滅多に感情を表に出さないサリュウが、珍しく苛立ちを滲ませた言葉を呟いたことに、他の三人は軽く驚いてみせ、互いにさっと目配せをしてから、各々行動を開始するべく会議室を後にしようと立ち上がった。

「あ、そうだ、あのシトロネラって子たちはどうする？」

「心配しなかけとく？」

一番に扉に手をかけたメルチエが、振り返りつつ気乗りのしない様子で三人に問うと、サリュウがにやっと牙を見せて笑ってみせた。

「それは僕にお任せを、勿論七海の相手もね。」

メルチエたちは、一切気にする必要ありませんよ。」

それはサリュウが敵と見定めたものに向ける表情だ。

メルチエはその反応に満足気に頷いて外へとかけてゆき、アルと

ネジは苦笑いして肩を竦めるも、特に反論することもなくメルチエの後に続いて部屋から姿を消す。

「恨みは無いんですがね」

一人残された会議室で、ぽつりとサリュウが呟く。
かちかちと、どこからか取り出したキーボードを使って誰かにメールを書きながら、表情の抜け落ちた顔で、目の前の画面を見つめる。

「知らぬは罪、たとえ悪気が無くても。
せいぜい、役に立ってください。
僕たちの身代わりとして、困、としてね」

たん、と一際大きな音を響かせ、どこかへとメールが送信された。
後に残ったのは静寂だけ。
その中でまたサリュウは、黙々と別の工作を始めるのだった。

採取します（前書き）

難産でした。

話を進めたいので無理矢理捻りだし。

そのうち書き直します。

採取します

「俺、こうやって誰かとプレイしたことあんまりねえんだ」

こちらを直接見ることはせずに、ざつざと地面を蹴りつけながら
キーチくんは懺悔するかのごとく弱弱しい声で言葉を紡いでいった。

「だから加減が分からねえ。

どこまでやっていいのかも、どうすればいいのかも。

どうやったら一番いいのかも、全部分かんねえの。

別にお前に付き合うのは嫌じゃない。

プレイ初めのこと思い出すから、むしろ、た、たの、楽しい、し。

ああああ、だから、お前は好きにやりやいいんだよっ！

んで嫌なことははっきり言やいいんだ。

俺も、そうするし」

途中で照れくさくなったのか、急に声を張り上げ、ぎつとこちらを睨み付けながらそんなことを言うものだから、落ち込んでいたことも忘れふふふと笑ってしまう。

キーチくんはむっとしたように眉をひそめ、口を尖らせて何事か言おうとしたので、先にこちらが言いたいことを言ってしまうことにした。

「ほんとに、ほんとに嫌なことは言ってるね。」

キーチくんがわたしに合わせる必要なんて無いんだし。

調子乗んかって叱ってくんなきゃ、わたしますます調子に乗るか
らね」

割と本気で言ったことだったのだが、今度は逆にキーチくんにふんと鼻で笑われてしまった。

「別に、嫌んなったらそこらに置いてくし」

さうらりとそう言われたものの、きつとそんなこと出来ないだろう

と思う。

わたしが自分でうまく迷惑の度合いをコントロールしなければ、キーチくんは黙って受け取るだけな気がしてしまう。

それをキーチくん本人に告げたところで、反論されるだけだろう。つまり、そこはわたしが上手く見極めなければいけないのだ。

「じゃあキーチくん、今日も一日よろしく願います。

えっと、本は無くても大丈夫？」

かしまって深々と頭を下げつつ、先ほど頑なにわたしがいらな
いと言い張った本について話を向けると、少し悩んだ後にキーチく
んは首を振った。

「今日は採取した後はまた狩りに行くつもりだしな。

んで、金貯めて自分で買え」

それで良いだろと言いたげにわたしの方を少し見たので、結局こ
ちらの主張を通してしまったかと思いつつも素直に頷いた。

わたしの反応を見て満足げに笑ったキーチくんは、くると踵を返してさっさと街の入口に向かって歩いていく。急いで追いかけると、その背に追いつくか追いつかないかのところで、再びキーチくんが喋りはじめた。

「これは一人言だ。

あー、初心者プレイなんざ一回しか出来ねえ。

新キャラ作って新しく始めたって、知識は残ったまんまだ。

それをもう一度、疑似体験出来るんだ、初心者で隣で。

面白くない訳がねえだろ」

途中でつい話に割り込みそうになり、最初に一人言だと前置きしていたことを思い出して、慌てて口を閉じる。

「俺なりのチュートリアル終わったら、そっからは口出ししねえ。好きなようにやりゃいい。

ただそれに俺がついてくただけだ、それが今の俺のやりたいことってこつた」

一人言の割に随分と声が大きくて、おまけに誰かに話しかけてい
るようだけど、反応はせずに耳をすませる。

ほんのり耳が赤くなっているのも、気づかないふりをする。
ゲームを始めてから、ついていないことの連続だった。

腹の立つことも無かった訳じゃない。

だけど今この瞬間、ゲーム内での幸せ不幸せの総量を天秤にかけ
て比べたら、圧倒的に幸せの方へと傾くんじゃないかと思う。

「ありがとう、あ、一人言ね、一人言」

うふふと笑いながらキーチくんの背中にそつと言葉を投げ掛けた
ら、ぴくりと肩を震わせたあと、歩くスピードを早めてしまった。

その後ろをついてゆくわたしの姿を見ていたのが、NPCの人だ
けなのは幸이었다。

きつと、すごくにやけてしまりの無い顔をしていただろうから。

街を出る前に雑貨屋に立ち寄り、使い捨ての採取道具一式を購入
して、いざ採取へと向かう。

道具自体は20G前後でさほど高くなかったのだが、鍬にツルハシ、
斧に鎌の四種類もあったので所持金ギリギリだった。

ここはお金を稼ぐためにも、張り切って採取しようと思っていたが、スキルレベルが低いせいかなかなか上手くいかない。

一番最初の採取場所、ヨモギの群生地でキーチくんを見做って鎌を振るうも、三回に一回程度の割合でしか、手元にヨモギが残らない。

失敗した時ははらりと小さな粒になって、どこかへと飛んでいってしまう。

それでも鎌が壊れるまで振るった結果、20個のヨモギを採取することが出来た。

店で売ると1Gにしかならないらしいけれど、薬を扱うプレイヤーには5G程度で買い取ってもらえるらしい。

なんて説明と共にキーチくんから取引を持ちかけられ、100Gとヨモギ二十個を交換することになった。

交換の際、キーチくんが少し嬉しそうにしていたので、きっと本当に必要なものだったのだろうが、今のわたしにそれを判断する知識は無い。

互いに気を遣いすぎることなく遊ぶためにも、もっと色々自分でも勉強しなければと思いつながら次の場所に向かった。

鍬は誰が管理しているのか分からない、畑に実ったキャベツとジヤガイモらしき野菜を掘りおこすのに使った。

勝手に収穫して良いのかと思っただけで、鍬をふるっている最中、収穫し終わった場所から新しいキャベツがぬつと生えてきたのを見

て、なんとなく仕組みを理解した。

農業スキルを使って作った野菜と、フィールドに自生している野菜は形は同じでもその効果は全く違うらしい。

質の面で自生はスキルで作ったものに大きく劣り、店でも低価格でしか引き取ってもらえないようだ、料理には使えるようだ。

キャベツもどきとジャガイモもどきと、兎の肉と組み合わせた料理が幾つかあることを教えてもらい、早速帰ったら試してみようとはくほく顔でアイテムをしまった。

次の採取場所は少し街から離れた場所にあった。

少し間をあけて背の低い木と高い木が混じって群生する林は、薄暗く不気味な雰囲気漂っている。

奥に行くときアクティブモンスター、こちらを認識すると攻撃しなくても襲ってくるタイプの敵が居るということなので、林の入口で斧を振った。

木を斬り倒すと、自動的に枝を切り払われ、幾つかの丸太に分かれた状態で目の前に転がり、しばらくすると切株からよきよきと新たな木が生えてくる。

早送りで木の成長する様子が再現され、ほうと見とれつつ、転がった丸太をしまう。

丸太はさすがに重量があり、メルチエさんに貰った小さな袋を駆使しないと、収納しきることが出来なかった。

しかしぼんぼん小さな袋に丸太を放り込んでいると、キーチくん

に見咎められ、その出所を訊ねられる。

素直にメルチェさんに貰ったのだと答えると、キーチくんはものすごく不満そうに顔を歪めた後、小さな袋より一回り大きな袋を取り出し、ぐいとこちらへ押し付けてきた。

受け取れないと首を振り、返そうとすると、拗ねたようにぶいっとそっぽを向いてしまう。

「……んで、メルチェはよくて、俺は駄目なんだよ」

そんな風にぼつりと呟く姿があんまりにも可愛らしくて、つい流され受け取ってしまう。

しまった、とは思ったけれど、満足げに笑ったキーチくんの表情を見て考えを改めた。

わたしも、魔物笛を受け取ってもらえなかったら、がっかりしていただろう。

そう置き換えてみたら、頑なに拒むのも違う気がする。

お礼を言っつて、早速貰った袋に丸太をせつせと移し変えつつ、あまり意固地になりすぎないようにしようと密かに反省した。

休憩、後、狩り

最後に向かったのは、草原に点在している人の背丈より少し大きめの岩の所だ。

鉱石の採掘が出来るらしく、試しにツルハシを数度振ってみると、岩肌が削れ、周りとは色の違う石が姿を現した。

そのまま何度か続けて振ると、黒い煙が一瞬石の回りを取り囲んだかと思うと、しゅわしゅわと音を立てて霧散し、その姿を消してしまふ。

どうやら失敗したらしい。

気を取り直して再度挑戦してみたものの、また失敗だった。

「採掘は他の採取より成功率低いからな。

石が見えたらその周りを削るイメージで掘ると多少上手くいきやすい」

負けるものかとツルハシを大きく振りかぶったわたしに、隣で同じく採掘していたキーチくんからアドバイスが投げ掛けられる。

見れば既に足元に三つほど鉱石を散らばらせていて、四つ目の石

をがりがりとツルハシの先端で削っているところだった。

その動作を一通り観察してから、慎重にツルハシを動かす。

一度目はまた失敗してしまったけれど、二度目は小さいながらもちゃんと鉋石らしきものが取れた。

嬉しくなつて、地面に転がった鉋石を拾い、解析をかけてみる。

浮かんで来たのは、銅鉋石の破片との文字。

きちんとした鉋石で無いのは残念だけど、ヨモギ摘みや野菜の収穫に比べて達成感があるのは、その姿が見えない所から石が現れるからだろうか。

「そつといえばキーチくん、採取スキルいろいろ持つてるんだね」

採掘も先の三つの採取も、近くで一緒に行なっていたことを思い出し、次の鉋石を掘りにかかりつつ何気なく話しかける。

「ああ、基本の採取は全部20ちょい上げてる。

買うことが多いけど、こういうイベント中の気分転換用にな」

たまに採掘イベントもあるしな、と呟きながら、また一つ鉱石を掘り当てる。

見た目からして銅鉱石っぽい。

わたしはまた失敗して、黒い煙を発生させてしまう。

「採取と金属精錬スキルは一通り覚えておくと便利だな。

フリマはどこにでもはねえし、店では品切れなことも少なくない。調査したい時に出来ねえのは、不便だろ」

キーチくんも今度は失敗したようで、しゅわしゅわと手元から音をさせている。

20ちよつとあっても失敗するんだと思いつながらキーチくんの言葉に頷き、またツルハシを振るった。

結局、ツルハシが壊れるまでに掘れたものは、銅鉱石の欠片が五個に銅鉱石が一つだけだった。

今ひとつはかばかしくない成果だったが、キーチくんによれば悪くないらしい。

そんなものかと納得しつつ鉱石を袋に仕舞い、ついでにステータスで満腹度を確認する。

いつしか太陽はてっぺんから少し傾いている。

こんな時間まで、朝から昼食を取らずひたすら採取に励んでいた

せいか、既に50%をきりかけていた。

兎の肉は何枚か持ったままだけど、残念ながら調理していない。

一応食材だからそのままでも食べられる気はするけれど、逆に満腹度が減ってしまったら困る。

試しにちよつとかじってみようと、肉を取り出すのと同時に、いつの間にか離れたところに移動していたキーチくんと呼ばれた。

肉を握ったまま小走りで近づくと、地面が円上に剥き出しになっている場所の中心で、小さな焚き火が燃え盛っていた。

「休憩、と食事な」

そう言いながら、キーチくんは焚き火の周りに散らばっていた枝を拾い、ぐるりと肉を巻き付けて、火の側の地面にぶすりと挿し、どっかりと腰をおろす。

わたしもそれに倣い、肉を焼き、その前に陣取った。

「フィールドには、こんな焚き火のポイントがある。

焼くしか出来ねえけど、敵も近付いて来にくいから休憩には向いてんな」

肉はすぐに良い匂いをあげて色づき、ぽたぽたと肉汁を垂らし始めた。

キーチくんが手を伸ばすのと一緒のタイミングで取り、むしゃりとがぶりつく。

「んん、あれ、なんかあんまり美味しくないような」

見た目はフライパンで焼いた時より美味しそうに仕上がっているのに、いざ口に含んでみるとあまり汁気がなく、少しばさばさしていた。

「ああ、外での調理は精度落ちるからな。
調理器具使わねえと更に落ちる」

「ごくと口の中を飲み込んでから、キーチくんがそんな説明をしてくれる。」

ふむふむと納得はしたものの、外の焚き火で焼いた肉というわくわくするシチュエーションに見合わない味に落胆しながらもその口を動かしていると、見かねたらしいキーチくんスキルレベルが上がれば味も良くなると慰められ、調理スキルレベルを率先してあげようと密かに決意した。

「後は狩りしてくか。

兎一発で行けるなら、ちょっと上の行くぞ」

肉を食べ終わると、休憩もそこそこにキーチくんは立ち上がり、街とは逆の方向に歩いてゆく。

昨日はずっと街道の付近で狩っていたのだが、道からも外れ、ずんずん進んでいった。

周りにはちらほらとラビの姿が見えていたが、進むにつれ次第に別の姿も混じってくる。

ラビの姿が完全に見えなくなり、縞馬模様の小さめの牛と、ラビより少し大きな栗鼠ばかりになったところで、キーチくんは足を止めた。

まずは牛と栗鼠、両方に解析をかける。

牛のほうはカウル、栗鼠はチップという名前で、ラビと同じくあ

まり捻りがない。

意外なことに体力は双方とも似たようなもので、ラビの二倍弱程度だった。

これなら楽勝だろうと、キーチくんのお手本も待たずにカウルに挑もうとすると、ぐいっと後ろから服を引かれた。

「カウルには気をつけるよ。

近くで敵倒すと襲ってくる。

俺はもう少し奥に行くから」

そう言い残し、キーチくんは少し背の高い草が生えた場所をがさがさと音を立てて進んでいく。

変な人に絡まれないだろうかと一瞬心配になったが、キーチくんの向かう先には絶壁の岩肌がそそり立っているのがうつすら見え、よっぽど無制限の岩肌がそそり立ちから人が来ることは無いだろうと判断し、改めて敵に向かうことにした。

まずは、カウルの側に居ないチップの姿を探す。

ざっと見た感じ、カウルよりチップの数が多い。

おかげですぐに孤立したチップを見つけることが出来た。

草を食べるでもなくその場に立ち尽くし、何かをじっと見つめて

いる一体のチップに近づき、改めて解析をかけて体力を表示させる。
50/50と表示されたバーを確認して、ヨーヨーを構えたまま
じりじりとその距離を詰めていった。

狩りも終わり

ギリギリまでチップに近づき、狙いを定めてから、勢いよくヨーを投げつけた。

どすんという鈍い音がするのと同時に、体力表示のバーが半分強減少して、目を赤く光らせたチップがこちらに向かってくると低い声をあげる。

ヨーヨーを手元まで引き戻し、再度攻撃を仕掛けようとするも、その前にチップが小さな石らしきものをこちらにぶつけてくる。

避けたつもりだったのだが、私の身体の動きに合わせて石の軌道もぐにやりと曲がり、お腹でがっんと受け止める羽目になってしまった。

避けた筈の石に当たったことで一瞬頭が混乱しかけたが、もう一度チップにヨーヨーを投げ、止めをさした。

消える身体と引き換えに、その場に残された銅貨を広いながら、先ほどの現象について考える。

確かに、あの時わたしは避けた筈だった、にも関わらず、身体を中心に石を当てられてしまった。

もしや敵の持つスキルが関係しているのかもしれないと思いつつ、ステータスを開いてみると、新しく回避スキルが発現していた。

回避：1（回避確率0・1%上昇）

避けるのにもちゃんとスキルがいるらしいのは、現実での経験による差を出にくくするためだろう。

そんなに運動が得意では無いので、嬉しい配慮といえはそうだけれど、せっかく避けたのにその動作が意味を為さないのは少しつまらない。

今度はそんな不満を感じないためにも、反撃を受ける前に倒してしまつべく、技を取り入れてみることにした。

すぐ近くに居たチップに近づき、少し躊躇ってから、小さな声で
呟く。

「に、にににー、っ二連撃」

照れ臭さを我慢して思い切って口にしてみたのに、ヨーヨーはぴくりとも動いてはくれない。

自棄になってもう一度、最初より随分大きめな声で技の名前を叫ぶと、今度はきちんと反応があった。

構えたヨーヨーの先端がふわりと浮き上がり、目にも止まらぬ早さで二度、チップの身体を打ち据えた。

二度だと分かったのは、音で辛うじて判断出来たからで、視覚的には何が起こったかさっぱり分からない。

生憎それだけではチップを倒すには届かず、反撃を受けながらも一度ヨーヨーを打ち込み、完全に息の根を止める。

技のエフェクトが地味で今一つだと言っていたヨーヨーだけれど、そんなに悪くなかったように思う。

光ったりキラキラしたり、派手な効果音がついたりはしなかったけれど、あの速さは格好良かった。

すっかり気を良くしたわたしは、次のターゲットにも技を使う。

二連撃より上の、三連撃である。

多少吃りながら技の名前を叫ぶと、殆ど二連撃と変わり無い動きでヨーヨーがチップの身体へ打ち込まれ、その一撃であっさりと倒せてしまった。

それで調子に乗ったわたしは、すぐ近くのチップに向かって、ノリノリで叫ぶ。

「くらえ三連撃！」

しかし少し格好をつけて叫んだにも関わらず、ヨーヨーは何の反応も見せてくれず、ただわたしの声だけが空しく空に響くだけだった。

誰かが聞いている訳じゃないけれど、何の反応も示さないチップを見ていたら、急に自分の行動が恥ずかしくなって、一気に頬が熱を帯びるのが分かる。

おかしいなあ、なんてわざとらしく首を捻り、ぱたぱたと手うちわで火照った頬を扇ぎながらステータスを開こうとして、自身の魔力がごっそり減っていることに気づいた。

どうやら技を発動させるだけの魔力が足りなかったらしい。

早めに気づいていればあんな醜態はさらさなかったのにと一頻り悔しがってから、もう一度敵に向かう。

今度はまず、普通に一撃、通常攻撃を行なってから、間をおかず技を使ってみた。

ヨーヨーの先端がチップの身体を捉えた瞬間、二連撃を発動させる。

この流れは思いの外上手くいき、反撃を受けることなくチップを倒すことが出来た。

逆の流れも試してみたが、技を出した後通常攻撃する場合は、一度手元にヨーヨーを引き寄せてから再度投げねばならないため、こちらはあまり上手く行かず、あたふたしているうちに二度も反撃をくらってしまった。

技を二回続けて出す場合は、二連撃二度だと、一度目の技の後すぐに反応してくれなかったが、二連撃と三連撃の流れだとすぐにヨヨーが動いてくれる。

そんな風にチップ相手にあれやこれや試行錯誤していると、いきなり後ろから何かに突き飛ばされ、思わずバランスを崩して地面に膝をついてしまう。

一体何事かと首だけで振り返ってみると、ふんふんと荒い息を吐きながらこちらを睨み付けているカウルの姿があった。

わたしが体勢を立て直すのを暢気に待ってくれる訳もなく、再び勢いよく向かってこられ、そのまま数メートル程吹っ飛ばされてしまう。

一度に受けるダメージ量はそこまで多いわけじゃないけれど、このままだと反撃する前にやられてしまう。

次に吹っ飛ばされる前に、転がってなんとか身体の向きを反転させ、カウルと向かい合った状態でもう一度攻撃を受けた。

左手で顔を庇っていたせいか、今度はダメージは受けたものの飛ばされずに済む。

すかさず立ち上がり、カウルに駆け寄り、通常攻撃と二連撃を続けて打ち込んで、ようやく倒すことが出来た。

半分近く削られた体力を見て、途中で立て直せたことにほっと息をつき、他にこちらを狙っているカウルはいないか確認してから、自然回復がてらアイテムを拾ってゆくことにした。

ドロップアイテムはまだ一つも出ていないけれど、お金はラビに比べたら少し増えていて、一撃で倒せるようになったら随分と狩りの効率が上がりそうだ。

魔力が満タンまで回復したところで、技の試し打ちはやめ、狩ることに専念し始めた。

基本的には通常攻撃と二連撃の組み合わせで、魔力が切れかけたアイテムを拾いつつ、ひたすら狩り続けた。

途中で器用が増えたか玩具二のスキルレベルが上がったか、二連撃一発でチップもカウルも倒すことが出来るようになった。

アイテムは、チップからは毛皮、カウルからは牛の肉と牛の角が取れたが、その量は少ない。

狩っては拾い、狩っては拾いのローテーションを繰り返し、陽が傾き地平線の向こうへ沈みかけたころ、戻ってきたキーチくと合流し、道すがら敵を狩りながら街へと戻る。

わたしはいちいち銅貨やらアイテムやらを拾って居たのだが、途中からキーチくんが取り出した袋を辺りにかざすと、掃除機のようにアイテムが袋の中に吸い込まれていったので、目につく敵を狩るのに専念した。

特定のクエストをクリアしたらもらえるアイテム収集用の袋らしい。

羨ましいなああと呟いたら、そのうち取りに行こうぜとどこか得意気な様子で笑ってくれる。

その表情は幼い外見にぴったりな、まさに年相応なものだったので、可愛らしくて頬が弛んでしまいそうになる。

そんなにやつきを防ぐためにも、街の入口にたどり着くまで、黙々と敵を狩り続けた。

生産の時間

真つ直ぐ宿屋に向かい、部屋で戦利品を山分けする。

キーチくんは熊を狩っていたようで、お金の他に数枚の熊の毛皮と肉をいくつか手に入れていた。

昨日より狩っていた時間は短かったものの、ラビより強い敵を相手にしていたおかげか、収入自体はむしろ増えていて、二人合わせて2000G程度になった。

わたしが稼いだのは600Gと少しだけなので、二等分にするのは申し訳無い。

しかしキーチくん曰く牛の角はドロップしにくいためにそこその値がつくアイテムで、ついでに薬の調合にも使えるというので、手に入れた二本を無理矢理受け取ってもらう。

後は熊の肉と牛の肉を何枚か交換して、残りのアイテムは各々が狩ったものを取り分とすることで落ち着いた。

ほっと一息つき、料理を作ってみようかと食材を幾つか取り出し眺めていると、キーチくんからぽんと何かの本を投げて寄越される。

「基本レシピ。
攻略サイトに載ってるやつばっかだから」

わたしが口を開く前にそれだけ言って、さっさと作業部屋に引込んでしまった。

せっかくの好意なのでありがたく受け取り、ゆっくりページをめくる。

それは売っている本ではなく、わたしの雑記帳と同じくキーチくんが独自に書きためたノートのように、低レベルで作れる料理のレシピが幾つも載せられていた。

手順や必要な材料、気をつけるポイントまで丁寧に書き込まれている。

兎の肉とキャベツを使ったレシピを見つけ、早速試してみるべく作業部屋に移動する。

キャベツを千切ってフライパンに敷き詰めてゆき、底が見えなくなつたところでその上に兎の肉を乗せ、火にかける。

しばらくすると手元が光に包まれ、キャベツと細切れになつた兎の肉が炒められたものが現れた。

つまんで口に放り込んでみると、キャベツの甘さと肉の旨味がじわりと口の中に広がり、美味しさについてい目尻が下がる。

続けて食べようとするも、さすがにこれを手づかみで食べるのは抵抗があり、箸かスプーンは無いかとフライパン片手に各部屋を漁りにいく。

「どうした。」

「ああ、成功したか」

「そこそこあちこちを漁っているとキーチくんが様子を見に出てきて、わたしの手にある料理に気づき嬉しそうに微笑んだ。」

「うん、レシピすごく分かりやすかったよ、ありがとう」

「搜索の手を中断して、わたしも微笑み返す。」

「キーチくんは満足そうに頷いてから、ようやくこちらの行動を不審に思ったのか、軽く眉を寄せ首を傾げた。」

「食わねえの?」

なんとなく手づかみで食べにくいとは言いづらくて、あははと笑って誤魔化すと、キーチくんは不思議そうにしながらも、深くは追求せず自分の場所に帰っていった。

誤魔化せたのは良いが、どうしたものかとフライパン片手にその場に立ち尽くす。

と、不意に今日丸太を採取してきたことを思い出し、急いで機巧の部屋に駆け込み、丸太を一本取り出した。

この端を薄く削り出して鑢で整えれば、箸として使えそうだ。

自分の思いつきにすっかり機嫌をよくし、フライパンを脇に置いて鋸で丸太を切り出す。

少し太めになってしまったが、鑢で削るとそれなりに形になった。細かいものは摘まめなさそうだが、普通に食事をするには十分だろう。

手にとって数回空を摘まむ動作をし、ついでに試しとばかりに、機巧スキルを発動してみることにした。

左、右と順に作業台の上に箸を並べ、魔力を放出する。

「えーっと、箸、でいいかな」

遊び半分、きつと発動しないかと思っていただけなのに、ぽそりと眩くと二本の棒はきらきらと光に包まれ、少し動揺してしまう。

光の中から出てきたのは、紛れも無く箸で、さっきよりも表面が

滑らかになっており、ほんのり丸みを帯びていた。

「うわー、成功しちゃった」

明らかに完成度の上があった箸をしげしげ眺めていると、再びキイチくんが覗きに来た。

「さっきから何やってんだ」

「あ、キイチくん、みてみて、箸が出来たよー」

出来上がったばかりの箸をひらひら振ると、キイチくんは少し目を見開いた後、微妙にわたしから視線を逸らしながら、言いくそくに口を開いた。

「あー、食器な、受付に言ったら借りられるぞ」

告げられた内容に、ちゃんと聞いてみるべきだったと肩を落としかけるが、気にしていない風を装ってそのままフライパンの中身をつつき、キーチくんにも差し出してみる。

キーチくんは少し躊躇ってから、どこからか箸を取り出し、口に運んでくれた。

「ん、うまい」

なんとなく漂っていた気まずい空気はその言葉で和らぎ、キーチくんも心なしかほっとした様子で箸をしまつ。

「食器、借りたやつは外に持ち出せねえし、作っても全くの無駄なことばねえから……多分」

最後にフォローらしき言葉を残して、またそそくさと元の場所に戻っていった。

全くの無駄では無いけどきつと効率は良くないんだろうな、とはちらりと思っただけれど、とってつけたようなフォローが面白くて、さほどがっかりせずすんだ。

フライパンの中身をもしやりもしやりと咀嚼しながら、暇つぶしにステータス画面を開くと、また新しくスキルが発現していた。

採取は道具ごとにスキルが設定されているようで、四種もスキルが増えている。

一つに纏めれば良いのには思っけれど、細々と分かれているのも膨大なスキルの中から選択する楽しみのためと考えれば、これはこれで良いのかもしれない。

他には戦闘中に発現した回避スキル以外にも、機巧設計スキルなんてものもいつの間にか獲得していた。

「機巧設計……ああ、著！」

い。 どうやらキーチくんの言った通り、全くの無駄ではなかったらしい。

いきなり設計と言われても、からくりの仕組みを理解している訳ではないので、ハードルが高い。

しかしもしかしたら、木材や歯車はわざわざ本を買わなくても作れるかもしれないと思っ立ち、残ったフライパンの中身を一気にか

きこんでから、早速丸太を切り出しにかかる。

隠し部屋で散々木材に触っていたおかげで、大体の大きさは覚えていたものの、正確ではない。

きちんと測っておけば良かったのだが、今さら後悔しても遅い。一枚目は質の悪いものでも、大きさが分かれば良いかと割りきって、適当に形を整えた後に、さつさと仕上げにかかる。

魔力測定器を右手にはめ、ゆっくり魔力を注ぎながら名前を呟くと、たった2で光の色が変わった。

慌てて手の向きを変え、光が収まるのを末と、所々虫食いの跡がある木材が現れた。

すぐにその大きさを測り、作業台に直接数値を書き込んでから、次はそれに近づくように丸太を切り、丁寧に鑿で磨いていく。

最終的にはそのまま木材として使えるのではと思うくらいに綺麗に仕上がった。

果たして機巧スキルを使う必要があるのかと思っただけで、解析をかけるとアイテムの名前が切り出した丸太となっていたので、一応魔力を注いでスキルを発動してみる。

現れた木材は、見た目はわたしが仕上げたものからほぼ変化がなく、変わったのはアイテム名のみとなっていた。

「んんん、丸太のままじゃ駄目なのかな」

出来上がった木材を目の前に翳し、うむむと考え込む。

しかし考えて答えが見つかる訳でも無く、実際使ってみなければ違いは分からないだろうと結論づけ、次の材料作りに取りかかろうとし、ふと視線を感じて振り返る。

すると物陰からこっそりこちらを伺っていたキーチくと、ぱちり目が合ってしまった。

機巧スキルの使い道

「どうしたの、キーチくん」

気づかないふりをするには無理があるほどにしつかり目が合ったので、手にしていた木材を作業台に置いて尋ねると、キーチくんはせわしなく視線をさ迷わせて分かりやすく慌てた。

悪戯が見つかった子供みたいな反応だったので、重ねては問わず、少し視線を外して落ち着くのを待つ。

しばらく経って、むすりとしたしかめっ面を作ったキーチくんは、ようやく口を開いてくれた。

「何か、困ってねえの」

「どうぞやら心配して見に来てくれたらしい。
さっきの食器の件があったせいだろうか。」

その気持ちはとても嬉しかったけれど、今のところはまだキーチくんの手を借りなければいけない程に行き詰まってはいない。

「大丈夫だよ、ありがとう」

感謝の気持ちをこめてにっこり笑ってみせると、一瞬しかめられた眉がへによりと下がり、残念そうな表情を覗かせた。

その顔を見て、失敗したことを悟る。

じゃあいいと言って、そのまま去ろうとしたキーチくんの背中に、慌てて声をかけた。

「あ、やっぱり、聞きたいことが！」

何も思いついてはいなかったけれど、とりあえず引き留めると、キーチくんは少し嬉しそうな様子でこちらに近づいてきた。

じつと期待のこもった目で見つめられ、内心たじろぎながらも、必死で頭を働かせる。

「うん、えっとね、ほらあれ、採取道具！

採取道具って壊れちゃったけど、武器とか防具は壊れないのかな」

昨日今日とでかなり使用しているのに一向に壊れる気配の無いヨ
ーヨーのことを思い出し、聞いてみる。

ヘルプでは確か摩耗するとあった気はするけれど、よく考えたら
耐久度を確認する方法が分からないし、戦っている最中に壊れたら
困る。

咄嗟にはなかなか良い質問だと心の中で自分を褒めつつ、キ
ーチくんの答えに耳を傾けた。

「ああ、壊れるぞ。

物によって耐久度は違うけどな」

そっぴや言っでなかつたなと呟き、キーチくんは二本の杖を取り
出した。

形は同じに見えるが、片方は微妙に色がくすんでいるような気が
する。

わたしに見比べるように促して、再び話を続ける。

「残りの耐久知るにはまた特別にスキルがいるんだけど、壊れかけると微妙に色が変わる。

完全に壊れると武器は消えちまうから、捨てるつもりがなきゃその状態になったら使うのはやめた方がいい。

防具は消えねえけど、防御力とか加護が全部消えてただの服になる」

ふんふんと頷きつつ、手を振ってヨーヨーを出現させて眺めてみたが、比較対象が無いといまいちよくわからない。

「修理も金かかるし、レベル低い武器だと買い換えた方が安上がりだから、最初は消えるまで使っても問題ねえ。

代わりの武器は用意しとかねえと困るけどな。

防具はまあ、なんとかなるけどな」

確かに戦っている最中にいきなり武器が消え、素手となったならば非

常に困る。

格闘系のスキルもあるだろうけど、器用スキルでは役に立たないだろう。

明日早速武器屋で予備の武器を買おうと思うが、少々お金が心許ない。

何か作って売るにも、今のところ出来た材料は木材だけだ。と、そこで、さっき作ったばかりの箸の存在を思い出す。

「ねね、キーチくん、これって売れるかな？」

フライパンに乗せたままの箸を指差すと、キーチくんは黙って首を振った。

「素材はよっぽどレアじゃなきゃ売れねえよ。加工した素材は引き取ってすらもらえねえ」

「違う違う、これ、切り出しただけじゃなくて、ちゃんと機巧スキル使ったから、もう素材じゃなくなってる筈だよ」

どうやらキーチくんは、わたしがただ丸太を切つて箸の体裁を整えただけだと思つていたらしい。

少し驚いたように目を見開いた後、離れた場所からわたしの作った箸に解析をかけ、ちよつと目を輝かせた。

「本当だ、ちゃんと道具になつてるな。

あんまり高くは売れねえけど、丸太から作れる割合考えたら結構効率いいんじゃない」

機巧スキルつてなかなかいいじゃん、何故かキーチくんが嬉しそうに微笑んだ。

なるほど、初心者がお金を稼ぐにはうってつけの職であるような気がする。

しかし作業部屋に専用部屋が無いから、そこまで人気のスキルでもなさそうだ。

果たしてどれくらいの機巧スキル人口はどれくらい居るのかと興味本意で尋ねてみると、その答えは殆ど居ないというなかなかシビアなものだった。

「機巧はなあ、戦闘に使えるの少なえイメージだから。

ステータスの伸びも良い方じゃねえし、地味だし、NPCにも人気がなさそうだし」

「NPCに人気とかあるの？」

人気が無いのもステータスが伸びにくいのも残念だが、それより最後が気になって、そこに食いつく。

「ああ、NPCが成長するつつつたる。

そうという街で露天開いてるとたまにNPCが買いに来ることもあるし、薬とか結構売れるぞ」

それはなかなか面白そうだ。

同時に図鑑に載っていたいろいろな道具を思い出す。

あまり実用的なものは少なかったが、枕やドライフラワーはNPCにはウケが良さそうに思える。

逆にプレイヤーには全く売れなさそうだけれど。

イメージが先行して人気が無いのかなと考えていると、キーチくんが慌ててフォローをしてくれる。

「でも結局は自分に合うか合わねえかが大事だし、ステータスは他
ので補えばいいし。」

俺はいいと思う、その、機巧」

別に落ち込んではいなかったので、気を回させてしまつて悪いと
は思いつつ、素直に礼を述べる。

他に聞きたいことは、と無言のまま視線で問われるものの、既に
箸を作ることに気がいつていて思いつかない。

どうしようと内心焦っていると、キーチくんから何も無いなら機
巧スキルを見せて欲しいと言われ、喜んでそれを受けた。

さつき木材を作った時に余った木切れから適当な長さのものを二
本選び、軽く鑢で整えてから順に作業台に並べ、魔力を注いで名前
を呼ぶ。

じつと手元に視線を注がれているのは恥ずかしかったけれど、失
敗することなく完成させることが出来た。

「出来たよキーチくん」

はい、と完成した箸をキーチくんに差し出すも、その視線はわたしの手に固定されたままだった。

「それ、何だ」

箸を通り越してぴっと指差されたのは手に嵌めた魔力測定器で、外して手渡すと興味深そうに眺めている。

「結構あっさり作れるんだよ、それ」

あんまりに熱心に見つめているので、少し照れくさくなり、えへへとおどけながら説明すると、ぱっと顔を上げこちらで見たキーチくんは、キラキラした眼で見つめられた。

「これ、俺にも作ってくれないか。
勿論金はちゃんと払うから」

今までで一番興奮しているキーチくんの姿に驚き、何度もこくくと首を縦に振りながらも、あんなにあっさり作れたものにこんなに興味を示すことを少し不思議に思う。

「魔力測る機械って無いの？」

「いや、ある」

聞けば即座に否定され、では何故と更に疑問が募る。
そこではっと我に返ったらしいキーチくんは、恥ずかしそうに視線をさ迷わせながらも、説明してくれた。

「あるんだけど、設置型だから使いにくいんだよ。」

俺がやってる無言詠唱、魔力のコントロールが結構繊細だから、手袋だとすっげえいい」

照れくさそうにしながらも、その手にはぎゅっと手袋を握ったまままだ。

あまりに微笑ましい様子に、つい表情が緩んでしまう。

「ん、いいよ。」

材料無いからすぐは無理だけど、雑貨屋に売ってたかな」

すぐに期待に応えたくて、雑記帳を捲って材料を確認する。

歯車五個と針金一本で、最悪金属板があれば作れそうだ。

その旨を伝え、早速雑貨屋へ行こうとすると、キーチくんが代わりに俺が行くと、止める間もなく飛び出して行ってしまった。

その素早さにぼかんと呆気にとられたが、すぐに可笑しくなり、ぷっと吹き出してしまふ。

「かーわいいなあ、キーチくんは」

くすくす笑いながら、丸太を削って箸を作る。

質の良い魔力測定器を作るべく、機巧スキルのレベルを少しでも上げる努力をしながら、キーチくんの帰りを待った。

閑話：不協和音

「やっば、うますぎ」

「聞こえるぞ、言いたくなる気持ちは分かるけどな」

とある山岳地帯にて、広域魔法で辺りの敵の体力を削りつつ、剣と槍を振り回して止めをさしてゆくコジマと『愉快犯』の後方で、口元に笑みを浮かべたシオリーナとギギアルが、そっと囁き交わした。

彼らの役割は、回復と支援、そしてドロップアイテムの回収で、反撃を気にせず突っ込んでゆく前衛のために、絶えず魔法を唱え回復アイテムを惜しみ無く利用しているが、その支出を補って尚余りある収入に、合間を縫って軽口を叩きたくなるのも道理であった。

「さっすが、課金率トップクラスは違っわねー」

狩りを始める前に、『愉快犯』のメンバーが使ったのは、一時間アイテムドロップ四倍とスキルレベル上昇率四倍、更には敵の出現スピード八倍の、計20000円分の課金アイテムだった。

その効果は目を見張るものがあり、既にアイテム収集用の袋が一つ、いっぱいになっている。

なかなか手に入らないとされているレアアイテムもかなり集まっており、この後の分配が楽しみで仕方ないと、シオリーナは彼らから離れているのを良いことに、いやらしく歪む口元を隠そうともしない。

「ほら、しっかりと働いてアピールアピールと」

ステータスアップの魔法を前衛の五人にかけ、ついでに敵の近くにトラップ魔法を仕掛けながら、ギギアルがシオリーナの背中を叩く。

シオリーナよりは冷静さを保っている風だったが、その口元はシオリーナと同様につり上がっていた。

シオリーナもギギアルも、後方支援に向けたスキルを好んで取得している。

多少スキルレベルが低くても有用な補助と回復の魔法は、誰かに寄生するにはぴったりのスキルだった。

やがて敵の現れる間隔が空くようになり、課金アイテムの効果が切れたところで、前衛の五人が二人の元へと戻って来る。

いち早く駆け寄ってきたトロイが、ぎゅっとギギアルに抱きつき、キラキラした目で二人を見上げた。

「すごいすごい、二人ともすごい支援うまい！」

ボク、こんな狩りやすかったの、久しぶりだよおっ！」

えへへと笑って惜しみ無い賞賛を送るトロイに、二人が謙遜してみせたが、遅れてやってきた他のメンバーも次々に二人を手放しで褒め称える。

トロイはコジマの姿が見えると、ギギアルから離れその腕に抱きつき、二人の活躍を懸命に話し、コジマはその頭を撫でてやりながらうんうんと頷いた。

「定期的にパーティー組もつぜ、これからも」

ニカツと笑って握手を求めたのはレオンで、その言葉を受けたシオリーナとギギアルは、控え目に微笑んで握手に応えた。

「せっかくだからあ、場所変えてもうちょっと狩りましょ？」

ぼつぼつと新たに沸いてきた敵を魔法で攻撃しながら、セイレーンがそう口にするのと、一緒に敵に攻撃を放っていたエルフの青年、ノルディックもそれに同意し、コジマとシオリーナたちに視線を向けた。

「いいよー、あ、でもちよっと待って」

すぐに頷いたシオリーナだったが、途中でわざとらしく言葉を切り、メニュー画面を開いて掲示板を確認し、あからさまにがっかりしてみせた。

「どおしたの？」

それに釣られたセイレーンが首を傾げてみせると、シオリーナは眉を寄せ力なく笑ってみせた。

「ん、ほら、シロちゃん。

目撃情報とか無いかなーって、ね」

まだ無いみたい、と呟くと、浮わついた雰囲気が一転して引き締まり、どこか気まずい空気が漂う。

特にコジマの表情は厳しいものとなっていて、トロイを始めとした愉快犯のメンバーはその顔色を恐る恐る伺っていた。

「うちのギルドからも、情報は入っていない。
無事だといいたが」

ため息をついて、首を振ったコジマに、ギギアルが慌てた様子でフオローを入れる。

「七海が一発芸のギルマスに合わせて写真撮らせたいって言うから、安全は確保されてると思うよ。

被写体には丁寧だから、あそこは」

本当は被写体云々は言っていなかったのだが、さもそれが真実であるように話すと、コジマは厳しい顔をしつつも軽く頷いた。

「被写体でいるうちに見つけられたらいいのだが。

下手に手を出すと事態が悪い方へ行くかもしれない。

本当に、あいつらは難しい」

ぼつりとコジマが呟くと、トロイがそれに同調する。

「ほんとーにね、どこつついちゃダメかわかんないもーん。
だいじょぶだよこおちゃん、メルちゃんたちが動いてくれてるん
だからっ」

ね、とトロイが笑いかけると、ようやくコジマも表情を緩め、う
っすら微笑んでみせる。

「でもあれだな、メルチエたちもひどいよな。
コジマと引き換えに俺たちに牽制だもんよ」

レオンがからから笑いながら、ぱんっとコジマの背を叩くと、コ
ジマは少し眉を下げ、バツが悪そうに視線をさ迷わせる。

「『しばらくコジマと一緒に居ていいから余計なことはすんなー』」

って、コジマがトップなのに、なあ」

「うんうん、ひどいよー。」

ね、こおちゃん、このままずーっとボクたちと一緒に居ようよ。

ボクならメルちゃんたちより、もっともーっとこおちゃんのこと、大事にするよ？」

きやつきやと無邪気に引き抜きを提案され、心底困った様子のコジマに視線で助けを求められ、シオリーナが動いた。

「メルチエちゃんたちに叱られちゃうよっ！」

ほら、セレちゃんにノルくんが大変だから、移動しちゃお」

沸いてくる敵を黙々と狩り続けていたセイレーンとノルディックを指差し強引に話を遮ると、トロイとレオンはあっさりコジマから離れ、地図を広げて次の狩場について相談し始めた。

解放されたコジマはほっとした様子でシオリーナたちに近づき、軽く頭を下げて礼を言う。

「助かった。」

あれ以来しおらしくて、悪戯もしてないから、あまり無下に来なくてな」

苦笑いしながら手持ちのナイフを投げ、セイレーンたちを援護し始めたコジマに続き、シオリーナもトランプ魔法でじりじりと敵の体力を削りつつ、同調してみせ、シロへの気遣いを口にする。

「シロちゃん、泣いてないかなあ」

軽く唇を尖らせ俯いたシオリーナの頭をギギアルがぼんぼんと叩いて、慰める様子を見せると、コジマは目を細めて穏やかに微笑んだ。

「本当に仲良くなったんだな。」

短い間で、大したもんだ、なかなか出来ることじゃない」

口にしていたのが七海やメルチエなら、嫌味にしかならなかっただろう言葉だったが、心底感心している様子のコジマから放たれると、純粹な賞賛の響きしか含まれていない。

シオリーナはそれに、軽く怯んだ様子を見せた。

「ん、まあ、ね。」

「あ、あたし、向こう行くね」

ひきつった笑顔を浮かべたシオリーナがコジマから距離を取るように離れていくと、ギギアルもそれに続き、コジマは少し首を傾げて見送った後、本格的に周囲の掃討に専念し出した。

「」
「どうした」

コジマたちから十分距離を取った場所で、アイテムを使っていた

シオリーナにギギアルが声をかけると、むすつと機嫌の悪い顔で口を開いた。

「だって全然、何にも疑ってないんだもん。
で、あの表情だよ。」

ヤバイ、ちよつと分かつちゃった、コジマ様の人気の一端」

不機嫌な表情はそのままに、うつすら頬を染めてコジマの後ろ姿を見つめるシオリーナを、ギギアルは皮肉げな笑みで嘲笑う。

「なに、あっさり落ちちゃうの、お前が？」

馬鹿馬鹿しい、と言外に含ませた口調で吐き捨てると、シオリーナはぎろりとギギアルを睨み付けた。

「そんなんじゃないわよ、馬鹿にしないでっ」

ふんつと忌々しげに鼻を鳴らして、離れていくシオリーナの背中を見つめるギギアルの視線は、ひどく冷たいものだった。

「これだから女は」

心底馬鹿にしたように呟き、すぐに表情を穏和なものへと変え、未だ結論の出ないトロイたちの元へと近づいていく。

「そろそろ切り捨て時かな」

にこにここと笑いながら、こっそり吐き捨てた言葉には、何の色もついていない。

誰にも聞こえなかった筈の言葉は、しかし、こっそりと捉えられていたことに、ギギアルが気づくことはなかった。

作る楽しみ

箸を十膳ほど作ったところでようやく、キーチくんは帰って来た。勢いよく出かけた割に結構ゆっくり帰ってきたなと思いつつ、差し出された材料を受け取る。

「歯車は売ってなかった」

口をへの字に曲げて残念そうに呟くキーチくんは、大丈夫大丈夫と笑いかけ、早速金属板からの歯車作りに取りかかる。

作業台に歯車の大きさは型どっておいたから、かなり正確なものが出来そうだと、機嫌良くふんふん鼻唄を歌いながら、コンパスで金属板に幾つも円を描いていく。

キーチくんはわたしの横で、きらきらと期待のこもった目で作業を見守っている。

しかしまだまだ完成までの道のりは程遠いので、円を描きながらしばらく歯車作り専念する旨を伝えると、ちよつとがっかりした様子で自分の場所に引っ込んでいった。

「あ、そうだ、箸な。
10Gちよっとで売れそうだが」

途中くるつとこちらを振り返り、ついでに調べてきてくれたらしい情報を教えてくれた後、早足で去ってゆく。

慌ててありがとうとその背に告げながら、質の良いものを作るぞと改めて気合いを入れた。

歯車の歯の数までは記していなかったので、一つ目は形を取るだけに留め、手早く仕上げる。

機巧設計は滞りなく發揮されたようで、色はくすんでいるものの、歪みの無い歯車が出来上がった。

羽ペンでその形を作業台に直接なぞって描きこんでから、丸く切り出した金属板と歯車を重ねあわせ、形をそれに合わせて削っていく。

元になる形があるというのはやはり便利なもので、かなり早いペースで歯車の形を模したものが出来上がっていった。

失敗した時のことも考えて、少し多めに作ってから、まず一つ、丁寧に仕上げる。

出来上がったものは、一番最初に作ったものよりは光沢のあるものだったけれど、しかし隠し部屋で作った大きな歯車の質より劣っ

ているような気がしてならない。

「うーん、厚さが足りてないからかなあ」

歯車と金属板を並べて比べると、厚さが三倍程違う。

機巧スキルが上がれば自ずと質は上がっていくのだろうけれど、今すぐ良いものを作るにはそれではいけない。

むむむと唸ってから、試しに歯車型の金属板を三枚重ね、それで機巧スキルを実行してみる。

先ほどは魔力は2しかいらなかったのに、きっちり三倍の6吸いとったところで光の色が変化した。

現れたのは、やたらとキラキラした歯車だった。

「よし、成功。」

でもこれ、材料消費激しいなあ」

特別な時以外は普通に作ろうと思いながら、残りの歯車を完成させてゆく。

多少ばらつきはあったけれど、ある程度の質のものが五枚仕上がったところで、次の作業に移る。

針金は全く長さを測っていなかったなので、また最初は形を取るためのものを作った。

歯車より形が簡単なおかげか、型どり用のものでもかなり質は良さそうだ。

それに合わせて改めて金属板を切り出し、針金を作ると、その細さにも関わらずきらりと光っているのが分かるような、とても良いものが出来た。

これは良いものが作れそうだと、改めて雑記帳で魔力測定器の作り方を見直しながら、歯車を重ねて針金に通す。

後は名前を呼んで魔力を注ぎ完成させるだけ、というところにきて、わたしは手を止めて考えこんだ。

これでは凶鑑そのままをなぞっているだけだから、何か工夫をして質を良くしたいところだけれど、分かりやすい形のものとは違って魔力測定器はどのような仕組みになっているのか分からない。

下手に手を加えると逆に質が下がってしまうかもしれない。

工夫すべきかやめておくべきか、しばらく悩んでから、針金を手の形に曲げて、指先に当たる場所に一つずつ、歯車を配置してみることにした。

そうすると針金の長さが足りなくなってしまうため、物は試しと長い針金を作ってみると、上手い具合に出来上がった。

これは幸先が良いと意気込んで、自身の手の形に合わせて針金を曲げてから、重ねた歯車を通し、それぞれ配置していく。

「上手くいきますように、魔力測定器っ」

祈りと気合いを込めてぐぐくと魔力を注ぐと、12とかなり取られたところでようやく光の色が変化した。

失敗の色でなかったことにほっと安堵の息を吐きながら、現れた魔力測定器を手にする。

残念ながら見た目は今わたしが使っているものとさほど変わりはない。

きちんと動くか確かめるため、試しに使ってみようとした時、キイチくんが飛び込んできた。

「で、出来たのか？」

期待のこもった目で見つめられ、たじろぎながら頷き、魔力測定器をそっとキイチくんの方へと差し出す。

「まだ試運転してないから、使ってみてくれるかな？」

駄目だったらまた作り直すからね、と言いかけたところでキーチくんが嬉々としてそれを受け取り、早速使い心地を試して、更に顔を輝かせた。

「おおっ、すげえじゃんこれ！」

小数点以下まで出てるぞっ！」

きゃっきゃっとはしゃぎながら、満面の笑顔ですいと手の甲を差し出してくるキーチくんを微笑ましく思いながら、自分の目でも確認してみると確かに、小数点以下二桁まで表示されている。

しかもわたしのと違って、漢数字でなく、ちゃんとアラビア数字になっていた。

「すっげえ、いいよこれ、ありがとうな！」

にこにこ笑ってそんなことを言ってくれるから、わたしもつられて笑いながら、少し首を傾げる。

歯車が手間をかけないと質の高いものが出来ないくらいのレベルの機巧スキルなのに、魔力測定器はこんなに良さそうなものが作れるなんて、少し変な感じがする。

良いものが出来るに越したことはないけれど、なんとなく釈然としない。

やがて一頻りはしゃいで落ち着いたキーチくんがそんなわたしの様子に気づき、どうしんだと尋ねてきたのでそのまま疑問をぶつけてみた。

「ああ、それは多分、設計レベルが低いからだろ。」

後はスキルに使える道具系は難易度低めになってるしな、その代わり店ではあんま値段つかねえけど」

あっさりわたしの疑問に答えを出してくれたキーチくんがさらに説明してくれたことによると、設計に頼った生産は設計スキルのレベルの影響を思いきり受けてしまうらしく、ある程度のレベルに到達するまでは、既存のレシピを使った方が質は良いらしい。

更にはレシピを本からではなく、人づてにでも知ってしまったら、既存のレシピと少し違う材料手順で設計した場合ですら、設計ではなくただの生産になってしまうこともあり、既存レシピにはプレイヤーが発見したものも含まれるというかなりややこしい縛りの

ある設定のため、設計スキルは育てるのが面倒なものとなっているようだ。

「なんか、早い者勝ちなスキルなんだねえ」

「ま、名前変えちまえばいいんだけどな、あんまりイメージとかけ離れてると失敗するし。」

早い者勝ちっちゃ早い者勝ちだな」

現金つぎ込めばスキルレシピの記憶消せるけどな、と教えてくれたけれど、今のところ課金するつもりは無いので、機巧設計を育てるならばなるべく機巧スキルのレシピを知らないようにするのが良さそうだな。

「スキルレベルが上がるとき、過程省けるってあったけど、そういう場合はどうなるの?」

「一番作った回数が多いレシピが採用される。」

だから過程省くには最低一回はちゃんと生産しなきゃ駄目なんだ」

ふむふむ、と頷いて一通りの話に納得すると、キーチくんはまたにっこり笑って魔力測定器を眺め出した。

目まぐるしく数値が変化しているから、そんなに喜んでもらえるところちも嬉しい。

しばらく魔力を操って遊んでいたキーチくんだったが、わたしがここにこして眺めているのに気づくと、ぽっと赤くなって逃げるように作業部屋を出て行ってしまった。

「あ、明日の予定聞くの忘れた」

今から追いかけていくのもなんとなく気まずい。

とりあえず一日中狩りをしていても大丈夫なように、新しい武器をそろえる資金を作っておこうと、箸をもう少し生産することにした。

ダンジョンの準備

十五日目。

昨日はあれから十膳程箸を作ってから、ブログを書いてそのまま眠りについた。

少し早めにセットしていたアラームで、朝の五時に起きる。

まだ太陽は昇っていないようで、部屋に備え付けられた小さな窓からでは外の景色が見えない。

枕の側に居たタロウを抱え、昨日作った箸と、機巧スキル用の道具を収納してから、音を立てないようにこっそり部屋を後にする。

宿の受付には誰も座っておらず、まだNPCの人は活動していない時間なのかと思いつつ、雑貨屋までのうす暗い道をタロウと共に歩く。

「ほらタロウ、これが街だよ、あそことは全然違うでしょ」

誰も居ないのを良いことに、目に映るものについていちいちタロウに説明しながら、しんとした朝の空気を楽しんだ。

地平線の向こうはぼんやり明るくなりかけていて、空の色が変わ

っている。

その光景がよく見えるようにと、雑貨屋の外の看板の上にタロウを座らせ、一人で中へと入った。

雑貨屋にも店員は居らず、ただひっそりと商品が並べられていて、なんだか独特の雰囲気があった。

箸を一膳取り出してシヨップと呟けば売買用の画面が現れたので、画面を操作して一気に箸を売り払う。

一番高いもので12G、安いもので10Gで買い取ってもらえるらしく、全部で235Gの収入になった。

もう少し高額になるかと期待していたのだけれど、まだそこまで質は良くないらしい。

ついでに持ってきた機巧用の道具の買取の値段も調べてみたが、キーチくんが言っていた通りどれもロクな値段がつかず、高いものでも8Gが良いところで、殆どは1Gかもしくは買取不可だった。

雑貨屋は色々な品物が置いてあって、眺めているだけでも楽しく、うっかり手に取ってしまうと使い道も分からないのに欲しくなってしまう。

1400G少しの手持ちは出来たものの、まだ無駄遣い出来る程の余裕も無いので、機巧に使えるような品物の名前と値段を、ブログの記事をメモ代わりにして書き留めておくだけにした。

店の外に出ると、丁度太陽が顔を出し終わっていて、街が明るくなり随分と雰囲気が変わって見えた。

まだ住人NPCの姿は見えないけれど、光に照らされただけで、生きている感じがする。

タロウを連れ、武器屋への道すがら、きよろきよろとあちこちを観察すると、住人の家にもそれぞれ特色があることに気づく。

洗濯物が干されていたり、花が飾られていたり、一軒一軒微妙に違っていて、まだこちらからのコンタクトには反応してくれないものの、きちんと個性はあるんだなと思うと嬉しくなった。

武器屋では今使っているヨーヨーと全く同じものを購入した。

その一つ上のものとなると桁が二つはねあがってしまうので、まだ手が届かなさそうだ。

早速、新品と装備しているヨーヨーを比べてみる。

しかし色の変化は見てとれない。

そう思えば違うような気もするけれど、ぱっと見ただけでは判断出来そうになかった。

うっかり取り違えないように、新品のヨーヨーをしまい、ようやく用事を終えたわたしは、タロウに話しかけながらのんびり宿へと引き返した。

「なんだ、起きてたのか」

宿に戻ると既に起きていたキーチくと最初の部屋で鉢合わせした。

おはようと言葉をかけると軽く笑ってくれたものの、途中でぴきりとその表情がひきつってしまふ。

一体どうしたのかとその視線を辿ると、その先にはタロウの姿があった。

急いで後ろに隠したものの、微妙に気まずい空気が流れる。

「いや、別にそういう趣味が悪いってんじゃないくて、驚いたっつーか、予想外ってどうか」

慌てたようにキーチくんがフォローしてくれたけれど、わたしも友達が人形を抱いて朝散歩している姿を目撃してしまったら、多分ぎよっとすると思う。

タロウがどういう存在か必死で説明すると、納得したような顔はしてくれただけれど、逆に自分がダメージを受けてしまった。

これでは人形に並々ならぬ肩入れをするちよつと変な人である。はつきり言わないだけで、きつと引かれただろうなあと落ち込んでいると、キーチくんは全く別な観点から助け船を出してくれた。

「ペットスキル取れば、人形連れ回してても、んな変じゃなくなるから。」

「多分」

そのままキーチくんの話を知ると、モンスターや精霊、武器に意志を持たせることの出来るスキルがあるとのことだった。

面白そうだし是非タロウとお喋りはしてみたいが、人形がペットってどうなのだろうと問うてみればそつと視線を外された。

「後は人形で攻撃出来るスキルがあるけど、それは人形が壊れるからな。」

「ま、あんまり気にすんな」

とても優しい眼差しで微笑まれ、しばらくタロウには部屋で待機しててもらおうと心に決める。

後ろ手にタロウを隠したまま、密かにしまってから、平静を装って今日の予定を尋ねた。

「今日はクエスト受けつつダンジョンに行く。」

「それが終わったら、チュートリアルは一通り終わりだな」

ダンジョンにはあまり良い思いが無いが、キーチくん主導なら大丈夫だろうと素直に頷く。

キーチくんは、わたしの返事を確認すると満足そうに頷いてから、部屋の中央にある机にダンジョンに必要な道具を並べ、一つ一つ丁寧に説明し始めた。

今までよりも気合いが入っているように見え、そういえばシオリーナさんがキーチくんを連れて来たのはダンジョンに詳しいからだったなんて考えながら、ふむふむとその説明に聞き入った。

最低限必要なのは、ランタンにロープ、目印用の苔で、この三つが無いと探索どころでは無いらしい。

「地図があれば苔はいらねえけど、誰かが攻略した地図なぞるなんてつまんねえだろ」

うきうきと言い切ったキーチくんは特に反論する点もなかったのだ、素直に頷くと嬉しそうに何度もそうだよな、と呟いていた。

それだけダンジョンが好きなのに、キーチくんはダンジョン探索用のスキルは殆ど取ってないらしい。

ランタンもロープも、罨外しも、スキルで補えるのだけれど、それじゃつまらないからいちいち道具を使って臨むのだという。

ダンジョンについては初心者を使うものと同じものを使っているから、参考になると思うと言ったキーチくんは、照れ臭そうではあったけれどどこか誇らしげだった。

一通り説明が終わり、必要なものを今の手持ちで準備出来るか考えていると、机の上のものをこっそりこちらに押しやり、さらにはお金も取り出して寄越そうとしているキーチくんに気づき、慌てて止める。

多少ならお金はあとアピールすると、笑って首を横に振られた。

「魔力測定器の代金、4000G分つてとこだ。

そんなに破格じゃ無い。

普通の魔力測定器でも2000Gはするしな」

適正価格だと笑顔で言われてしまえば、確認する術が無い。

そつだ情報掲示板で確かめれば良いのではとはっと閃き、メニュー画面を開こうとすると、慌てたキーチくんに止められた。

「上乗せなんてしてねえよ。」

いつかばれるんだし、お前の性格も少しは分かってるつもりだから」

メニュー画面へと伸ばした腕をがしりと掴まれ、真剣にそう言われたら、頷くことしか出来ない。

何度もお礼を言ってから、ありがたく頂いた。

「あれだね、失礼だった、ごめんね」

ともすれば低く見積もられているのではと勘違いしていると誤解されかねない行動だったことに気づき、頭を下げると何故かキーチくんは、苦笑いして少しわたしから視線を外した。

「掲示板の使い方もそのうち教えるから。」

今は開くな、攻略情報なんか見ちまったら面白さ半減だろ」

こちらを見ずに告げたその言葉には、額面通りではないものも含まれていそうだったけど、確かにと納得してみせ素直に画面を閉じた。

探索開始

目的のダンジョンは昨日狩りや採取をした平原とは街を挟んで反対側にあった。

門を出てすぐのところ、古井戸がぽつんとひとつ存在していて、そこが入口だと教えられ少々驚いた。

中に入る前に、街の出口に立っていた門番の人に声をかける。

クエスト、という単語にあからさまな反応を示した彼が口頭でその内容を告げると、勝手に画面が展開され十個のクエストが表示される。

随分沢山あるんだなと思いつつ、隣のキーチくんの画面をちらりと覗くと、わたしの数倍はあろうかという量のクエストが並んでいた。

「うわ、すごいねキーチくん」

自分のものと見比べつつ、素直に感嘆の声をあげるとキーチくんは少しはにかんでみせた。

「これくらいお前のもすぐ増える。
それよりほら、確認しろ」

促されるままに一番上に表示されていたクエストの文字に触れると、詳しい内容が表示される。

『バット討伐クエスト』と銘打たれたそれは、指定された敵を規定数倒して報酬を得るという、MMOにはよくあるタイプのクエストだったが、その条件付けが少し変わっていた。

期間がダンジョンに入ってから出てくるまでの間、となっているのだ。

普通なら何日以内とかでありそうなのに、随分と曖昧な条件だと首を傾げつつ、十体倒して報酬が20Gと安めだったので、失敗はしないだろうと軽い気持ちで受諾ボタンを押す。

しかし早まったようので、キーチくんに軽く叱られてしまった。

「馬鹿、ちゃんと説明読んでねえだろお前。
失敗した時のペナルティも確認しろよ」

ぎろつと睨まれ慌ててもう一度説明に目を通すけれど、報酬以外のことは書かれていない。

ペナルティは無いみたいだよと答えれば再び馬鹿と呟いてから舌打ちをされ、次のページがあることを教えられる。

画面の右下にはページ数が書かれてあるだけだったけど、触れると確かに画面が変化した。

その表示があるのは即ち二ページ以上存在しているということらしい。

そこにあつたのはペナルティとクエストの敵の出現地域で、失敗した場合はクエスト提供者の心証がダウンすると書かれてあつた。

「心証が上がると受けられるクエストが増える。

殆どのクエストは達成すれば心証は上がるようになってるけど、下がるクエストは注意書きあるから気を付けるよ。

下げて受けられるクエストとか称号もあるけど、基本は心証上げてくのが基本な」

ふむふむと頷きながらちらりと門番の方を伺ったけれど、その表情はぴくりとも動いておらず、こちらをどう思っているかはさっぱり分からない。

「隠しステータス、多いんだね」

武器の耐久度も心証も、ついでに街の人の成長具合も、確認出来ないものが多くて、面白いけれど大変だとふうとため息をつくときーちくんが苦笑いしてそれに応えた。

「その分対応したスキルもあるからな。クエスト関連のスキルも勿論あるぞ、取ってるやつは少ないしメインで使うやつなんて殆どいねーけど」

確かにわざわざ取る人は少なそうだ。

死にスキルが多いなあと思いつながら、表示された全てのクエストをチエックし、所持金ペナルティのあった三つを除いた七つを受諾し、キーチくんに頷いてみせる。

全てダンジョン用の簡単そうなくエストばかりだったことに多少引っかけを覚えたけれど、キーチくんが井戸にかかった梯子を降りていってしまったので急いでその後を追った。

梯子を降りた先は、床も壁も天井も全てびっしり煉瓦で敷き詰められた、かなり広い正方形の部屋だった。

壁には松明が灯っていて、頼りなげな灯りなのにそれだけで部屋全体が見渡せるほど明るい。

どこにも敵の姿は無く、一本の通路がどこかへ続いているのだけが確認出来た。

キーチくんに促されて荷物からランタンを取り出し、部屋を照らす松明に近づけるとぽっと明るくなった。

ベルトに持ち手の部分を通し、ついでにロープも引っかけて腰に回すと随分らしくなって、うきうきしてくる。

「ダンジョン入ってすぐの場所は大抵こんな部屋になってて、敵は出てこない。

始まるのはあの通路に入ってからな」

キーチくんはそう言いながら通路ギリギリまで近づき、腕を広げてその入口を測る仕草を見せこちらを振り返る。

「結構狭いだろ、通路は基本集団戦には向かええ。

ついでに使えない技なんてのも出てくる。

どれが使えないか、いちいち説明なんて出てこないから、慣れた

ら雑魚相手に試してみるといい」

じゃあ行くか、と何の気負いも無い声で言われ、少し緊張しながらゆっくり通路に近づく。

今回はわたしのためのチュートリアルだから、キーチくんは手を出さないことになっている。

道を決めるのも、敵と戦うのも、罠を解除するのも、全てわたしがやらなければならない。

わたしが頼み込んでそう決めたことなのに、敵の姿の見えない暗い通路に踏み込んでいくのには勇気がいった。

しかしキーチくんが心配そうにこちらを見ているのに気づき、覚悟を決める。

「じゃあ、出発！」

空気で明るい声で自分を奮立たせ、暗い通路に一步、足を踏み出した。

途端に暗かった通路が数メートル先まで明るくなり、壁に先程部屋にあったのと同じような松明があるのを発見する。

灯りはついていなかったもので、どうなってるか確かめてみようとした瞬間、後頭部に何かがぶつかって体勢を崩してしまふ。

慌ててきよろきよろと辺りを見回すと、赤い目の灰色のコウモリが天井近くに浮かんでいるのに気づいた。

再びこちらに向かって急降下してきたので、ヨーヨーを投げつけると、キキツと耳障りな音を立ててコウモリが床に落ちていく。

やり過ごせたことに安堵し、ほっと息をついてコウモリから目を離すと、後ろから鋭い声が飛ぶ。

「馬鹿、まだだっ！」

その声に反応し急いで上に視線を向けると、今度はお腹にどすりと衝撃を受けた。

不意打ちに動揺しつつも、再び攻撃を仕掛けてきたコウモリにヨーヨーを叩き込めば、今度は床に落ちずに姿が消え、しゃりんと固い音を立てて硬貨が辺りに散らばった。

「油断すんなよ」

少し呆れたような口調で咎められ、恥ずかしさに頬が赤くなる。

後ろは振り返らず、そのまま前方を警戒すると、灯りが届かない場所にきらりと光る赤いものを見つけた。

今度はあちらからの出方を待たず、こちらから向かう。

「三連撃っ」

技を使うのは恥ずかしかったが、呆れられたままでいるのが嫌で一気に近づいて勝負を仕掛けると、今度は一撃で倒せたようで、硬貨の落ちる音がした。

まだ他にも居るかと警戒し、前方を睨み付けていたが、何もやってこない。

そのまましばらく待ってから、ようやく場の安全を確認し、さつき見つけた松明のところへと引き返す。

側には何の仕掛けもなく、火種も無さそうだ。

試しにランタンを近づけると、一気に先の方まで明るくなり、次の松明と天井に張り付いているコウモリの姿が視界に飛び込んできた。

素早くヨーヨーを構えたが、すぐに襲ってくる様子は無かったので、コウモリに視線を固定しつつ床に落ちた硬貨を回収する。

じりじりとへっぴり腰で20Gを拾い、それでも動かない相手にようやく平静を取り戻した。

そしてやっと解析をかけていなかったことに気づき、急いでスキルを発動する。

名前はバット、一番初めのクエストにあった敵の名前だ。

体力は60/60でチップより少し多いくらい。

しかし一度の通常攻撃で体力は殆ど削れてしまったので、防御力はさほど無いようだ。

先制攻撃が成功すれば後は向かってくるバットを迎えつつだけで終わり、三度目はとてもあっさり倒すことが出来た。

「うん、上出来」

背中にそんな声をかけられ、にやけながらもようやく振り返ってキーチくんをまともに見ることが出来た。

満足そうに微笑んでいるキーチくんは、頑張る、と宣言すると嬉しげに頷いてくれる。

しばらくここに二人で笑いあってから、気合いを入れ直し、慎重に先へ足を進めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0500v/>

ひとりヴァーチャルリアリティー

2011年10月28日02時11分発行